長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

飯田市地内その2

昭和47年度

日本道

長野

信州大学附属図書館
3470342233

木忠書

鈴茂蔵

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

―飯田市地内　その2―

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会

序

昭和47年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、飯田市地内その２（阿智・山本・伊賀良・座光寺）17遺跡の発掘調査が４月10日から７月22日にかけて実施された。

この山本・伊賀良地区は、久米川・飯田松川の堆積による新期扇状地が木曽山脈山麓に広がり、東方に続く数段の段丘面と、西南方に形成された盆地状の地形や、中期・古期扇状地の入り組む複雑な地形を示し、そのひとつひとつの扇状地や台地には、それぞれ遺跡が存在し古くから考古学上注目された地域である。中央自動車道は、山本地区では山麓に近い台地状を、伊賀良地区で、新期扇状地の中央部を横切るため、縄文時代から歴史時代の集落址の存在が予想され、今回の発掘調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、山本石子原遺跡で発見された前期旧石器は、その後の第２次調査にその解明を待つようになり、同遺跡の縄文時代早期の土壙群と土器片・石器の多量発見、弥生時代の方形周溝墓群と古墳との関連性の解明、縄文時代前期・中期の集落立地を知る柳田・上の平東部・滝沢井尻・小垣外遺跡、弥生時代後期から古墳・平安時代にかけての集落構成を把握できた飯田インター付近の遺跡群、同遺跡群においては、中世住居址群と、柱穴群や特殊遺構の確認さえあって、学界に新知見をもたらすものが多く、調査の成果は極めて多大であった。

報告書刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋支社、同飯田工事事務所、余寒まだ去りやらない４月から炎暑のきびしい７月にかけて、長期間この調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査にご協力いただいた、長野県飯田中央道事務所、飯田市および阿智村当局等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和48年３月20日

長野県教育委員会教育長　　小　松　孝　志

例　　言

1　本書は、昭和47年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、飯田市地内その２の調査報告書である。

2　本書は、契約期間内（昭和48年３月20日）にまとめることが義務づけられており、なお、調査団（飯田班）は三か所の調査及び整理をしているため、整理期間内に資料をまとめるのがやっとであり、その上、本年は飯田本部のなくなることもあって、調査結果についての充分検討・研究することはできない。調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおいた。本年は住居址内出土石器について図示をセレクトした。　石器種別の出土数については表を参照してほしい。編集は神村があたった。

3　遺構図において、ドットは焼土を示す。埋甕は○と、⊙（伏甕）で表示してある。ピットの深さは数字で表示してある。縮尺については図に示してある。

4　図面作成については、調査員が全員であたった。

5　石器の実測図の中で「特殊磨石」については、Ａ面―巾0.5～３㎝前後の磨面、Ｂ面―Ａ面以外の磨面Ｃ部―敲打器として使用している面、Ｄ部―凹石として使用された凹部、Ｅ部―台石として使用されたダメージ部と区別し、Ａ～Ｅの記号で表示してある。

6　遺跡の担当者の分担は、調査員協議して決め、それぞれの文末に文責を記した。

7　遺物や関係図面、諸記録は、飯田市仲之町の下伊那教育会南別館の土蔵に保管してあり、遺物の一部は同所の教育参考館に展示してある。

目　　次

○　はしがき
Ⅰ　調査状況……1
1　調査にいたるまで……1
1）中央道関係の経過……1
2）発掘調査委託……9
3）発掘調査開始までの準備……14
2　調査の実施と経過……16
1）調査の開始と経過……16
2）発掘調査協力者……16
3）現地指導・見学者……18
3　発掘調査の方法……19
Ⅱ　飯田市伊賀良・山本地区の概況……20
1　伊賀良・山本地区の環境……20
2　伊賀良・山本地区の遺跡……21
1）伊賀良地区の遺跡……22
2）山本地区の遺跡……23
3）伊賀良・山本地区の古墳……24
Ⅲ　調査遺跡……30
1　かぶき畑遺跡……30
1）位置……30
2）まとめ……30
2　柳田遺跡……31
1）位置……31
2）遺構と遺物……31
ア住居址　イ土壙　ウその他の遺物
3）まとめ……33
3　山田遺跡……34
1）位置……34
2）遺物……34
3）まとめ……34
4　石子原遺跡……35

1）位置 …… 35
2）遺構と遺物 …… 35
ア押型文土器とその遺構　イ縄文時代中期の遺構　ウ方形周溝墓と墓壙　エその他の遺物
3）まとめ …… 39
5　石子原古墳 …… 40
1）位置と外形 …… 40
2）古墳築造状態 …… 40
3）内部構造 …… 41
ア墓壙１　イ墓壙２　ウ墓壙３　エ墓壙４
4）出土遺物 …… 42
5）まとめ …… 42
6　ようじ原遺跡 …… 43
1）位置 …… 43
2）まとめ …… 43
7　上の平東部遺跡 …… 44
1）位置 …… 44
2）遺構と遺物 …… 44
ア１号住居址　イ２号住居址　ウその他の遺物
3）まとめ …… 45
8　寺山遺跡 …… 46
1）位置 …… 46
2）遺物 …… 46
3）まとめ …… 46
9　六反田遺跡 …… 47
1）位置 …… 47
2）遺構と遺物 …… 47
ア住居址　イ土壙　ウその他の遺物
3）まとめ …… 49
10　大東遺跡 …… 50
1）位置 …… 50
2）遺構と遺物 …… 50
ア住居址　イ土壙　ウ溝状遺構　エその他の遺物
3）まとめ …… 52
11　酒屋前遺跡 …… 53
1）位置 …… 53
2）遺構と遺物 …… 53

ア住居址　イ竪穴状遺構　ウ柱穴群　エ精錬状遺構　オ構状遺構　カ土壙　キその他の遺物
3）まとめ …… 60
12　滝沢井尻遺跡 …… 61
1）位置 …… 61
2）遺構と遺物 …… 61
ア住居址　イ柱穴群　ウ方形周溝墓　エ溝状遺構　オ土壙　カその他の遺物
3）まとめ …… 64
13　小垣外・辻垣外遺跡 …… 65
1）位置 …… 65
2）遺構と遺物 …… 65
ア住居址　イ柱穴群　ウ土器集中地　エ焼土群　オ配石　カ溝状遺構　キ土壙　クその他の遺物
3）まとめ …… 73
14　三壺渕遺跡 …… 74
1）位置 …… 74
2）遺構と遺物 …… 74
ア住居址　土壙　ウその他の遺物
3）まとめ …… 75
15　上の金谷遺跡 …… 76
1）位置 …… 76
2）遺構と遺物 …… 76
ア住居址　イ柱穴群　ウ溝状遺構　エ土壙　オその他の遺物
3）まとめ …… 81
16　大門原B遺跡 …… 82
1）位置 …… 82
2）調査 …… 82
あとがき …… 83

挿　図　目　次

第 1 図　飯田市地内中央道用地内遺跡分布図及び地形図 …… 106
第 2 図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図 …… 107
第 3 図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図 …… 108
第 4 図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図 …… 109
第 5 図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図 …… 110
第 6 図　柳田遺跡・石子原古墳・石子原遺跡構全体図 …… 111
第 7 図　石子原遺跡土壙群及び方形周溝墓 …… 112
第 8 図　石子原古墳実測図 …… 113
第 9 図　上の平東部１号・２号住居址 …… 114
第 10図　六反田遺跡遺構全体図及び１号・２号住居址 …… 115
第 11図　六反田遺跡３号・４号・５号住居址 …… 116
第 12図　六反田遺跡土壙図及び大東遺跡遺構全体図 …… 117
第 13図　大東遺跡１号・２号住居址 …… 118
第 14図　大東遺跡３号・４号住居址及び土壙図 …… 119
第 15図　大東遺跡土壙図 …… 120
第 16図　大東遺跡土壙図 …… 121
第 17図　酒屋前遺跡遺構全体図及び１号・２号 …… 122
第 18図　酒屋前遺跡３号・４号・５号・６号住居址 …… 123
第 19図　酒屋前遺跡７号・８号住居址 …… 124
第 20図　酒屋前遺跡９号・10号住居址 …… 125
第 21図　酒屋前遺跡11号・12号住居址 …… 126
第 22図　酒屋前遺跡13号・14号住居址 …… 127
第 23図　酒屋前遺跡15号・16号住居址 …… 128
第 24図　酒屋前遺跡竪穴状遺構及び柱穴群１・２ …… 129
第 25図　酒屋前遺跡精錬状遺構及び土壙図 …… 130
第 26図　酒屋前遺跡土壙図 …… 131
第 27図　酒屋前遺跡土壙図 …… 132
第 28図　酒屋前遺跡土壙Ｄ群 …… 133
第 29図　酒屋前遺跡土壙図 …… 134
第 30図　滝沢井尻遺跡遺構全体図及び１号・２号住居址 …… 135
第 31図　滝沢井尻遺跡３号・４号・５号住居址 …… 136

第 32図　滝沢井尻遺跡６号・７号住居址及び柱穴址 …… 137
第 33図　滝沢井尻遺跡方形周溝墓及び溝状遺構１ …… 138
第 34図　滝沢井尻遺跡溝状遺構２・３及び土壙図 …… 139
第 35図　滝沢井尻遺跡土壙図 …… 140
第 36図　小垣外・辻垣外遺跡遺構図及び１号・２号住居址 …… 141
第 37図　小垣外・辻垣外遺跡３号・４号住居址 …… 142
第 38図　小垣外・辻垣外遺跡５号・６号住居址 …… 143
第 39図　小垣外・辻垣外遺跡７号・８号・９号・10号住居址 …… 144
第 40図　小垣外・辻垣外遺跡11号・12号住居址 …… 145
第 41図　小垣外・辻垣外遺跡13号・18号住居址 …… 146
第 42図　小垣外・辻垣外遺跡14号・15号・16号・19号住居址 …… 147
第 43図　小垣外・辻垣外遺跡17号・21号住居址 …… 148
第 44図　小垣外・辻垣外遺跡20号・22号住居址 …… 149
第 45図　小垣外・辻垣外遺跡柱穴群及び土器集中地Ⅱ …… 150
第 46図　小垣外・辻垣外遺跡配石及び０号～22号土壙図 …… 151
第 47図　小垣外・辻垣外遺跡23号～45号土壙図 …… 152
第 48図　小垣外・辻垣外遺跡46号～69号・ 112号土壙図 …… 153
第 49図　小垣外・辻垣外遺跡70号～94号土壙図 …… 154
第 50図　小垣外・辻垣外遺跡95号～ 111号土壙図 …… 155
第 51図　三壺渕遺跡遺構全体図及び１号・２号・３号住居址 …… 156
第 52図　上の金谷遺跡遺構全体図及び１号住居址 …… 157
第 53図　上の金谷遺跡２号・３号・４号住居址 …… 158
第 54図　上の金谷遺跡５号・６号住居址 …… 159
第 55図　上の金谷遺跡７号・８号・10号住居址 …… 160
第 56図　上の金谷遺跡９号住居址及び14号土壙図 …… 161
第 57図　上の金谷遺跡11号・12号住居址及び柱穴群Ⅰ …… 162
第 58図　上の金谷遺跡柱穴群Ⅱ …… 163
第 59図　上の金谷遺跡土壙図 …… 164
第 60図　柳田遺跡出土土器 …… 165
第 61図　石子原遺跡出土土器 …… 166
第 62図　石子原遺跡出土土器 …… 167
第 63図　石子原遺跡出土土器 …… 168
第 64図　石子原遺跡出土土器 …… 169
第 65図　石子原古墳及び石子原遺跡出土土器・石製品 …… 170
第 66図　石子原遺跡及び上の平東部遺跡出土土器 …… 171
第 67図　上の平東部遺跡・六反田遺跡及び大東遺跡出土土器 …… 172

第 68 図　六反田遺跡出土土器 …… 173
第 69 図　六反田遺跡出土土器 …… 174
第 70 図　酒屋前遺跡出土土器 …… 175
第 71 図　酒屋前遺跡出土土器 …… 176
第 72 図　酒屋前遺跡 7 号住居址出土土器 …… 177
第 73 図　酒屋前遺跡出土土器 …… 178
第 74 図　酒屋前遺跡出土土器 …… 179
第 75 図　酒屋前遺跡出土土器 …… 180
第 76 図　酒屋前遺跡出土土器 …… 181
策 77 図　酒屋前遺跡土壙58出土土器 …… 182
第 78 図　滝沢井尻遺跡出土土器 …… 183
第 79 図　滝沢井尻遺跡 3 号住居址出土土器 …… 184
第 80 図　滝沢井尻遺跡出土土器 …… 185
第 81 図　滝沢井尻遺跡出土土器 …… 186
第 82 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 187
第 83 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 188
第 84 図　小垣外・辻垣外遺跡 9 号住居址出土土器 …… 189
第 85 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 190
第 86 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 191
第 87 図　小垣外・辻垣外遺跡20号住居址出土土器 …… 192
第 88 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 193
第 89 図　小垣外・辻垣外遺跡土器集中地Ⅱ出土土器 …… 194
第 90 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 195
第 91 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 196
第 92 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 197
第 93 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 198
第 94 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 199
第 95 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 200
第 96 図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器 …… 201
第 97 図　三壺渕遺跡出土土器 …… 202
第 98 図　三壺渕遺跡及び上の金谷遺跡出土土器 …… 203
第 99 図　上の金谷遺跡出土土器 …… 204
第 100図　上の金谷遺跡10号住居址出土土器 …… 205
第 101図　上の金谷遺跡出土土器 …… 206
第 102図　上の金谷遺跡出土土器 …… 207
第 103図　柳田遺跡出土土器 …… 208

第 104図　柳田遺跡・山田遺跡及び石子原遺跡出土石器 …… 209
第 105図　石子原遺跡出土石器 …… 210
第 106図　石子原遺跡出土石器 …… 211
第 107図　石子原遺跡出土石器 …… 212
第 108図　石子原遺跡出土土器 …… 213
第 109図　石子原遺跡出土石器 …… 214
第 110図　石子原遺跡出土石器 …… 215
第 111図　石子原遺跡出土石器 …… 216
第 112図　上の平東部遺跡・寺山遺跡及び六反田遺跡出土石器 …… 217
第 113図　大東遺跡出土石器 …… 218
第 114図　酒屋前遺跡出土石器 …… 219
第 115図　酒屋前遺跡出土石器 …… 220
第 116図　酒屋前遺跡出土石器 …… 221
第 117図　滝沢井尻遺跡出土石器 …… 222
第 118図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器 …… 223
第 119図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器 …… 224
第 120図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器 …… 225
第 121図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器 …… 226
第 122図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器 …… 227
第 123図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器 …… 228
第 124図　三壺渕遺跡及び上の金谷遺跡出土土器 …… 229
第 125図　上の平東部遺跡・寺山遺跡・酒屋前遺跡出土土製品及び石製品 …… 230
第 126図　酒屋前遺跡精錬状遺構出土土製品 …… 231
第 127図　酒屋前遺跡・滝沢井尻遺跡・小垣外・辻垣外遺跡出土土製品及び石製品 …… 232
第 128図　小垣外・辻垣外遺跡・三壺渕遺跡・上の金谷遺跡出土土製品及び石製品 …… 233
第 129図　柳田遺跡・酒屋前遺跡・小垣外・辻垣外遺跡・上の金谷出土土製円板 …… 234
第 130図　石子原古墳出土鉄製品 …… 235
第 131図　酒屋前遺跡・滝沢井尻遺跡・小垣外・辻垣外遺跡・三壺渕遺跡・上の金谷遺跡出土鉄製品及び古銭 …… 235
第 132図　柳田遺跡・上の平東部遺跡・酒屋前遺跡及び小垣外遺跡埋甕状態図 …… 237

図　版　目　次

第　一　図　かぶき畑・柳田遺跡 …… 238
第　二　図　山本地区遺跡 …… 239
第　三　図　柳田遺跡住居址 …… 240
第　四　図　柳田遺跡出土土器 …… 241
第　五　図　柳田遺跡住居址 …… 242
第　六　図　石子原遺跡ピット・土壙 …… 243
第　七　図　石子原遺跡配石 …… 244
第　八　図　石子原遺跡方形周溝墓 …… 245
第　九　図　石子原遺跡方形周溝墓 …… 246
第　十　図　石子原遺跡方形周溝墓 …… 247
第十一　図　石子原遺跡・石子原古墳出土遺物 …… 248
第十二　図　石子原古墳 …… 249
第十三　図　石子原遺跡墓壙 …… 250
第十四　図　石子原古墳出土遺物 …… 251
第十五　図　石子原遺跡墓壙と出土状態 …… 252
第十六　図　石子原古墳出土遺物 …… 253
第十七　図　石子原古墳 …… 254
第十八　図　伊賀良地区南部の遺跡 …… 255
第十九　図　上の平東部遺跡住居址 …… 256
第二十　図　上の平東部遺跡出土塑像 …… 257
第二十一図　上の平東部遺跡住居址 …… 258
第二十二図　六反田遺跡住居址 …… 259
第二十三図　六反田遺跡住居址 …… 260
第二十四図　六反田遺跡住居址・土壙 …… 261
第二十五図　大東遺跡住居址 …… 262
第二十六図　大東遺跡住居址 …… 263
第二十七図　大東遺跡住居址 …… 264
第二十八図　大東遺跡土壙 …… 265
第二十九図　伊賀良地区北部の遺跡 …… 266
第三十　図　酒屋前遺跡住居址 …… 267
第三十一図　酒屋前遺跡住居址 …… 268
第三十二図　酒屋前遺跡住居址 …… 289

第三十三図　酒屋前遺跡住居址 …… 270
第三十四図　酒屋前遺跡出土土器 …… 271
第三十五図　酒屋前遺跡住居址 …… 272
第三十六図　酒屋前遺跡住居址 …… 273
第三十七図　酒屋前遺跡住居址 …… 274
第三十八図　酒屋前遺跡住居址 …… 275
第三十九図　酒屋前遺跡住居址 …… 276
第　四十　図　酒屋前遺跡住居址 …… 277
第四十一図　酒屋前遺跡特殊遺構 …… 278
第四十二図　酒屋前遺跡出土土器 …… 279
第四十三図　酒屋前遺跡土壙 …… 280
第四十四図　酒屋前遺跡土壙・溝 …… 281
第四十五図　滝沢井尻遺跡住居址 …… 282
第四十六図　滝沢井尻遺跡住居址 …… 283
第四十七図　滝沢井尻遺跡出土遺物 …… 284
第四十八図　滝沢井尻遺跡住居址 …… 285
第四十九図　滝沢井尻遺跡住居址 …… 286
第　五十　　滝沢井尻遺跡方形周溝墓 …… 287
第五十一図　滝沢井尻遺跡出土遺物 …… 288
第五十二図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 289
第五十三図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 290
第五十四図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 291
第五十五図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 292
第五十六図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 293
第五十七図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 294
第五十八図　小垣外・辻垣外遺跡出土遺物 …… 295
第五十九図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 296
第　六十　図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 297
第六十一図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 298
第六十二図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 299
第六十三図　小垣外・辻垣外遺跡住居址 …… 300
第六十四図　小垣外・辻垣外遺跡土器集中Ⅱ …… 301
第六十五図　小垣外・辻垣外遺跡出土遺物 …… 302
第六十六図　小垣外・辻垣外遺跡土壙 …… 304
第六十七図　三壺渕遺跡住居址 …… 304
第六十八図　三壺渕遺跡住居址 …… 305

第六十九図　上の金谷遺跡住居址 …… 306
第　七十図　上の金谷遺跡住居址 …… 307
第七十一図　上の金谷遺跡出土遺物 …… 308
第七十二図　上の金谷遺跡住居址 …… 309
第七十三図　上の金谷遺跡住居址 …… 310
第七十四図　上の金谷遺跡住居址 …… 311
第七十五図　上の金谷遺跡出土遺物 …… 312
第七十六図　上の金谷遺跡住居址 …… 313
第七十七図　上の金谷遺跡出土遺物 …… 314
第七十八図　上の金谷遺跡住居址 …… 315
第七十九図　調査関係者 …… 316
第　八十　図　スナップ …… 317

表　目　次

第１表　飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表 …… 25
第２表　飯田市地内その２　遺構一覧表 …… 84
第３表　飯田市地内その２　遺跡別出土遺物一覧表 …… 85
第４表　飯田市地内その２　住居址一覧表 …… 86
第５表　飯田市地内その２　方形周溝墓・古墳一覧表 …… 91
第６表　土壙一覧表 …… 92
第７表　土製円板一覧表 …… 105

1　調　査　状　況

1 調査にいたるまで

1）　中央道関係の経過

ア　整備計画とその経過

昭和32年４月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線を西の宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼ぶ。昭和41年７月に五縦貫道整備計画が決定され、その後道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間やく 360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那谷に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ケ岳山麓を通って山梨県に至るやく 122kmとなっている。

昭和41年、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪３市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・巾杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実は遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年３月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ケ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊された例のあったことである。

イ　埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年９月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪３地区で開きその対策を打合せる。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区 112遺跡、諏訪地区90遺跡計 349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡（含斜坑広場）、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計 190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という。）の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の４県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一様でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、Ａ・路線計画からはずすもの、Ｂ・路線計画の中に入れるが保護するもの、Ｃ・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するものの３区分されている。それに基づいて、中央自動車道地内遺跡についても、Ａ・Ｂ・Ｃの３区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局 190遺跡すべてＣとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」できめられている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年３月に、飯田市上飯田地区の２遺跡（さつみ・古屋垣外）の発掘調査が行なわれた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年４月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課（後に文化課に独立）では、担当指導主事を２名増員し、４名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、６月と７月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、７月には「長野県中央道遺跡調査会」を再結成した。

昭和45年度は、８月に下伊那郡阿智村地内７遺跡（調査費 179万円）、９月に飯田地内その１地区10遺跡（調査費1590万円）の発掘調査委託契約を相次いで結び、９月２日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の鍬入式を挙行している。翌９月３日から２班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その１地区６遺跡（調査費 500万円）の発掘調査委託契約を結び、昭和46年３月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、４月に、上伊那郡飯島町内その１地区（調査費1224万円）、８月に下伊那郡高森町内その１地区（調査費3120万円）、９月に下伊那郡阿智村園原斜坑広場その１杉の木平遺跡（調査費 730万円）

の発掘調査委託契約が結ばれ、発掘調査が進められている。なお上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その２久根平遺跡（調査費 123万円）の発掘調査委託契約が、９月に結ばれ、特設調査団が組織され調査を完了している。

昭和47年度は、買収契約も進展し、上下伊那郡下の各工区において工事発注が続出する年とあって、県教育委員会文化課においては、担当指導主事を３名増員し、４班編成の調査団を組織し、飯田・下伊那地区に２班、伊那・上伊那地区に２班づつ常駐させて発掘調査に当っている。４月に飯田市内その２地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その３地区８遺跡（調査費 677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）の発掘調査委託契約が成立し、広範囲にわたる発掘調査が開始されている。さらに、下伊那郡高森町内その２地区５遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ケ根市内８遺跡（調査費 563.5万円）の発掘調査委託契約が７月に成立している。８月には、上伊那郡南箕輪村内その１地区５遺跡（調査費1051.5万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。さらに飯田市山本地籍石子原遺跡において多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器として、その重要性が認められて第２次調査の再協議が成立し、飯田市内その３（調査費 410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。10月には上伊那郡南箕輪村内その２地区４遺跡（調査費 514.4万円）と、上伊那郡の天竜川橋梁工事と辰野町平出陸橋工事に伴う辰野町内その１地区３遺跡（調査費 497.2万円）の発掘調査委託契約が成立している。本年度調査された遺跡は、数にして81、面積にして132180㎡と広大であるばかりでなく、遺構・遺物の発見も膨大にして、発掘調査の成果も多大である。45年発掘調査開始以来３年目を終ろうとしている今日、出土遺物の累積も予期以上に多く、関係市町村当事者や、考古学者等からその資料の保存・活用の方途についての要望が提出されている。中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査も、昭和48年度の上伊那地区北半と、諏訪地区の調査や、やがて予想される長野線の発掘調査を含めて、新しい局面を迎えているように思える。

ウ　中央道関係の経過一覧

この経過一覧は、前項のものと重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央道建設法案とそれに基づく機関、県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部載録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。なお、発掘調査委託契約地区名について、昭和47年度から呼称が変っているか、ここでは従来の例にならっている。

32・４・16　国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年７月31日）

32・７・25　中央自動車道予定路線を定める法律制定

39・６・16　国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車予定路線は諏訪回りに改正

41・７・25　五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る。

〃・８・12　長野県中央自動車道対策協議会開催

〃・８・12　恵那山トンネル立入測量開始

〃・９・22　中央自動車道長野県建設協力会開催

〃・９・30　下伊那郡阿智村の一部、飯田市、鼎町（14km）ルート発表

41・11・16　長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道課および飯田中央道事務所設置
〃・12・15　中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
42・2・14　中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
〃・2・21　〃　〃　（上伊那地区）
〃・2・22　〃　〃　（諏訪地区）
〃・3・23　恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
〃・3・28　下伊那郡上郷町・飯田市座光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
〃・3・31　恵那山トンネル補助トンネル工事着工
〃・4・15　文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ会開催
〃・5・4　伊那中央道事務所設置
〃・5・30　中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
〃・6・13　中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回　長野県庁）
〃・8・1～12　下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　147（団長　大沢和夫）
〃・11・1　上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
〃・11・10～26　上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　112（団長　林　茂樹）
〃・11・27～12・15　諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　90（団長　藤森栄一）
〃・12・16　下伊那郡阿智村殿島・智里地区（5.65km）ルート発表
43・2・27　公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
〃・3・5・公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
〃・7・23　下伊那郡阿智村智里殿島地区、県内のトップをきって用地買収契約成立
〃・10・12　中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回　松本市）
44・3・18　〃　〃　（第3回　岐阜市）
〃・7・15　公団名古屋支社と協議　（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
〃・8・12　上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
〃・10・3　飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委回答　12・11）
〃・10・8　中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
〃・10・20　飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議
〃・10・31　中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
〃・11・11　恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
〃・12・11　公団名古屋支社と協議　（45年の発掘調査について）
45・1・29　諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
〃・2・2　公団名古屋支社と協議　（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
45・2・23　岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

45・2・24　下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始

〃・2・27　長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）

〃・3・2　公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　80万円）

〃・3・5　飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（団長　大沢和夫）

〃・3・31　飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行

〃・4・22　公団名古屋支社と協議　（45年度の発掘調査について）

〃・4・23　上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）

〃・5・8　下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文代財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答　5・26）

〃・5・14　中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）

〃・6・1　公団名古屋支社と協議　（発掘調査上の問題について）

〃・6・9　下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）

〃・6・11～12　下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・鼎町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議

〃・6　昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出

〃・6・29　上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）

〃・6・30　諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）

〃・7・8　上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）

〃・7・22　長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）

〃・8・17　下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　179万円）

〃・9・1　飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　1590万円）

〃・9・2　中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査鍬入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）

〃・9・3　下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平II・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）

〃・9・3　岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）

〃・9・5　伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察

〃・9・7　諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）

〃・9・8　田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察

〃・9・22　飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）

〃・10・19　上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）

〃・10・28　公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察

〃・10・29　公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察

〃・11・16　長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター）

45・11・17　公団名古屋支社との協議　（昭和46年度発掘調査地区の選定について）

〃　11・28　下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催（下伊那郡阿智村智里東小学校）

〃・12・5　上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催（上伊那郡宮田村福祉センター）

〃・12・25　茅野市・原村・諏訪市の一部（12.4km）ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了

46・1・12　伊沢県教育長、下伊那郡鼎町山岸遺跡視察

〃・2・1　公団名古屋支社と協議　（昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察）

〃・2・2　下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（昭和46年度発掘調査地区決定）

〃・2・28　上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・11　飯田地区その1発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)

〃・3・15　飯田地区その1発掘調査報告会開催（一般公開）

〃・3・20　飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・4・1　飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　1224万円）

〃・4・12　飯島町地内その1地区（七久保）発掘調査団結団式挙行（飯島町役場）

〃・4・13　飯島町地内その1、7遺跡(鋳物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始（終了46・7・3）

〃・4・26　長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催（伊那市上伊那郷土館）

〃・5・24　恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催（公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会）

〃・6・7　下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査（～8）

〃・6・16　公団本社・同名古屋支社と協議（下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について）

〃・7・1　公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場（杉の木平遺跡）埋蔵文化財について意見聴取

〃・7・15　飯島町地内その1発掘調査報告会開催（飯島町役場七久保支所）

〃・7・20　公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議（恵那山トンネル斜坑土捨場問題について）

〃・8・1　下伊那郡高森町地内その1（10遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　3120万円）

〃・8・6　下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会（高森町役場）

〃・8・10　下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡（弓矢・無縁堂・神堂垣外・鐘鋳原A・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原Ⅰ）発掘調査開始（9・14中断、10・23再開、終了47・1・14）

〃・8・18　恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

46・8・30　公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議

〃・8・31　公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議

〃・9・4　伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鋳原遺跡視察

〃・9・10　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）

〃・9・13　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円

〃・9・14　赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鋳原遺跡視察

〃・9・16　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）

〃・9・17　上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立　（委託金額　123万円）

〃・9・20　上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）

〃・11・18　長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑠璃寺前遺跡視察

〃・11・19　長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）

47・1・25　飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鼎町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・1・26　下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、宮田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・1・27　伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・2・29　上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・2・29　上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・25　下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）

〃・3・26　下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）

〃・3・27　園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）

〃・4・1　飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　2367.5万円）

〃・4・1　飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　677.1万円）

〃・4・1　伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　3361.6万円）

〃・4・3　飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）

〃・4・10　飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結団式挙行（飯田合同庁舎）

〃・4・10　飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）

〃・4・24　上伊那地区発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）

47・4・25　飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂II・うどん坂I・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）

〃・4・25　伊那市西春近地区・18遺跡（和手・富士山下・富士塚・蒲蒲沢・南丘A・南丘B・名廻南・名廻東古墳・名廻・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

城平上）の発掘調査開始。（終了47・12・14）

47・4・26　長野県中央道遺跡調査会第５回理事会開催。（伊那市上伊那図書館）

〃・6・20　公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第２次調査について協議（県庁教育次長室）

〃・6・22　公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第２次調査について現地協議。

〃・7・3　下伊那郡高森町内その２地区（５遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額2,002 万円）

〃・7・6　下伊那郡松川町内（12遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 1,864.3万円）

〃・7・6　駒ケ根市内（８遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 563.5万円）

〃・7・7　駒ケ根市内８遺跡（大徳原南Ｂ・大徳原南Ａ・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地）の発掘調査開始。（終了47・９・１）

〃・7・12　飯田市内その３（石子原遺跡第２次調査）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 410万円）

〃・7・14　下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。（松川町福祉センター）

〃・7・24　下伊那郡高森町内その２地区５遺跡（神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘鋳原Ａ）の発掘調査開始。（終了47・11・９）

〃・7・24　下伊那郡松川町内12遺跡（里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ）の発掘調査開始。（終了47・11・11）

〃・8・15　公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内９遺跡と辰野町内その１地区３遺跡について現地協議。

〃・8・17　飯田市内その３（石子原遺跡）発掘調査団結団式。（飯田教育事務所）

〃・8・17　飯田市内その３（石子原遺跡）の発掘調査開始。（終了47・９・30）

〃・8・21　上伊那郡南箕輪村内その１地区（５遺跡）の発掘調査委託契約成立。(委託金額1.051.5万円)

〃・9・1　上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。（南箕輪村公民館）

〃・9・4　上伊那郡南箕輪村内その１・その２地区９遺跡（南原・三本木原・曽利目・在家・大芝原・大芝東・南高根・北高根Ａ・北高根Ｂ）の発掘調査開始。（終了47・12・９）

〃・10・9　上伊那郡南箕輪村内その２地区（４遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額514.4万円）

〃・10・9　上伊那郡辰野町内その１地区（３遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 497.2万金）

〃・10・11　上伊那郡辰野町内その１地区の発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会。（辰野町公民館）

〃・10・12　上伊那郡辰野町内その１地区３遺跡（五反田・越道・平出山の神）の発掘調査開始。（終了47・11・30）

〃・11・15　長野県中央道遺跡調査会第６回理事会開催。（伊那市上伊那図書館）

〃・12・4　公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。（公団伊那工事事務所）

〃・12・5　公団名古屋支社と伊那市内その２地区（４遺跡）・箕輪町内（３遺跡）・辰野町内その２地区)(14遺跡・諏訪郡富士見町内（７遺跡）について現地協議。

〃・12・15～・16　上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。（上伊那地方事務所大会議室・一般公開）

〃・12・16　上伊那郡辰野町内その１地区（３遺跡）の発掘調査報告会開催。（辰野町公民館）

48・3・16　上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催。（飯島町公民館）
〃・3・18　飯田市内その2・その3地区発掘調査報告会開催。（下伊那教育参考館）
〃・〃・〃　下伊那郡高森町内その2地区発掘調査報告会開催。（　〃　）
〃・〃・〃　下伊那郡松川町内発掘調査報告会開催。（　〃　）
〃・3・19　上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催。（南箕輪村公民館）
〃・3・24　駒ケ根市内発掘調査報告会開催。（駒ケ根市役所大会議室）
〃・3・26　伊那市西春近地区発掘調査報告会開催。（伊那市福祉センター）

2）　発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があって、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

ア　発掘調査委託契約書

1　委託事務の名称　中央道埋蔵文化財発掘調査（飯田市内その2）
2　委託期間　昭和47年4月1日から
　　昭和48年3月20日まで
3　委託金額　￥23，675，000円也
4　委託金支払場所　日本道路公団名古屋支社

日本道路公団（以下「甲」という。）は、長野県教育委員会（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条　甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条　甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条　乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条　乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2　甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受理した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第５条　甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2　乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3　乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4　乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B５版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5　乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後１箇月以内に甲に提出しなければならない。

第６条　この契約に基づく報告書、費用精算調書其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第７条　乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第８条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第９条　乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第５条第４項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25％の割合で計算した金額を徴収することができる。

2　甲の責に帰する事由により第４条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25％の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条　乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の１を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書２通を作成し、当事者記名押印の上、各自１通を保有する。

昭和47年４月１日

委　託　者　　名古屋市中区栄４丁目１番１号（中日ビル11～12階）
日本道路公団名古屋支社
支社長　　平　野　和　男

受　託　者　　長野県教育委員会
教育長　　小　松　孝　志

イ　長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年７月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年２回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和47年度役員・飯田市内その２地区調査団組織はつぎのとおりである。

(ア) 長野県中央道遺跡調査会規約

第１条　この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

（名称）

第２条　この調査会は長野県中央道遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

（組織）

第３条　調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長　１名　(2) 理事　若干名　(3) 監事　２名

事務所）

第４条　調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

（会長及び理事）

第５条　会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

２　理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

(1) 学識経験者　(2) 関係学会の役員

(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者　(4) 関係市町村教育委員会の教育長

(5) 関係行政機関の職員

（会長及び理事の職務）

第６条　会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

２　理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

(1) 調査会の運営に関すること。　(2) 発掘調査の受託に関すること。

(3) 規約の改正に関すること。　(4) その他必要な事項

３　会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

（理事会の招集）

第７条　理事会は必要に応じて会長が招集する。

２　理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

３　前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

４　理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

（顧問）

第８条　調査会に顧問若干名を置くことができる。

２　顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

３　顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

（監事）

第９条　監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

２　監事は、調査会の会計を監査する。

（役員の任期）

第10条　役員の任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

（幹事）

第11条　調査会に幹事を置く。

２　幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

３　幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

（調査団）

第12条　調査会に調査団を置く。

２　調査団の組織及び運営について別に定める。

（事務の管理執行の規定）

第13条　調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

（経費）

第14条　調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

（会計の区分）

第15条　調査会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月31日に終わる。

２　調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

（出納及び現金の保管）

第16条　調査会の出納は、会長が行なう。

２　調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

（決算）

第17条　会長は、会計年度終了後１ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

（財務に関する事項）

第18条　この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

（委任）

第19条　調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

（付則）

この規約は、昭和45年７月22日から施行する。

イ）長野県中央道遺跡調査会役員名簿　（昭和47年11月現在）

顧問	一志　茂樹	（県文化財専門委員）		
会長	小松　孝志	（県　教　育　長　）		
理事	金井喜久一郎	（県文化財専門委員）	米山　一政	（県文化財専門委員）
	藤沢　宗平	（　〃　）	藤森　栄一	（長野県考古学会会長）
	原　嘉藤	（長野県考古学会委員）	宮嶋　進	（下伊那教育会会長）
	木下　衛	（上伊那教育会会長）	福田　幹人	（諏訪教育会会長）
	小泉兵次郎	（県　教　育　次　長）	飯島　丁巳	（県　文　化　課　長）
	佐藤　唯重	（飯田教育事務所長）	徳永　正人	（伊那教育事務所長）
	小林　彰	（阿智村教育長）	新井　良男	（鼎 町 教 育 長）
	矢亀　勝俊	（飯田市教育長）	中塚　伝次	（高森町教育長）
	北原　保喜	（松川町教育長）	斎藤　三夫	（飯島町教育長）
	北沢　照司	（駒ケ根市教育長）	細田　峩徳	（宮田村教育長）
	松沢　一美	（伊那市教育長）	安積　正一	（南箕輪村教育長）
	熊谷　大一	（辰野町教育長）	羽生　保吉	（下伊那地区教委協議会会長）
	坂井　喜夫	（上伊那地区教委協議会会長）	木川　千年	（諏訪地区教委協議会会長）
	林　茂樹	（上伊那郡中川東小学校教頭）		
監事	岡沢　幸朝	（県文化課課長補佐）	田中　富雄	（飯田市社会教育課長）
幹事	金井　汲次	（県文化課文化財係長）	前沢富実保	（県文化課文化係長）
	西沢　清	（　〃　専門主事）	浅川　欽一	（　〃　専門主事）
	矢島　太郎	（　〃　専門主事）	佐藤　文武	（飯田教育事務所総務課長）
	佐藤　陸	（飯田教育事務所主幹）	下平　久雄	（　〃　主事）
	松島　勇	（伊那教育事務所総務課長）	小林　正次	（伊那教育事務所主幹）
	鈴木　長次	（　〃　主事）	今村　善興	（県文化課指導主事）
	桐原　健	（県文化課指導主事）	神村　透	（　〃　）
	宮沢　恒之	（　〃　）	丸山敞一郎	（　〃　）
	岡田　正彦	（　〃　）	堀内規矩雄	（　〃　主事）

ウ）長野県中央道遺跡調査会調査団　（飯田班）

調査団長	大沢和夫		
調査主任	神村　透（高森町）	岡田正彦（松川町）	今村善興（総括）
調査員	今村正次	佐藤甦信	
	木下平八郎	矢口忠良	
	遮那藤麻呂	松永満夫	
	鳴海本昭	市沢英利	
	金井正彦	小林正春	
	酒井幸則	八木光則	
	小平和夫	宮下典彦	
	一条隆好		

調査補助員	飯島洋一	小林昭治	鈴木次郎	田口英次
	竹内三千夫	竹村和紀	徳永忠雄	三浦光一
	宮沢富夫	渡辺重良		

3）　発掘調査開始までの準備

ア　準備

4月10日を発掘開始と決め4月1日より9日までを発掘準備にあてる。

4月1日　飯田市地内その2を中心に、本年度発掘調査の日程計画を立てる。

4月3日　飯田合同庁舎にて、飯田市地内その2の調査について、関係機関が集まって事前の打ち合わせをする。参集者は、日本道路公団飯田工事々務所、山本農協、伊賀良農協、飯田市教育委員会、飯田中央道事務所、飯田教育事務所、中央道遺跡調査団で、4月10日に伊賀良から調査に入り、登記のおくれている山本へと移動していくこと。調査作業員は90人位をと話しあう。

なお、この日より調査に必要な物品の購入をはじめる。

4月6日　飯田市教育委員会を通して、有線放送で作業員の募集をはじめる。

4月7日　長野県教育委員会文化課にて、今年度の調査について打ち合わせる。

4月8日　飯田教育事務所にて、調査団の結団式を行なう。その後調査についての打ち合わせをし、用地内遺跡の現状踏査をする。

イ　発掘調査前の遺跡の状況

発掘直

発掘調査前の遺跡の状況と面積　　（飯田市　その２）

遺跡名	現況	状況	全体面積	用地内面積	最低調査予定面積
かぶき畑	畑	丘の麓にある傾斜地で、以前から縄文時代中期の石器が採集されていた。付近からは縄文時代中期土器片、土師器、須恵器、中世陶器片も発見されている。	21,000$^{m^2}$	9,500$^{m^2}$	1,600$^{m^2}$
柳田	水田・畑	湯川西方の山地より流出した比高10～15mの台地で、地表面にて黒曜石片、石鏃等が採集され、また、縄文時代中期の土器片、打石斧等が水田の中耕の際出土している。	332	256	50
山田	畑	石子原の南側に立地する谷一つ隔てた台地で、湯川流域に傾斜している。縄文時代中期の土器片、打石斧が出土している。	1,750	670	130
石子原	畑	山本小学校の南方 150mの小高い平担部で、古い扇状地の両側が侵食され残った部分である。縄文時代早期、中期の土器等が出土している。	3,500	1,450	290
石子原古墳	畑	石子原遺跡の台地先端に立地する古墳で、東南に緩い傾斜を示す円墳。開墾時に一部が破壊されている。	130	88	88
ようじ原	畑	二つの小川の中間に東西にのびる台地で、縄文時代早期、中期の土器片、石器等が出土し、他に弥生後期土器、土師器、須恵器が発見されている。	2,100	72	15
上の平東部	畑	もつけ川の左岸の台地上にあり、緩傾斜をなして川に下っている。縄文時代中期の土器片が出土している。	356	356	70
寺山	畑	中村部落の東側中央部の長清寺のある台地縁で、縄文中期土器の遺物と古墳時代の石製模造品が採集されている。	800	708	140
六反田	畑	大瀬木と三日市場の境界となるあたりの桑園内にあり、縄文時代中期の土器片・石器片と平安時代の土師器片が出土している。	3,850	1,120	220
大東	水田・畑	酒屋前遺跡の西方にあり、深い峡谷をなす新川との間にある微高地で、凹地により二地点に分割される。土師器片、須恵器片、中世陶器が発見されている。	17,000	8,300	1,600
酒屋前	水田・畑	伊賀良小・中学校の東南方向に緩傾斜をなす扇状地で、水田の深耕の際、土師器・須恵器、中世陶器片が出土している。	9,100	6,500	1,200
滝沢井尻	水田・畑	北方と大瀬木の境に滝沢井が東流し、その右岸の微高地に立地する。左岸に小垣外遺跡があり、いずれも縄文時代中期から中世に至る時期の遺物がかなり多く散布している。	1,100	1,000	200
小垣外	畑	北方の南沢と滝沢井との間にある小高い丘で、古くは南沢の扇状地であり、３度くらいの緩傾斜をなしている。一面から縄文時代中期の土器片をはじめ、歴史時代の土師器、須恵器が発見されている。	9,100	8,100	1,600
辻垣外	畑	小垣外遺跡の南東側凹地をはさんだ微高地にあり、縄文時代中期の遺物が発見されている。	7,200	4,400	800
三壷淵	水田・畑	扇状地が段丘地帯に接するあたりに立地し、東方に向って緩傾斜をなしている。付近より土師器、須恵器片が出土している。	400	368	70
上の金谷	水田・畑	北方のやや山に近い地域で、傾斜をなしている。付近の桑畑より土師器、須恵器が地表採集でき、南面の水田地帯は集落址の可能性が大きい。	1,150	1,108	220
大門原B	畑	大門原扇状地の先端部から傾斜地にかかるA遺跡の南東下方に展開する傾斜地に立地する。縄文時代中期より弥生時代後期にかけての遺物が散布している。	64,000	16,000	2,000

2　調査の実施と経過

1）　調査の開始と経過

昭和47年４月10日、飯田市伊賀良の中央道飯田インターになる小垣外遺跡に全員集合する。調査作業員の皆さんは、昭和45年度に参加した人たちが多く、なつかしい顔をあちこちに見つける。飯田市教育長矢亀勝俊先生のあいさつ、調査主任の調査計画と調査方法の説明があった後、運ばれてきた道具を整理し、現地にテントを設営して、本年度の調査は開始された。

飯田地区の調査は、伊賀良地区11遺跡、山本地区４遺跡に加えて、パーキングエリヤなどで追買になった阿智村かぶき畑遺跡と飯田市座光寺大門原Ｂ遺跡の２遺跡があった。山本地区は用地買収がおくれていることもあって、伊賀良のインターを中心とする広い遺跡に調査の重点をおき、もう一つは用地の手続きがすみ次第に伊賀良から山本へと調査を進めることを計面した。４月10日から７月25日までの80日間を予定し、途中から岡田正彦調査主任が参加次第２班にわかれることにした。

４月17日より、岡田主任が参加し、調査団も全員そろう。小垣外・辻垣外遺跡の調査が終り、５月15日より、２班にわけて、本隊をＢ班とし、岡田調査主任が中心になりインター内と附近の遺跡を調査し、Ｃ班は神村調査主任が中心となって、中村、山本の遺跡を調査する。Ｃ班の調査は６月28日に終る。途中、石子原遺跡で旧石器を発見し、マスコミや研究者から注目され、そのため、再契約して、２次調査を行なうことになった。６月29日より、Ｂ班の１部が上の金谷遺跡に入る。かぶき畑遺跡と大門原Ｂ遺跡は用地買収がすんでおらず、今回の予定期間内ではできないことになった。上の金谷遺跡の調査が終了したのは、７月22日であった。

調査団は引きつづいて高森町と松川町の調査に入る。かぶき畑遺跡は、石子原遺跡の２次調査も終った９月19日調査するが、遺構・遺物はなかった。大門原Ｂ遺跡は用地買収がなかなか進展せず、３月に入って話がまとまる。そのため調査は、報告書執筆の合い間をぬって３月６日～14日にかけて行なう。

飯田地区の整理は、高森・松川両町の調査が終ってからの、12月・１月に行なった。

各遺跡の調査は第１表の通りである。

2）　発堀調査協力者

飯田市の調査であるため市内の人たちがほとんどであるが、特に伊賀良・山本地区の方が多かった。また阿智村の調査も入っていたので、阿智村からもいく人か参加していただき、その方々は４回目というベテランである。こうしたなれた方たちの仕事であるので、作業はとてもしやすかった。

飯田市

第1表　飯田市地区内 その2　発掘調査経過

遺跡＼月	4月 1 10 20	5月 1 10 20	6月 1 10 20	7月 1 10 20	8月 1 10 20	9月 1 10 20	12～3月	主な遺構
阿智村駒場かぶき畑						19		なし
山本柳田			3 13					縄文住2、土壙10、溝状遺構1
山田			1 3					なし
石子原			1 29		17 21 第2次調査（飯田その3）			方形周溝墓3 土壙23、墓壙2 石組遺構1、旧石器礫群2
石子原古墳			7 24				遺物整理 遺物実測 図面作成 報告書作成	墓壙 4
伊賀良ようじ原			1					なし
上の平東部		26 1						縄文住 2
寺山		24 26						なし
六反田		15 24						平安住4、中世住1 竪穴遺構8 土壙7
大東			17 29					弥生住2、中世住2 土壙64
酒屋前			22 21					縄文住4、弥生住8、中世住4 土壙107、柱穴群2 磨錬状特殊遺構1
滝沢井尻		6 22						縄文住3、弥生住1、平安住2 中世住1、方形周溝墓1、柱穴1 土壙22、溝状遺構3
小垣外 辻垣外	10 10							縄文住8、平安住2、中世住12、土壙121 柱穴3、溝状遺構4
三霊淵		6 15						古墳住1、平安住2、土壙1
上の金谷				29 22				弥生住7、古墳住1、平安住3、中世住1 柱穴群2、土壙16 溝状遺構1
座光寺大門原B							（3月）6 14	なし

（山　本）　石田　光彦　伊坪　さだ　井上　忠作　金田ちさえ　熊崎　一江　熊崎はつえ
小林　昭治　斉藤　肇　佐々木和子　島岡　さと　竹村　一郎　竹村　和紀　竹村　伝一
竹村　宮恵　遠山　健　浜島扇之助　原　アケミ　林　弘恵　福岡　一子　松井　光枝
村沢　和光　森本　進一
（伊賀良）　池戸　宰子　位高　重子　市瀬　悦子　市原　千里　伊藤　郁子　伊藤モモエ
井上つね子　遠藤　さわ　奥田　庄一　奥田　千舟　春日　要　春日チサト　片山　文子
加藤さとみ　加藤　せつ　木下きねよ　木下はるみ　久保田只雄　久保田裕二　熊谷八千子
黒河内光子　五島美恵子　後藤　和子　酒井　好子　椎名いすず　鈴木まさ子　関島ひろこ
高内　くわ　高内　武一　高橋　すえ　塚原千枝子　中上　百　原　玄也　原　とき子
原　敏一　林　ひろ子　肥後寿恵子　肥後　三子　平沢　央子　前田重五郎　松沢　きよ
松沢　節子　松沢とし子　松沢　ちえ　松沢　久恵　松下　兼吉　光沢　明　光沢　百恵
矢沢　要　矢沢きよ子　吉沢　夏江　米山　久子　山口志津子
（下久堅）　新井みさ子　池田　きし　氏井　広人　桐生みさお　小池　千君　寺沢　二郎
寺沢　なか　知久さとゑ　平沢　俊恵　平沢　彦男　平沢　巳春　元島　貞子　吉沢　徳男
（座光寺）　飯島　洋一　北村　重美　木下しんよ　田原　初子　塚原　和子　中根　祐子
七海　節子
（松　尾）　池田　功　大島　利男　小池　治平　小池　照夫　小林津佐子　宮沢　富夫
（その他）　小林ますえ　鈴木　ふゆ　中村　一義　神村　さよ　久保田尚子　田添　真彦
小木曽道子　吉川　清司　清水　実

阿智村
牛山　畝雄　牛山　初江　熊谷う志子　倉田　千穂　佐々木清美　関　政子　原　こまえ
牧島よしゑ　水上いずみ　宮島ふさえ

その他（県外の学生も含む）
所沢　啓二　徳永　忠雄　竹内三千夫　三浦　孝一　田口　英次

3）　現地指導・見学者

伊賀良地区での学術調査は今回が初めてということもあって、地域の方々が合い間を見ては見学に来られたし、山本地区では旧石器の発見や、人骨（近世）の発掘もあって、地元や研究者の見学が多かった。特に、石子原古墳について明治大学大塚初重教授、同小林三郎助手の指導を、石子原遺跡の旧石器については東北大学芹沢長介教授、明治大学戸沢充則助教授の指導をうけた。同遺跡の地質については、信州大学斉藤豊助教授、東京大学鎮西清高博士、豊丘中学校松島信幸教諭の指導をうけた。

道路公団　名古屋支社長　支社用地課長　監事　室長　支社埋蔵文化財担当主事　飯田工事事務所長

同総務課長　同工事課長　恵那山東トンネル事務所長

県教委　文化課長　同課長補佐　文化財係長　埋文担当指導主事　同主事　飯田教育事務所長　同総務課長　同指導主事　同他職員一同

飯田市　教育長　社会教育課長　同課長補佐　飯田有線放送　飯田市文化財審議委員一同

学　校　伊賀良中学校長　同教頭　伊賀良中学校近代史クラブ（小島徳郎）同養護学級　伊賀良小学校郷土クラブ（代田照男）　緑ケ丘中学校歴史クラブ（伊藤順次）　山本小学校長　同教頭　山本中学校長　同校職員　同校生徒　同歴史クラブ（柄木田孝行）　飯田高校社会科職員一同

研究者　井口喜晴　江坂輝弥　大塚初重　川上　元　小林三郎　斉藤　豊　ショフコ・プリアス　芹沢長介　千葉徳爾　鎮西清高　筒井泰蔵　戸沢充則　林　茂樹　長谷川善和　樋口昇一　松島信幸　森島　稔　中央道調査団上伊那班一同

その他　飯田市文書審査会　山本郵便局一同　高森町婦人会　伊賀良・山本地区のみなさん多数

3　発堀調査の方法

中央道用地内の遺跡発堀調査は、工事により破壊されるため、工事着工前に記録保存を目的とした緊急発堀である。そのため、この調査は、用地内にどのような時期の遺跡が、どんな遺構と遺物を残しているかをさぐり、それを報告書としてまとめることが目的となる。

そのため、発堀調査は中央道用地内に限定される。すでに分布調査によって、その遺跡の広がり、時期は一応確認されている。その遺跡の中において、中央道がどのような部分をとおるかによって４区分した。０―全面かかるもの。Ａ―遺跡の頂部がかかるもの。Ｂ―遺跡の中央部を横切るもの。Ｃ―遺跡の先端部にかかるものの４区分がそれである。用地内の遺跡は全面にグリットを設定するのを原則として、小さな遺跡、やむを得ない遺跡は適当にトレンチを入れた。グリットの設定は、２ｍ間隔の基準方眼を設定し、中央道の幅員方向に01～99の２桁の数字を用い、それに直交する方向にＡ～Ｙの25字のアルファベットを用いた。その数え方は名古屋方面から東京方面に向って立ったとき、左から右へ01～99とし、ただし、道路のセンターライン（20ｍおきにセンター杭をうつ）を50とする。だからセンターを中心に左右98ｍの巾がとれる。アルファベットは中心杭のうち、遺跡内で最も名古屋よりを基準にして東京方面へＡＢＣ…とする。Ａ～Ｙの25字で50ｍをおさえ、その範囲を地区としておさえ、それもＡＢＣ…と標示する。これによって、25地区1250ｍがとれる。だからそれぞれのグリット地点は、「KGB　AC 63」というように、表示できる。これは小垣外遺跡のＡ地区Ｃ63地点ということになる。このようにグリットを設定してから、適宜にグリットをほり、遺構が確認されたらそのまわりを広げていくという方針をとった。調査中の記録としては、「調査日誌」「調査記録」「住居址調査カード」「古墳調査カード」等を使用した。

なお　こまかな調査方法については「長野県中央道埋蔵文化財発堀調査指針」という小冊子をまとめてそれをもとに調査を進めている。

また、調査中、調査員の努力によって、「調査速報」を日刊で発行し、作業員の方々に発堀調査、調査結果について理解してもらった。（神村）

Ⅱ　飯田市伊賀良・山本地区の概況

1　伊賀良・山本地区の環境

下伊那郡から上伊那郡にかけて、南北に帯状に続く盆地状の大きな低地が伊那谷で、東に、伊那山脈、赤石山脈、西に、木曽山脈があって、その中央部を天竜川が南流している。下伊那郡は、長野県の最南端に位置し、地形上から大別すると、赤石縦谷、飯田盆地、西部及び南部山地の三地区になっている。

飯田盆地は、北は上伊那郡境の松川町から、南は飯田市の南部、天竜峡までの細長い盆地で、この盆地の中心は、飯田市飯田である。飯田市は、数度にわたる町村合併によって、この盆地の南半一帯を占める行政区画となっているが、今回の発掘調査の対象となった地域は、飯田盆地の西南に位置する伊賀良・山本地区が主体である。

伊那谷の南部地域、特に飯田付近においては、河岸段丘の発達が日本屈指といわれている。この地域の段丘は、新旧約10段の段丘面に区分されているが、南部地域ほど段丘の数が多く、古い段丘から新しい段丘が見られ、天竜川の上流へいくにつれて段丘の数が減り、新しい段丘だけが発達している。もう一つの特徴は、赤石・木曽山脈から押し出された扇状地が各所に発達している。天竜川右岸の竜西地域には、大きな扇状地が並んでいる。それを下伊那郡の北から主なものをあげると、松川町の桑園・堤原・増野原・高森町の増野・新田原、上市田、牛牧地籍の扇状地、飯田市座光寺の大門原、上郷町の米の原・柏原、飯田市上飯田の押洞・正永寺原、同市伊賀良地区の北方・大瀬木の扇状地、山本地区の大明神原等その数は多い。この中では、伊賀良地区の扇状地は、最も発達したもののひとつである。山本地区の大明神原までは、下伊那竜西地域の区分内に入るが、ここから西南部では、山本・阿智村と下条村に続いて、小規模な扇状地が数多く形成されており、下伊那地域の扇状地のうち阿智・親田地域と区別されている。この山本・伊賀良地区において、扇状地の形勢の差異を見ることができる。これら大小さまざまの扇状地は、それを構成する礫層によって、古期、中期、新期扇状地に区分されているが、南部の下条山脈の北東麓に形成されている親田等の扇状地や、山本地区から阿智村にかけて、木曽山脈の山麓からやゝ離れた所に残丘状に残された舌状台地は、古期扇状地であり、その上方は新しい扇状地が重なっている。伊賀良地区と飯田松川の北にある風越山々麓に形成されているのは、新期扇状地の模式的なものである。扇状地だけでなく、地質図を見ても、基盤となる岩質の相違も大きく、断層線の走向も異なり、山本地区と伊賀良地区では久米川を境にして、相隣り合う地域でありながら、地形・地質的には相違の著しいことに気づく。

伊賀良・山本地区は、以前は伊賀良村・山本村として夫々独立した村政を敷いていたが、昭和33年町村合併によって飯田市に合併して今日にいたっている。伊賀良地区には、古代東山道の育良駅が置かれていたと言われ、山本地区の久米の光明寺には、平安時代の仏像が残されていることを見ても、この両地区の

歴史を類推することができよう。両地区共、飯田市の西南に位置し、木曽山脈南部の前山、笠松山（1271m）、鳩打峠（1173m）、高鳥屋山（1397m）、梨野峠（1200m）の東山麓に位置し、東は、飯田市竜丘・三穂地区に接しているため、天竜川に面する段丘地帯を持たない共通点を持っている。この両地区は、木曽山脈から断層で切り離された茶臼山・二ツ山山塊と、この山を分けて流れる久米川あたりを境にしているが、この二ッ山と、南に位置する城山・水晶山を境にして景観の差異が著しい。

伊賀良地区は、木曽山脈山麓には、北の飯田松川と南の久米川（北は茂都計川）の強い押し出しによって広くて大きな扇状地が発達している。特に松川の扇状地は、下伊那地域の中で模式的な新規扇状地で、飯田盆地主部の最西部にあたる。この扇状地は、東方下殿岡まで続き第2段丘に連っている。伊賀良地区は、西方の山地帯、松川右岸沿いの段丘面、東方竜丘地区に接する段丘面、南方茂都計川流域の段丘面を除いては、中央部は、この大きな扇状地にあると言えよう。この新しい扇状地を前山から流れ出る新川とその支流、飯田松川から引水している大井川が、浅い谷を作りながら東流してこの面を潤している。特に伊賀良井の歴史は古く、鎌倉時代の開発と言われ、松川から引水した用水のほかに、他の川から引水している井水も多い地域で、飯田松川の開析の著しい扇状地面の水利の必要性を物語っている。

山本地区は、飯田盆地主部とは二ツ山、城山、水晶山などの丘陵によって隔った阿智盆地の一部である。この両盆地を隔つ丘陵は、ゆるやかな曲線を画きながら南北に並び、この丘陵と木曽山脈の山麓にはさまれて、ほぼ南北に細長く続くのが阿智盆地である。この地区の木曽山脈の山麓には、新しい扇状地が発達しているが、北側伊賀良寄りの大明神原を除いては、規模は大きくない。国道 153号線が通るあたりは、古い扇状地があって、この扇状地の両側がだんだん浸食されて、台地状の小丘陵として残っている所が、各所に分布し、南東の方向にのびている。旧石器発見で話題を投げた石子原遺跡のある台地も、このひとつである。これらの台地上では、工事の切取面や、崩壊面では、赤褐色の強い古期ロームの露出がよく見られる。この古いローム層の露出は、飯田盆地では殆んど見られない。

石子原から、国道 153号線を越えて、東南へ伸びている舌状台地と、その東に位置する水晶山を分水嶺として、北は、久米川水系、南は、阿知川水系と二分されている。山本地区においては、阿知川の支流の湯川・箱川・久米川とその支流が、木曽山脈の前山から流れ出し、山麓の扇状地を浸食し、残丘化した台地や、東に並ぶ小丘陵を縫うように流れて、この地区を潤している。山麓の扇状地や、これらの川に面した所に耕地が展開し、集落も、国道 153号線の街村を除いては、これらの小河川に面した所に集落が散在しているのも、この地域の特長である。近年にいたって、扇状地の上部や、東にのびる台地上や、数条に走る断層崖によって生じた崖錐面にも開拓が進み、集落が発達しつゝある。

2　伊賀良・山本地区の遺跡

地形でも説明したように、伊賀良・山本地区の相異は遺跡立地にもあらわれている。山麓の扇状地には遺跡の多いことは共通であるが、伊賀良地区の平担地には、殆んど遺跡の分布が見られるのに、山本地区の場合は台地上であっても、分布の濃淡の差がはっきりし、低地であっても、川に面した小台地上に、その分布が多いこともある。しかし、現在までは伊賀良地区への注視が多かったことも、その理由のひと

つでもあるので、今後の調査によって状況は変ってくるであろう。

1） 伊賀良地区の遺跡（図1 ①～⑭、1～89）

伊賀良地区は、下伊那地方でも遺跡分布の濃厚地帯として知られ、現在までに確認されたものは、中央道用地内遺跡を含めて99の多きに及んでいる。その分布状況は、地区全域の平担部に分布しているが、山麓扇頂部から中央自動車道の通過する扇央部にかけて濃厚で、その東の段丘面でやゝ稀薄とはなるが、川沿いの地域には集中する傾向を見せている。時期的に見ても、先土器時代の遺跡は、現在未発見であるが縄文早期から各期にわたり、今回の発掘調査の結果でもわかるように、中世期のものまで発見される地域である。

ア 山麓扇頂部の遺跡 （1図、1～10）

茂都計川上流に矢平（1）から飯田垣外（5）が列状に並び、新川支流の上流にはさまれた台地上には孫兵衛屋敷（6）から火振原遺跡（9）が固っている。縄文期各期のほか、弥生時代から古墳時代の遺物包蔵も多く、矢平遺跡は、標高 850m の位置にありながら、弥生後期と平安時代の遺跡として注目されている。孫兵衛屋敷（6）、牧平（2）、火振原（9）遺跡は、押型文土器出土で知られるだけでなく、各期の遺物包蔵の量も多く、古くから注目されている。北へ行っては、佐久良社付近（10）のほかには、遺跡が位置していないが、下方に大きな遺跡があるので、それに続く地域があると思われる。

イ 扇状地上方面の遺跡（1図11～37）

この一帯は、現在でも住宅が多く、新川の支流河川によって水利に恵まれた所である。古い民家も多い所で、この地区内では、最も遺跡分布が濃厚であり、大遺跡も多い。遺物の出土量、その時期・性格からみて注目されるものをあげると、原の平（13）、細田（19）、大原（27）、在京原（29）、山口（30）、真慶地原（32）、立野遺跡（33）と数多く、どのひとつをとっても特色のある遺跡である。特に立野遺跡は、押型文土器各種揃い、縄文・撚糸文・無文土器も含めて出土する。代表的な縄文早期の遺跡であることは、神村によって報告されている。なお、前・中・後期のほか、水神平系の遺物出土もあって注目されている。この一帯では、調査が進むにつれて特色のある遺跡が増加すると思われる。

ウ 中央道周辺の遺跡（1図38～65）

伊賀地区においては、インターチェンジが設置されるために、中央道は、山麓をはなれて扇央部を通過しているので、この付近の遺跡は、扇央部に立地していることになる。この付近までくると、扇状地は、茂都計川や新川とその支流によって浸食をうけ、その間が台地化してくる。遺跡は、川と川にはさまれた小台地上に立地している。これらの遺跡は、縄文中期以降、弥生時代から古墳時代のもので、規模も余り大きくないと見られていたが、中央道用地内の発掘調査の結果に見られるように、縄文前期の住居址の発見もあった。弥生後期から古墳・平安時代の集落の一画が確認され、予期通りの遺跡であったとも言える。しかし、その中心は、この周辺のどこかにあるにちがいない。いずれにしても、中央道用地内や、中津川

鉄道用地内の分布調査によって発見された遺跡も多く、近い将来において、この付近の遺跡の性格がよりはっきりされるに違いない。

エ　扇端部から段丘面の遺跡（1図66～89)

この付近へ来ると、川も水量を増し、扇状面の浸食も深まってくるので、台地上の水利は悪く、遺跡は川に面する所に立地する傾向を示している。しかし、台地上に遺物がないわけではないので、他域にくらべて調査が進んでいない所であるといえよう。

茂都計川に面する下中村には、朝臣（66）～塚本遺跡（75）が立地し、新川左岸から、鼎町一色段丘面に面する下殿岡面には、はりつけ原（79）～下原遺跡（89）が存在している。全体的には、縄文中期から弥生・古墳・平安時代の遺物出土が報告されているが、遺跡の性格は、はっきりされていない。その中間に位置する三日市場は、白井川の浸食で谷が切り込んでいて、遺跡が少ないが、この谷に面する土器洞(78)は、須恵器のほかに、鉄滓や焼土の発見もあって、須恵窯址が存在している。

2）　山本地区の遺跡

山本地区は、遺跡の立地を大別すると、山麓扇状地と、東方に伸びる台地、河川流域の小台地に分けられる。これらの中で、包蔵量の多い遺跡は、扇状地上と、台地上に立地しているが、山麓渓流沿いや、小河川に面する小台地上の遺跡の中にも、特色を持ったものも見られる。

ア　山間渓流沿いの遺跡（1図90～93)

久米川と湯川は、高鳥屋山と梨野峠から流れ出ているが、湯川上流の青木（90)、社円寺原遺跡（91)は久米川上流の谷間に面する遺跡である。特に青木遺跡は、桃ケ久保遺跡とともに、標高 800m の高さにあり、縄文中後期のほか、弥生後期、灰釉陶器の出土があり注目されている。

イ　山麓に近い扇状地の遺跡（1図94～107)

南、阿智村境の湯川平から、北は、伊賀良地区に接する大明神原まで、山麓の扇状地には遺跡が多い。特に、大明神原遺跡（105）は、扇状地も広く、水利条件もよいので、遺跡範囲は広く、包蔵量も多い。山本地区としては、縄文早期から後期、弥生後期、古墳時代の遺物も多く、大きな遺跡のひとつである。

金堀塚遺跡（98）は、古墳もあり、縄文早期の遺物こそ発見されていないが、縄文中期から古墳時代にかけての遺物の多い遺跡である。その他の遺跡については、現在まであまり調査が進んでいない。

ウ　古い台地上の遺跡

中央道用地内遺跡を含めて、ここから東へ伸びる台地上は、山麓の扇状地とともに、遺跡の多い所である。　特に、東南部の箱川と久米川の間の台地と、箱川と湯川の間に伸びる箱川原や長田平の台地は、縄文時代中期を主体とする遺跡が並んでいる。猿子平遺跡（110）は祭祀遺跡として知られ、土師器のほか石製模造品出土地である。杵原遺跡（112）は、北側の台地に、箱川原遺跡（115）は南側の台地と相対

た位置にあり、縄文中期を主体とした遺跡であるが、杵原には、弥生時代や古墳時代の遺物も発見されている。箱川原の北側では、昭和45年、工場建設工事中に住居址が発見され、緊急発堀調査が実施され、5軒の縄文中期の住居址が確認されている。特に、釣手形土器と有孔鍔付土器の完形品は逸品である。なおこの工事中に調査なしに破壊された住居址も、あったので、集落址が存在したことが確認されている。この台地の南側では、相当量の土器片が地表で捨えるので、遺跡の中心は、南側と思える。

エ　水晶山山麓の遺跡（1図117～122）

水晶山の西麓を流れる川が箱川である。この箱川に面した山麓小台地に立地して、水晶山をとりまくように遺跡が並んでいる。箱川中尾遺跡（117）は、やゝ北に離れているが、縄文中後期の遺物が多く、弥生後期の遺物もあり、この周辺では大きな遺跡である。六蔵むくり（118）、水晶山麓（119）、箱川（120）下平（121）と並んでいるが、遺物の出土はあまり多くない。

オ　久米川中流域の遺跡（1図122～135）

久米川は、上流ではいくつもの支流に分かれている。二ツ山の西麓で、この川をはさんで位置するのが二ツ山（122）、桜垣外遺跡（123）である。二ツ山の南山麓に白山遺跡（146）、久米川の右岸台地に大塚（124）、観音寺付近遺跡（125）がある。大塚遺跡は、中津川線の用地にあたり、昭和44年緊急発堀調査によって、中世の火葬墓群が検出されている。

久米川は、二ツ山と城山の間を流れ出ると、二ツ山の東麓の久米部落へ出る。ここは、北の茂都計川と、南の久米川にはさまれ、東を除いて三方山に囲まれた盆地状の台地である。ここの川に面した小台地や、山麓の崖錐面には、それぞれ小規模な遺跡が多い。縄文中期のほか、弥生後期の遺物出土の遺跡も多く、今後の調査を待つ地域である。

3）　伊賀良・山本地区の古墳

伊賀良・山本地区の古墳は、伊賀良に43基、山本に11基あったと伝えられる。現存のものは、伊賀良で9基、山本では3基に過ぎない。いずれも円墳で規模は大きくない。両地区共、特に集中した所はないが扇状地から扇端部の台地上や、川に面した傾斜地等に分布している。多くは、石室が小規模で、山地性の小円墳で、後期古墳と言われている。しかし、今回の石子原古墳の発堀調査によると、主体部は、小石室のほかに、3この土壙が存在し、追葬の事実を示している。この土壙のひとつからは、6世紀に比定される須恵器の出土もあって、この地区の古墳の性格に各種の話題を投げかけている。

第１表　飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器時代	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	土師器	須恵器	灰釉	其の他		
1	柳田	飯田市山本湯川					○										○	
2	山田	〃　〃　南平					○					○	○	〃				
3	石子原	〃　〃　〃		○	○		○	○					○	○				古墳あり、前期旧石器出土
90	青木	〃　〃　南平					○	○				○			○			
91	社円寺原	〃　〃　〃					○											
92	桃ケ久保	〃　〃　北平					○					○						
93	天神岩	〃　〃　西平					○					○	○					
94	湯川（平）	〃　〃　湯川					○					○						
95	平林	〃　〃　西平											○					
96	浄玄寺付近	〃　〃　〃					○					○						
97	三ノ沢	〃　〃　〃											○					
98	金堀塚	〃　〃　〃					○	○				○	○					
99	馬捨場	〃　〃　〃					○											
100	大畑	〃　〃　〃					○					○			○			
101	竜文寺郭	〃　〃　中平					○											
102	中溝	〃　〃　北平					○											
103	オタキバ	〃　〃　〃					○					○	○	○				
104	シシガシラ	〃　〃　〃					○											
105	大明神原	〃　〃　〃			○	○	○	○	○			○	○	○				
106	ナギジリ上	〃　〃　東平					○					○						
107	夜燈付近	〃　〃　〃					○											
108	七久里	〃　〃　南平					○											
109	権現	〃　〃　西平										○						
110	猿子平	〃　〃　箱川										○	○					
111	長田洞	〃　〃　〃					○					○						
112	杵原	〃　〃　竹佐					○					○						
113	森林	〃　〃　〃					○					○						
114	下り松	〃　〃　〃					○											
115	箱川原	〃　〃　〃					○	○	○								○	
116	横山	〃　〃　久栄					○											

第１表　飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器時代	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	土師期	須恵器	灰釉	其の他		
117	箱川中尾	飯田市山本箱川					○	○				○						
118	六蔵むくり	〃〃〃					○											
119	水晶山麓	〃〃〃										○						
120	箱川	〃〃〃					○											
121	下平	〃〃〃					○											
122	二ツ山	〃〃東平					○											
123	楼垣外	〃〃〃					○											
124	大塚	〃〃久米											○	○			○	
125	観音寺付近	〃〃〃					○											
126	白山	〃〃〃				○	○											
127	久米中尾	〃〃〃										○						
128	新九田	〃〃〃					○											
129	上の原	〃〃〃					○					○						
130	宮下	〃〃〃					○					○		○				
131	上田	〃〃〃										○	○					
132	高野	〃〃〃										○						
133	洞口	〃〃〃					○					○						
134	馬場平	〃〃〃					○											
135	矢代	〃〃〃					○					○	○					

第1表　飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器時代	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	土師器	須恵期	灰釉	其の他		
5	ようじ原	飯田市伊賀良中村					○					○						
6	上の平東部	〃〃〃			○	○	○						○	○			○	
7	寺山	〃〃〃					○									石製模造品	○	
8	六反田	〃〃大瀬木					○	○					○	○	○		○	
9	大東	〃〃〃					○	○				○					○	
10	酒屋前	〃〃〃				○	○	○	○			○					○	
11	滝沢井尻	〃〃〃					○	○	○			○	○				○	
12	小垣外・辻垣外	〃〃北方			○	○	○	○				○	○	○			○	
13	三產淵	〃〃〃					○	○				○	○	○			○	
14	上の金谷	〃〃〃					○	○				○	○	○			○	
1	矢平	〃〃大瀬木					○					○			○			
2	牧平	〃〃〃			○	○		○										
3	山田	〃〃〃					○											
4	井の口原	〃〃〃					○					○		○				
5	飯田垣外	〃〃〃					○					○						
6	孫兵衛屋敷	〃〃〃〃			○		○	○				○	○	○	○			
7	川越場	〃〃〃										○						
8	梅ケ久保	〃〃〃			○		○					○	○	○				
9	火振原	〃〃〃			○	○	○	○				○						
10	佐久良社付近	〃〃北方					○											
11	ヨキ峠	〃〃大瀬木					○					○		○	○			
12	請井地	〃〃〃					○	○										
13	原の平	〃〃〃					○	○				○						
14	鳥矢平	〃〃〃					○					○						
15	藤塚平	〃〃〃					○											
16	小竹	〃〃〃					○					○		○				
17	横内	〃〃〃					○	○										
18	北反田	〃〃〃					○											
19	細田	〃〃〃					○	○				○		○				
20	三尋石	〃〃〃					○											
21	三五郎塚	〃〃〃					○					○						
22	伊京	〃〃北方				○	○	○				○						
23	河原林	〃〃〃					○											

第１表　飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器時代	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	土師器	須恵期	灰釉	其の他		
24	野沢平	飯田市伊賀良北方					○											
25	七本松	〃〃〃				○	○											
26	直刀原	〃〃〃					○											
27	大原	〃〃〃			○	○	○											
28	入野	〃〃〃					○											
29	在京原	〃〃〃				○	○	○										
30	山口	〃〃〃			○	○	○	○				○						
31	真慶地山	〃〃〃				○	○											
32	真慶地原	〃〃〃				○	○	○				○	○					
33	立野	〃〃〃			○	○	○	○			○	○						
34	藤塚	〃〃〃					○	○				○						
35	土平	〃〃〃										○						
36	北原	〃〃〃					○					○						
37	中通	〃〃〃					○					○						
38	山王田	〃〃中村										○						
39	伊勢在家	〃〃〃					○											
40	樋明	〃〃〃					○					○						
41	上の平	〃〃〃					○						○					
42	寺畑	〃〃〃					○											
43	藤九郎畑	〃〃大瀬木					○							○				
44	徳明	〃〃中村					○						○	○				
45	紙屋	〃〃〃											○					
46	六反田Ⅱ	〃〃大瀬木					○					○	○					
47	源氏垣外	〃〃〃					○					○		○				
48	知原	〃〃〃					○					○						
49	柳下	〃〃〃					○	○				○						
50	宮下	〃〃〃					○	○				○						
51	位高	〃〃北方					○					○						
52	向林	〃〃〃					○					○	○	○				
53	文吾林	〃〃〃					○					○	○					
54	塩漬原	〃〃〃				○	○	○					○					
55	ハチヤシキ	〃〃〃				○	○	○										
56	薬師原	〃〃上殿岡											○	○				
57	砂垣外	〃〃北方					○					○	○	○	○			

第1表　飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器時代	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	土師器	須恵器	灰釉	其の他		
58	下金谷	飯田市伊賀良北方											○	○				
59	畑田	〃〃〃												○				
60	桑の木	〃〃〃											○	○				
61	田中	〃〃〃											○					
62	宮の上	〃〃〃					○					○						
63	笛吹	〃〃〃					○						○	○				
64	南方	〃〃〃					○						○					
65	西の原	〃〃〃					○					○						
66	朝臣	〃〃中村					○											
67	権現原	〃〃〃					○											
68	観音堂	〃〃〃					○							○				
69	夜行洞	〃〃〃					○											
70	横須羅	〃〃〃					○											
71	清水平	〃〃〃					○											
72	辻屋	〃〃〃						○					○	○				
73	大原	〃〃三日市場					○						○					
74	栗谷本	〃〃中村											○	○				
75	塚本	〃〃〃					○							○				
76	宮の先	〃〃三日市場											○					
77	丸山	〃〃〃					○											
78	土器洞	〃〃〃												○				
79	はりつけ原	〃〃〃					○	○				○	○	○				
80	中島平	〃〃〃					○											
81	市場屋敷	〃〃上殿岡					○											
82	稲葉	〃〃三日市場					○						○	○				
83	北村	〃〃下殿岡											○			石製模造品		
84	垣外	〃〃〃					○						○					
85	宮の前	〃〃〃					○					○						
86	宮後	〃〃〃					○	○										
87	公文所前	〃〃〃					○											
88	大久保	〃〃〃											○	○				
89	下原	〃〃〃					○						○					

Ⅲ　調　査　遺　跡

1　かぶき畑遺跡

1）　位置

遺跡は長野県下伊那郡阿智村駒場にある。昭和45年度の当村内中央道内遺跡調査の際、ここは調査しなかった。その後、この台地にパーキングエリトの設置が決定し、用地が大きく広がって、丘にまでかかることになり、そのことがはっきりした昭和47年に用地内遺跡として調査対象になった。45年度の調査で、南側くぼち宮の脇遺跡の遺物は両側台地からの流れこみと考え、また台地先端部の国鉄中津川線の駒場駅予定地がかぶき畑遺跡であり、その延長として、かぶき畑遺跡をおさえた。（1図2、写一の1）

この台地は、駒場から南一帯を見渡すことのできる小じんまりした台地で、標高 595m、巾は基部で20m、先端部で50mと先に広くなり、長さ60mの小さな、そして両側の崖はけわしく、その比高は25mある。台地頂部はこんもりしており平担ではない。黒土の堆積はほとんどなく、耕土そしてロームとなっている。

中央道の部分に、センターラインに直交するようにと、台地先端部にT字形のトレンチを入れたが、遺構、遺物を検出することはできなかった。

2）　まとめ

舌状台地であることや、丘下のまわりに遺物が散布するところから遺跡としておさえたが、調査の結果は、遺構、遺物を検出することができず、かぶき畑遺跡の中心は、丘の上でなく、下の、学校裏側一帯と考えられる。

（神村）

2　柳　田　遺　跡

1）　位置

遺跡は飯田市山本湯川5219番地を中心とした地域にある。(１図３、写一の２、二）。山麓に湯川によって形成された扇状地で、その中央を湯川が浸蝕して南東に流れている。この湯川南岸の台地縁が遺跡である。湯川との比高差15m、標高 615m の台地で、そのほとんどが水田に造成されている。そのため遺跡の大半はすでに破壊されている。台地縁に小さくある桑畑に遺物の散布が見られ、発掘調査も、そこを中心に、南側の水田にも広げた。

中央道は台地中央部を南西から北西にと走っている。グリットは38＋０杭をＡＡとし、ＡＡ～ＡＪまで42～52の間に設定した。

地層は耕土の下に黒褐色土・茶褐色土・ロームとなっており、粘質の強い土である。地表からロームまでの深さは50～70cmある。

2）　遺構と遺物

遺構は台地地縁に集中して、住居址２と土拡10があり、それを後世の用水路が横切っていた。住居址は170cmの間をおいて、台地縁に沿って並んでいる。このことから考えて、台地縁に住居址が列をなしていたと思われる。土拡は住居址南側にあるが、住居址内にもあって、それは張り床されていたので、同時期と、それより古いものとに区別される。

ア　住居址

ア）１号住居址（６図１～60図１・２、 103図１～24、 134図１、写三・四）

遺構　１号住居址は台地縁にあって、崖から10m も離れていない。ロームをほりこんで、 510×530cm のほぼ円形の竪穴住居址である。主軸方向はN28°Wとなる。壁は南西で40cmと高く、北東に低くなっている。壁のほりこみは直である。床面の状態は良好である。周溝は巾20cm、深さ14cm程で壁に沿ってめぐっており、南側の一部できれている。主柱穴は４個である。炉は中央より北よりにあって、当初は石囲い炉であったと思われるが、その石のほとんどは抜きとられ、一部が炉の中におちこんでいる。内部は舟底状にほりこまれよく焼けている。炉内部とその周囲に遺物の出土が多かった。埋甕は南壁よりに正位の状態で、甕上端を床面よりわずかに高くなるようにうめてあり、その内側には土を埋めて張り床をしてあった。(132図１)。埋甕（60図１）は口縁部と胴下半を欠くものである。なお、住居内土壙10には張り床がある。

遺物　土器・石器がある。土器は破片で、器形のわかるのは埋甕と、炉内に落ちこんでいた筒形の鉢(60図２）がある。埋甕は上径32cm、下径20cm、高さ32cmある。これらの土器は縄文時代中期加曽利Ｅ式土器である。石器（103図）は打石斧（１～12)、横刃形石器（13・14)、磨石斧（15～17)、石鏃（15～24)、磨石（24）がある。打石斧・磨石斧は小形である。打石鏃は比較的大きい。

イ）２号住居址（６図１、60図３～９、103図25～40　写５）

遺構　１号住居址の西に並んである。500×518cmの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN３°Wとなる。壁は南側で27cmと高く、北東に近くなっている。床面の状態は硬くよい。周溝は壁に沿って、柱穴間に断続する。巾10cm、深さ４cmで、北西のは長く、東と南のは短かく、ほとんどない。主柱穴は４個である。炉は中央より北によってあり、石囲い炉であったが、西側の１つを除いては、取りはずされて、炉内と炉の南側の床面におかれている。堀りこまれた内部はよく焼けている。埋甕はないが、南壁直下に直径20cmの長円形、深さ13cmのピットがあって、その上に平板状の石（38×28cm、厚さ４cm）が蓋のようにのっていた。内部に若干の炭があった。埋甕と同じ性格の遺構と考えられる。土壙８と切りあっている。

遺物　土器・石器があるが、その出土は少ない。土器（60図３～９）は破片のみである。加曽利Ｅ式土器である。石器（103図）は打石斧（25～27)、磨石斧(28)、石錘(29・30)、敲打器(31・32)、砥石(33)、石鏃（34～40）がある。

イ　土壙（６図１、60図10～17、104図１～６、表）

土壙は10検出され、８・10が住居址と切りあっており、10はあきらかに張り床されていた。円形（１・５・６・10)、長円形（７・９)、不整形（２・３・４・７・８）とあり、円形のが最もよく。内に炭が多く、遺物も見られた。特に１には大きな木炭となった材木があり、学習院大学木越邦彦教授のＣ－14測定、(Gak－4214）でＢＣ2270±105となっている。この土壙から出土した土器（60図10・11）は加曽利Ｅ式土器前半のものである。５は出土土器（60図13～15）から、中期中頃、井戸尻Ⅲ式土器で、住居址より古い。４からは比較的大きな土器片（60図12）が出土し、器形・文様から見て、縄文時代後期初頭のものである。

ウ　その他の遺物（60図18～20、104図７～16、129図１）

土器・石器が出土しているが、その量は多くない。土器（60図）は、縄文時代中期の勝坂式土器最末期の井戸尻Ⅲ式土器（18～24)、加曽利Ｅ式土器（25～26）がある。他に、天目、片口、山茶碗、坏といった陶器類もある。石器（104図）は打石斧（７～11)、横刃石器（12・13)、石錘（14～16）があり、いずれも縄文時代中期のものである。また、土製円板（129図１）も出土している。

3） まとめ

柳田遺跡は縄文時代中期の遺跡である。住居址は２軒検出されたが、遺物などから見て同時性が考えられる。その並び方から見て、台地縁に沿って、住居址が列になってあったと思われるが、用地内のみの調査であったため、確認はできなかった。この住居址は遺物から見て、加曽利Ｅ式土器で、その前半に位置する。石器で見ると、打石斧、磨石斧ともに小形であるのが注意される。そして、中期にしては打石鏃の出土が多い。しかも形が大きい。住居址の施設では、埋甕と、それと同じ性格の石蓋セットが注意される。１号住居址の埋甕は張り床があり、内部を埋めこむということが意識されていたように思える。炉はいずれもこわされており、遺跡に住む人間集団が、他遺跡（生活地）へ移動する際に意識的に破壊していったものである。土壙は、全てが縄文時代のものとは思われないが、円形のもの、長円形のものはよいと思う。特に、１の木炭による年代測定は、当地方では最初の例であり、その比較年代を知る貴重な一資料となった。同時に測定した高森町増野新切遺跡Ｄ14号住居址（加曽利Ｅ期）のＣ―14が、ＢＣ2210±105となっている。土壙は１号住居址から南側にかけてあり、群をなしているが、井戸尻Ⅲ式土器のものもあって、住居址より１型式位古いもの、同じころのもの、そして新しいものもあるので、全部が同時期ではない。住居址を切って南に流れる用水路は、湯川に平行しており、中世陶器の出土から考えて、その頃の湯川から引水してきた用水路と思う。遺跡の山よりの農家で、以前、古銭の大量出土があったという。

遺物から見て、縄文時代中期中頃から後期にかけての遺跡であり、中央道はその集落のほぼ中央部を横切っている。台地縁より中に入った水田地帯も、調査の結果、部分的に包含層が認められた。遺跡の範囲は相当に広かったと思うが、水田造成で大半は破壊されている。（市沢）

3　山　田　遺　跡

1）　位置

遺跡は飯田市山本南平3812～3894番地にある。南平にはほぼ東西に走る舌状台地がいくつも形成されており、山田遺跡のある台地もその一つである。石子原遺跡とは谷地を間において南側にある。標高 628m、巾90m、長さ 150m の台地（２図１、写二）で、縄文時代中期の遺跡である。

中央道は台地の中央部を南西から北西に走っている。グリットは42＋０杭をＡＡとし、ＡＡ～ＢＫ、41～58に設定した。

カマボコ状の台地であるためか、黒土の堆積はほとんどなく、耕土ですぐロームとなっている。

2）　遺物（ 104図17）

発掘では遺構は検出されず、わずかの土器・石器という遺物を得たのみである。土器はいずれも小破片である。文様や胎土から見て、縄文時代中期加曽利Ｅ式土器である。石器は打石斧、打石鏃（ 104図17）がある。

3）　まとめ

山田遺跡は縄文時代中期の遺跡である。しかし、中央道の通る部分は集落にあたっておらず、遺跡の中心は、丘先端部にあたるものと考えられる。（神村）

4　石　子　原　遺　跡

1）　位置

遺跡は飯田市山本南平3067～4092番地にある。山本小学校の南にある馬の背状の台地であ（２図２、写二）。古い扇状地がその後の浸蝕で両側をけずられ、ほぼ東西に走る台地となり、標高629ｍ、先端部の巾90mある。谷地との比高９ｍある。丘頂部は東へ傾斜し、さらに南北両側にゆるく傾斜していって、急に谷地におちこんでいる。その頂部に石子原古墳がある。

中央道は丘先端に近い所を南北に横切っている。グリットはセンター杭43＋80より南10mのところをＡＡとし、ＡＡ～ＢＹ、40～59に設定し、２次調査をした結果全面を調査した。

地形の状態から黒土の堆積はほとんどなく、耕土ですぐロームとなっており、ロームにほりこまれた遺構には、黒土が堆積していた。古墳の断面を見たら、盛土の下に黒土があり、その下に茶褐色土があって以前は黒土や茶褐色土が全面に堆積していたものと思われ、茶褐色土からと、ロームにわずかに入りこんで押型文土器が包含されていた。

2）　遺構と遺物

石子原遺跡では縄文時代早期の押型文土器が採集されていたので、その時期の遺構と遺物の検出を期待した。事実、それは得られたが、当初予期しなかった方形周溝墓三基の検出、つづいて、旧石器の出土もあって、調査団を喜こばせた。特に旧石器は、石材、石器の種類から相当に古いと考えられ注目された。この結果、２次調査が計画された。その結果は、旧石器の出土する地点は新たになく、押型文土器の遺構と遺物、そして方形周溝墓３号を調査した。そのため、第１次調査に得られた旧石器は第２次調査の報告書にまとめ、その他の遺構、遺物については本報告書にのせた。

用地内で検出された遺構は、旧石器が出土したＡ地点と、それと同時期と考えられる礫群１・２の他に押型文土器に伴なう土壙群、縄文時代中期の配石と土壙、弥生時代後期の方形周溝墓と墓壙がある。（６図２）押型文土器は古墳墳丘下の包含層に多く、遺構は、南側用地界に近い所に方形周溝墓３号と重なってある。台地中央部にもいくつかある。縄文時代中期の土壙もローム・マウンドと呼ぶ特殊な土壙がある。配石は台地中央部の用地内東端に近い無縁墓地の中にあった。方形周溝墓は古墳をはさんで、東側に２基、南側に１基ある。そのあり方から古墳との関連が考えられる。

ア　押型文土器とその遺構

ア）土壙（７図１・２、61図、105図、写六）

土壙１～22は、２か所に集中する。１つはＢ地点の方形周溝墓３号に重なり、用地外にのびている。そのプランは円形で、大きさには大小あるが、直径は 120～50cmで、深さは20から50cm、舟底状、すり鉢状おけ状になっている。１～４、６、11、12には内部に木炭があり、１、６には焼土が見られた。遺物はこの土壙群に集中し、（７図２）、とくに11、12に多い。11、12は他の土壙と較べておおきく、そのほりこみの状態も違っていて、竪穴住居址である可能性が強い。13は１つはなれて北にあり、古墳のほりによってきられている。その大きさから見て竪穴住居址と思われる。１～10は屋外炉である可能性が強い。もう一つは、Ｃ地点とした、Ｂ地点の東にあって、14～22がそれである。これらは形、深さも不規則で、遺物の出土もほとんどない。19、20に少量の押型文土器片と剝片があったのみで、全てを押型文土器のものとすることはできない。19はわずかなほりこみで焼土が２か所あった。

遺物は土器・石器で、土器はいずれも小破片で、風化しており、またもろかった。石器はわずかで、その多くが剝片である。土器（61図）は、押型文土器で、山形文（１～３・19）は土壙１・３・４から、格子目文（５～７・17・18）は土壙８、12から、市松文（８～13）は土壙11、12から、縦線文（14～16）は土壙12から出土している。いずれも同一時期の押型文土器である。石器（105図）は土壙２から剝片石器（１）と横刃形石器（２）が、土壙12から横刃形石器（３～７）が出土している。

イ）押型文土器と石器（62～64図、106～111図）

押型文土器とそれに伴出すると考えられる石器は特に古墳マウンド下の茶褐色土に包含されていた。

土器はいずれも小破片で、保存の状態はよくない。文様で拓本にとれるものを全部図に示した。それで見ると、押型文土器を主体とし、縄文・撚糸文土器が少量ある。縄文土器（61図20～29）は比較的粒の大きな斜縄文である。29は複節の斜縄文である。いずれも全面に施文する。撚糸文土器（同図30～38）は、30を除いては縦に密施され、撚糸の太いの細いのとある。30は網目状になるもので、口縁部の破片である。口縁は大きく外反し、口端は丸味をもっている。押型文土器の押型文は、市松文、格子目文、山形文、楕円文とある。市松文は刺突文、半回転文といわれるもので、61図39～49、62図１～５は逆楕円になっていて、口縁付近では横に、頸部以下は縦になるように施文されていて、全面に施文される。口縁は大きく外反し、口唇に刻目をつける。62図６～15は長方形を呈するもので、施文の状態は前のものと同じである。格子目文は多く、本遺跡の主体的な文様である。62図16～18は長方形または菱形としては整っていないが斜走格子目文に入る。同19～51は、比較的に大きな平行四辺形をなすもので、19・20は口縁部である。19には口縁端に刻目をつけている。49は尖底部で、乳房状の突起をもち、先端まで施文されている。50、51は山形状の中に横に平行線を入れたもので、山形文と格子目文のつながりを考えさせる。63図１～３は格子の通りの悪い斜格子目文である。区画も大きい。同図４～14は長方形の格子目文で、４－６は短冊形となり、７～14は整った長方形である。同図15～39は菱形を示す斜格子目文で、最も普通のものである。量的にも多い。山形文は格子目文や市松文よりは少ない。63図40～49、64図１～16がそれで、いずれも山は大きく、そして細い。全面に縦に施文するのを普通とするが、40、41、44の如く、口縁にそって横に施文するものもある。45は口縁部に近いところに破片接合のためと思われる穿孔が見られる。楕円文は押型文の中では最も量的に少ない。64図17～25がそれで、楕円文の粒は余り大きくなく、穀粒状（17～24）のと

円粒状（25）のとあって、前者が多い。縦または横に施文している。26・27は文様は判然としない尖底部である。これらの押型文土器は、胎土、厚さから見て、どの文様も共通しており、同一の所産である。市松文、格子目文、そして山形文の特徴も、胎土、厚さから見て、立野式土器である。

石器については、第二次調査の中でも説明されているが、A地点の旧石器とは異なるが、交互剥離技術の発達した、玄武岩を石材とする一群の石器が、押型文土器土壙群（1～12）附近と、古墳マウンド下の包含層から出土している（106～108図）。その出土の状態から見ると、押型文土器との関連が強いのであるが、同時期の他の遺跡からはこの種の石器は出土しておらず、石器製作技術も特殊であるので、直ちに同時期とすることにためらいをもつ。旧石器時代のものである可能性も強い。押型文土器に伴なう石器は、硬砂岩の剥片を利用した横刃形石器（109図）が多い。110図1は刃部を磨いた扁平な局部磨石斧、2は小形の丸味のある磨石斧、3は周辺部を磨いた板状の石器、4・5は特殊磨石の破片である。Aは磨耗部で、Cは打痕の残るところである。6・7は砥石で、6は板状の砂岩で、7は矢柄研磨器と思われる（写十一の28）。111図1～6は黒曜石製の曽根形コアである。7～18は打石鏃、7、18はチャート、11 15はハリ質安山岩、他は黒曜石である。19はハリ質安山岩製のスクレイパー、20は黒曜石製で、つまみを作り出した剥片で石匕と思われる。21は黒曜石製の剥片石器である。

イ　縄文時代中期の遺構

ア）　配石1（7図1、104図18、写七）

配石1は石組といった方がよいかも知れない。用地内中央部の東端に名号碑を中心に無縁墓地（墓壙は30以上）があった。その中にあって、人骨を近くの寺に納めるためにとりあげていた時検出された。上面には、その中央に平らな自然石が2つ並んでおかれ（写七の14）、墓碑の台石か、墓標と考えた。そのほりこみをほりさげると、石蓋をした方形の石囲があり（写七の15）、それをとりのぞくと、中央に丸味のある石頂部が見えた（写七の16・17）。方形の石囲いは一部2段になっていて、上段をはずすと中央のそれは石棒であることがわかる（写七の18）。全ての石囲をはずすと、円棒状の自然石の角を敲打整形した石棒がやや斜めになって立っていた（写七の19）。この遺構は東西160cm、南北160cmの隅丸方形のプランで、西側にテラスをもち、逆角錐台にロームを約70cmほりこんでいる。その中央に石棒（104図18）を立て、それをかたくとりかこむように扁平の石をもって方形に囲み、石棒頂部までかくし、その上部を石で蓋をする。さらに土でもって埋め、おさえとして扁平石をおいていたことになる。石棒は花崗岩製で、断面は楕円状の、太さ16.5cm、長さ49cmの上部に細くなる自然石で、上端と縁辺に敲打調整が見られる。伴出遺物の出土はないが、石棒の存在時期や、中期土器も散布していることから考えて、その頃のものと思う。

イ）　土壙23～25（7図1、写六の12・13）

C地点に集中する土壙の中に24・25はあり、23はそれとB地点の間にある。これら3つともいわゆるロームマウンドの土壙で、円形のスリ鉢状に掘くぼめた中に、ほり出したロームをうめこんだもので、ロームの塊状になった周囲と下部に黒土帯をもっている。そのため上面では黒土の円形状の掘りこみができ、

断面をとると黒土がロームの下に入りこんでいる。ロームをとりあげるとスリ鉢状のピットになる。これらの土壙は縄文時代中期に盛行している。石子原遺跡のは比較的大きなものである。遺物は出ていない。

ウ　方形周溝墓と墓壙

方形周溝墓は3基確認された。1・2号は台地の北面斜面にあって、溝を共有している。2号の南西に接して台地尾根部に円墳がある。3号は古墳の南側の、南面斜面にある。こうしたあり方から、古墳を含めて、墓地群（墓域）を考えた方がよいと思われる。

ア）方形周溝墓1号（7図3、65図7、8、写八図）

1号は南北14m、東西 12.40mのわずかに南北に長い方形で、東南隅に巾180cmの陸橋をもつ。溝は隅丸に一周し、逆台形状にほられ、巾は広いところで2m、せまいところで1mあり、深さは東溝60cm、西溝60cm、北溝40cm、南溝60cmある。溝の長さは東溝10.5m、北溝9.80m、西溝11m、南溝8mある。溝中からの出土遺物はない。墓壙は2基あって、墓壙1は中央部やや南よりに、溝の方向より北へ傾きをもち、N 65°Wの方向を示す。長さ2.7m、巾1.26m、深さは40cmの大きさの長方形である。北西よりの頭部付近と思われるところ（×印）から、コバルトブルーのガラス小玉(65図7・8、写八の22)が2個出た。7は径9mm、厚さ8mm、中央に2mmの孔があく。8は径9mm、厚さ8mmで中央に2mmの孔があく。大きさ、形から見て、古い時期の小玉である。墓壙2は1の西にはなれてあって、N 67°Wの方向で、大きさは長さ1.7m、巾 0.8m、深さ34cmとあって、墓壙1より小さい。墓壙の深さなどから見て、当初は盛土があったと思われる。

イ）方形周溝墓2号（7図3、写八・九）

2号は南北 9.8m、東西10mの方形で、1号よりは一まわり小さくなっており、1号の西溝を利用して西側に並んでいる。南隅と北隅の2か所に陸橋を残す。溝は巾1m前後で、逆台形にロームをほりこんでいる。深さは南溝 120cm、西溝80cm、北溝60cmある。溝の長さは南溝 7.2m、西溝 8.6m、北溝6mある。墓壙はほぼ中央部にあって、溝の方向と一致している。墓壙は方向N 80°Wで、長さ3m、巾1.2m、深さ25cmの大きさで、隅丸長方形をなしている。墓壙内には木棺材と思われる板状の木炭が見られ(写九の22)その木炭にまじって骨片（同25）が点在していた。火葬骨としてはおかしく、埋葬後何らかの事由で焼かれたようであり、焼土も見られた。出土遺物はない。

ウ）方形周溝墓3号（7図4、写六・十）

3号は南面斜面にあって、北西半分は用地外にあるため全域の調査はできなかった。南北17mの方形状をなすもので、3基の中では最大である。東溝の中央よりやや南によって陸橋があり、溝は大きくて深い。東溝は巾2m、深さ60cm、陸橋部も入れて長さ15m、北溝巾 1.6m、深さ80cm、南溝巾 1.4m、深さ40cmある。溝の断面で見ると盛土があったように思える。墓壙は2基あって、墓壙1はほぼ中央部にあり、溝の方向と一致する。方向N 55°Wで、長さ 2.8m、巾1.6m、深さ42cmと大きくて深い。墓壙2は1の北に

並んであって、方向N45°Wで長さ 2.6m、巾 1.6m、深さ22cmと、一まわり小さくなっている。遺物の出土はない。

エ） 墓壙（７の１、写六の13）

墓壙と思われるほりこみの深い土壙があり、土壙と区別したが、人骨は認められなかった。墓壙１は方形周溝墓１号の南にあり、直径50cmの深さ70cmの円形の土壙である。墓壙２は、Ｃ地点の中で発見されたもので、長さ 1.8m、巾 1.4m、深さ１ｍの形、大きさのしっかりした長方形のものである。方形周溝墓３号の墓壙と大きさ、形が似ている。いずれも出土遺物はない。

明らかに人骨の入った墓壙は、用地内に30基以上あった。南無阿弥陀仏の名号碑を中心に、そのまわりが無縁墓地で、人や馬などを葬ったらしく、両者の骨が見られた。墓壙は円形、長方形とあり、上部に石を置くものもある。人骨は生々しく、保存の状態はよい。副葬品は寛永通宝、煙管はほとんどの墓壙にあり、特別なものとして、天目碗と刀子を納めたのがあった。

エ　その他の遺物（66図、 104図）

遺構以外の出土遺物としては、土器、石器が少量ある。土器（66図）は、縄文時代中期で、勝坂式土器（19・２）、加曽利Ｅ式土器（３・４）、後期堀之内式土器（５・７）があり、須恵器、陶器、青磁も出ている。石器（ 104図）では打石斧（19～23）、磨石斧（24）、横刃形石器（25）、磨石（26）などある。

3）　まとめ

石子原遺跡は、旧石器時代からの遺跡で、それについては別の報告書を見てほしい。押型文土器は立野式土器で、竪穴住居址と土壙（炉と思われる）があり、土壙３の木炭はＧａｋ 4210によるＣ―14ではＢＣ 5880± 190とでている。予想したよりは新しい。また矢柄研磨器の存在が注目される。中期の配石１は石棒を埋めた特殊な性格で、信仰面での追求が必要である。方形周溝墓は３基以上あったものと思われる。出土遺物がなく時期不明であるが、３号は陸橋のあり方から見て当地方弥生時代後期に多く、１・２号もそれと同じか次ぐものである。時間的には３→１→２の順が考えられ、最後に円墳へと発展すると思う。弥生時代後期から古墳時代にかけてと思うが、土器は一片もなく、近くに同時期の遺跡の存在も知られていない。当地方で類例を増加しつつある方形周溝墓を総括して考えるべきであろう。２号における木棺を焼いた例は他にないようであり、特殊な葬法があったのだろうか。土壙21も墓壙的な性格が強いが、中には焼土があり、木炭も見られた。Ｇａｋ ―4208によるＣ―14ではＡＤ 740± 500という数値が得られている。八世紀頃の遺物はないが、その頃のものであろうか。

当遺跡は予期以上の遺構と遺物の発見があり、中央道による破壊は残念である。丘の大半は残されているので、それを含めて、周辺の調査（分布調査も）をし、この遺跡の理解は今後に残されている。

（遮那）

5 石 子 原 古 墳

1） 位置と外形

石子原古墳は飯田市山本南平4087番地にあり、石子原遺跡と同じ台地の先端に近い尾根頂部にある。(2図2、6図2)。遺跡のところで説明されているように、方形周溝墓3基にはさまれていて、方形周溝墓2号の周溝南西コーナーより1.04mはなれて、古墳の堀がある。3号とは約10mはなれている。2号の溝を切りあわないように離している点、方形周溝墓を意識して築造したものと思う。標高 630m、調査前の古墳は桑畑となっていて、東西18.5m、南北13.9mの、高さ1.68mの小円墳として理解され、開墾により石室は破壊されていると思われていた。

古墳はそのほとんどが用地内に入っているが、西側は相当に崩されて、用地外にのび、南側は農道があって調査できなかった。20cm前後の耕土をとりのぞくと、墳丘は角のある円墳で、方墳といえないこともないが、これをとりまく堀はあきらかに円孤をえがいている。堀の内側での大きさは、南北19.2m、東西は18.6mのほぼ同径で、高さは堀縁から 175cmある。墓壙1のあり方から見ると、当初はもっと封土は高かったようである。堀は巾 2.6～ 3.2m、深さは20～30cmあるが、墳頂部から1mのところに見られ黒土が当時の地表面であるので、そうだとすると、堀は1m以上も堀りあげており、堀の巾も5m以上はあったとも考えられる。堀の底に粘質黒土が堆積した頃、その上面に礫を役げこんだか、意識的においたらしく北側に集中して礫が見られた。この石は墓壙1と関係するであろうか。(写十二の32)

2） 古墳築造状態

古墳を東西と南北に切断して見た(8図2、写十七の49)。盛土は非常にやわらかで、その上に立ってのの触感がいかにも盛土という感じを示す。頂部から70～ 100cmのところに真黒土が5cm程の厚さであってその面は平らである。それより下の層は全くあれておらず、黒褐色土、暗褐色土とあってロームになっており、ロームまでの厚さは20cmある。この黒色土の上面に墳丘のプランをきめてから、まわりに堀をほって、その土で盛りあげたので、黒土、ローム、ローム混じりの褐色土が互に入り組んで積み重なっている。その厚さは1mない。当初の盛土がもう少しあったとしても、高さ2m足らずの低い円墳であったといえよう。この円墳から墓壙が4基検出された。1～3は断面で観察される。それで見ると、当初の墓壙は2で3そして1とつくられたようで、2→3→4→1の順が考えられる。墓壙1の下部盛土中に木炭が集中し、相当に大きな材木が焼かれたようであり、その木炭のC－14 (Gak 4212) はAD 200±85という数値がでている。墳丘の時期と一致しないが、方形周溝墓2号の墓壙の木炭との関連も考えられる。なお、根石や葺石は見られなかった。

3） 内部構造（墓壙）

古墳の墓壙は４基発見されたが、その発見の状態が充分でなく、３・４は完全な調査はできなく残念であり、調査員の力不足を痛感した。墓壙１は耕土を取りのぞいた時にその石囲が検出された。その時点で明治大学大塚初重教授より、このような古墳には墓壙がいくつもあるからと指示され、ほりさげていく過程で、墓壙２を検出した。北西４分の１区をほりさげていく途中で墓壙３を検出したが、墓壙底部の状態をつかむのがやっとであった。墓壙４は、朱の塊がでてきてその存在を知り、その時には大半がけずられており、位置しか確認できなかった。発見された順に１～４とする。

ア 墓壙１（８図、写十三）

長方形に石を組あわせた箱式石棺で、蓋石ははずされてなかった。長さ 1.6m、巾 0.7m、深さ中段まで８cm、下部まで16cmある。方向N45°Eで、墓壙２とは45°東にずれ、墓壙３とはほぼ平行する。墳丘の最も頂部につくられる。大半が花崗岩で、嶺家片麻岩も含む自然礫で、両側壁と奥壁は面を出すように直に立て、南側の壁は２段の小口積にしている。内部には土が埋まっていて、中段に一つの面があり、奥、中央、そして南よりの３か所に石がおかれていた。ここが棺底部とも考えられる。その下にも硬い面がありつき固められていた。出土遺物はない。

イ 墓壙２（８図２、写十三の36、十四）

墓壙１の西にあって、長方形のほりこみをもつ。長さ 2.2m、巾85cmの隅丸長方形プランである。方向はN 5°Wで、ほぼ南北線を示す。南西隅より土師器、須恵器そして刀子が出ている。

ウ 墓壙３（８図２、写十五・十六）

全体を検出できなかったが、残された部分から推定すると、長さ 3.5m、巾 1.5mの長方形で、ほりこみは30cm以上ある。その中央は長さ３m、巾50cm、中央の深さ10cmの丸底をなすようにほりこまれている。割竹形木棺を置いたようである。そのほりこみ中央部東縁に直刀が、西縁に鉄鏃が、南端に近いところに朱塊が見られた。この墓壙３は墓壙２の西側に、２より深くほりこまれてある。主軸方向は45°東に傾いている。

エ 墓壙４（８図２）

墓壙４は北側に残してあった土層観察壁を崩していて検出した。墓壙２の北側にあって、全体のプランを確認できないが、N80°Eの方向をとる長方形のほりこみである。西端に朱塊があった。

4） 出土遺物

墳丘の南西封土中より、碧玉製の管玉が２つある。(65図５、６)。出土位置から見て、墓壙３とのつながりが強い。

堀りの埋め土より須恵器堤瓶がこわされて、なげこんだようにあった。下半部は道路下の未調査部に入っているらしいが、口径13.3cm、胴径21.6cmの球形状をなし、あるいは壺とも考えられる。焼成、胎土よく、須恵器第２様式で、岐阜県、愛知県から持ち運ばれてきたものである。

墓壙２からは、刀子と須恵器壺、土師器甕が出ている。いずれも墓壙の南西隅にあって、刀子は柄をやや下に、刃部先端が高くなっていた。須恵器の蓋付広口壺は蓋をしてやや斜めになり、土師器甕は壺からわずかに北にはなれて横だおしになっていた（写十四の37、38)。刀子（130図２、写十四の39）は、鹿角装の小刀子で先端部がおれている。残部の長さ10.65cm、刃部は5.3cm、茎5.35cmある。蓋付広口壺（65図１・２、写十一の29）は焼成・胎土ともよい。蓋は偏平なつまみがつき、径 9.3cm、高さ 4.5cmある。壺は口径 7.9cm、胴径11.4cm、底径 4.3cm、高さ 6.2cmある。その器形から見て須恵器第二様式に比定される。土師器小形甕は、口径 9.4cm、胴径10.1cm、底径 4.9cm、高さ８cmあり、器高から見て鬼高式土器に比定される。

墓壙３からは直刀と鉄鏃が出土した。直刀は保存状態がよい（130図１、写十六の46)。長さ86cm、鋒1.9cm、身69cm、茎14.5cmあり、身の部分には木質部が残る。出土した時は、柄と鞘の状態はよく残っていた（写十五の43、44)。柄は紐でかたくまいたようである。柄頭はあれていて明確でないが、環頭であったように思われる。鉄鏃は棺方向に一致するものが多いが、１つだけ方向を異にしていた。かためられてあり、刃先は南を向いている。木質部はないが、茎の部分に一部残っており、刃部の中には布の残痕が見られる。全部で11で、いずれも片刃鏃である（130図３～13、写十六の47)。

なお、古墳とは直接関係ないが、墳丘の耕土中から文久永宝が２枚出土している（103図14・15)。また、この古墳から勾玉が以前採集されているという。

5） まとめ

石子原古墳は、破壊されてしまった古墳と考えていたが、墓壙も４基確認され、墓壙２、３からは副葬品もあり、当地方の円墳を軽視していたのを、改めて注意せねばいけないことを知らせた。立地の状態から見て、方形周溝墓とのつながりも強く、遺物から見て、６Ｃ初頭と考えられる。当地方に横穴式石室が盛行する以前の古墳であろうか。当地方古墳全体という広い視野に立って検討すべきであろう。墓壙の造成にしても、その順序も一応は考えたが、果してそうであったろうか。このようにいくつも墓壙をもつ古墳のあり方等、今後に残された課題は多い。　（金井）

6　ようじ原遺跡

1）　位置

ようじ原遺跡は飯田市伊賀良中村 375～ 390番地にある（2図3、写十八）。ニツ山北側の、茂都計川南岸の台地で、標高 595m の小台地である。

中央道はこの台地先端部から台地崖をきりとって東西に走っている。そのため、用地内に入る台地平坦部は殆んどない。台地縁にそってトレンチを入れるが、出土遺物、遺構の検出は全くなかった。

2）　まとめ

ようじ原遺跡は、古くから縄文時代の遺跡として知られている。とくに縄文時代早期の押型文土器は大正年代に採集されていて、日本的に見てもその発見は古い、中期土器、石器、弥生時代後期土器、石器、そして古墳時代の土師器、須恵器、それに石製模造品も出ていて、注目される遺跡であったが、中央道は遺跡をかすめて通るような状態であったため、出土遺物はなかった。

7 上の平東部遺跡

1） 位置

遺跡は飯田市伊賀良中村 287番地にある（2図4、写十八）。伊賀良地区の南端、茂都計川の北岸台地が遺跡で、中には古墳もあるが遺物の散布は少ない。標高 579m、台地縁に住居址が検出された。

中央道はこの丘を東西に横切っている。グリットは77＋60杭をAAとし、AAからBL、41～62までに設定した。

A地区では耕土の下は礫層で茂都計川の河床であった。住居址のある部分は一段と高くなっていて、砂礫土の上に褐色砂土があり、耕土となっていた。深い所で70cmほど褐色砂土が推積し、褐色砂礫土をほりこんで住居址がつくられていた。

2） 遺構と遺物

遺構は住居址が2軒検出されたが、それは2号住居址の上に重なってあった。1号住居址と2号住居址の区別は判然としなく、数cmの厚さしかなかった。そのため遺物は明確に区別できないものが多かった。

ア 1号住居址（9図、66図、 112図、写十九・二十）

遺構東西 5.8m、南北 5.3m のほぼ円形プランの竪穴住居址で、主軸方向N43°Wをはかる。2号住居址をうめてつくられていた。壁は軟弱であり、そのほりこみも浅い。床面は炉のまわりを除いては状態はよくなく、やや粘質の砂土をかためていた。柱穴は3本確認された。もう一本あったと思われるがつかむことができなかった。炉は中央より北西によったところに不整円形の石囲い炉がある。小礫を2重または2段に積んだていねいなつくりであり、奥中央部に立石状の石が見られた。炉南側の2号住居址柱穴を埋めた中から粘土製の塑像が出土している。その出土状態は、柱穴の中を土でうめるが、土器片や石もつめこんでおり（写十九の53）、さらに上に大きな礫をおいていた。その柱穴中央部に、立ててうめてあった。これは、1号住居址の人がうめたものと考えられる。あるいは2号住居址の人が住居廃絶のときに意識してうめたのだろうか。

遺物、土器、石器があり、土器（66図）はいずれも甕の破片で、8は器形がわかるもので、2号住居址埋甕近くの床面にあった。9・10は塑像の入っていた柱穴内から出土した。いずれも縄文時代中期加曽利E式土器でも終りのものである。石器（112図）は打石斧（1～5）、横刃形石器（8）、石ヒ（9・10）敲打器（6）、石鏃（11）、不定形石器（7）がある。

イ　2号住居址（9図、66図、67図、 132図、写二十一）

遺構　東西 5.7m、南北6.15mの角のある円形竪穴住居址である。主軸方向はN14°Wをはかる。壁は北東部で高く、南に低くなり、南になってなくなっている。壁の状態はよくない。床面の状態も悪い。柱穴は4本で、東側壁にも柱穴らしき穴がある。炉は中央より北よりにあって、炉石ははずされており、スリ鉢状にほりこまれた炉底は焼けている。南側壁よりに埋甕（67図1、 132図2）があり、甕の口縁部を欠くのを、わずかに上端を上にだして正位に埋められていた。胴径29cm、底径10cm、高さ33cmの大きさである。どちらの住居址につくか不明であるが、埋甕より外側壁よりに平らな石がおかれてあった。

遺物　1号住居址に混在していると思うが、土器があり、土器（66図11～17）は埋甕以外はいずれも破片である。17は台付土器の台部である。13・14・16・17などはやや古い様相を示すが、2号住居址と同じく加曽利E式土器の終末期土器である。

ウ　その他の遺物

遺構外からの遺物出土は少ない。土器では縄文時代中期土器（67図2～4）、土師器・須恵器の新しい時期のもの、中世の天目碗や黄瀬戸皿などが出ている。石器（112図）では打石斧（12・13）、横刃形石器（14）、スクレイパー（15―17）、石鏃（18）がある。

3）　まとめ

調査の結果、縄文時代中期加曽利E期の住居址を2軒検出した。これはほとんど時間差がなく、2号住居址の上に重複して建てられている。台地縁にあって、集落は用地外にのびていると思われる。この住居址では1号住居址のうめ方が特に注目され、柱穴の埋め方と、その中にあった塑像が注意される。粘土をこねてつくったもので、盲人のつくった人間像のようである（125図1、写二十）。厚さ6cm、高さ18cmの大きさで、手でこねたようにあって、指紋も見られる。今後注意しなければならない遺物であると思う。

（金井）

8 寺　山　遺　跡

1）　位置

遺跡は飯田市伊賀良中村92～94番地にある（３図１、写十八）。中村部落東側の中央部にあって東に走る台地縁が遺跡である。長清寺西裏の南面斜面となる。標高 576m、南側の水田地帯より６ｍ程高くなっている。

中央道はこの台地中央部を南西から北東に走っている。グリットは80＋60杭をＡＡとし、ＢＥまで、41～61に設定した。調査の結果、わずかの遺物を得たのみであった。

2）　遺物

土器、石器、石製模造品が出ている。土器はいずれも小破片で、縄文時代中期勝坂式土器、新しい土師器、中世陶器がある。石器（ 112図19）は打石斧とスクレイパーがある。石製模造品は分布調査をしたとき採集されたもので（ 125図２）、滑石製の円板で、直径 2.1cm、厚さ３mm、中央に１孔がある。

3）　まとめ

寺山遺跡では石製模造品が採集されていたのと、南面斜面のよい場所ということで期待して調査に入ったが、遺構は検出されず、遺物もほとんどなかった。中央道より西の、部落に近い方に遺跡の中心があるものと考えられる。　　（神村）

9　六　反　田　遺　跡

1）　位置

遺跡は飯田市伊賀良大瀬木4319～4330番地にある（３図３、写十八）。山麓の扇状地扇端部がその後の侵蝕によって、いくつもの東西に走る台地となり、六反田もその一つである。大瀬木、三日市場、そして中村の三部落の境界近くで、三日市場の大池堤北側台地である。標高 560m ～ 580m にかけての東に傾斜する台地で、巾約 100m のもので、畑地となっている。

中央道はその先端に近いところを南西から北東に走っている。グリットは86＋20杭をＡＡとし、ＣＸまで、39から58までに設定し、さらにＡＡより南にものばして、ＹＹからWAまで広げた。

2）　遺構と遺物

遺構（10図１）は住居址と土壙が検出された。住居址４軒は１号が台地尾根に近いところにあり、２～４は北側斜面端近くにある。５号住居址と土壙４は台地先端よりに、土壙１～３は台地尾根部にある。土壙５～７はわずかなくぼ地をおいて南側の小台地にあった。大池堤西側の台地先端部に平担地が造成されていて、竪穴状のほりこみが見られ（写二十四の64）、注意して堀り上げたが、出土遺物は現代のものであり、地域の人の話で、堤を作るときに赤土をとった場所とのことであった。

ア　住居址

ア）　１号住居址（10図、68図、写二十二）

遺構　中央道用地内では最高所にあって、3.7× 3.9m のほぼ方形の竪穴住居址で、ローム層をほりこんでいる。主軸方向 N23° E をとる。壁高は30cmあって、カマドは北壁の中央よりやや東によって、わずかに壁をほりこんである。石心粘土カマドであるが、カマド東側が耕作のうねによって破壊されている。袖を住居内に出し、中央に自然石をたてている。床面の状態はよい。四隅には大きな堀りこみが見られ、柱穴とも思われるが、カマド東側のは、内部から遺物や石もあって、貯蔵穴とも考えられる。

遺物　土師器、須恵器、灰釉陶器があり、灰釉陶器は小破片の椀があったのみである。土師器（68図）は杯（１）、甕（６～10）で、杯は内面黒色土器で糸切底となっている。甕は小形でヘラけずりの見られるの（６）、同じく横走する整形痕の見られるの（７）、そして長胴で、縦の整形痕の残るもの（８～10）の三器形があり、後者が多い。これらはカマド内とその周辺に発見された。石製品として砥石（ 112図20）も出土している。

イ）2号住居址（10図、68図、写二十二）

遺構　台地北側斜面の水田となっている谷地に近いところにある。2～4号住居址と3軒かたまってあり、カマドの方向も一致している。そのまわりには住居址はなかった。4.8×4.3mの方形竪穴住居址でロームをほりこんでいる。傾斜地のため北西側の壁は高く、東南側の壁は低い、主軸方向はN64°Wをはかる。カマドは石心粘土カマドで、北西壁のほぼ中央にあるが、くずされて、側壁や中央の石は抜かれてあった。床面の状態はカマドから中央にかけてはよかったが、壁よりは悪く、北側は悪い。4隅と北側、東側、そして床中央部にも大きなほりこみが見られた。北側の一つをのぞいてはいずれも浅い。西隅と東側中央のピットには焼土が入っていた。

遺物　カマド内とそのまわりに多くあった。土師器・須恵器で、灰釉陶器は椀と壺の小破片が2片あったのみである。土師器は甕（68図16、17）で、5個体以上ある。須恵器は坏（11～15）で、いずれも高台はなく、糸切底である。

ウ）3号住居址（11図、68図、69図、写二十三）

遺構　2号住居址の南にあって、3.5×4.3mの長方形の竪穴住居址である。主軸方向はN80°Wをはかる。傾斜地のため西壁は高いが東壁はほとんどない。床面の状態は良好である。カマドは石心粘土カマドで、西壁の中央部にあって、くずされている。ほりこみは5か所あり、不規則である。東隅のは柱穴と思われるが、他は貯蔵穴と思われる。

遺物　土師器、須恵器が多く、灰釉陶器は壺、椀の破片が2片あった。土師器は坏（68図18）と甕（20～22、69図1）があり、甕が多い。器形に変化が見られる。須恵器は坏（68図19）と甕（23）がある。

エ）4号住居址（11図、69図、写二十三）

遺構　2号住居址の東側にあって、住居址群の中では最も低い場所にある。東壁をつかむことはできなかったが、長方形の竪穴住居址で、南北5.35mある。4軒の中では最も巾が広い。床面はカマドの前から中央部に良好で、まわりと東側はよくない。カマドは西壁中央部にあって、石心粘土カマドでわずかに崩れているだけで保存の状態はよい。柱穴は4本検出されたが、東隅のはつかめれなかった。床面に焼土が2か所認められた。

遺物　土師器、須恵器がほとんど、灰釉陶器は壺と椀の破片が2片である。土師器は甕（69図4～9）で、小形のもの（4～7）と長胴のもの（8・9）とがある。須恵器は坏（2）、高台付皿（3）、蓋が出ている。

オ）5号住居址（11図、写二十四）

遺構　3号住居址の南にあって、3.8×1.65mの長方形のプランで、主軸方向N75°Wをはかる。西側に壁は高く、東に低くなっており。そのほりこみは内側に傾むいている。東壁外側には黒土中に東へ高くなるように貼り床が見られ、入口部と思われる。床面の状態はよい。柱穴はない。遺物の出土もない。土壙とも考えられたが、床の状態、入口部の様子から住居址とした。

イ　土壙

土拡は７個検出された。１～３は用地内台地頂部にあって、ド１は小規模なロームマウンドの土壙で、ローム中央に焼土が見られた。２・３は不整円形の浅いほりこみである。４は５号住居址の南西にあって、形も類似している。長楕円形で南東にテラスをもつが、床面のようなかたさはない。５～７は南側の台地に並んであって、赤土取りによってきられている。袋状の断面をもつ円形のピットで、中から土器片や石器が出土している。

遺物、土壙５～７の中で発見されたもので、土壙５からは、打石斧（112図21）と石錘（22～25）があり、石錘４この出土が興味をひく。土拡６からは土器片（67図５・６）が出土し、縄文時代中期前半の土器である。土壙７からは、中期前半の土器底部（７）と打石斧（112図26）が出ている。

ウ　その他の遺物

土器、(67図）、石器（112図）があり、土器は縄文時代中期勝坂式土器、加曽利Ｅ式土器（８・９）、堀之内式土器（10・11）、加曽利Ｂ式土器があり、また中世陶器も出土している。石器は打石斧、石鏃、横刃形石器（27）がある。

３）　まとめ

六反田遺跡では、住居址５軒と土壙７が検出された。縄文時代の土器、石器の散布からその時期の遺構を期待したが、土壙１～３、５～７のみで、住居址は検出できなかった。これらの土壙は台地頂部にあるので、台地縁に住居址が存在すると思うが、それは中央道用地外である。住居址１～４号は、遺物から見て国分期のものである。灰釉陶器のほとんどないこと、高台の発達がないことから、古い方に位置づけられる。１号と２～４号とは群を異にしており、同時期ではあるが、カマドの方向を異にしているのが注目される。台地でも北側斜面の、谷地水田に接してあり、それが、３軒前後でまとまって、それがいくつか集まってあったと思われる。中央道用地から西にかけて広がっていると思われる。５号住居址は、その形やあり方から見て住居址としたが、土壙４と共通性が強い。中世の住居址のあり方に類似しており、その頃のものと思われる。（遮那）

10 大　東　遺　跡

1）　位置

遺跡は飯田市伊賀良三日市場にある（４図１、写二十五）滝沢川のつくる扇状地扇端部にあって、滝沢川北岸の台地が遺跡である。酒屋前遺跡とは小さな凹地をはさんで南側にある。遺跡は間に柳ツボという凹地を挟み南側の小さな舌状台地と、北側のゆるい傾斜地とにわかれる。南側の台地は水田となり階段状の造成が見られ、用地内での高さは標高 555 mである。北側のそれは畑地となっていて、標高 550 mある。

中央道は遺跡の先端部を南北に横切って、飯田インターへと入っている。グリットは99＋０杭をＡＡとし、ＡＲ～ＦＩ、37～63までに設定した。

南側の台地では、耕土（30cm）、黒褐色土（30～40cm）そしてロームとなり、住居址はロームをほりこんでいた。北側では耕土（30cm）、黒褐色土（40cm）そしてロームとなっていた。

2）　遺構と遺物

遺構は住居址と土壙、そして溝が検出された。南側の台地からは弥生時代の住居址２軒と、土壙が４、北側の傾斜地からは中世の住居址２と、土壙群、溝があった（12図３・４）。

ア　住居址

ア）１号住居址（13図、67図、113図、写二十五）

遺構　滝沢川に接する台地縁にあって、２号住居址と並んでいる。6.50×5.20m の長方形の竪穴住居址で、主軸方向はＮ81°Ｅをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、北で39cm、南で32cmの高さをもつ。床面は中央部が良好で、壁よりはあまりよくない。柱穴は４主柱穴で、床面中央部に浅いピットがある。また壁にそって、径10cmの柱穴が間をおいて並んでおり、東側では少ない。壁のための柱穴と思われる。炉は西よりの主柱穴間中央部に、直径50cm、深さ10cmにほりくぼめた地床炉である。南壁東よりと、北壁西よりに大きなほりこみがあり貯蔵穴と思われる。このほりこみは住居内側に土手をつくっている。

遺物　土器（67図）、石器（113図）が出ている。土器は小破片で、壺（12）、甕（13）がある。器形や文様から見て弥生時代後期中島式土器である。石器は打石斧（１）、敲打器（２）、磨石（３）がある。

イ）２号住居址（13図、67図、113図、写二十六）

遺構　１号住居址の西にあって、5.55×4.35ｍの長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN42°Eをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、壁高は20cm前後ある。床面の状態は中央部でよく、壁よりが悪い。柱穴は４主

柱穴で、南よりに1つ浅いピットがある。炉は北東よりの主柱穴間中央にあって、床面を直径45cm、深さ10cmにほりくぼめ、南西側に2個の石をハの字に並べた枕石がある。東壁の南よりに、内側に土手をめぐらしたほりこみがあり、貯蔵穴と思われる。

遺物　土器（67図）、石器（113図）があり、土器は壺（14）、甕（15～20）、高坏（21）があり、文様、器形から中島式土器である。石器は打石斧（4～7）、有肩扇状形石器（8）、横刃石器（9・10）がある。

ウ）3号住居址（14図、写二十七）

遺構　北側の扇状地で、南縁に近いところにあって、4号住居址と並ぶ。3.30×2.60mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N33°Wをはかる。北壁中央東よりに95×60cm、深さ10cmの張り出しがある。壁はほぼ直にほりこまれ、壁高45cmある。ほりこみが砂土中であるため床面の状態はよくない。柱穴はない。遺物の出土もない。

エ）4号住居址（14図、写二十七）

遺構　3号住居址の東側にある。3.25×3.15mの、北壁と西壁が直で、南壁と東壁がカーブをもつ竪穴住居址である。主軸方向はN8°Wをはかる。砂土をほりこんであることもあるが、壁は中央に傾斜してほられ、あまりよくない。床面の状態もよくない。住居内には人頭大からこぶし大の礫が40個ばかり入りこんでいた。また覆土中からは木炭が見られた。柱穴はないが、壁外側に小ピットが点在したが、この住居址に伴なうものか不明である。

遺物　覆土中より、中世陶器の山茶碗片口、天目碗、内耳鍋、常滑水甕片が出ている。

イ　土壙（12図、14図、15図、16図、写二十八）

土壙は南側台地の4個をのぞいては北側の扇状地に集中する。それらはさらに5か所に集中している。A群は列状に、B・C・D群は塊状に集中している。E群は溝の外側にある。土壙2・4は内部から木炭が多くでている。A群では土壙のから青磁片が出ている。C群の土壙37は内部に石が4個入っており、常滑の水甕片がでている。E群の土壙57は直径2.50mの大きな円形で、すり鉢状のほりこみで、壁外側には北東部を除いてロームをおきつきかためてあった。住居址4号と共通するところが多い。

ウ　溝状遺構（12図、写二十六）

溝は扇状地東端にあって、南北に走り、並んでいる溝3本と、それに北側で直交し、東西に走る溝がある。溝底には石や砂があって水の流れていたことを示す。溝3から中世・近代陶器片が出土し、寛永通宝も一枚あった。近世の用水路と思われる。

エ　その他の遺物

遺構外から出土した遺物は、土器、石器、鉄器がある。土器（67図）は、縄文時代後期堀之内式土器（22～26）、晩期土器（27）がある。中世陶器としては天目碗、山茶碗、水甕、青磁、内耳鍋などがあり、近世陶器も多い。石器（113図）では弥生時代の石鏃（11）、打石斧（12～14）、有肩扇状形石器（15）横刃形石器(16)、石鏃（17、18）があり、特に注目されるものとして、旧石器時代のナイフ（19）、小形のコア（20）、スクレイパーなどがある。鉄器としては中・近世の火打金具がでている。

3）　まとめ

大東遺跡では、住居址と土壙が検出された。住居址は南側台地で弥生時代後期の竪穴住居址２軒があり、これは同時期のものであり、さらに用地外西側に続いているものと思われる。住居址そのものは当地方に普通にあるプランであるが、１号住居址の壁にそっての柱穴列は例がない。また、土手をもつ貯蔵穴もその位置、用途についての検討が必要であろう。３・４号住居址はそのあり方から見て、小垣外遺跡の中世竪穴住居址と共通し、出土遺物も中世陶器であるので、中世につくられたものであろう。

土壙は、そのほとんどが中世以降のものと思われるが、決定的なきめては少ない。A群のは袋状のほりこみであり、深さから見ても貯蔵穴と思うが、B～D群のそれは、墓壙とも考えられる。E群のはまた趣きを異にしており、土壙57のような特殊なあり方も、今後の類例まちである。これらの土壙については、扇状地全体に広がってあるだろう中世集落の中で検討されるべきものと思う。

断片的な資料であるが、旧石器の存在は注目される。段丘地帯での旧石器の発見例はほとんどなく、このような台地状でないところにも存在するということは、今後の各地の調査にも、その面での注意を与える。（鳴海）

11 酒屋前遺跡

1） 位置

遺跡は飯田市伊賀良大瀬木にある（4図、写二十九）。扇状地扇端部の緩傾斜地にあって、北は凹地をへだてて滝沢井尻遺跡、南は凹地をへだてて大東遺跡となっている。遺跡の中心は標高 550m で、用地内において、下段は 544m、上段が 553m と 9 m の差がある。上段部北側は凹地との比高 2 m ある。下段では50cm足らずとなっている。階段状の水田となっている。

中央道はここから飯田インターに入るため、丘先端部を大きくおおっている。グリットは94＋40杭をＡＡとし、ＣＳまで、2～95までに設定した。

層序は上段部では耕土、黒色土、砂礫混り褐色土、粘質褐色土、ロームとなっている。下段部では耕土、黒色土、褐色土、ロームとなっている。場所によってその堆積は違うが、上段では 180cmあり、下段では30cmが平均的厚さである。

2） 遺構と遺物

遺構は住居址16、竪穴状遺構３、柱穴群２、精練状遺構１、土壙 107、溝状遺構３が検出された（17図1）。その分布は、中央道のとおる中央部から西側に集中し、用地内東端に土壙群Ｂ・Ｄと 住居址７・８・15号があり、後者の広がりは、上段とちがうと思う。

ア 住居址

ア）１号住居址（17図、70図、71図、 114図、写三十）

遺構　台地中央部南縁に近いところにあって、4.00×3.40m の長方形の竪穴住居址で主軸方向はＮ5°Ｗをはかる。壁・床面とも砂礫混り褐色土をほりこんでいるため、状態はよくない。壁高は30cmで西側がやや高い。東壁にそって、床面が２段におちこんでいる。柱穴は４主柱穴である。炉は北西主柱穴間中央にあって、45×50cmの不整円形にほりくぼめ、南よりに甕胴部をうめ、南に接して石をおき枕石としている。

遺物　土器、石器で、土器（70、71図）は壺（70図１）と甕（70図２・３、71図１～３）があり、壺は東海地方の寄道式土器の一形態で、持ち運ばれてきたものである。甕は文様などから見て弥生時代後期の座光寺原式土器である。2は炉に埋められていた。石器（ 114図）は打石斧（１・２）、横刃石器（３）、磨石庖丁（４）、敲打器（５）、石鏃がある。

イ）２号住居址（17図、 131図、写三十）

遺構　１号住居址の北側にあり、３・４・６号住居址とし群をなす。2.80×4.20mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N29°Eをはかる。壁は浅く、内側に傾斜している。床面は起伏があり平らでない。柱穴は住居内と周辺にあるが、この住居址につくものか、柱穴群２のAにつくものかは判然としないが、密接な関係はあると思う。住居内中央の柱穴は床面をもりあげてほり肩をつくっている。内部北よりに礫が集中して入っている。炉、カマドはない。

遺物　鉄製品と陶器がでており、陶器は小茶碗の片口鉢、天目碗の破片で、鉄製品（131図）は鉄器（１）、毛抜き様のもの（２）、釘、火打金具が出ている。

ウ）３号住居址（18図、写三十一）

遺構　２号住居址の西にあって、４号と並んでいる。2.20×2.10mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N33°Eをはかる。壁のほりこみは浅く、傾斜している。床面は中央部がかたい。西壁中央に良質の粘土が集積されている。その付近に木炭が見られた。その範囲は 1.5× 0.8mで、あたかも粘土カマドのようである。住居外側に柱穴が見られるが、柱穴群Ｉと関連するかも知れない。遺物は出土しない。

エ）４号住居址（18図　70図、写三十一）

遺構　３号住居址の１ｍ南側にある。2.40×2.10mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N63°Wをはかる。大きさ、形状とも３号に類似する。壁のほりこみは浅く、状態はよくない。床面はかたく良好である。柱穴は壁外に４本みられる。住居址南壁外側に 4.1× 0.4mの溝状のものがあり、Ｌ字形にまがって、４号住居址の南隅におちこんでいる。この住居址に伴なうものと思われる。

遺物　陶器片で、山茶碗の片口鉢（70図４）と青磁片が出ている。

オ）５号住居址（18図、70図、71図、写三十一）

遺構　上段部の台地北縁にあって、14号住居址と並んでいる。4.50×3.60mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向N81°Wをはかる。壁はほぼ直で、壁高は50mある。床面は黒褐色土の貼床をし非常に硬い。柱穴は４主柱で、西壁よりに５このピットが並ぶ。床中央部にも２この浅いピットがあり、その一つに焼土が見られる。東壁中央に貯蔵穴と思われるピットがある。炉は西側主柱間中央に床面をほりくぼめ、その南よりに甕破片をおいている。

遺物　土器と石器がでている。土器（70・71図）は、壺（71図４～11）、甕（12、70図５～８）、鉢、器台がある。壺（71図11）、甕（70図５）、器台は東海地方から持ち運ばれてきたもので、寄道式土器である。他は座光寺原式土器である。70図６の甕は炉におかれていた土器片である。石器は打石斧片がでているのみである。

オ）６号住居址（18図　写三十二）

遺構　２号住居址の東側にあり、土壙24に北西隅を切られている。4.00×4.80mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N30°Eをはかる。壁は突きかためてかたく、内側に傾斜している。床面も非常に硬く、北壁

側に傾斜している。柱穴は住居内と壁外にあり、規則性がある。北西壁にそって８この柱穴が並んでいるのは明らかに当住居のものである。壁外のは柱穴群Ⅱとの関連も考えられる。住居内南側の深さ20cmの柱穴は床面を盛り上げて堀肩をつくっており、２号住居址のものと同様である。この点から柱穴群Ⅱと住居址は同時性が考えられる。

遺物　陶器片がでており、犬目碗と古瀬戸皿である。打石斧はあとからのまじりと思う。

キ）７号住居址（19図、72図、 114図、写三十二～三十四図）

遺構　用地内では下段、東北端にあって、住居址８号、15号、土壙群Dとが集中しているが、弥生時代の住居址は１軒のみである。5.10×5.60mの隅丸方形の竪穴住居址で、その主軸方向はN15° Wをはかる。壁高40cmで、床面、壁ともに良好である。柱穴は４主柱穴で、東壁中央のテラスに接して貯蔵穴がある。炉は北側主柱穴間中央に床面をほりくぼめ、中央に台付甕の胴下部をうめ、南に接して石を２こ並べて枕石としている。この住居址では南隅に床面より３～５cm高く、三角形状のテラスをつくっている。この住居址は火災にあい、建築材の炭化したものが壁から中央を向いて見られた。また、遺物の持ち出しができなかったのか、一セットの土器が現位置におかれてあった。そのほとんどテラスの上で、炉の北側にも３個あった。

遺物　土器と石器がでている。土器の出土状態は火災にあったため原位置におかれたままで出土している。住居址南隅のテラス上には、遺構図（19図１）の番号で見ると、１（72図３）は大形の器台で、脚部を上にしてある。２（73図１）は甕でテラスより下におちて柱穴のところにあった。３（72図７）は甕で横だおしになっていた。４（73図３）は台付甕で横だおしになっていた。５（72図８）は甕でもっとも大きい。横だおしになっていた。６（72図５）は高坏脚部で、炉の北、壁よりにあった。７（73図２）は台付甕で炉の北側にあった。８（72図６）は甕で炉の北側、東よりにあった。いずれも横だおしにあった。９（72図９）は甕でテラスの上に横だおしになっていた。10（72図２）は浅鉢でテラスよりおちかかってつぶれていた。こうしたことからみて、テラスが特別の意味をもっていたことがわかる。小形壺（72図１）はその出土位置は不明である。甕、台付甕は煮沸用のものであるが、貯蔵用の壺が小形壺をのぞいて破片一つないのが注目される。小形壺、器台、浅鉢は東海地方の寄道式土器である。他は座光寺原式土器である。73図４は炉にうめられていた。テラスに近い床面から台石と思われる磨石状の石（114図７）がでており、上面が磨かれている。

７）８号住居址（19図、71図、 114図、 132図、写三十五）

遺構　用地内の下段東北端にある。直径 5.3mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN61° Wをはかる。壁床面ともに良好である。北西側と南東側の壁に沿って周溝がある。北壁中央に１m×50cmの高さ20cmのテラスが認められる。柱穴は４主柱穴で、西壁よりに柱穴が２つ並ぶ。炉は中央より北西よりにあって、方形石囲炉と思われるが、炉石はすべてぬかれている。東側壁よりに埋甕がある。胴下部を欠く深鉢を、口縁部を床面と同じレベルにして正位にうめている（71図13、 132図３）。内部には乳棒状磨石斧片がある。

遺物　土器と石器がでており、土器は埋甕をのぞいてみな破片である(71図13～22)。文様から見て加曽利E式土器後半のものである。埋甕は口径35cm、下径22cm、高さ36.5cmの大きさである。石器（114図)は打石斧

(8～10)、横刃形石器(11・12)、磨石斧(13・14)、敲打器(15・16)、敲石がでている

ケ) 9号住居址 (20図、71図、73図、 114図、写三十六)

遺構　用地内中央部の台地北縁にあって、10号住居址と並んでいる。4.20×4.55mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N81°Eをはかる。壁の状態はあまりよくない。壁高25cmある。床面は中央部がやや軟弱であるが、他は良好である。柱穴は4主柱穴であるが、支柱と思われる柱穴もあり、炉北側のは2個接するように並んでいる。東壁と南壁に接して貯蔵穴が見られる。炉は北側主柱穴間中央部に床面を円形にほりくぼめ、中央に甕胴部をうめ、南に接して石をおき枕石としている。炉南東40cmのところにも浅いピットがあり、焼土が認められ、旧い炉であったかも知れない。

遺物　土器、石器がでている。土器は壷 (71図25・28)、甕 (26・27)、丹彩の小形鉢 (23・24)、器台 (73図5) がある。壷 (28) と器台は東海地方の寄道式土器であり、他は座光寺原式土器である。石器は磨石庖丁 (114図18) と横刃石器 (17) がでている。

コ) 10号住居址 (20図、写三十六)

遺構　9号住居址の東北にあって、いわゆる竪穴住居址ではない。5.00×4.00mの長方形に、巾20～25cm、深さ15～20cmの周溝がめぐり、南隅が切れている。北隅には柱穴がある。鼎町山岸遺跡でも同様なものが検出され、壁囲いのある住居址と考えた。主軸方向N53°Wをはかる。

遺物　周溝内部より、弥生時代後期土器片がでている。

サ) 11号住居址 (21図、74図、 114図、 132図、写三十七)

遺構　上段中央部にあって、この付近には同時期の住居址はない。4.50×4.00mの円形の竪穴住居址で主軸方向はN1°Eをはかる。壁の状態はよくなく、高さ20cmある。壁にそって周溝がめぐり、南西部で切れている。床面は堀りこんだ砂礫混り褐色土に部分的に貼り床があり、その部分は良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は中央より北によって、方形の石囲炉であったと思われ、炉石はほとんどはずされている。南壁よりに、口縁部を欠き、上縁を磨いて平らにした鉢を、上縁が床面とほぼ同じにして、正位にうめていた。なおこの埋甕は胴下半に穿孔が見られる。

遺物　土器と石器がある。土器 (74図) は深鉢で、1は埋甕のものである。文様などから見て、加曽利E式土器後半のものである。埋甕は上径24cm、底径10cm、高さ30cmの大きさ、胴下半に直径7cmの穴があく。石器 (114図) は打石斧 (19・20)、横刃石器 (21～22)、スクレイパー (23)、石鏃 (24) がある。

シ) 12号住居址 (21図、73図、74図、 131図、写三十八)

遺構　用地内上段の西はずれにあって、13号住居址と並んでいる。4.60×4.85mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN58°Wをはかる。壁、床面とも不良である。壁高は50cmある。柱穴は4主柱で、 炉北側に浅いピットがある。また東南壁の中央に貯蔵穴と思われるピットがある。炉は北西より主柱穴間中央に床面を円形にほりくぼめ、その中に甕胴部をうめていた。

遺物　土器と鉄製品が出ている。土器 (73、74図) は壷 (74図12・13)、甕 (14～16) があり、73図6

の甕胴部は炉にうめられていた。東海地方の土器片もある。文様から見て、座光寺原式土器よりは中島式土器に近い。鉄製品（131図）は尖り根の鉄鏃（３）と工具片と思われる鉄片（４）がある。

ス）13号住居址（22図、73図、74図、写三十八・三十九）

遺構　用地内上段にあって、12号住居址の南側に位置する。4.34×4.56mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N28°Eをはかる。壁はよくないが、床面の状態はよい。柱穴は４主柱で、南側に支柱がいくつかある。南壁中央部に貯蔵穴が見られる。炉は北東主柱穴間中央を円形にほりくぼめ、中央に台付甕胴下半（73図８）をうめ、南に接して石をおき枕石としている。

遺物　土器、石器があり、土器は壺（74図17～20、73図７）、甕（74図21）、台付甕（73図８）があり、壺の完形品（73図７）は胎土緻密、焼成良好な無文のもので、東海地方の土器である。中島式土器に近い。石器（114図）は打石斧（25）、敲打器（26）、砥石（27）がある。

セ）14号住居址（22図、74図、114図、写三十九）

遺構　５号住居址の南側にある。5.50×4.75mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向N71°Wをはかる。壁・床面とも状態は悪い。柱穴は４主柱穴である。炉は北西より主柱穴間中央を円形にほりくぼめて、南縁に石をおいて枕石としている。この住居址のみ中に土器を埋めていなかった。廃絶後と思われるが、住居内中央部に集石が見られ、その中に３個の石を台にして40×30cm大の平板石一枚のせたような状態のものがあり、単なる投げこみではないように思われた。

遺物　土器・石器がでている。土器（74図）は壺（22）、甕（23～25）、台付甕があり、いずれも小破片である。中島式土器に近い。石器は砥石（114図28）がでている。

ソ）15号住居址（23図、74図、114図、写四十）

遺構　用地内最下段東北端にあって、８号住居址の北側、台地縁にある。東側はけずられているが、直径4.60mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN57°Wをはかる。壁は良好である。壁にそって周溝がめぐっている。床面の状態は普通。柱穴は６主柱穴と思われるが、東側のは確認できない。炉は中央より北西によってあり、石囲炉と思われるが、炉石はすべてぬかれている。

遺物　土器・石器がでているが、その量は少ない。土器（74図）は深鉢片（26～31）である。文様から見て加曽利Ｅ式土器後半のものである。石器は打石斧（114図29）１個のみである。

タ）16号住居址（23図、75図、115図、写四十）

遺構　用地内下段のうちでも北端で、土壙群Ｂの上面につくられたものである。床面は全くわからず、炉によってその住居址を確認した。土壙群より明らかに上面にあり、柱穴も認められる。どの柱穴がこの住居址のものであるかについてはきめがたい。炉は石囲い炉で、南北両側のものが欠けている。

遺物　土器と石器がある。土器（75図１～14）は深鉢片で、縄文時代後期堀之内式土器が多く、10・11は加曽利Ｅ式土器終末期のものである。石器（115図）は打石斧（１～４）、横刃形石器（５）、石錘（６）がでている。

イ　竪穴状遺構（24図、131図、写四十一）

遺構　上段の北端にあって、砂礫混り褐色土をほりこんでいる。4.50×4.90mの南北にやや長い方形状で、長軸方向はN25°Eをはかる。壁・床面とも不良で、壁高7～15cmと浅い。南壁は共通壁であり北壁、に向って三分割される。西側からⅠ・Ⅱ・Ⅲとする。Ⅰは4.60×1.90mで、西南隅にテラスをもち、西壁北よりに石の入った1.70×0.30m、深さ10cmのほりこみがある。Ⅱは4.90×1.10m、Ⅲは4.80×0.80mの大きさで、ⅡとⅢの間に巾50～60cmの壁がある。Ⅲの北側外に柱穴が2個ある。ⅡとⅢのつながる南端は小礫が集中している。ⅠとⅡの間にある壁は断面三角形を呈し、突きかためたらしく非常に硬く丈夫。

遺物　陶器片と金属製品がある。陶器は「本」の刻印のある天目茶碗、鉢、皿があり、鉄製品（131図5）、銅製品（6・7）があり、これらの器種は不明である。

ウ　柱穴群

ア）柱穴群Ⅰ（24図、写三十一の80）

遺構　台地中期にあり、3・4号住居址を包括するように検出された。径20～30の円形で、深さ25～50cmの柱穴群で、そのいくつかに規則性が見られる。長軸6.80m、短軸5.10m、その長軸方向はN28°Eをはかる。住居址と密接な関係のあるあり方を示している。遺物はない。

イ）柱穴群Ⅱ（24図、写三十二の82）

遺構　用地内中央部、柱穴群Ⅰの東側にある。2・6号住居址にかかって北側に広がる。径20～40cm、深さ11～60cmの柱穴群で、比較的通りがよい。その配列については、全体を一つの建物としてとらえるのと、2つの建物にわけてとらえるのとある。前者は長軸 11.10m、短軸9.00m、その長軸方向30°Eをはかる。4間×5間の大きな建物である。後者の1つは、2号住居址を中心とするもので、長軸7.80m、短軸3.60m、長軸方向N30°Eの2間×3間の建物である。もう1つは、6号住居址を中心とするもので、長軸5.40m、短軸3.60mの長軸方向N31°Wを示す2間×2間の建物である。いずれにせよ、これらの柱穴建造物は住居址と密接な関係をもつものと考えられる。遺物は出ていない。

エ　精練状遺構（25図、125図、126図、127図、131図、写四十一、四十二）

遺構　用地内中段の南縁にある。遺構は砂礫混り褐色土をほりこんでいる。東西6m、南北10mの範囲に確認されたもので、南北に走る三列の溝と、その西側に並ぶ柱穴群がそれである。溝は巾50～90cm、深さ10～15cmの浅いもので、北から南へ流れていて、中には砂が入っていた。この溝上面の覆土からは遺物が見られたが、溝内からは遺物の出土はなく、溝も南北にのびていることを考えると、精練状遺構以前の水路と思われる。ピット群からは遺物の出土が多かった。

遺物　陶器、精練用具、溶滓、鉄滓、鉄片がでている。陶器は片口鉢、すり鉢、天目碗、古瀬皿、内耳

鍋、灯明皿などで、いずれも破片である。精練用具としては、土製の鋳型と思われるもの（125図３）、土製のるつぼ（125図４・５、126図１～４、）同支脚（？）（126図５）、ふいご口（127図１）があり、そして多量の溶滓と、少しの鉄滓がある。また器種不明の鉄片（131図８～11）もでている。

オ　溝状遺構（171図、73図、写四十四）

遺構　溝状遺構は、精練状遺構のところの溝を除いて、３本検出された。溝１は、台地北縁を東に走るもので、土壙群Ｂ、Ｄの間を通っている。巾16m、深さ 1.5mの大溝である。溝２は上段を南に走るもので、巾 1.5m、深さ１ｍのＶ字溝である。溝３は溝２の西にあって、南に走る。巾 0.9m、深さ 0.5m、Ｕ字溝である。いずれも中に砂が堆積していて、用水路である。

遺物は、溝２から灰釉陶器片、溝３から鉄釉の土鍋（73図９）がでている。

カ　土壙

本遺跡からは、用地内全域に土壙が検出され、107の多数に及んでいる。大きくＡ～Ｅの５群に集中しいくつかは単独のもある。形、深さ、断面形、埋土の状態など変化があり、時期も多時期にわたっている。

ア）土壙群Ａ（25図）

中段にあり、土壙２～４、21～23の６こがそれである。列状に並んでいる。遺物はない。中世と考えられる。

イ）土壙群Ｂ（26図、75図、115図、129図）

下段の北端にあって、16号住居址の下部にある。土壙８～16の９こで、土壙内からは土器、石器がでている。これらから見て、縄文時代の土拡群である。

ウ）土壙群Ｃ（27図、75図、115図）

用地内中央部、土壙群Ａの東にあって、土壙25～36の12こである。このうち26は27に切られ、中より縄文中期土器浅鉢（75図23）を出したことから除かれる。他からはほとんど遺物がなく、中世のものである。

エ）土壙群Ｄ（28図、75図、76図、77図、115図、116図、129図、131図）

下段東北端にあって、７・８・15号住居址の中に混在している。しかし、８・15号住居址より上面からほりこまれている。土壙37～80、105～107の47こである。住居址があることもあって、中からの遺物出土は比較的多い。それらから見ると、加曽利Ｅ式土器後半の時期のものと思われる。

オ）土壙群Ｅ（29）

用地内最上段にあり、土壙 100～104の５こである。103からすり鉢片、釘、鉄滓が出土していること

から見て、中世のものである。

カ）その他の土壙（25図、26図、27図、29図、76図、115図、116図）

土壙群に入らないもののうち、注意されるものとして、土壙17は、円形の土壙で、中に小礫とともにつば付土器の破片がある。土壙18はいわゆるロームマウンドの土壙である。土壙89は土壙をとりまいて柱穴が5こ検出されている。

キ　その他の遺物

遺構外から出土した遺物は、土器、石器、鉄製品がある。土器は縄文時代前期末（76図10）、中期初頭（11）、加曽利E式土器、後期堀之内式土器（12・13）、晩期大洞A式土器の壺（14～16）、水神平式土器（17）があり、弥生時代のは後期土器、土師器は鬼高式と国分式が、中世のものとしては各種の陶器片がでている。石器（116図）も打石斧（7～19）、横刃石器（20～22）、磨石斧（23～25）、石錘（26）凹石（27・28）、石ヒ（29）、スクレイパー（30）、石鏃（31～35）、磨石鏃未製品（36）、石鏃、砥石がある。土製品としては円板（129図 5.6）がある。鉄製品（131図）には、釘、刀子、くさび、鉄鏃、火打ち金具、鉄片などがあり、キセル、寛永通宝もでている。

3）　まとめ

住居址は、縄文時代4軒で、16号を除いて加曽利E期であるが、11号は上段に単独、8・15号は下段にあり、後者は滝沢井尻遺跡の同期のものとのつながりを考えたい。弥生時代8軒も、7号住居址以外は上段にあり、そのほとんどが座光寺原期である。12・13号はやや新しく中島式土器ともいえる。7号住居址は土器のおかれ方が注目される。これらの住居址からは東海地方からの土器があって注目される。またこの住居址群と滝沢井尻遺跡の方形周溝墓とのつながりも考えなければいけない。中世（鎌倉～室町）4軒は、近くにある小垣外遺跡のそれと共通しており、最近注目されてきた遺溝である。住居址の周辺にある柱穴群とともに、この時期の建造物のあり方は今後の課題である。

竪穴遺構は最初の知見であり、その性格は全く不明である。時期は中世である。精錬状遺構は発掘時に特にかたい面などなく、明確につかむことはできなかった。出土遺物から見て、あれたり、流れたりしていないので、この場所か、近くに遺構があったと思う。鉄滓の科学的な分析については窪田蔵郎氏に依頼してある。

土壙は充分検討しなければいけないと思う。大きく見て、時期的には縄文時代中期と中世のものにわけられる。

この遺跡だけではないが、調査結果については、今後への問題を多く残している。（岡田）

12 滝沢井尻遺跡

1） 位置

遺跡は飯田市伊賀良大瀬木にある（5図1、写二十九）。伊賀良区のほぼ中央、南沢川の形成した扇状地扇端部にある。この扇端部は小さな流れによって東に走る小台地にわかれており、北から小垣外遺跡、滝沢井尻遺跡、酒屋前遺跡、大東遺跡と並んでいる。滝沢井尻遺跡は、滝沢井にそって、その南岸に東西にのびる、巾30m、長さ200mの細長い台地である。そのほとんどが水田となっている。

中央道は、この一帯が飯田インターになり、丘先端部を大きくおおっている。グリットは96十0杭をＡＡとし、ＹＴ～ＢＬ、39～116までに設定し、特に用地内の西と東に重点をおいて調査した。

2） 遺構と遺物

遺構は住居址、柱穴群、方形周溝墓、溝状遺構、土壙がある。その分布も、用地内東西両端に見られ、西側には住居址、方形周溝墓、柱穴群、溝、土壙が、東側には住居址・土壙がある。その中間は水田（作物）、家畜小舎、住宅があって調査しなかったが、当然遺構の存在が考えられる。（30図1）

ア 住居址

ア） 1号住居址（30図、78図、117図、128図、写四十五）

遺構　用地内東はずれにある住居址群の1つで、茶褐色砂土をほりこんでいる。3.90×4.90mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN11°Eをはかる。柱穴は4主柱穴で、床中央部に3個、東隅主柱穴の近くに3個の柱穴が見られる。主柱穴内の床面の状態はよい。壁に近い部分はやわらかい。炉は北側主柱間中央にあって、柱穴を結ぶ線よりは中に入っている。床面を径60cm、深さ10cmにほりくぼめ、南側に石を2つおいて枕石としている。この住居址は縄文時代の7号住居址の上にのってつくられている。

遺物　土器・石器がでている。土器（78図）は、壺（1）、甕（2・3）、台付甕、高坏がでている。いずれも小破片である。壺の文様から見て弥生時代後期座光寺原式土器である。石器（117図）は磨石包丁（1～3）と、磨石鏃（4～6）がでていて、この時期の住居址としては種別の個数が多い。2・4はそれぞれの未製品である。

イ） 2号住居址（30図、78図、117図、写四十六）

遺構　用地内東はずれからは、縄文時代の住居址が3軒、孤状に並び、その中央にあるのが2号住居址である。直径5.90mの円形竪穴住居址で、主軸方向N34°Wをはかる。床面は砂質のためあまりよくなく、

中央部にわずかにかたい部分が見られた。柱穴は主柱穴６個で、南東壁よりのは埋甕と同じ性格をもつピットではなかろうか。炉東側のピットは貯蔵穴と思う。炉は中央より北西よりにあって、石囲炉であるが南側の炉石をのぞいてはずされている。一部は炉内におちこむ。

遺物　土器、石器が出ており、土器（78図）はいずれも深鉢で、器形のわかるもの２個（４・５）以外は破片である。器形、文様から見て、縄文時代中期加曽利E式土器前半のものである。石器（117図）は打石斧（７～９）と横刃形石器（10）がある。

ウ）３号住居址（31図、79図、80図、117図、写四十六・四十七）

遺構　２号住居址の西側にあって、直径 4.7m の円形の竪穴住居址で、主軸方向N86°Wをはかる。壁にそって巾15～20cm、深さ４～７cmの周溝がめぐる。床面の状態はよい。柱穴は４主柱穴で、東側壁よりに入口部の柱穴と埋甕と同性格と思われるピットが見られる。炉は中央より西よりにあって、方形石囲炉であったと思うが、炉縁石はぬかれてない。

遺物　土器、石器がでており、その量は多い方である。土器（79・80図）は、床面より完形の鉢（80図１）が横にたおれてあった。器形の大きな深鉢が多く（79図）、破片であるがつば付土器もある。器形、文様から見て、加曽利E式土器後半のものである。石器（117図）は打石斧（11、12）、磨石斧、横刃形石器（13）、スクレイパーが出ている。

エ）４号住居址（31図、81図、117図、写四十七、四十八）

遺構　用地内西端の住居址群で、５号住居址に一部重なっている。台地北縁に近いところである。3.80×4.10m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN85°Wをはかる。壁の状態はあまりよくない。床面はかたく良好である。柱穴と思われるピットがあるが不規則である。カマド南側の大きなほりこみは貯蔵穴である。カマドは東壁の中央より南よりにあって、石心粘土カマドで、耕作により破壊されていた。この家は火災にあったためか、木炭が多く、建築材と思われる炭化材が壁から中央にむいてある。直径６～８cm の丸太材をそのままか、２～４つ割して使用している。遺物の出土は比較的多い。

遺物　土師器と灰釉陶器で、須恵器は全くない。土師器（81図）は小形の坏（１～７）で、５は輪花となっている。６・７は高台がつく。灰釉陶器は皿（８・９）と碗（10～14）があって、段皿（８）の底部には墨書が見られる。字は判読できない。石製品として砥石（117図14）がでている。

オ）５号住居址（31図、写四十八）

遺構　４号住居址の東側にあり、西側の一部に４号住居址がのっている。4.60×5.40m の長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN62°Wをはかる。壁のほりこみは17cmと浅い。床面は全体に良好である。柱穴と思われるピットが北壁と南壁にそって並んでいる。北壁隅に貯蔵穴がある。カマドは石心粘土カマドで、東壁の南よりにある。耕作のため北側の袖はない。出土遺物は全くない。

カ）６号住居址（32図、写四十九）

遺構　用地内西端にある住居址で、方形周溝墓南側にある。5.00×2.60m の長方形の竪穴住居址で、主

軸方向はN64°Wをはかる。ほりこみは北西にやや深く、壁は内側にゆるく傾むくようにほられている。床面はかたく良好である。住居内には人頭大の礫がつまっており、当初、ここに古墳があったといわれていたので、その石室床部かと思った。この住居址内と、そのまわりに、主軸方向を同一にする柱穴列が見られた。それは南西にのびておるのと、住居内のそれは覆土をほりこんでいたことから、この住居とは区別した。

遺物　石の間から山茶碗の破片が出ている。

キ）7号住居址（32図、50図、写四十九）

遺構　用地内東端の住居址群の1つで、2号住居址の南にあり、1号住居址の下にずれて重なっている。直径4.90mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN45°Wをはかる。床面は中央部はかたくて良好であるが、壁近くはよくない。柱穴は数多くあり、6主柱と考えられ、東南の一群は、住居址拡張前の柱穴とも考えられる。炉は中央より北西によってあり、石囲炉であったと思われるが、炉石はのぞかれている。

遺物　土器と石器があり、土器（80図）はいずれも深鉢（3～5）で、5は完形である。加曽利E式土器の前半にあたるものと思う。石器は打石斧と石鏃がでている。

イ　柱穴群

柱穴群（32図3）は、6号住居址と重なってあり、その主軸方向を同じにしている。南西にもう一列以上のびているのを確認しているが、用水路、水田のため調査できなかった。4間×？間のもので、柱穴の通りはよい。

ウ　方形周溝墓（33図、80図、131図、写五十、五十一）

遺構　方形周溝墓は、用地内西端に発見され、北西半分は用地外にのびている。また中を用水路が流れていて南側の周溝は充分調査できなかった。地主さんの好意により、墓拡の半分と、北と西のコーナー、西溝の場所を確認させてもらった。南北11.30m、東西11.20mのほぼ方形の大きさで、主軸方向はN68°Wをはかる。東溝の中央よりやや北によって陸橋部を残して溝は一周する。溝は0.9～1.3m、深さ30～60mあり、逆台形状にほられている。ほぼ中央部に、主軸を同じにして、墓壙がある。2.30×1.10mの隅丸長方形で、深さ30cmほりこまれている。墓底北側にはロームを意識的に盛りあげてある。墓壙内西隅に近いところに、鉄剣が2個、先端を北西に向けて並列していた。

遺物　溝内より、2片の弥生式土器（80図6・7）がでている。座光寺原式土器の甕である。墓壙内からは、保存状態のよい鉄剣（131図14・15）が出ている。15は茎下方を若干欠損するが、残部の長さ28.5cm、巾は2～2.9cmで、柄部の方に巾広くなっている。先端は丸味をおびて尖っている。中央に鎬が見られ、その部分の厚さは0.6cmある。両刃の剣で、切先はふくらみをもち刃方は切先へ向うに従って鎬にせまり巾がせまくなる。鎬は柄方向に向うに従って明瞭となり、茎に至って消え、茎断面は長方形をなす。刃関はゆったりとした丸味をもって茎に移っている（呑口式）。茎に柄と思われる木質部が残る。14は長さ13.5cmで

最大巾は剣身中央より切先によってあり、 1.7cmある。鐔部の厚さ 0.3～ 0.4cmである。剣身と茎の間に刃関がなく、明瞭に区別できないが、茎になると鐔がない。目釘穴は茎の下部にある。これは大きさも小さく、小形鉄剣ともいえ、欠損品の再加工品（磨上）とも考えられる。

エ　溝状遺構（33図、34図）

溝は用地内西端の南はずれに大きいのがあって、それを溝１とする。中央部の南はずれには２つあって溝２、３とする。いずれも用水路で、台地南縁に沿って流れていたものと思う。

オ　土壙（34図、35図）

土壙は22検出し、用地内西端、東端、そして中央部の南端の３か所にある。円形のも、不整円形のもの方形のものとあり、ほりこみも各種ある。中の状態も石の入るのとそうでないものがある。土壙14、15はロームマウンドのものである。土壙内からの出土遺物は、土壙３から中世山茶碗の片口鉢が、土壙５からクルミの炭化物、土壙６から縄文時代後期堀之内式土器（80図10、11）、土壙13から前期末土器（12）、土壙14から中期土器（13）、土壙15から前期末土器（14）、土壙18から前期末土器（15～17）、土壙20から中期土器（18、19）がでている。だから、４時期の土壙がある。

カ　その他の遺物

土器（80図）、石器（117図）がある。土器は縄文時代前期末（20～24）、中期加曽利E式土器、後期堀之内式土器（25・27）、晩期水神平式土器の破片があり、中世陶器片も多かった。石器は打石斧（19）、横形刃石器（20）、磨石（21）、スクレイパー（23）、石鏃（24）、砥石（22）がある。石製品としてはロウ石の玉（127図２）がある。

3）　まとめ

住居址は２・３・７号が縄文時代中期のもので、１号は弥生時代後期である。４・５号は平安時代のものである。６号は中世である。これらの集落の広がりは用地外にのびており、また両側の遺跡ともつながりが考えられる。柱穴は中世以降である。方形周溝墓はその形から見ても弥生時代後期座光寺原式土器で、１号住居址や酒屋前遺跡の住居址群と同時期である。墓壙内出土の鉄剣は注目される。保存の状態もよく貴重な資料である。４号住居址の出土は、灰釉陶器を主とする好資料で、セットとして把握される。

（木下）

13　小垣外・辻垣外遺跡

1）　位置

遺跡は飯田市伊賀地方にあり（36図１、写二十九）、大瀬木部落と境を接している。　南沢川の扇状地扇端部に位置していて、南沢川と滝沢井にはさまれる。巾約 100m の東に傾斜する台地である。標高540m から 545m の間に中央道用地がある。

中央道は台地中央部を南北に横切っている。ここに飯田インターがつくられることになり、用地は東側に大きく広がった。そのため、調査は 100m 四方の用地内遺跡としては最大の面積を調査できた。用地内東南にわずかな凹地があって、滝沢井の旧河床である。この凹地を境にして、北側が小垣外で、南側を辻垣外と呼ばれている。遺跡も２遺跡にわけられているが、用地内の大半は小垣外遺跡で、辻外垣遺跡はわずかにかかっているため、両者を一遺跡として扱かった。遺構としては、18号住号址が辻垣外遺跡に入る。グリットは97＋０杭をＡＡとし、ＣＮ、38～ 109までに設定した。

遺跡の地層は、Ａ地区で耕土25cm、暗黒色土27cm、黒色土20cm、茶褐色土25cmでロームとなっており、北に行くにつれて厚くなっている。特に茶褐色土が包含層であった。

2）　遺構と遺物

遺構は、住居址、柱穴群、配石、土壙などを検出した。一部道路および宅地があったため調査できなかったところがあるが、ほぼ全域に検出され、傾向としては、南側の旧河床に沿ってあるように見える。これらの遺構は各時期にわたっているので、時期別の検討が必要である（36図１）。

ア　住居址

ア）１号住居址（36図、写五十二）

遺構　用地西縁にある。2.70×3.45の不整方形の竪穴住居址で、主軸方向N62°Wをはかる。壁はゆるやかに傾斜しかたい。床面もかたくて良好である。北西半にて一段さがり、北壁に接して貯蔵穴かと思われるピットがある。柱穴は住居址内と壁外にとりまくようにあり、柱穴群Ⅲと関連する。

遺物　中世の陶器、片口鉢片がでている。打石斧もあるが、うまるときのまじりであろう。

イ）２号住居址（36図、82図、118図、写五十二）

遺構　用地内北西端にあり、台地北縁に位置する。4.70×4.40m の不整円形の竪穴住居址で、心もち角

ばった感じをあたえる。壁は直にほりこまれ13～17cmと浅い。床面は炉のまわりがかたくて良好である。他は軟弱である。柱穴は６主柱穴である。炉はほぼ中央の床面を30×35cmの円形に、深さ10cmにほりくぼめ、炉底に土器片を敷いていた。

遺物　土器・石器がでており、土器（82図　１～11）はいずれも破片で、その文様などからみて、前期末の土器である。１・２は同１個体の土器で、炉底におかれていた。石器（118図）は打石斧（１・２）、磨石斧（４）、石錘（３）、凹石（５・６）、石錘（７）、スクレイパー（８～10）があり、黒曜石剥片も多い。

ウ）３号住居址（37図、写五十三）

遺構　中央の南縁にあって、４号、21号住居址に接している。3.40×4.25mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N66°Wをはかる。壁は状態よく、傾斜している。東隅は壁がなく床中央に向ってなだらかに傾斜している。入口部かと思われる。北西壁中央より北によって方形の張り出しがある。床面はかたく良好であり、全体に中央より東側にくぼんでいる。南隅に貯蔵穴と思われるピットがある。柱穴は住居内にも２こあるが、壁外にとり囲むようにある。遺物の出土はない。

エ）４号住居址（37図、写五十三）

遺構　21号住居址の東にはなれてある。1.50×1.70mの不整長方形の竪穴住居址で、主軸方向N11°Eをはかる。北壁中央よりやや西によって方形の張りだしがある。壁は北側が直にあるが、他は傾斜しかたい。壁のほりこみは10cm前後と浅い。床面は全体にかたく、西へ傾斜する。柱穴は壁外に並んでいる。なお北壁は土壙68がきっている。出土遺物はない。

オ）５号住居址（38図、82図、118図、128図、写五十四）

遺構　用地内北西、２号住居址の南にある。直径４mの円形の竪穴住居址で、堀りこみは10cm前後と浅い。床面は炉の周辺がかたく良好であるが、他は軟弱であり、平担でない。中央に不整形な凹みがある。柱穴は主柱穴が７本あったと思われるが、土壙51にきられ１本を確認できなかった。炉は中央にあって、床面をほとんどほりくぼめていない。

遺物　土器、石器がでている。土器（82図12～28）は鉢の破片で、文様から見て、前期末のものである。また小形の椀形土器（128図２）もでている。石器（118図）は打石斧（11）、石鏃（12～14）があり、黒曜石剥片の出土も多かった。

カ）６号住居址（38図、83図、118図、128図、129図写五十四）

遺構　用地内中央の南縁にあって、22号住居址の南東にある。4.85×4.95mの円形竪穴住居址で、壁高15cmある。床面は全体に軟弱であり、中央部および東壁は土壙によってほりこまれている。そのため柱穴は西半分に５主柱穴を確認したのみである。炉は不明。

遺物　土器、石器、土製品があるが、その量は少ない。土器（83図１～５）は文様から見て、前期末のものである。石器（118図）は横刃形石器（118図15）が１点である。土製品は円板状土製品（128図３）と円板（129図５・６）がでている。

キ）７号住居址（39図、83図、118図、写五十五・五十八）

遺構　用地内中央部の、台地中央部にあって、20・９号住居址にはさまれている。4.40×4.60mの不整円形で、主軸方向N62°Eである。壁はほぼ直に10～37cmほられ、南に深い。床面は比較的良好であるが、深耕のうねによりあらされている。東壁よりに不整形の浅いくぼみをもつ。柱穴は４主柱穴である。炉は中央より北西によってあり、方形石囲炉であるが、炉石はぬかれてない。土器片の出土量は比較的多く、それは床面より15～20cm浮いていた。

遺物　土器、石器で、土器(83図６～19）は深鉢で、底部を欠く６以外は破片である。縄文時代中期加曽利E式土器で、その後半のものである。石器（118図）は打石斧（16～18）、横刃形石器（20・21）、敲石（19）、敲打器、石鏃（23～25）、スクレイパー（22）、異形石ヒ（26）がでている。

７）８号住居址（39図、写五十五）

遺構　用地内では北東部で、南沢に面してあり、10号住居址の南にある。一辺3.00mの不整方形の竪穴住居址で、主軸方向N2°Wをはかる。壁は南側が直で、他は傾斜しており、とてもかたい。南壁中央より西によって、方形の張りだしをもつ。張り出しは中央に凹みをもっている。覆土中に木炭や焼土塊を検出するが、この部分で焼かれたと思われる痕跡はなかった。床面はかたく良好である。平担でなく中央にくぼんでいる。柱穴は壁外に見られる。

遺物　片口鉢と常滑焼の水甕の破片がある。

ケ）９号住居址（39図、84図、118図、129図、写五十六）

遺構　用地内中央部にあって、７号住居址の北にある。4.25×4.45mの円形の竪穴住居で、主軸方向、N13°Eをはかる壁は12～36cmとほりこまれ、南に深い。床面はかたく良好である。柱穴は４主柱穴であ。る。炉は中央よりわずか北によっている。方形石囲炉で、炉石は西側の１つを除き、はずされ、床面と炉内におちこんでいる。

遺物　土器、石器、土製品がでている。土器（84図）はいずれも深鉢片で、４は無文の椀形土器である。器形・文様から見て、加曽利E式土器後半のものである。石器（118図）は打石斧（27～30）、横刃形石器（31～34）、磨石斧（35）、敲打器（36）、砥石（37）、石ヒ（38）、スクレイパー（39）、石錘（40）石鏃（41～44）がある。他に土製円板１点（129図９）がある。

コ）10号住居址（39図、写五十六）

遺構　用地内北東部、南沢に接してあり、８号住居址の北にある。3.60×2.00mの不整長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN－Sに一致する。壁は浅い。床面はかたく良好である。西壁北すみに張り出しをもつ。柱穴は、南・北壁外に不規則に並ぶ。出土遺物はない。

サ）11号住居址（40図、85図、119図写五十七・五十八）

遺跡　中央部南縁にあって、溝３に近い。12号住居址と並ぶ。4.85×4.40mの方形竪穴住居址で、主軸方向N74°Wをはかる。壁高は13～19cmあり、壁にそって周溝がめぐる。床面はかたく良好である。柱穴は

主柱穴４本で、他は支柱穴と思う。主柱穴２本は西壁に接してある。南西隅に貯蔵穴と思われる大きなピットがある。また住居内中央部にも浅い大きなほりこみがある。カマドは北東隅にあって、耕作によって大部こわされている。床面をほりこんで粘土カマドをきずいたものと思われる。袖には石を心にしていたと思われ、その石が直立してある。それは整形された砂岩で、12号住居址のカマド袖石の上部に接合し、12号住居址よりおってきたように思われる。カマドと貯蔵穴に遺物の出土が多かった。

遺物　灰釉陶器、須恵器、土師器そして石器がでている。土師器（85図）、坏（１～５）は１～３、５が内面黒色土器で、３には高台がつく。４は内外両面と黒色である。１・２・４には暗文が見られる。甕（10）はあまり大きくないものである。須恵器は坏（６・７）がある。灰釉陶器は高台付の皿（８）、長頸壺（９）、碗がでている。平安時代のものである。石器（119図）は敲石（１）と砥石（２）がある。

シ）12号住居址（40図、85図、119図、写五十七、五十八）

遺構　11号住居址より 1.5m 東にある。5.25×5.60m のやや南北に長い方形竪穴住居址である。主軸方向N77°Wをはかる。壁は直で、南西に高く35cmある。床面はかたく良好で、平らである。主柱穴は４本で２本は西壁に並ぶ。カマドは北東隅にあり、耕作で破かいされている。石心粘土カマドで、袖に使われた石がある。その一つは整形された砂岩で、上半が11号住居址のカマドに使用されている。カマドの南側、南東隅、南西隅に貯蔵穴があり、住居内にも大きなほりこみが見られる。また住居内主柱穴に接して２か所のローム盛り土が見られた。周溝は西壁と南壁の一部に見られた。

遺物　土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、鉄片があり、比較的多い。カマドの周辺より出土した。土師器（85図）は、坏（11・12）と小形の甕（25・26）があり、11は内面黒色のもので、外面に墨書がある。須恵器は坏（13・14）、壺（27）、坏蓋がある。灰釉陶器は多く、皿（16～19）と碗（20～24）で、他に把手片もある。碗10個体のうち４個の底部に墨書が見られる。小破片であるが緑釉皿片（15）がでている。石器では砥石（119図３）がでている。11号住居址と同時期であり、墨書の多いのが注目される。

ス）13号住居址（41図、写五十九）

遺構　用地内中央部の東よりにあって、12号住居址の北にある。2.12×4.80m の長方形の竪穴住居址で主軸方向N20°Wをはかる。壁は西壁が直に近く、他は内側へ傾斜している。傾斜する壁と床面はかたく良好で、床は中央部にくぼんできている。柱穴は住居址内には北壁よりに２個あるのみで、他は壁外に並んである。

遺物　陶器片で、古瀬戸小形壺、片口鉢、常滑水甕がでている。

セ）14号住居址（42図、写五十九）

遺構　用地内東端、台地でも先端部に位置し、15、16号住居址と接し、17号住居址が北にある。プランはＬ字形で、4.20×2.70m の長方形のものに、1.50×2.50m の長方形の張り出しが北につき、これは北にむかって上っており、入口部と思われる。壁は傾斜をもち、床面ともかたく良好である。床は平らでなく中央にくぼむ。張り出し部と接合するところに長方形のほりこみがある。柱穴は住居内の１つをのぞき、他は壁外にある。

遺物　常滑水甕片が出ている。

ソ）15号住居址（42図、119図、写五十九）

遺構　14号住居址の南西に1.15mはなれてある。2.20×2.30mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N60°Eをはかる。壁は傾斜し、かたく、床面もかたく良好であり、中央がくぼむ。住居内に礫の集積が見られた。柱穴は壁外に3こある。

遺物　山茶碗の坏片と砥石（119図4）がでている。

タ）16号住居址（42図、86図、写五十九）

遺構　14号住居址の西60cmはなれてあり、わずかにくぼんで、かたくつきかためられた床面が南北に長く不整形に見られた。主軸方向N23°Wをはかる。柱穴は4こある。

遺物　中世陶器片で、水甕、椀、底にオロシメのつく壺底部（86図1）、内耳鍋がでている。

チ）17号住居址（43図、128図、写六十）

遺構　用地内東端にあり、台地扇端部、南沢川に接している。6.10×3.70mの東西に長い不整長方形を基本形とし南壁に大きな張り出しをもつ。主軸方向N17°Eをはかる。壁は東半をのぞいて、ゆるい傾斜で中央におちこみ、そのまま床面となり、中央部が最も低くなり、鍋底状である。全体にかたく良好である。床内部に礫を集めている。東壁によって、礫を基礎として、粘土でつくった間仕切り様の壁があり、その両側には床面より上、東側で16cm、西側で7cmの貼り床があり、一段と高くなっている。柱穴は住居内にもあるが壁外にとりかこむように見られる。

遺物　中世陶器の甕、碗片と、ロウ石製の紡錘車片（128図8）がでている。

ツ）18号住居址（41図、86図、119図、写六十一）

遺構　用地内南端にあって、溝3南に接し、20号住居址と相対している。辻垣外遺跡に入るものである。5.30×5.00mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N50°Wをはかる。壁は耕作によりあれている。壁にそって周溝がめぐる。床面の状態はかたくてよい。柱穴は4主柱穴で、建直しのため接するように堀直されている。建直しのとき住居址は東側に拡張している。入口部と思われる南東壁に接してピットがある。炉は中央より北西により、方形石囲炉で炉石はほとんどがぬかれ、わずかに残されている。

遺物　土器、石器がでている。土器（86図）は、台付土器（2）と深鉢（3～12）であり、文様から見て加曽利E式土器後半のものである。石器（119図）は打石斧（5～7）、磨石斧（9・10）、横刃形石器（8）、石ヒ（11）がでている。

テ）19号住居址（42図、写六十一）

遺構　用地内北東部にあって、8号住居址と14号住居址の中間にある。2.50×2.70mの不整方形の竪穴住居址で、主軸方向N27°Eをはかる。ほりこみは深く、62～78cmをはかる。そのためか南壁にテラスがある。壁は内側に入り、あまりかたくない。床もかたくなく、南よりに細長いほりこみがある。柱穴らしき

ものが壁外にあるが明確でない。出土遺物はない。

ト）20号住居址（44図、87図、119図、132図、写六十二）

遺構　用地内中央部にあって、7・9号住居址と並ぶ。一番南にある。11号住居址が上に一部のっている。5.50×5.10mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N62°Wをはかる。壁はほぼ直で30cm前後ある。床面は部分的にかたいが、大部分はよくない。柱穴は6主柱穴である。炉は中央より北西により、方形石囲い炉で、炉石はぬかれ、一部炉内におちこんでいた。埋甕は南東壁に近くあって、口縁を欠く深鉢が、上縁を床面にあわせて正位にうめられていた。内部より剥片が出土する。

遺物　土器・石器がでている。土器（87図）は埋甕の1をのぞいては破片である。埋甕は上径45cm、底径 8.5cm、高さ42cmの大きさである。文様から見て、加曽利E式土器後半のものである。石器（119図）は打石斧（12～14）、磨石斧（15）、横刃形石器（16～18）、石鏃（19～21）がある。

チ）21号住居址（43図、写六十三）

遺構　用地内中央部南縁にあって、3・4号住居址の間にある。4.50×4.30mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N 30°Eをはかる。東壁は段をもっておちこむが、他は傾斜している。床面は良好であるから北半分は土壙と耕作によってあれている。柱穴は住居内にし、西壁外に1ある。

遺物　中世陶器片のオロシ皿がでている。

ツ）22号住居址（44図、86図、191図、写六十三）

遺構　用地内中央部にあり、6号住居址の北西にある。4.50×4.30mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N30°Eをはかる。壁は南西に深く30cm、北東で9～18cmある。床面は炉周辺部がかたくて良好であるが、他は軟弱である。柱穴は4主柱穴で、2～3回建直されたようである。炉はほぼ中央にあり0.95×1.00mの方形にほりくぼまれている。

遺物　土器、石器がでている。土器（86図13～35）はいずれも鉢の破片である。文様から見て前期末の土器である。石器（119図）は打石斧（22・23）、石鏃（24～26）、スクレイパーがでている。

イ　柱穴群

ア）柱穴群Ⅰ（45図、119図）

遺構　用地内西部にあって、柱穴群Ⅱと並ぶ。柱穴が楕円形状に並んでいる。床面、炉のようなものはない。縄文時代の建造物と思われる。

遺物　土器は加曽利E式土器終末の小破片がでている。石器（119図）は打石斧（27）、石鏃（28）がでている。

イ）柱穴群Ⅱ（45図、88図、119図）

遺構　柱穴群Ⅰの東に集中してあり、さらに東北にのびていると思われるが、宅地であったため調査で

きなかった。柱穴は不規則である。炉、床面はない。Ⅰの中間に焼土が見られる。

遺物、土器、石器があり、土器(88図１～３)は加曽利E式土器終末期のものである。石器は打石斧(119図29、30)、石錘(31)、敲打器(32)、石ヒ(33)がでている。

ウ）柱穴群Ⅲ（45図）

遺構　柱穴群Ⅰ、Ⅱの南西にあって、１号住居址と北接し関連が強い。Ⅰ・Ⅱとは柱穴内の埋土が全く違っていた。２間×２間の建造物が考えられる。

ウ　土器集中地

ア）土器集中地Ⅰ（88図、120図）

遺構　用地中央部南縁にあって、土器集中地Ⅱと道路をへだてて相対していて、東側のをⅠとする。３×６ｍの範囲に土器片が集中してあり、竪穴住居址とも考えられ、壁と思われるおちこみ、床面と思われるかたい面があったが、耕作のためあれてて確認できなかった。こうした土器片が集中することはこの時期に普通に見られる。

遺物　土器、石器で、土器（88図）が多く、そのほとんどが粗製土器である。注口土器（４・５）、鉢（６～11、15～19)は精製土器で、12～14、20、21は粗製土器深鉢である。土器底部には網代痕（22～29)が多く、各種の網み方がある。器形、文様から見て、縄文時代後期の堀之内Ⅱ式土器である。石器(120図)は、打石斧（１）、磨石斧（２）、磨石（３）、石鏃（４）がでている。

イ）土器集中地Ⅱ（45図、89図、120図、写六十四）

遺構　土器集中Ⅰの西にあって、５×４ｍの範囲に、厚さ５ｍで円形に土器片が集中していた。その部分を中心にして柱穴群が見られ、明確な規則性はないが、円形になるように２群が見られる。多分住居址と思うが、床面、炉は確認できなかった。

遺物　土器、石器が出土し、土器（89図）は粗製土器が大半をしめ、精製土器はわずかである。鉢、甕注口土器、椀が出ている。文様から見て、土器集中地Ⅰと同時期、堀之内Ⅱ式土器である。石器（120図）は、打石斧（５）、磨石斧（９・10)、横刃形石器（６・７)、敲打器（８・13)、石錘（11・12)、石鏃が出ている。

エ　焼土群（90図、120図、127図、129図、写六十五）

遺構　用地内西部の中央、溝１の北側にあって、土壙群上面に見られた。10×10ｍの範囲に50cm前後の焼土が散在していた。特に床面というようなかたい面はなかった。

遺物　土器、石器、土製品がある。土器（90図１～23）は縄文時代後期堀之内式土器が多く、それに加曽利E終末期のもの（１～６）が混っていた。石器（120図）は打石斧（14～17)、磨石斧(21・25・24)、横刃形石器（18～20）、磨石（23）、敲打器（26）、石錘（22）、凹石（27～29）、石鏃（30）がでてい

る。土製品は、後期土偶の片足（127図４）と土版（６）、そして舟形土製品（128図１）がでていて、特にこれは注目される。

オ　配石（36図、46図、写六十六）

遺構　用地内北西部、２号住居址の南にあって、レベルは高く、黒褐色中につくられていた。扁平の礫で方形石囲いしたもので、一辺45cmの大きさである。１見、炉のように見えるが焼土、木炭はなく、配石と考えた。このような石囲は縄文時代後期に見られる。遺物はない。

カ　溝状遺構

ア）溝状遺構１（36図）

遺構　用地内西部の中央を、台地走向（北西から東南）に流れ、巾５～７ｍ、深さ２ｍのＶ字形の溝で内は砂礫でうまる。人為によるほりこみで、南側にはテラスもある。比較的新しい時期まで流れていたようであり、溝３につながる。

イ）溝状遺構２（36図、90図）

遺構　用地内北西端にあって、南沢川に接する。２号住居址の東にある。宅地のため溝の南側しか確認できない。堆積土の状態から、古い（縄文時代？）もので、旧河川の縁と思う。

遺物　堆積土中より、土器（90図）片がでている。縄文時代早期センイ土器（24）、前期土器（25）、中期後半の土器（26・27）がそれである。

ウ）溝状遺構３（36図）

遺構　用地内南縁にあって、現地表面もここは凹地となっていて、これを境に小垣外と辻垣外にわかれる。溝はほぼ東西に流れ、滝沢井の旧河床と思われ、住居址の配列から見ると古い頃から流れていたようである。

キ　土壙

土壙（46～50図、91～94図、121図、128図、129図、写六十六）は、用地内全域から検出され、その数111ある。その状態については、表および土壙実測図、土器拓本、石器実測図を参照してほしい。傾向としては、用地内西南部に集中している。時期的には前期末のものが多く、中期、後期、そして中世のものと区別される。プラン、ほりこみ、内部の状況も各種各様であり、時間をかけた検討が必要である。

ク　その他の遺物

遺構外から出土した遺物は、各時期のものにわたっている。（94～96図、 122図、 123図、 127図、 128図、 129図、写六十五）土器は縄文時代前期末（94図26～49）、中期勝坂式土器（95図１）、加曽利Ｅ式土器（２～９）、後期堀之内式土器（10～26、96図１～32）があり、遺構は１つも検出できなかったが、弥生時代後期土器高坏（33）、甕（34・35）があり、座光寺式原土器である。この他に土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、青磁、白磁片もでている。石器（122・ 123図）も各種でている。遺構から出土しなかったものとしては、弥生時代打石包丁（122図19～21）、縄文時代の石皿（17・18）、石棒があり、前期に所属すると思われるが、注意したい剝片（123図37～42）もでている。土製品では滑車形耳飾（127図３）、前期末と思われる土偶胴部（５）、後期の土偶足（128図４）、前期末の小形注口土器（５）、円板（129図７・８・10・11）がある。宋銭（131図16）、釘もでている。

３）　まとめ

インターのため広く調査できた。そのため各時期の遺構・遺物を検出したが遺構は用地外西方に広がる。住居址は、縄文時代前期末４軒は数少ない検出資料であり、多くの同時期土壙群とともにそのあり方を注意したい。縄文時代中期住居址は加曽利Ｅ式土器後半で、同時期のものである。縄文時代後期のものとしては土器集中地、焼土群があり、前者は住居址であったと思われる。堀之内式土器の好資料となり、とくに土製品（土偶・土版・舟）は注目される。平安時代住居址２軒はほとんど同時期のものであるが、12号住居址の方が古いと思われる。灰釉陶器から見て10C後半と考えられる。また12号住居址の遺物のあり方は注目される。中世住居址はこの遺跡を初め、周辺の遺跡で検出され、その特徴がはっきりしてきている。柱穴群とともに、中世建造物の検討と、このような建物群と、文献に見られる「育良駅」「伊賀良庄」とのつながりを今後検討しなければならない。　（矢口）

14 三 壺 渕 遺 跡

1） 位置

遺跡は飯田市伊賀良北方にある（5図2）。南沢川のつくる扇状地扇端部でわずかな台地となっている。その台地先端部が遺跡である。北側の凹地をへだてて上の金谷遺跡と相対している。標高 540m、凹地との比高2mある。水田地として造成されている。

中央道は台地先端部に半分かかって南北に走っている。グリットはセンター杭99＋0をＡＡとし、ＤＴまで、38～43に設定した。

ここの地層は、耕土、黒色土、褐色砂土で、遺構は褐色砂土をほりこむ。

2） 遺構と遺物

用地内台地先端部に住居址三軒を検出する。あり方から見て、用地外西方に広がる。また土壙1は、用地南端にある。

ア 住居址

ア）1号住居址（51図、97図、128図、写六十七）

遺構　用地内中央西端にあって、3号住居址と南西隅が接している。北西隅が水田土手のため調査できなかったが、住居址の大半を検出した。4.90×4.80の方形の竪穴住居址で、主軸方向N78°Eをはかる。壁はほぼ垂直にほりこまれ、北壁と東壁にそって周溝がある。床面はカマドから中央部に良好で、まわりは軟弱である。柱穴は床面の状況が悪く検出できなかった。カマドは石心粘土カマドの雄大なもので、西壁中央部に見られる。火床中に礫を立て支脚としている。たき口天井石ははずされて南側袖のところにあった。

遺物　比較的多く、土師器、須恵器である。土師器（97図）は坏（1～5）は5個以上、坩（7）は2個体、甕（6・11・12）は5個体以上、高坏（9）5個体以上、コシキ（13）2個体、手こね土器1個体が出土している。3は内面黒色の坏、12の甕は大形で、網んだもので吊されていたらしく、網目が土器表面に残っている。高坏は坏下部に段をもっている。須恵器は少なく、高坏（8）、蓋、甕がある。土師器は鬼高式土器前半に、須恵器は第2様式である。この他にスタンプ状の土製品（128図6）がある。

イ）２号住居址（51図、97図、写六十八）

遺構　１号住居址の北東にあり、３号住居址と同時期のものである。後世の溝が住居内を横切り、北壁外に溝状のものがある。3.00×3.40m の方形の竪穴住居址で、主軸方向N18°Wをはかる。壁はほぼ直にほりこまれている。床面の状態はよくなく、柱穴も検出できなかった。貯蔵穴と思われるほりこみがカマド前と西にある。カマドは北壁中央部にあって、袖石と天井石をつかった粘土カマドで、くずれていた。カマド内に土器がこわれこみ、火床中央に石を立てた支脚がある。

遺物　土師器、須恵器、灰釉陶器があり、量は多くない。土師器（97図）は甕（16・17）のみで、須恵器は坏（14・15）と甕（18）、壺がある。灰釉陶器は壺と碗の破片がでている。

ウ）３号住居址（51図、97図、124図、写六十八）

遺構　１号住居址の西に接してあり、用地西端にあって、水田土手下に西壁が入り調査できなかった。南北3.50m、東南4.10m 以上の長方形の竪穴住居址で、主軸方向N78°Wをはかる。壁のほりこみは水田造成時にけずられ、床面もあれていた。柱穴も確認できない。カマドは西壁南よりあったが、けずられて、火床の焼土を残すのみであった。

遺物　土師器、須恵器、石器があるが量は少ない。土師器（97図19・20）は甕と、須恵器は杯片がでている。石器は砥石（124図１・２）がでている。

イ　土壙（98図）

遺構　用地内南西にあって、遺跡台地の南縁端にある。直径48cm、深さ40cmの大きさである。

遺物　土壙埋土中より、土器（98図１～８）片がでている。その文様から見て縄文時代中期初頭のものであり、３は西日本の船元式土器である。

ウ　その他の遺物

遺構外からの土器（98図）は、中期初頭（９～11）、加曽利E 式土器、堀之内式土器、弥生後期座光寺原式土器（12・13）、土師器、須恵器（14）、中世陶器がある。石器（124図）は打石斧（３・４）、磨石斧（５）、スクレイパー（６）、石鏃（７）があり、宋銭（131図17）もある。

3）　まとめ

集落は用地西側にある。用地内の遺構は縄文時代中期初頭の土壙と、古墳時代後期の住居址（１号）と平安時代の住居址（２・３号）が検出された。中でも１号住居址のセットと、土壙出土の土器が注目される。（遮那）

15　上の金谷遺跡

1）　位置

遺跡は飯田市伊賀良地方1274～1282番地にある。（５図３、写二十九）。三壺渕遺跡とともに、南沢川扇状地の北東端に位置する。小さな流れによって形成された台地先端部が遺跡となり、水田、畑となっている。標高 538～ 539m、まわりの凹地より１m高い。

中央道は台地先端部を横切っている。グリットはセンター 101＋40をＡＡとし、ＢＫまで、40～61までに設定した。

遺跡の地層は耕土、褐色土、砂礫土層となり、遺構は砂礫土層をほりこんでいる。

2）　遺構と遺物

遺構は台地に密集して、住居址、柱穴群、土壙などが検出され、住居址は弥生時代、古墳時代、平安時代、中世のものと各時代にわたるものである。

ア　住居址

ア）１号住居址（52図、98図、99図、124図、写六十九）

遺構　用地内南はしの、台地南縁にある。3.90×4.35m の長方形の竪穴住居址で、主軸方向N54°Wをはかる。壁高10cmと浅い。床面は中央部に良好な部分があるが、全体に軟弱である。柱穴は４主柱であるが中世と思われる柱穴も入って、穴が多く見える。東南壁の南よりに貯蔵穴がある。炉は北西主柱間の中央に径50cmの円形にほりくぼめ、南よりに胴下部を欠く甕をうめている。それに接して南に石をおき枕石とする。

遺物　土器、石器がでている。土器（99図）は高坏と甕（98図15・16・99図１～３）で、器形、文様から見て、中島式土器前半（座光寺原式後半とも考えたが）である。石器は打石斧（124図８）、石庖丁、磨石（９）、敲打器（10・11）、台石（12）がある。

イ）２号住居址（53図、99図、写六十九）

遺構　用地内東端の台地先端部にあって、これのみ孤立している。4.50×5.00m の長方形竪穴住居址で主軸方向N77°Wをはかる。壁、カマドは水田造成時にけずられて、床面とカマド基底部を検出した。床はカマドから中央にかけて貼り床がありかたいが、他は軟弱である。柱穴はカマド北側の以外は確認できな

かった。カマドは東壁中央部にあって、粘土カマドである。火床中央に支脚用の石を抜いたと思われる小ピットがある。カマド構築の際、床面レベルより下にまでほりこんでいる。

遺物　土師器、須恵器が、カマド内より出ている。土師器（99図）は坏（6）と甕が、須恵器は蓋（4・5）、坏（7）がでており、平安時代のものである。

ウ）3号住居址（53図、98図、99図、124図、写七十、七十一）

遺構　台地先端、南よりにあって、1・5号住居址にはさまれる。3.90×3.70mの南隅が丸味をもつ方形竪穴住居址で、主軸方向N38°E(一番最初）をはかる。壁の状態はよくない。床面は中央部が貼り床でかたくてよい。柱穴は4主柱穴である。北西壁中央に貯蔵穴と思われるピットがある。また4隅にもピットが見られる。炉は3回移動しており、炉1→炉2→炉3となる。炉1は北東主柱穴によって、中間に円形にほりこんでいる。内部より甕片あり。炉2は90°西へ移動し、北西主柱間中央に床面を円形にほりくぼめ炉底に甕片が見られる。炉3は180°東にふれて、東南主柱穴間中央を径30×40cmの円形にほりくぼめ、中央に底部を欠く甕をうめ、西に石をおいて枕石としている。

遺物　土器と石器が出土し、土器（98図、99図）は甕（98図17、99図9）、台付甕（10）、高坏（8）がある。9は炉3にうめられていたものである。器形、文様からと、高坏の器形から見て、中島式土器前半のものである。石器は磨石（124図13）がでている。

エ）4号住居址（53図、写七十二）

遺構　1号住居址と3号住居址にはさまれ、6号住居址の西にある。水田造成でけずられており、東南壁は不明、3.20m短辺とする長方形の竪穴住居址で、壁と床面の状態はよくない。主軸方向N44°Wをはかる。柱穴は4柱穴以上と考えられる。西隅にピットのある張り出しをもつ。

遺物　中世陶器片が出ている。

オ）5号住居址（54図、98図、99図、124図）

遺構　3号住居址の東にあって、台地先端部になる。6号住居址に東壁をきられ、柱穴群Ⅰが上にのっている。5.80×6.15mの方形竪穴住居址で、N33°Eをはかる。壁は直にほられ、30～40cmある。床面は全体に軟弱である。柱穴は4主柱穴で、南側に2つの支柱穴がある。南隅に貯蔵穴と思われるピットがある。炉は北側主柱穴間中央の床面を円形にほりくぼめてある。この住居址は他の住居址（同時期の1号・3号住居址）とちがって、住居内埋土は粘土であった。これは水がよどむような浸水があったためと思う。

遺物　土器、石器が少量でている。土器は壺（98図18）、甕（99図11）があり、中島式土器である。石器は石鏃（124図14）がでている。

カ）6号住居址（54図、写七十二）

遺構　台地中央部先端にあって、柱穴群Ⅰの東南にある。用地界のため東南壁を検出できなかった。南北6.45mの方形竪穴住居址で、主軸方向N50°Wをはかる。壁はなだらかに傾斜して床面になっている。北西壁中央に方形の張り出しがあって、石と粘土が入っている。住居内はほぼ南北に間仕切の土手があって

東室と西室にわかれ、東室は全部検出できなかったが、中央に間をおいて東に走る土手が２列ある。西室は、張り出し部北側に、東西に礫を並べて土手をつくり、間仕切りとしている。その北側の中には粘土塊が見られた。柱穴は壁縁と壁外に囲むようにある。

遺物　青磁碗、白磁碗、志野皿、山茶碗、片口鉢の破片がでている。

キ）７号住居址（55図、99図、128図、写七十三、七十六、七十八）

遺構　用地内の西部にあって、台地中央部にある。９・12号住居址の北にあって、13号住居址と並ぶ。この住居址の上に８号住居址がのる。また後世（中世か）の溝が住居内を流れている。4.70×4.60m の隅丸方形竪穴住居址で、主軸方向N38°Eをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、30～40cmある。床面は主柱穴内側がかたくて良好で、壁によった部分は軟弱である。柱穴は4主柱穴であるが北側のそれは検出できない。炉南側に浅い柱穴が３こ並んでいる。住居内中央部にも浅くて比較的大きなほりこみがある。炉は南側主柱穴間中央の床面を方形にほりくぼめ、中央に甕をうめ、北に石をおいて枕石とする。壁外の施設としてこの住居址につくものと思われる周溝が、南と北は長く、東と西は短かくあり、南のそれには小さいピットもあって、屋根との関係、壁などが考えられる。さらに、９・12号住居址との間には柱穴列もある。

遺物　土器、土製品がある。土器は壺、甕（99図12）、高坏があって、12は炉にうめられていた。土製品としては、甕底部を再加工した紡錘車（128図９）がある。中島式土器である。

ク）８号住居址（55図、99図、128図、写七十三）

遺構　台地中央部にあって、11号住居址の東になる。７号住居址の上にのっており、水田造成時にけずられて、カマドと床面の一部を検出したのみである。プラン、大きさは不明。主軸方向N57°Wをはかる。カマドの前に一部貼り床が見られた。カマドは西壁にあり、粘土カマドである。袖の中より甕片があって土器片を心にしていたと思われる。火床中央に支脚石のぬかれた痕跡がある。

遺物　土器師の須恵器、土製品で少量である。土師器は坏（99図13）、甕、須恵器は坏がある。土製品は中央に一孔をもつ半球状の紡錘車（128図10）がある。平安時代のものである。

ケ）９号住居址（56図、98図、99図、124図、写七十四）

遺跡　用地内西端にあって、台地南縁にある。12号住居址と並んで 170m 西にはなれている。6.60×6.40m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N22°Eをはかる。壁高55cmでほぼ直にほりこまれた。当地方としては最大級（この時期）のものである。床面は全体に軟弱である。北西隅は湧水のため調査できなかった。柱穴は４主柱穴である。炉は確認されなかったが、北側主柱間中央に浅いピットがある。焼土、埋甕はないので、炉と断定できない。北壁東よりを切って、土拡16がある。この住居がうまってスリ鉢状の凹みができた時点での中央凹地から、土器片と共に剣形石製摸造品の大きなのがでた。

遺物　土器、石器があり、土器は壺（98図19～23、99図15）と甕（98図14）がある。器形、文様から見て中島式土器である。石器は磨石斧（蛤刃か？）(124図15）もでている。

コ）10号住居址（55図、100図、101図、写七十四、七十五）

遺構　用地内西部、台地南縁にあって、12号住居址にわずか北にずれてのっている。5.40×4.90mの方形の竪穴住居址で、角がきちんとしている。壁はほぼ直にほりこまれ、25cmの高さある。床面は貼り床でかたい。柱穴は4主柱であり、北西にも支柱穴かと思う柱穴がいくつかある。貯蔵穴は南壁よりに、東側と、西側にあって、東のそれからは小形丸底土器が、西側のそれからは小形甕が出土した。また床中央西よりに浅い凹みがあり、焼けていないが、弥生時代の炉に似る。ここを中心に西壁ぞいに高坏をはじめとする遺物が集中してある。炉は中央よりやや北西によってあり、床面はほとんど平らかであり、よく焼けている。この住居址は火災にあい、建築材が中央に向って走っている。この木炭を学習院大学木越邦彦教授に測定してもらったところ、C—14（Gak—4209）の数値AD 400±80とでている。

遺物　火災のためか、遺物の出土は多く、すべて土師器である。石器もでている。土師器は坩(2個体)（100図1・2）、壺（2個体)(16・17)、高坏（13個体以上)(3～15)、鉢（1個体)、小形甕（2個体)(18・19)、甕（3個体以上)(101図1～3）でていて、とくに高坏が多い。これらのセット、器形からみて、和泉式土器である。石器は砥石、磨石がでている。器種不明であるが鉄片もある。

サ）11号住居址（57図、101図、写七十六）

遺構　用地内中央部西はずれにある。3.75×3.35mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N67°Wをはかる。壁の状態、床面の状態はよくない。柱穴にしては大きいが、直径90cmの円形ピットがコーナーにあり、南コーナーだけない。カマドは西壁の中央より西によってあり、石組粘土カマドである。北側の袖は破壊されている。火床には支脚の石が立つ。カマドの中と、まわりに遺物がでる。住居内出土の木炭で測定してもらったところ、C—14（Gak—4211）でAD 890±85の数値がでている。

遺物　土師器、須恵器、灰釉陶器があり、土師器は坏（101図11）と甕（4）、須恵器は坏、蓋、甕があり、灰釉陶器坏片がでている。平安時代のものである。

シ）12号住居址（57図、101図、102図、124図、写七十六、七十七）

遺構　用地内西部にあって、9号住居址の東に並ぶ。10号住居址が20cmの高さでのっている。4.85×5.30mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N26°Eをはかる。壁は47cmと高く、ほぼ直である。床面は平らで硬く良好である。主柱穴は4主柱穴で、東壁南よりと、西壁中央に貯蔵穴がある。炉は北側主柱穴間中央の床面を円形にほりくぼめて、中に甕をうめている。2回つくりなおしたため、古い埋甕が北側にこわれてある。枕石はない。

遺物　この時期としては多くの土器が出土した。土器は壺（102図1・2）、甕（101図6～10）、高坏（5）がでており、10は炉の古い方の埋甕、6は新しい方の埋甕である。器形・文様から見て、中島式土器の古い方である。石器は有肩扇状石器刃部（124図17）と凹石（16）がでている。

ス）13号住居址（58図）

遺構　7号住居址の西におちこみを確認したが、畑地の石垣があって調査できなかった。出土土器片から見て弥生時代の住居址である。

イ　柱穴群

ア）柱穴群Ⅰ（57図、写七十八）

柱穴群Ⅰは用地内東側中央部にあって、５号住居址の上にのり、６号住居址の西にある。柱穴は通りがよく、２間×４間の、8.30×4.10mの大きさで、長軸方向N42°Eをはかる。遺物はない。

イ）柱穴群Ⅱ（58図、写七十六）

柱穴群Ⅱは用地内西部にあって、９・12号住居址と７・13号住居址の間を、密に「し」字の字形に並んであり、住居群を区切柵をおもわせる。

ウ　溝状遺構

溝１は７号住居址を切っており、西から流れてきたのが、７号住居址東外で北にまがっている。巾 1.5m、深さ 1.1mのＶ字溝で、２号住居址と５号住居址の間にも溝を確認しているので、それにつながるものと思う。

エ　土壙

土壙は南側に集中し、全部で16検出している。南部のそれは湧水がはげしく、土壙内部を充分検出できないものもあった。縄文時代、平安時代、そして中世のものがあり、１・２・11はいわゆるロームマウンドの土壙で、ロームがないので、砂マウンドとなっている。11より縄文時代前期末の土器片がでており、これらはその頃のものと思う。土壙５は中世の井戸と思われる。土壙８は７の上にのって東にあり、この２つは用地内北東はずれにある。８には焼土、粘土が見られ、石もあって、一見カマドを思わせる。土師器甕、須恵器坏（102図５）、蓋（３・４）がでている。土壙については表を参照してほしい。

オ　その他の遺物

遺構外から出土遺物は縄文時代から中世までの各時代にわたっている。土器では、縄文時代前期の諸磯Ｃ式土器、前期末土器（98図30～40）、中期加曽利Ｅ式土器、弥生時代後期土器、土師器は和泉式と国分式が、須恵器はⅣ様式の壺、坏（102図６）、蓋が灰釉陶器の碗、中世陶器は山茶碗、古瀬戸、常滑、天目、青磁、白磁などがでている。石器は石鏃（124図18・19）、打石斧（20・21）、磨石斧（22）、スクレイパー（23）、石鏃（24）がある。石製品としては大形の剣形石製摸造品が９号住居址の覆土から出土している（128図11、写六十五）。　鉄製品は鋤先など、時期不明のもの、器種不明のものがある。中国銭（131図18・19）もでている。かわったものとしては、中世陶器片でつくった土製円板（129図19）もでている。

3） まとめ

調査の結果、住居址、柱穴群、土壙などの遺構があった。縄文時代の住居址は検出できなかったが、土壙があり、土器もあることから当然、集落の存在が考えられ、用地北西の台地中央部にあると考える。弥生時代、古墳時代、平安時代そして中世と４時代の住居址は集中しており、台地南縁の先端部を選んでいる。このあり方からみても、北から西にかけて広がっていることがわかる。弥生時代住居址は７軒検出し１・３・５と、９・12と、13・７の３群があり、後者２群は間に柵をつくっていたらしい。また７は壁外に周溝をもち注目される。９号住居址の大きいことと、12号住居址の土器セットは好資料である。座光寺原式土器から中島式土器への流れの中で、セットを中心に再検討するものを与えている。古墳時代和泉期の住居址は当地方では数少ない。しかも、そのC―14が測定されたことは、この土器群セットとともに、貴重な資料となる。高坏の出土が多く、祭祀的な性格を思わせ、となりの９号住居址覆土出土の石製摸造品とともに注意される。平安時代の住居址は３軒で、点在している。灰釉陶器が少ないことから見て、平安時代でも前半にいく。中世の住居址は今回の調査でいくつも検出されており、それが全て伊賀良地区であり、同一レベル（等高線的に）で、近接していることから、この一帯の広がりとまとまりの中で理解されるものと思われる。柱穴群Ｉも同時期と考える。（松永）

16 大門原B遺跡

1） 位置

遺跡は飯田市座光寺原81～ 183番地にあって、大門原遺跡群の一つである。扇状台地の上段と下段への移行する傾斜地にあって、昭和45年に中央道用地内は発堀調査されている。詳細は昭和45年度飯田地区その１の報告書を参照してほしい。

その後、この地にパーキングエリヤの設置がきまり、用地外に広がることがはっきりし、その部分の調査を47年度に行なうことになった。当初の予定では用地追加買収も早くすむと思ったが、交渉が進展せずやきもきさせた。調印は48年３月に入ってなされ、契約期限末近になった３月中旬に調査をする。

2） 調査

45年度の調査では、用地内南側傾斜地に弥生時代後期の住居址が５軒検出され、それより北によって縄文時代中期の土壙群が検出された。今回はそれらの遺構があった傾斜地南東にトレンチを入れる。その結果、遺構は検出できなかった。遺物としては、土器、石器を得ており、縄文時代中期加曽利E式土器、弥生時代後期座光寺原式土器、石器は打石斧、有肩扇状形石器などがあった。前回の調査時と変りはない。

（佐藤）

あ　と　が　き

飯田市地内その２　の発掘調査は４月10日から始まり、７月22日に一まず終った。その後、かぶき畑遺跡と大門原Ｂ遺跡の調査をいく日かした。暖かい季節に、後半の梅雨もあまりやられなく、16遺跡の調査を順調にすんだのも、この地内の調査が45年度につづいて２回目であり、多勢参加してくれた調査作業員の中には経験者が多かったこと、地元教育委員会の協力もあってのことである。今年は飯田市の他に高森町と松川町の調査もあって、それぞれともに多大の成果を得ており、その整理・まとめも短期間の中で大変な仕事であった。ここに立派な報告書としてまとめることができたのは、関係機関、関係者のご協力、ご支援のおかげと、調査団全員の努力の成果であり、団長として厚く感謝したい。

本年の調査は、各地区とも多くの成果を得ており、この飯田地内も予期以上であった。

旧石器時代については、石子原遺跡が特筆される。まさかと思っていた場所に、旧石器が発見され、その重要さに調査団はとまどった。これについては、東北大学芹沢長介教授の指導を受けることができ、飯田市地内その３　として、立派な報告書をまとめることができた。それを是非見てもらいたい。

縄文時代については、石子原遺跡の早期押型文土器と土壙群、小垣外遺跡の前期末住居址と土壙群、中期では、柳田・上の平東部・酒屋前・滝沢井尻・辻垣外・小垣外の六遺跡で、加曽利Ｅ式土器の住居址を検出した。特殊なものとして、石子原遺跡の配石と上の平東部遺跡の塑像が注意される。後期としては小垣外遺跡の資料がまとまっている。

弥生時代では、大東・酒屋前・滝沢井尻・上の金谷遺跡で住居址が検出され、資料も豊かさを増し、後期文化を解明する手がかりを与えた。石子原・滝沢井尻両遺跡で方形周溝墓が発見され、とくに滝沢井尻遺跡の鉄剣二口は特記に価する。

古墳時代では、石子原古墳のあり方 ――方形周溝墓とのつながり、いくつもある土壙――が、当地方の円墳を再検討させるきっかけとなった。住居址は三壺渕・上の金谷両遺跡で１軒ずつ検出した。いずれも土師器のセットは好資料である。

平安時代のは、六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺渕・上の金谷遺跡で住居址が検出され、小垣外遺跡12号住居址では緑釉陶器、墨書のある土器がでて注目される。育良駅との関連もこの附近にありそうだ。

中世の住居址、柱穴（建造物）は注目をしなければいけない。中世の竪穴住居址は本年当地方各地で注意され検出されている。ここでは酒屋前遺跡を中心に相当に大規模な建造物と、集落群が考えられ、伊賀良の庄の関連で理解される。また酒屋前遺跡の精練遺構は新知見である。諸学兄の指導を得たい。（大沢）

第3表　飯田市地区内 その2　遺跡別出土遺物一覧表

遺跡＼遺物	土器陶器 縄文時代 早	前	中	後	晩	弥生時代 中	後	土師器 古	新	須恵器 古	新	灰釉	青磁	中世	土製品	石器 ナイフ型器	刃器状剥片	有舌尖頭器	打石斧	磨石斧	石鏃	石錐	石匙	石皿	石鞭	石錘	凹石	敲打	有肩扇状	石庖丁	横刃	砥石	剥片石器	磨石敲石	その他	鉄製品	備考
阿智村駒場 かぶき畑																																						なし
山本 柳田			○											○	円板 1				65	4		14		1		4		3			5	1		1				
山田																			2			1																
石子原	○		○	○									○	○					7	2		6			1	1	1				11	1	1	1	特磨石 3 ガラス丸玉 2	古銭、キセル、火打ち金具	旧石器126
石子原古墳								○		○																									管玉 2	直刀 1 刀子 1 鉄鏃 11	朱あり
伊賀良 ようじ原																																						なし
上の平東部			○						○		○			○	塑像 1				25			6	2					1			2		2					
寺山			○											○					1														2		円板 1			
六反田			○	○					○		○	○		○					2			1									1	1						
大東				○	○		○						○	○(近)		1			23			2						1	2		5		3	1		古銭	
酒屋前		○	○	○	○		○						○	○	円板 6 るつぼ 1 フイゴ 2 鋳型 1				133	13	2	11	1	3		5	5	5		2	32	2	5	3		釘、鉄刀子、キセル、古銭	鉄滓
滝沢井尻			○	○	○		○		○			○		○					32	2	1	6(磨3)								3(磨)	7	1	2	1		剣 1 小型鉄剣 1	
小垣外 辻垣外	○	○	○	○			○		○		○	○	○	○	円板 7 土偶 4 耳栓 1 舟形 1				118	9		16	4		1	7	5	4			18	3	7	1	ドリル 4 紡錘車 1		
三壺淵			○	○			○	○	○		○	○		○	スタンプ状 1				7	1		1											2					
上の金谷			○	○			○	○	○		○		○	○	紡錘車 1				8	1	1	1						1		1		1	1	1	蛤刃 1 剣形模造品 1	古銭	
座光寺 大門原B			○																																			

第2表　飯田市地区内 その2　遺構一覧表

時代／遺跡	旧石器時代	縄文時代 草創	縄文時代 早前	縄文時代 中	縄文時代 後	縄文時代 晩	弥生時代 前	弥生時代 中	弥生時代 後	古墳時代 前	古墳時代 中	古墳時代 後	平安時代	鎌倉・室町・江戸	時代不詳	備考
阿智村駒場かぶき畑																なし
山本柳田				住居址 2 土壙 10											溝状遺構1	
山田																なし
石子原	礫群 2		土壙 22	ローム マウンド 3 石組遺構 1					方形周溝墓 3 墓壙 2							
石子原古墳											墓壙 4					
伊賀良ようじ原																なし
上の平東部				住居址 2												
寺山																なし
六反田				ローム マウンド 1 土壙 3									住居址 4	住居址 1	土壙 3 竪穴遺構8	
大東									住居址 2					住居址 2 土壙 3	土壙 61	
酒屋前				住居址 3 土壙 60 ローム マウンド 1	住居址 1 土壙 4				住居址 8					住居址 4 土壙 13 柱穴群 2 精錬状遺構1 竪穴遺構2	土壙 30	
滝沢井尻			土壙 1	住居址 3 土壙 6 ローム マウンド 2	土壙 2				住居址 1 方形周溝墓 1				住居址 2	住居址 1 土壙 3	柱穴址 1 土壙 8 溝状遺構3	
小垣外 辻垣外			住居址 4 土壙 18	住居址 4 柱穴群 2 土壙 19 ローム マウンド 7	土器集中箇処 2 焼土群 1 土壙 13 方形石囲 1								住居址 2	住居址 12 柱穴群 1 土壙 6	配石 1 土壙 48 溝状遺構4	
三壺淵				土壙 1							住居址 1		住居址 2			
上の金谷			土壙 2	ローム マウンド 1					住居址 6 柱穴群 1	住居址11			住居址 3 土壙 6	住居址 2 柱穴群 1 土壙 1	土壙 6 溝状遺構1	
座光寺大門原B																なし

第4表　飯田市地区内 その2　住居址一覧表（No.1）

（註：H ---- 土師器、S ---- 須恵器、K ---- 灰釉陶器）

遺跡名		柳田		上の平東部		六反田					大東				酒屋前					
遺構		1号	2号	1号	2号	1号	2号	3号	4号	5号	1号	2号	3号	4号	1号	2号	3号	4号	5号	6号
時期		縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	平安	平安	平安	平安	中世	弥生後期	弥生後期	中世	中世	弥生後期	中世	中世	中世	弥生後期	中世
遺構	プラン	5.1×5.3円形	5.0×5.18円形	5.8×5.3円形	5.7×6.15不円整形	3.7×3.9方形	4.8×4.3方形	3.5×4.3長方形	?×5.35方形	3.8×1.65長方形	6.5×5.2長方形	5.55×4.35隅方丸形	3.3×2.6長方形	3.25×3.15方形	4.0×3.4長方形	2.8×4.2隅長方丸形	2.2×2.1隅方丸形	2.4×2.1隅方丸形	4.5×3.6隅方丸形	4.0×4.8隅方丸形
遺構	柱穴	4	4	3	5	1	4		3		4	4			4		4	4	4	
遺構	かまど	石囲炉	石囲炉	円形石囲炉	石囲炉（石抜き）	石組粘土竈（北壁東寄り）	石組粘土竈（西壁中央）	石組粘土竈（西壁中央）	石組粘土竈（西壁中央）	無	地床炉	地床炉（枕石有り）	無	無	埋甕炉（枕石有り）	無		無	埋甕炉	無
遺構	主軸	N28°W	N3°W	N43°W	N14°W	N23°E	N64°W	N80°W	N56°W	N75°W	N81°E	N42°E	N33°W	N8°W	N56°W	N29°E	N33°E	N63°W	N81°W	N30°E
遺構	備考	埋甕あり	入口部ピット	2号住を埋める	1号住の台がある	貯蔵穴あり	貯蔵穴あり	貯蔵穴あり		入口部貼り床あり	貯蔵穴あり	貯蔵穴あり	北壁に張出し	中央集石		柱穴列集石あり	粘土が南壁に多量にあり	粘土が西壁にあり	貯蔵穴あり	柱穴列
遺物 土器	完形土器				1	5		1	4											
遺物 土器	図上復元可能の土器	1	1		1	6	6	7	3		1	3			3				4	
遺物 土器	土器の内訳	深鉢	台付		深鉢台付・小形壺	H甕甕・坏・坏 S甕甕・坏 K塊	H甕甕・坏 S甕・坏 K壺・塊	H甕甕・坏 S甕甕・坏 K壺・塊	H甕 S甕・坏・壺皿 K壺・塊		壺・甕	壺・甕・高坏			壺・甕				壺・甕台付・器台	
遺物 土器	土製品				塑像1															
遺物 石器	打石斧	27	4		11						1	4			2				1	
遺物 石器	磨石斧	3	1																	
遺物 石器	敲打器	1	1		1						1				1					
遺物 石器	石錘		2																	
遺物 石器	石鏃	6	6		2															
遺物 石器	石匙				2															
遺物 石器	石皿																			
遺物 石器	有肩扇状											1								
遺物 石器	石鉾丁														(磨)1					
遺物 石器	横刃	2			1							2			1					
遺物 石器	その他	磨石1	ト石1		不定形1						磨石1									
遺物	鉄製品																			
備考		加E	加E	加E	加E						中島	中島			座光寺原				座光寺原	

住居址一覧表（No.2）

遺跡名		酒屋前												滝沢井尻						
遺構		7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号	14号	15号	16号	柱穴 1	柱穴 2	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号
時期		弥生 後期	縄文 中期	弥生 後期	弥生 後期	縄文 中期	弥生 後期	弥生 後期	弥生 後期	縄文 中期	縄文 後期	中世	中世	弥生 後期	縄文 中期	縄文 中期	平安	平安	中世	縄文 中期
遺構	プラン	5.1×5.6 隅丸方形	径5.3 円形	4.2×4.55 隅丸方形	5.0×4.0 長方形	4.5×4.0 円形	4.6×4.85 隅丸方形	4.34×4.55 方形	5.5×4.75 隅丸長方形	径4.6 円形	径4.5 円形			3.9×4.9 隅丸方形	径5.9 円形	径4.7 円形	3.8×4.1 隅丸方形	4.6×5.4 隅丸長方形	5.0×2.6 長方形	径4.9 円形
	柱穴	4	4	4	無	4	4	4	4	4	9			4	7	4	4			6
	かまど	埋甕炉（枕石あり）	石囲炉（石抜き）	埋甕炉（枕石あり）	無	石囲炉（石抜き）	埋甕炉	埋甕炉（枕石あり）	地床炉（枕石あり）	石囲炉（石抜き）	石囲炉（石抜き）			地床炉（枕石あり）	石囲炉	石囲炉（石抜き）	石組粘土竈（東壁南）	石組粘土竈（東壁南）	無	石囲炉（石抜き）
	主軸	N15°W	N61°W	N81°E		N1°E	N58°W	N28°E	N71°W	N57°W	?			N11°E	N34°W	N86°W	N85°W	N62°W	N64°W	N45°W
	備考	貯蔵穴あり 火災	埋甕あり		中止？ プランをきめて 未完成の住居址	埋甕あり	貯蔵穴あり	貯蔵穴あり		不明 破壊のため東側 周溝あり	検出 炉址と柱穴のみ	係あるか？ 3・4号住と関 配列に規則あり	係あるか？ 2・6号住と関 配列に規則あり	る 7号住居址を切	入口部ピットあり 貯蔵穴あり	入口部ピットあり 周溝あり	貯蔵穴あり 火災 5号住居を切る	貯蔵穴あり れる 4号住居に切ら	集石あり	られる 1号住居址に切
遺物 土器	完形土器	9						1								1	9			1
	図上復元可能の土器	4	1	1		2	1	1		2						1	2			2
	土器の内訳	甕・浅鉢・高杯 台付・台・坏	深鉢	壺・甕・鉢 器台	壺・甕	深鉢・甕	壺・甕	壺・甕	壺・甕	深鉢	深鉢					深鉢	H・坏 K皿・坏			深鉢
	土製品		円板1																	
石器	打石斧		9			9		1		1	12				15	3				2
	磨石斧		3												1	1				
	敲打器		2					1												
	石錘										1									
	石鏃					1								3（磨製）						1
	石匙																			
	石皿																			
	有肩扇状																			
	石庖丁			(磨)1										3（磨製）						
	横刃		8	1		2					2				1	3				
	その他	台石1	タタキ石1			スクレイパー1		ト石1	ト石1							スクレイパー1				
	鉄製品						鉄鏃1 鉄製品1													
備考		座光寺原	加E	座光寺原	座光寺原	加E	座光寺原	座光寺原	座光寺原	加E	堀之内			座光寺原	加E	加E	墨書土器1点あり			加E

住居址一覧表 (No.3)

遺跡名		滝沢井尻	小垣外辻垣外																	
遺構		柱穴 1	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号	14号	15号	16号	17号	18号
時期		?	中世	縄文前期	中世	中世	縄文前期	縄文前期	縄文中期	中世	縄文中期	中世	平安	平安	中世	中世	中世	中世	中世	縄文中期
遺構	プラン		2.70×3.45方形	4.7×4.4円形	3.40×4.25長方形	1.5×1.7長方形不整	径4.0円形	4.85×4.95円形	4.4×4.6円不整形	3.0×3.0方隅丸形	4.25×4.45円形	3.6×2.0台不整形	4.85×4.40方形	5.25×5.60長方形	2.12×4.80長方形	4.5×3.8L字形	2.2×2.3方形	不明	6.1×3.7長方形	5.30×5.0円形
遺構	柱穴		10	6	2	6	6	5	4	有	4	有	有	4	2(内部)	5	3		6	10
遺構	かまど		無	埋甕炉	無	無	地床炉	不明	石囲炉(石抜き)	無	石囲炉(石抜き)	無	石組粘土竈(北東隅)	石組粘土竈(東隅)	無	無	無	無	無	石囲炉(石抜き)
遺構	主軸		N62°W		N66°W	N11°E			N62°E	N2°W	N13°E	N90°W	N74°W	N77°W	N20°W	N50°E	N60°E	N23°W	N17°E	N50°W
遺構	備考	も古い6号住居址より	柱穴列北西部深い		柱穴列方形張出し西壁中央北側に	柱穴列し北壁中央に張出			柱穴列張出し周溝一部分	柱穴列張出し南壁中央西側に		柱穴列し西壁北隅に張出	あり周溝・貯蔵穴	あり周溝・貯蔵穴	柱穴列	柱穴列北側に入口	集石あり北側に入口	わずかに凹む北側に入口	柱穴列一部は東側に間仕切り南壁に張出し	入口部にピット周構あり
遺物 土器	完形土器												7	11						
遺物 土器	図上復元可能の土器			1					1		1		3	6						1
遺物 土器	土器の内訳			壺					深鉢		深鉢		H甕・坏 S坏 K壺・坏	H甕・塊 S壺・蓋 K坏・皿						深鉢・台付
遺物 土器	土製品							円板2 円形土製品1			円板1									
遺物 石器	打石斧			2			1		16		20									10
遺物 石器	磨石斧			1							1									2
遺物 石器	敲打器								2		2		1							
遺物 石器	石錘			3							1									
遺物 石器	石鏃			1			3		3		6									
遺物 石器	石匙								1		1									1
遺物 石器	石皿																			
遺物 石器	有肩扇状																			
遺物 石器	石庖丁																			
遺物 石器	横刃							1	4		5									1
遺物 石器	その他			凹石2 スクレイパー2					スクレイパー2		スクレイパー1 ト石1		ト石1	ト石1 磨石1			ト石1		紡錘車1	
遺物	鉄製品																			
備考				十三坊台			十三坊台	十三坊台	加E		加E		墨書土器5点あり							加E

住居址一覧表 (No. 4)

遺跡名	小垣外・辻垣外							三壺淵			上の金谷								
遺構	19号	20号	21号	22号	柱穴址1	柱穴址2	柱穴址3	1号	2号	3号	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号
時期	中世	縄文中期	中世	縄文前期	縄文中期	縄文中期	中世	古墳	平安	平安	弥生後期	平安	弥生後期	中世	弥生後期	中世	弥生後期	平安	弥生後期
プラン	2.5×2.7 不整方形	5.5×5.1 円形	4.25×4.6 不整方形	4.5×4.3 不整円形	円形	円形	方形	4.9×4.8 方形	3.0×3.4 方形	4.1×3.5 方形	3.9×4.35 方形	4.5×5.0 方形	3.9×3.7 隅丸方形	3.2×? 長方形	5.8×6.15 方形	6.45×? 長方形	4.7×4.6 不整方形	?	6.6×6.4 隅丸方形
柱穴		6		4	9						4		4	3	4	11	4		4
炉かまど	無	石囲炉（石抜き）	無	地床炉				石組粘土竈（西壁中央）	石組粘土竈（北壁中央）	石組粘土竈	埋甕炉（枕石あり）	石組粘土竈（東壁）	埋甕炉（枕石あり）	無	地床炉?	無	埋甕炉	粘土竈	地床炉?
主軸	N27°E	N62°W	N21°E	N30°E				N78°E	N18°W	N78°W	N54°W	N77°W	N38°E	N44°W	N33°E	N50°W	N38°E	N57°W	N22°E
備考	壁に段あり 70cmの深さで	周溝は部分的 埋甕あり						周溝あり				貼り床	炉址は3回移動している 貯蔵穴あり		貯蔵穴あり	間仕切りあり	外に溝あり 間仕切りあり	攪乱のため不明	
遺物 土器 完形土器								5	2			2	1						
遺物 土器 図上復元可能の土器		1		1				6	3	2	3	2	2		1		1	1	2
遺物 土器 土器の内訳		深鉢		深鉢				H坏・坩・甕・高坏 コシキ坏 S甕・坏・蓋	H甕 K壺・椀	H甕	甕・高坏	H甕 S坏・蓋・壺	甕・高坏	陶器片	壺・甕	青磁椀・山茶椀	甕・壺・高坏	H甕・坏 S坏	甕・壺
遺物 土器 土製品								スタンプ状1									紡錘車1	紡錘車1	
遺物 石器 打石斧		12		3							1								
遺物 石器 磨石斧		1																	
遺物 石器 敲打器											2								
遺物 石器 石錘																			
遺物 石器 石鏃		3		4															
遺物 石器 石匙																			
遺物 石器 石皿																			
遺物 石器 有肩扇状																			
遺物 石器 石庖丁											1								
遺物 石器 横刃		2																	
遺物 石器 その他		分銅形1		スクレイパー2						ト石1	磨石1		磨石1						蛤刃1
遺物 鉄製品																釘			
備考		加E		十三坊台				土師皿期			中島		中島		中島		中島		中島

住居址一覧表 (No. 5)

遺跡名			上の金谷			
遺構			10号	11号	12号	柱穴1
時期			古墳前期	平安	弥生後期	中世
遺構	プラン		5.4×4.9方形	3.75×3.35隅丸方形	4.85×5.3方形	2間×4間
	柱穴		4		4	
	炉かまど		地床炉	石組粘土竈	埋甕炉	
	主軸			N61°W	N26°E	M42°E
	備考		火災貯蔵穴あり	火災貯蔵穴あり		
遺物	土器	完形土器	7		2	
		図上復元可能の土器	15	1	7	
		土器の内訳	甕・壺・坩鉢・高坏	HS甕・坏蓋	甕・蓋・高坏	
	石器	土製品				
		打石斧				
		磨石斧				
		敲打器				
		石錘				
		石鏃				
		石匙				
		石皿				
		有肩扇状			1	
		石庖丁				
		横刃				
		その他	磨石1 ト石1		凹石1	
	鉄製品		鉄片1			
備考			土師Ⅱ期		中島	

第5表 飯田市地区その2 方形周溝墓・古墳一覧表

遺跡名	遺構名(号)		時期	立地	プラン	規模	陸橋	埋葬施設	人骨有無	副葬品	溝中出土遺物	備考
伊賀良 滝沢井尻	方形周溝墓		弥生後期 (座光寺原?)	扇状地 扇央北端部	隅丸方形 主軸方向 N68°W	南北 11.3m 東西 11.2m 溝幅 0.4～1.3m 溝深 −34～−63cm	東側中央部 幅 1.6m	土壙墓 1基 西寄り中央部 隅丸長方形 南北 1.1m 東西 2.3m 深さ 30cm N68°W	無	鉄剣 1振 小形鉄剣 1振	無	
山本 石子原	方形周溝墓	1号	弥生後期	台地(丘陵) 先端部	隅丸方形 主軸方向 N63°W	南北 14m 東西 12.4m 溝幅 0.9～2m 溝深 −40～−82cm	東南隅 幅 1.7m	1号土壙墓 隅丸長方形 南北1.26m 東西 2.7m 深さ 40cm N65°W	無	ガラス玉 2点	無 (押型文土器片)	
								2号土壙墓 隅丸長方形 南北 0.8m 東西1.72m 深さ 34cm N67°W	無	無		
		2号	弥生後期	台地(丘陵) 先端部	隅丸方形 主軸方向 N80°W	南北 9.8m 東西 10m 溝幅 0.72～1.3m 溝深 −47～−68cm	東南隅 幅 1.8m 北側隅 幅 1.1m	土壙墓 1基 ほぼ中央部 隅丸長方形 南北 1.2m 東西 3m 深さ 25cm N80°W	有 (骨片)	木炭多し	無	周溝の切合関係により1号方形周溝より新しい
		3号	弥生後期	台地(丘陵) 先端部	隅丸方形 主軸方向 N55°W	南北 16.8m 東西 ? 溝幅 1.0～2.0m 溝深 −50～−80cm	東側中央 幅 2m	1号土壙墓 隅丸長方形 南北1.6m 東西2.8m 深さ42cm N55°W	無	無	無	用地外のため西側部分調査不可能
								2号土壙墓 隅丸長方形 南北1.6m 東西2.6m 深さ22cm N45°W	無	無		
	古墳		6世紀初頭	台地(丘陵)	円墳	南北 19.2m 東西 18.6m 墳丘高 1.9m 周溝幅 2.6～3.2m		竪穴式 1号 石室 長方形 1.6×0.7m N45°E	無	無	須恵器(提瓶)第Ⅱ様式	主体部以外の封土内出土品 碧玉製管玉2点 鉄製品
								竪穴式 2号 土壙 長方形 2.2×0.85m N5°W	無	・須恵器(蓋付広口壺)第Ⅱ様式 ・土師器(小型甕)第Ⅲ期 ・刀子1振		
								竪穴式 3号 割竹型木棺 長方形 2.5×0.4m N42°E	無	・直刀 1振 ・鉄鏃 11本 ・朱		
								竪穴式 4号 土壙 ? N80°E	無	・朱		

土 壙 一 覧 表　　柳 田 遺 跡

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他
1	円形		84	98	56	上部に木炭塊と焼土			縄中
2	不整形		240	80		3ケの凹み			〃
3	不整台形		135	85	31				〃
4	不整長方形		160	310	19	床面よりやや浮いた状態で土器集中		打斧・打器	縄後
5	円形		86			溝に切られる		打斧・石鏃	縄中
6	不整楕円形		80	100	21			打斧	〃
7	楕円形		90	160		東側に円形ピット			縄中
8	不整形			80	50	2号住と切り合う			
9	不整楕円形		80	100	13				縄中
10	円形		90			1号住内にあり、上面張床			

石 子 原 遺 跡

1	円形			径 80	40	焼土あり　木炭あり			
2	〃			120	40	木炭あり			
3	〃			120	40	木炭あり	1		
4	〃			100	50				
5	〃			90	40			1	
6	〃			50	30	焼土あり　木炭あり			
7	〃			70	20		2		
8	〃			60	30		1		
9	〃			40	20				
10	〃			112	30		2	1	
11	〃			160	40	焼土　木炭あり	17	11	
12	大円形			不	30	焼土塊　木炭あり	28	33	
13	〃			170	40				
14	長円形			50	20				
15	円形			130	70				
16	〃			40	20				
17	〃			70	20				
18	〃			60	20				
19	〃			不	不	焼土あり			焼土有

土 壙 一 覧 表

石 子 原 遺 跡

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他
20	〃			70	60	焼土あり			焼土有
21	〃			120	80				
22	長楕円			30	20				
23	円 形			170	120	ロームマウンド			
24	円 形			100		ロームマウンド　縄文時代土壙			
25	楕円形			240	110	ロームマウンド			
ポ1	円 形			50	70	弥生時代土壙			
ポ2	長方形			130	80				
	配石1			200	100	内側に石棒立			

六 反 田 遺 跡

1	ロームマウンド		長 180	短 160	14	マウンド上に焼土			
2	ダ 円		長 128	短 80	32				
3	ダ 円		長 110	短 80	18				
4	長ダ円		長径 350	短径 155	84				
5	円 形	フラスコ		65	40	覆土黄褐色土		石スイ 石 斧	
6	円 形			85	85	内部に石・焼土・木炭あり	底部近くに土器底部	石 斧	
7	円 形		径80		55	底面は平ら、覆土褐色土	中期前半土器		

大 東 遺 跡

1	長 円		100	85	34	底平　ホリコミ……ローム　フク土……黒色土			
2	タマゴ	スリ鉢	105	140	35	石多入る　木炭多			
3	不整円		70	70	46				
4	長 方		100	150	41	底平　木炭片多			
5	円	フラスコ	90	90	80	底平 110			
6	円	フラスコ	110	110	70	〃 130			
7	円	フラスコ	90	90	54	〃 110			
8	円	フラスコ	100	100	60	〃 110			
9	円	フラスコ	90	90	60	〃 110	青磁片		中 世
10	円	フラスコ	80	80	50	〃 60　ド11を切る			
11	円		80	80	30	南半分をド10に切られる			

土 壙 一 覧 表

番号	プラン		大きさ			状態（上部，内部など）	加工遺物		
	平面	断面	東西cm	南北cm	深さcm		土器	石器	その他
12	円		80	80	18				
13	円		106	106	26	浅いピット有り			
14	円		90	90	40	壁はほとんど直			
15	円	フラスコ	85	85	65	フク土……ローム混り黒色土			
16	円		175	175	35	〃			
17	円		75	75	47				
18	円		100	100	90				
19	円		100	100	100				
20	円	スリ鉢	260	260	40				
21	不整円	〃	156	156	20	フク土…ローム混り黒色土			
22	円		90	90	20	〃			
23	円		100	100	40	〃 西側で6cm袋状に入り込む			
24	円		60	60	20	〃			
25	円		100	100	25	〃			
26	円	スリ鉢	120	120	55	〃			
27	不整円	〃	60	60	13	〃			
28	円		110	110	24	〃 ド29により切られる			
29	円		90	90	62	〃 ド28を切っている			
30	円	スリ鉢	90	90	10	〃			
31	円	フラスコ	120	120	74	〃			
32	不整円	スリ鉢	120	120	43	ロームを掘り込み フク土はローム混り黒色土			
33	円	フラスコ	100	100	30	〃 東で20cm袋状になる			
34	不整円		120	120	23	〃 ド35に切られる			
35	円	スリ鉢	100	100	51	〃 ド34を切る			
36	不整円		110	110	47	〃 南側にピット有り			
37	円		95	95	74	〃 子供頭大の石2こ南に15cm のこぶし大石2こ張り出をもつ	常滑片		
38	〃		100	100	37	〃 ド39と切り合っている			
39	〃		100	100	41	〃 ド38と切り合っている			
40	不整円	フラスコ	80	80	46	〃			
41	円	〃	70	70	23	〃			
42	〃		80	80	20	〃 ド44に切られる			

土 壙 一 覧 表　　大 東 遺 跡

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他	
43	〃	スリ鉢	70	70	20	〃ド44に切られる				
44	〃		110	110	63	〃42・ド43を切る				
45	楕円		150	80	42	〃				
46	円	フラスコ	100	100	70	〃				
47	〃		110	110	47	〃長軸50短軸30覆土17cmほどの石1こあり				
48	〃		90	90	34	〃長軸60cm位の石が2個入りこんでいる				
49	〃		90	90	92	〃底径 130				
50	〃		100	100	30	〃				
51	〃	フラスコ	100	100	90	〃西でド52をわずかに切る				
52	〃	〃	100	100	50	〃ド51をわずかに切る 土面に子供頭大の石1こ有り				
53	〃	〃	100	100	100	〃中段より10cm袋状となる底に大小さまざまな石4個がある				
54	〃		110	110	42					
55	不整楕円	スリ鉢	220	160	76	〃底に子供頭大の石3個ある				
56	円	〃	150	150	20					
57	不整円		250	250	40					
58	楕円	スリ鉢	130	100	15					
59	不整楕円		90	150	15	ド60に切られる				
60	円		150	150	35					
61	不整楕円		190		25					
62	〃		160	2770	60	中央に長軸 100短軸50深さ50の落ち込みがある				
63	円		180	180	35	小ピットが3つある ド64を切る				
64	〃		130	130	20	小ピットが3つある ド63に　で切られる				

酒 屋 前 遺 跡

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他	
1	円形		径90		40					?
2	楕円形		100	80	20					中世
3	円形		径100		18					〃
4	〃		120		35					〃
5	長方形		130	190	20	一部集石				?
6	円形	フラスコ状	130		130					?
7	不整長方形		150	220	60					?

土　壙　一　覧　表

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他	
8	楕円形		80	60	20		深鉢片			加E
9	〃		140	110	130		深鉢片	磨斧1		〃
10	〃		180	210	180		深鉢片	横刃2 石鏃1		〃
11	〃		120	150	160		深鉢片			〃
12	〃		140	120	50		深鉢片	石皿1		〃
13	円形		径100		120					〃
14	楕円形		130	120	30		深鉢片			〃
15	〃		180	160	140		深鉢片	横刃1 打斧1		〃
16	〃		110	120	20	焼土あり	深鉢片	打斧1 凹石1	円板1	〃
17	〃		150	160	60		つば付 深鉢片	スクレイパー1 横刃、打斧1		〃
18	〃		370	300	90	ロームマウンド		打斧1 スクレイパー1		〃
19	隅丸 長方形		120	160	50	一部集石　粘土あり	青磁片			中世
20	円形		径70		40				鉄滓 釘	〃
21	〃		径90		27					〃
22	〃		径110		27					〃
23	楕円形		100	75	7					〃
24	円形		100							〃
25	〃		125							〃
26	楕円形		120	100	40		浅鉢片			加E
27	円形		145		70					中世
28	長方形		170	140	55					〃
29	円形		径140		70					〃
30	〃		径120		60					〃
31	〃		径115		85					〃
32	円形		径110		50					中世
33	楕円形		140	160	70		深鉢片	横刃1		加E
34	円形		径60		50					中世
35	楕円形		145	150	50	集石充満				〃
36	円形		径90		20	〃				〃
37	〃		〃 95		25					加E
38	〃		〃 80		20		深鉢片			〃

土 壙 一 覧 表

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他	
39	〃		〃 80		70					〃
40	〃		〃 90		12		深鉢片			〃
41	〃		〃 125		5					〃
42	〃		〃 95		30					〃
43	〃		〃 90		50					〃
44	〃		〃 90		10			横刃1		〃
45	〃		〃 95		30	溝1に切られる				〃
46	〃		〃 80		70					〃
47	〃		〃 125		40	溝1に切られる				〃
48	〃		〃 100		30		深鉢片			〃
49	〃		〃 110		26	焼土あり	〃			〃
50	〃		〃 115		15	〃	〃			〃
51	〃		〃 110		30		〃			〃
52	〃		〃 110		70	焼土あり				〃
53	〃		〃 105		25		深鉢片			〃
54	〃		〃 100		25		〃	横刃1		〃
55	〃		〃 125		30	溝1に切られる	〃			〃
56	〃		〃 125		40		〃	打斧1		〃
57	〃		〃 80		70				刀子1	中世
58	〃		〃 210		75		深鉢片 壷	打斧2 石皿1		加E
59	〃		〃 100		65		深鉢片		円板2	〃
60	〃	フラスコ状	〃 115		65		〃			〃
61	〃		〃 50		40					〃
62	〃		〃 85		12	溝1に切られる　焼土あり				〃
63	円形		径 160		40		深鉢片	石鏃1 磨斧1		加E
64	不整円形		110	60	35					〃
65	円形		径 200		100		深鉢片			〃
66	〃		〃 120		85		〃	打斧1		〃
67	〃		〃 110		50	上部集石あり	〃	石鏃1 磨斧1 敲打1		〃
68	〃		〃 130		55		〃	スクレイパー1		〃
69	〃		〃 180		90					〃

土 壙 一 覧 表

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他	
70	〃		〃 100		60		深鉢片	打斧磨石1		〃
71	〃		〃 130		86	焼土あり	〃	磨斧1		〃
72	〃		〃 150		50		〃	磨石1		〃
73	〃		〃 180		35		〃			〃
74	長楕円形		170	100	40					〃
75	円形		径 70		20		深鉢片	横刃1 打斧2		〃
76	〃		〃 140		70					〃
77	〃		〃 170		40		深鉢片			〃
78	〃		〃 130		120					〃
79	不整円形		150	120	20			石皿Ⅰ		〃
80	円形		径 50		50	40×40×10cmのフタ石あり				〃
81	隅丸 長方形		95	65	32					中世
82	不整台形		90	80	40					〃
83	円形		〃 145		34	集石充満				〃
84	〃		〃 230		45					〃
85	〃		径 170		40	集石充満	天目茶碗片 片口片		鉄滓	〃
86	〃		〃 90		40					?
87	半月形		260	120	115					?
88	円形		径 120		33		深鉢片			加E
89	楕円形		140	155	40	土壙をとりまいてピット5ケあり	〃			〃
90	〃		220	125	63					〃
91	長方形		90	140	53		深鉢片			〃
92	円形		径 120		18		〃	打斧2		〃
93	〃		〃 70		31					〃
94	円形		径 125		20				人骨粉	?
95	〃		〃 75		67					?
96	〃		〃 53		34	焼土あり			人骨粉	?
97	〃		〃 90		41					?
98	不整 楕円形		210	95	33					?
99	〃		210	105	42					?
100	円形		径 95		100					中世

土　壙　一　覧　表　　滝沢井尻遺跡

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他	
101	〃		〃 75		51					〃
102	不整方形		140	170	42		スリ鉢片		鉄滓	〃
103	円形		径 80		13				釘	〃
104	〃		〃 110		26					〃
105	楕円形		110	120	50		深鉢片			加E
106	円形		径 120		105		深鉢片			〃
107	〃		〃 130		50		深鉢片	打斧		〃

小垣外・辻垣外遺跡

1	方形	不整長方形	110	95	20	覆土中に石組			炭	
2	円形	すり鉢	210	195	65	〃				
3	方形	長方形	115	100	35	山茶碗をコーナーよりにおく			山茶椀	
4	円形	袋状	100	97	80	円形プランにそって表面に石組				
5	長楕円	すり鉢	90	50	25				くるみの炭化物	
6	不整円	段をもつ	165	140	70	上面から内部に石を充満	堀ノ内		骨片	
7	円形	長方形	110	110	55	覆土中に石組				
8	〃	〃	110	90	45					
9	〃	〃	110	110	45			打斧		
10	〃	袋状	110	110	75					
11	不整楕円	すり鉢	360	190	110	ロームマウンド				
12	円形	舟底	75	70	25	上部に礫1				
13	〃	〃	100	70	35	西にピット内部に礫少し入る	前期末			
14	〃	〃	190	240	27	ロームマウンド	加E			
15	不明	不明				ロームマウンド	前期末			
16	円形	舟底	185	175	23					
17	〃	〃	100	105	35	底部に礫1				
18	方形	袋状	100	115	75		中期初頭			
19	円形	〃	120	110	100	はり出しを持つ内部に礫				
20	不整円	〃	150	100	150	ロームマウンド（？）	加E	石錘		
21	双円		75	80	35	有段小さい方はPitか				
22	方形		190	180	50	上部に石組				

土　壙　一　覧　表

番号	プラン		大きさ			状態（上部，内部など）	加工遺物		
	平面	断面	東西cm	南北cm	深さcm		土器	石器	その他
0	円形		175		40	上部に礫多、底面にも密着			
1	卵形		84	96	38	炭化物			縄前末
2	円形	フラスコ形	50		45	〃　底面に4ケの小礫			〃
3	〃	〃	100		53	〃			〃
4	楕円形		60	105	26				
5	円形		195		10	底面に礫、径30cmのピット			縄後
6	卵形		115	105					
7	楕円形		205	230	85	北東壁は階段状			縄後
8	隅丸方形		175	300	40			打器（3） 石錐	〃
9	円形		120		113			磨石 スクレイパー	縄前末
10	〃		80		15			石化 石鏃（2）	
11	不整 楕円形		120	75	70	西半部　階段状			
12	卵形		110	80	66	上部に礫多		磨石斧	縄後
13	円形	フラスコ形	110		53	底面より33cm上部にかたい ローム混黒土あり		石ヒ 石鏃(2)	縄前末
14	〃		90		19				
15	〃		110		50				
16	〃	フラスコ形	110		54	炭化物			縄前末
17	〃		85		30				縄中
18	〃		85		37				〃
19	楕円形	フラスコ形	51	43		炭化物	底部	打石斧	〃
20	隅丸方形		70	150	50	東隅ピット		横刃	〃
21	円形		75		30			横刃・凹石・ スクレイパー	〃
22			295	240	100	ロームマウンド、炭化物多		凹石	縄後
23	円形		105		70				〃
24	楕円形		80	130	37	自然石2ケ			縄中
25	下整方形		95		36				〃
26	楕円形		60	75	19				
27	〃		60	100	18				
28	不整円形		70		28				
29	〃		120	100	28	炭化物			縄中
30	不整方形		170	105	20	ピット3ケ			縄前末

土　壙　一　覧　表　　小垣外・辻垣外遺跡

番号	プラン		大きさ			状態（上部，内部など）	加工遺跡		
	平面	断面	東西cm	南北cm	深さcm		土器	石器	その他
31	円形	フラスコ形	105		80	炭化物			
32	〃		185		100	上部に張り床と焼土塊			縄前末
33	楕円形		100	150	27				
34	円形		80	120	36				縄中
35	不整円形		185	150	25	炭化物、3ケのピット状凹み			
36	楕円形		270	200	25	上面に自然石・東上面焼土	注口	打石斧横刃 石鏃玉石皿	縄後
37	円形		48		32	焼土			縄中
38	卵形		130	80	23	上面に石3ケ			
39	円形		75		50				
40	〃		50		30				縄中
41						底面にこぶし大の石を敷く			
42		フラスコ形	130	120	82	〃			
44	長方形		60	80	20		山茶椀		中世
44	台形		140×110	130	17	浅いピット3ケあり			
45	楕円形		100	132	52				
46	〃		100	90	40	こぶし大の石がつまる		打石斧	
47	〃		65	60	35				
48	長方形		110	170	20	上面に自然石が散在する		横刃	
49	楕円形		115	55	55	北壁寄りにピット			
50	〃		250	225	60	南西部はロームでおおわれる 北壁寄りにピット		打石斧 ・横刃	縄中
51	円形	フラスコ形	75		55	炭化物			〃
52	〃		150		20	土壙　53に切られる		打石斧 ・磨石	〃
53	〃		150		70				〃
54	〃	フラスコ形	195		79	10～50cmの深に 300数ケの石つまる	山茶椀		中世
55	〃		115		26				
56	不整円形		60		99			石錘	縄中
57	円形		80		39				〃
58	〃		15		15				
59	〃		110		13				
60	〃				34				
61	卵形		100	85	35	3号床面がはられる			

土　壙　一　覧　表　　小垣外・辻垣外遺跡

番号	プラン 平面	プラン 断面	大きさ 東西cm	大きさ 南北cm	大きさ 深さcm	状態（上部，内部など）	加工遺物 土器	加工遺物 石器	加工遺物 その他
62	楕円形			115	35				
63	不整方形		100	70	80				
64	不整円形		95	105	20	土壙63に切られる 底面自然石１ケ			
65	〃		140	130	90				
66	〃		110	95	30	炭化物			
67	〃		400	380	95	ロームマウンド		打石斧 ・石錘	縄　中
68	〃		100	105	50	焼土	おろし皿		中　世
69	円　形		120		21			打石斧	縄　中
70	〃		150		57	フク土に数点の礫		〃	中　世
71	〃		75		58	炭化物			
72	〃		110		65				縄　中
73	〃		100		47			打石斧	
74	半円形		180	260	55	ロームマウンド			縄　中
75	円　形		170		49				〃
76	〃		100		118	自然大礫			
77	〃		145		116				縄　中
78	〃		120		50				中　世
79	〃		90		54	西半分にロームマウンド			縄　中
80	不　整 長方形		100	70	37	西側にロームマウンド			
81	不整円形		75	45	10	南半分にロームマウンド			縄　中
82	楕円形		120	75	40	〃　　〃			
83	〃		75	90	25	北半分に　〃			
84	卵　形		100		47	炭化物			縄　中
85	不整円形		85		60				
86	円　形		110		28				
87	〃		75		26				
88	〃		69		20				
89	〃		69		20				
90	〃		80		50			横　刃	
91	不　整 楕円形		240	1[illegible]0	65	炭化物　北壁急傾斜			縄　中
92	〃		365	200	105	〃　　〃			〃

土　壙　一　覧　表　　小垣外・辻垣外遺跡

プラン			大きさ			状態（上部，内部など）	加工遺物		
号	平面	断面	東西cm	南北cm	深さcm		土器	石器	その他
93	不整楕円形		145	70	36			打石斧	縄中
94	楕円形		85		42	炭化物　東壁にピット1ケ			〃
95	〃		90		102	〃			〃
96	〃		90	170	102	〃			
97	〃	フラスコ形	150		38	人頭大の礫がつまる			縄後
98	円形		120		43	炭化物			縄前末
99	〃		115		10				〃
100	〃	フラスコ形	80		40				〃
101	〃		75		70				〃
102	〃	フラスコ形	160		60			横刃	〃
103	〃		50		70				〃
104	〃		110		75				〃
105	〃	フラスコ形	60		65	上面に少量の焼土・くるみの炭化物			〃
106	楕円形		140	120	20	フク土上部人頭大の石1ケ			〃
107	円形		110		35				〃
108	〃		105		40	土器底部が逆位で出土			〃
109	〃	フラスコ形	110		60	フク土に人頭大の石2ケ			〃 (栗)
100	楕円形		325	240	113	北西壁階段状、北壁にローム堆積			
111	〃		125	175	102	上面は土器集中箇所Aによりはり床される。炭化物			縄後

三壺淵遺跡

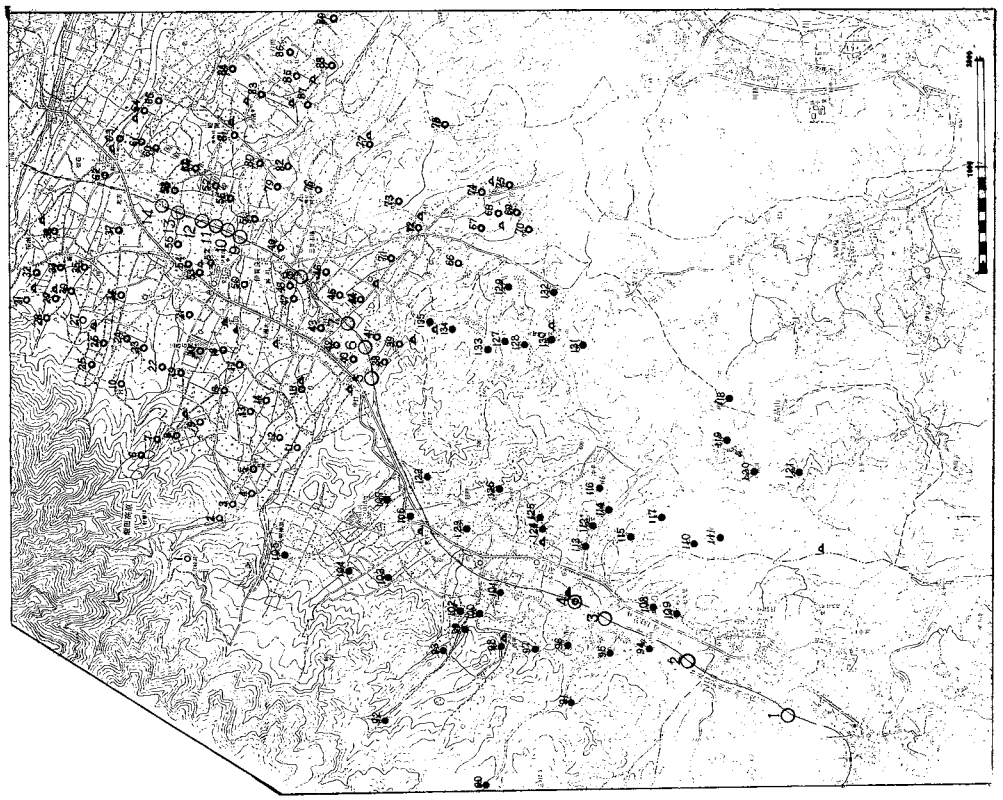
1	円形		径48		40	内部より中期初頭土器（西日本系土器を伴なう）			

土　壙　一　覧　表　　上の金谷遺跡

番号	プラン		大きさ			状態（上部，内部など）	加工遺物		
	平面	土器	東西cm	南北cm	深さcm		土器	石器	その他
1	楕円形	すり鉢	260	350	不明（湧水）				
2	不整円形	〃	200	240	不明（湧水）	〃　〃	土師器		
3	楕円形		110	70	40	底面が北東に広がる 褐色土より掘る			
4	不整円形		125	140	35				
5	円形		240	240	60	砂層・黒褐色土層・黒褐・黒褐色土の互Bの覆土・底に石	須恵器山茶碗土師器		
6	不整長方形		180	245	36	底面に石 褐色土層より掘る灰釉片			
7	隅丸方形		160	150	24	砂層を掘る			
8	〃		145	140	30	上部に粘土焼土　平石	須恵器甕形土器片		
9	不整長方形		150	130	10	底面に右　褐色土層を掘る	須恵器片		木炭
10	〃		100	120	25	〃	土師器片		
11	楕円形		340	260	不明（湧水）	褐色土のマウンド　ピット3ケ	縄文前		
12	円形	すり鉢	60	60	30	砂層を掘る			
13	〃		150	150	15	砂層を掘る底中央に石			
14	〃		110	110	10	ド15を切る			
15	〃		80	80	70	ド15に切られる			
16	長方形		110	140	30				

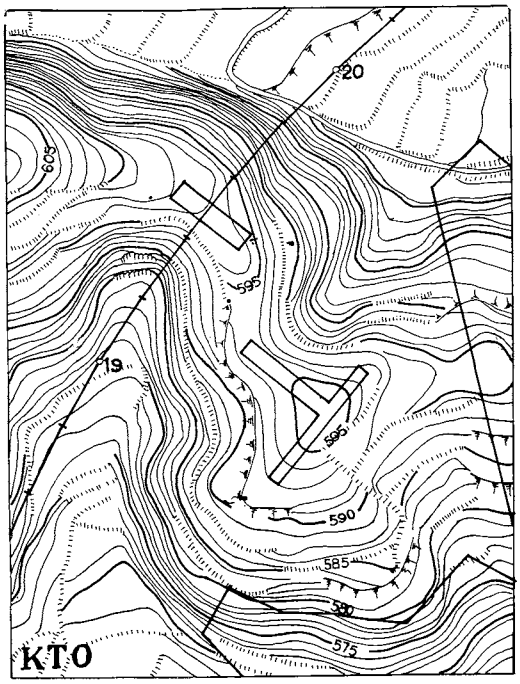
第７表　土製円盤一覧表

図	番号	遺跡名	遺構	縦　mm	横　mm	厚さmm	重さg	部　位	時　期
第129	1	ＹＮＯ	その他	39.0	41.0	11.5	20.5	胴	加E
第129	2	ＳＫＣ	土壙16	37.5	42.5	10.5	19.0	胴	加E
第129	3	ＳＫＣ	土壙59	37.0	41.0	9.0	17.5	胴	加E
第129	4	ＳＫＣ	土壙59	44.0	41.0	13.5	24.5	胴	加E
第129	5	ＫＧＢ	6　住	22.0	25.0	8.5	9.5	胴	加E
第129	6	ＫＧＢ	6　住	32.0	31.0	9.0	15.0	胴	加E
第129	7	ＫＧＢ	その他	22.0	28.0	12.0	16.0	胴	加E
第129	8	ＫＧＢ	その他	25.0	22.0	7.5	7.5	胴	加E
第129	9	ＫＧＢ	9　住	30.5	35.0	7.0	14.5	胴上部	加E
第129	10	ＫＧＢ	その他	52.0	49.0	8.5	30.5	胴上部	加E
第129	11	ＫＧＢ	その他	40.0	34.5	11.0	23.5	胴	加E
第129	12	ＫＧＢ	焼土群	40.0	40.0	8.0	25.5	胴	加E
第129	13	ＫＧＢ	焼土群	31.0	28.0	11.0	11.0	胴	加E
第129	14	ＫＧＢ	焼土群	26.5	21.0	9.0	7.5	胴	加E
第129	15	ＫＧＢ	土壙12	40.5	38.0	5.0	12.0	胴	加E
第129		ＫＧＢ	土壙12	31.0	27.5	5.5	8.5	胴	加E
第129	17	ＫＧＢ	土壙12	23.0	23.0	6.0	7.0	胴	加E
第129	18	ＫＧＢ	土壙12	25.0	22.0	5.5	6.5	胴	加E
第129	19	ＵＫＯ	その他	34.5	33.0	12.0	19.0	胴	加E

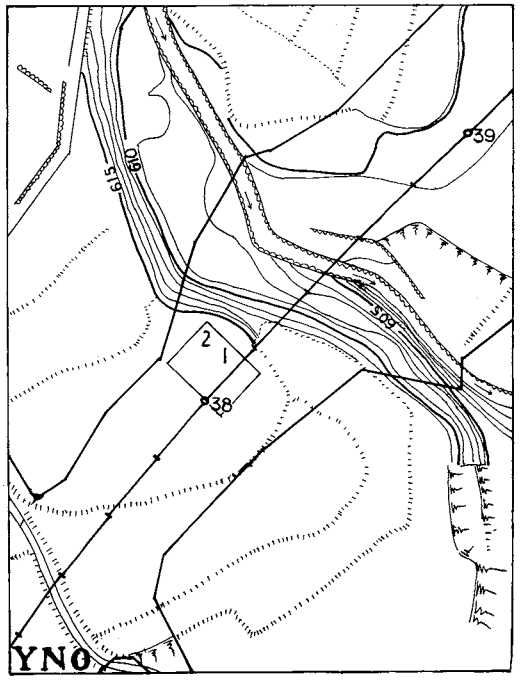


○用地内遺跡　○伊賀良地区遺跡　●山本地区遺跡　◠　古　墳

1．中央道用地内及び周辺の遺跡分布図

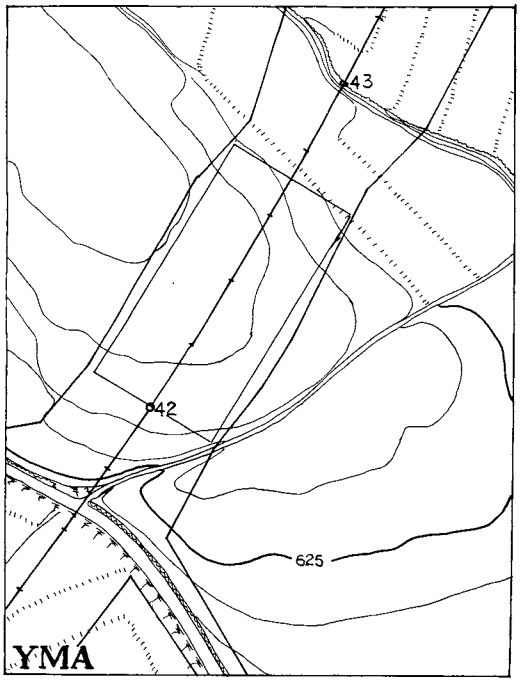


2．かぶき畑遺跡　（1：2000）

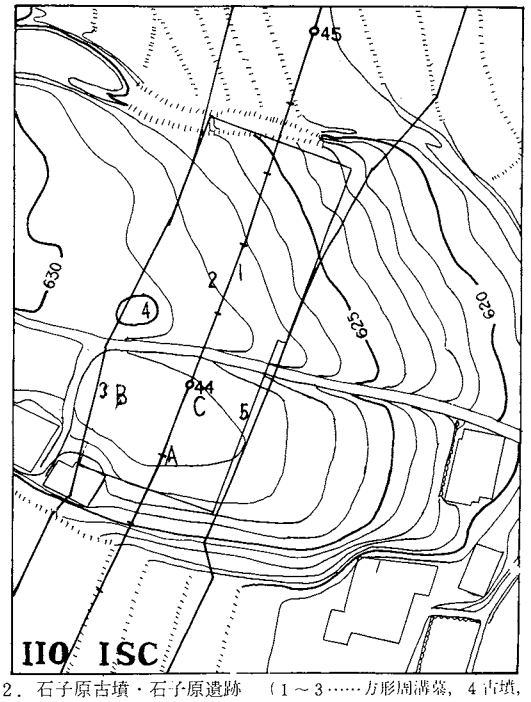


3．柳田遺跡　（1：2000）　（1・2　住居址）

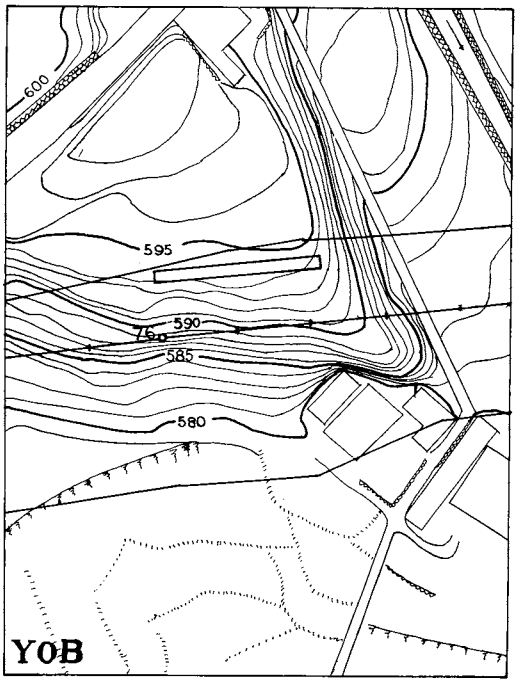
第1図　飯田市地内中央道用地内遺跡分布 図及び地形図



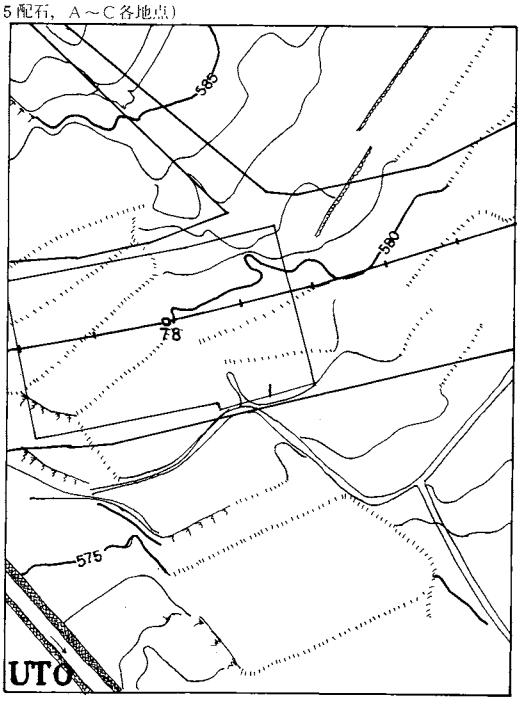
1．山田遺跡



2．石子原古墳・石子原遺跡　（1～3……方形周溝墓，4古墳，5配石，A～C各地点）

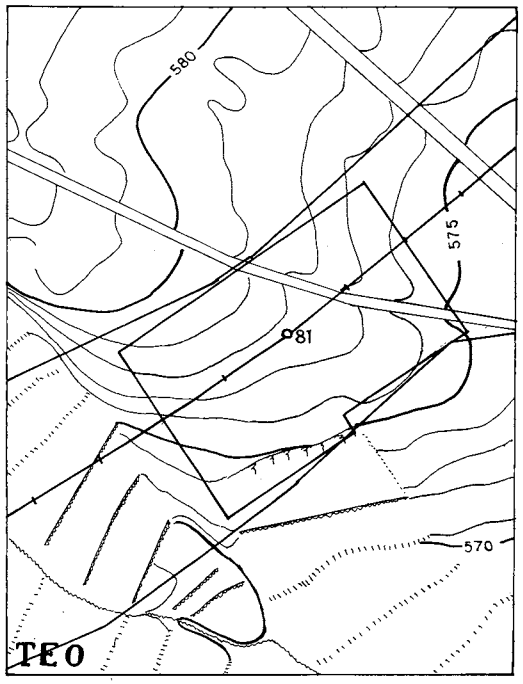


3．ようじ原遺跡

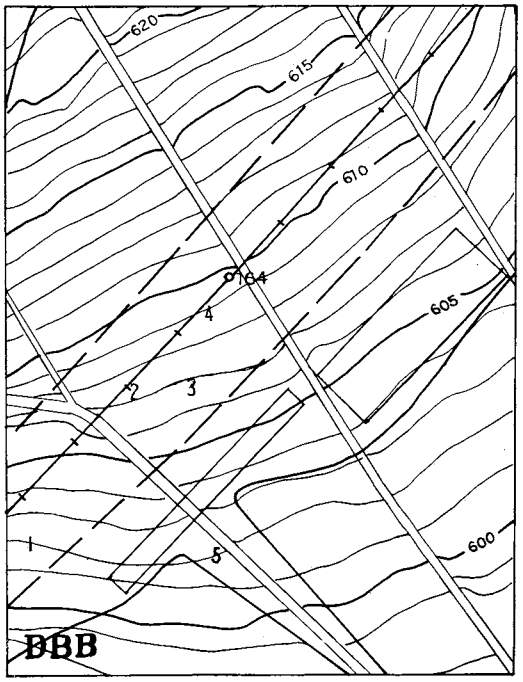


4．上ノ平東部遺跡

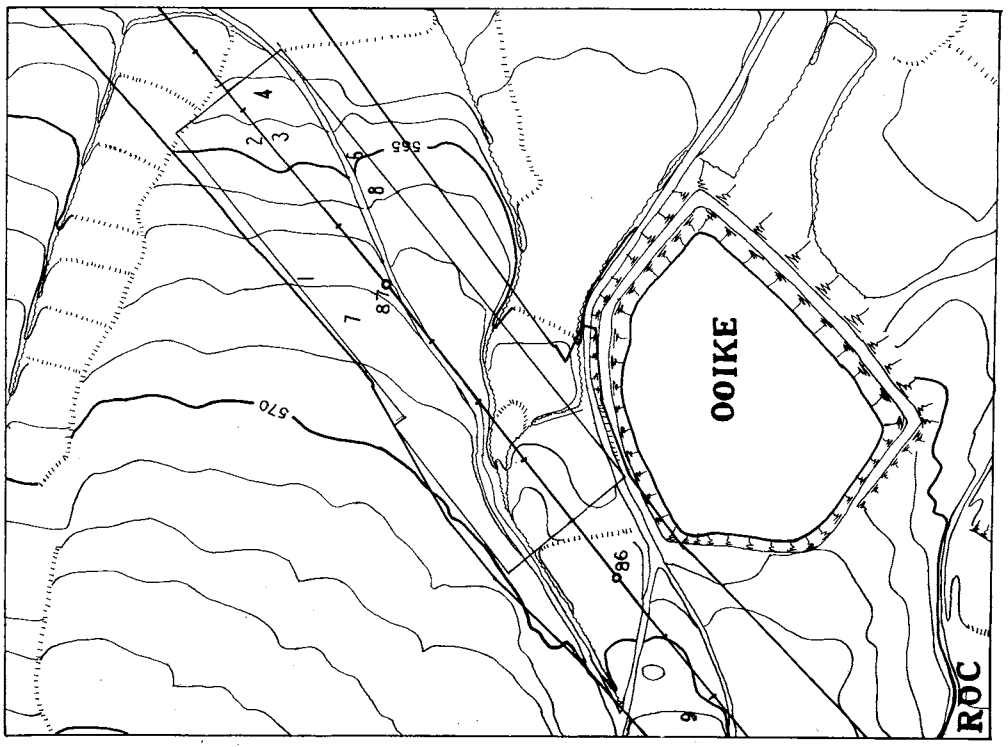
第2図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図　（1：2000）



1．寺山遺跡

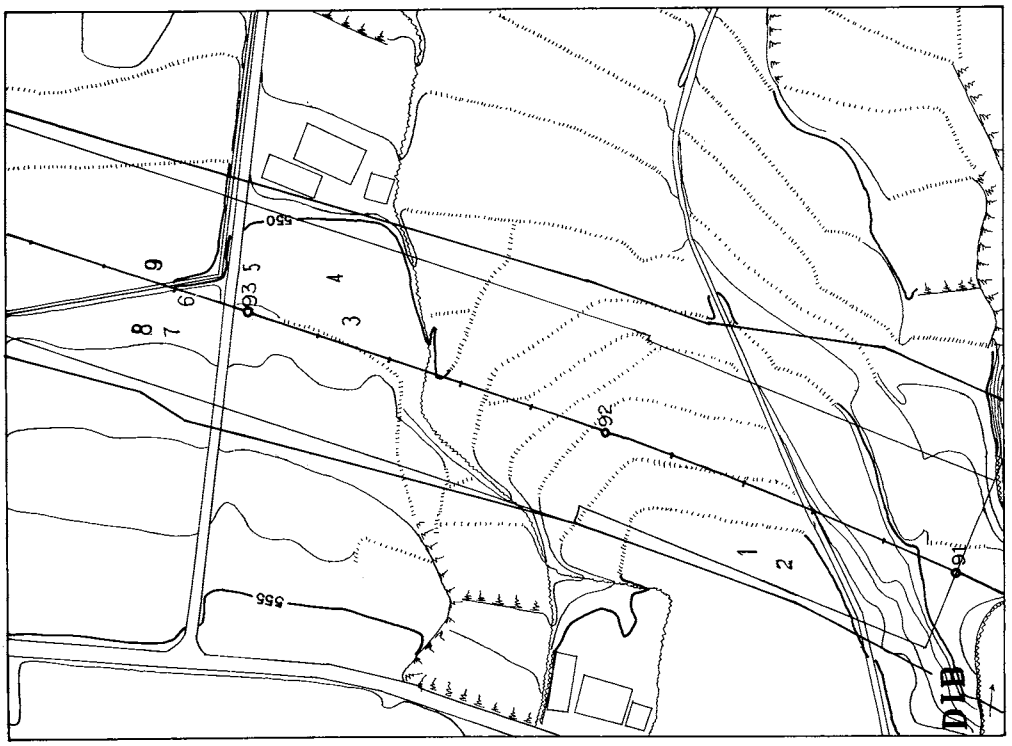


2．大門原B遺跡（1～5住居址）

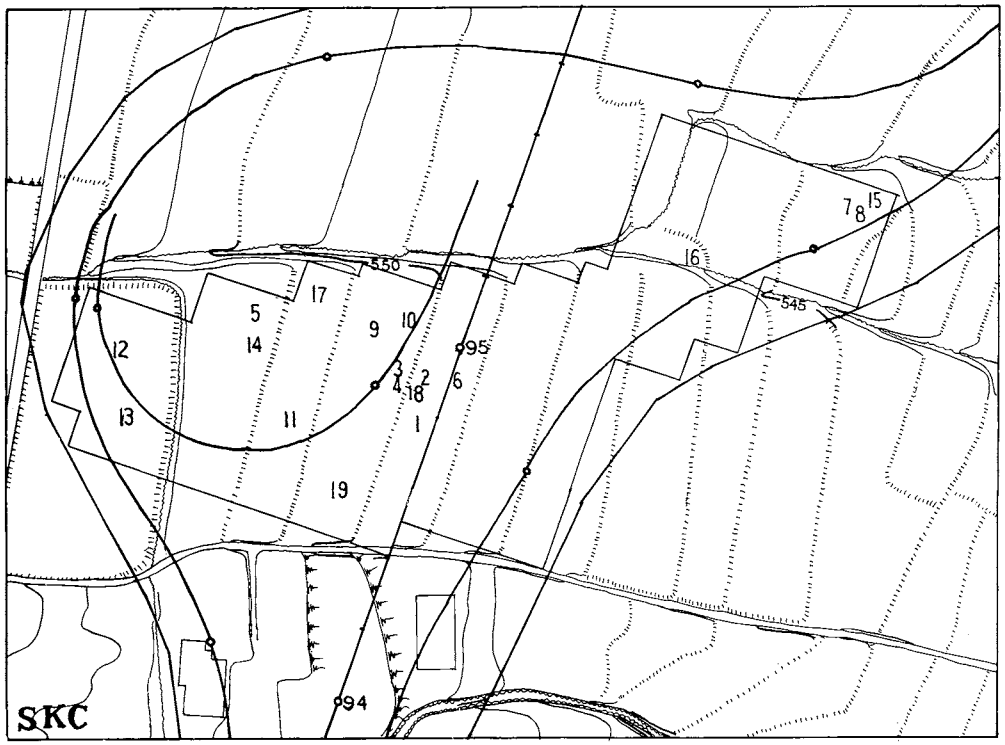


3．六反田遺跡（1～6住居址，7～9土壙）

第4図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図　（1：2000）

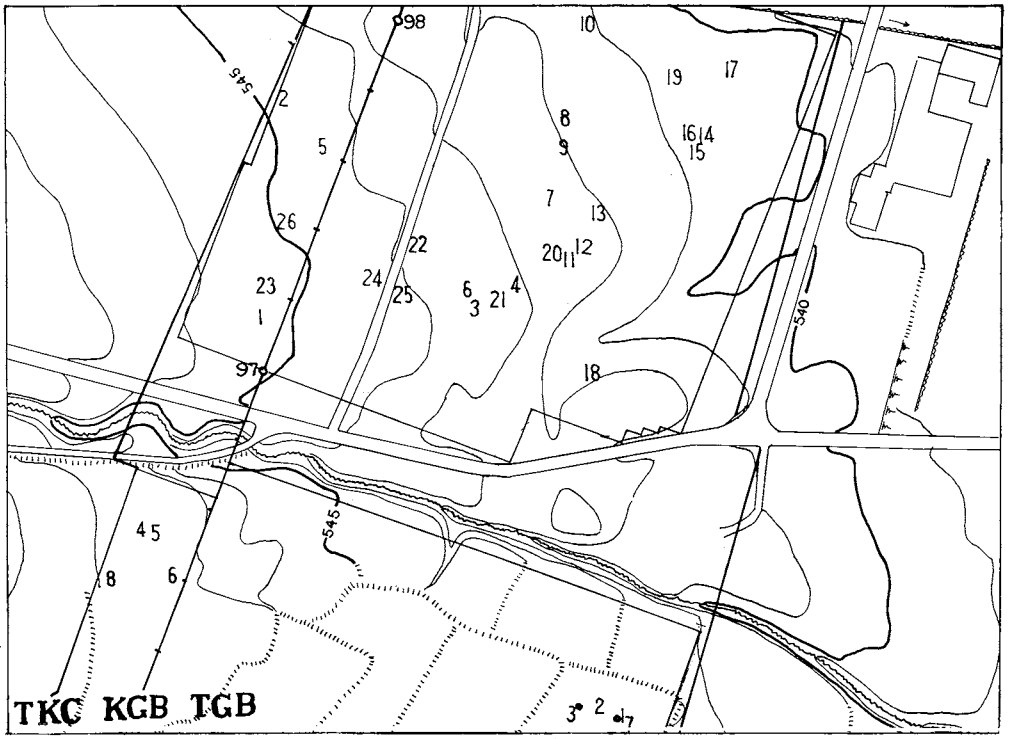


1、大東遺跡　（1～4住居址，5～9土壙群A～E）

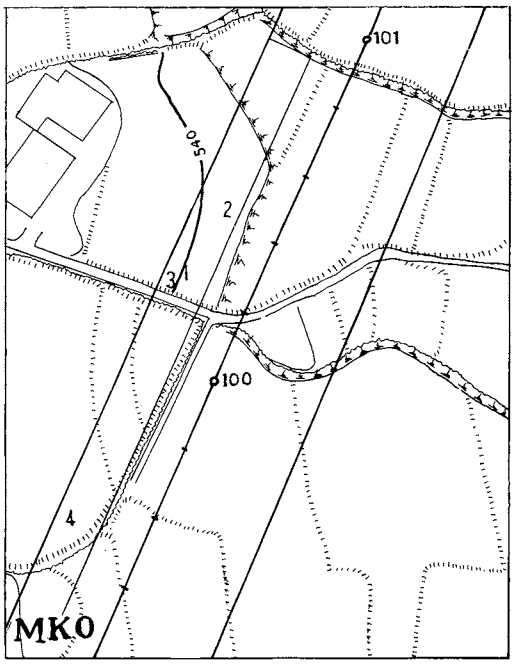


酒前遺跡（1～16）住居址・17竪穴遺構・18土壙・19精錬状遺構

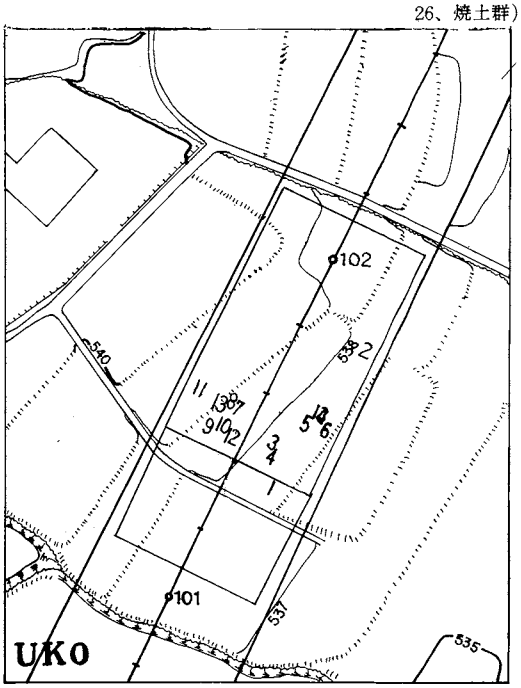
第3図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図　（1：2000）



1 滝沢井尻遺跡・小垣外遺跡・辻垣外遺跡（下1～7住居址、8方形周溝墓、上1～22住居址、23柱穴群、24・25土器片集中、26、焼土群）

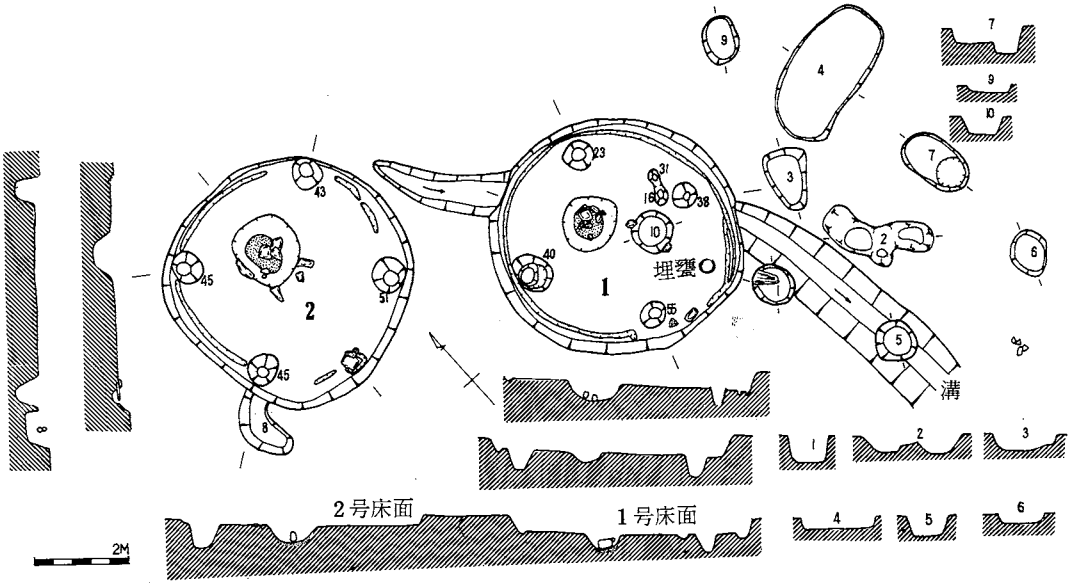


2．三壺渕遺跡　（1～3住居址，4．土壙）

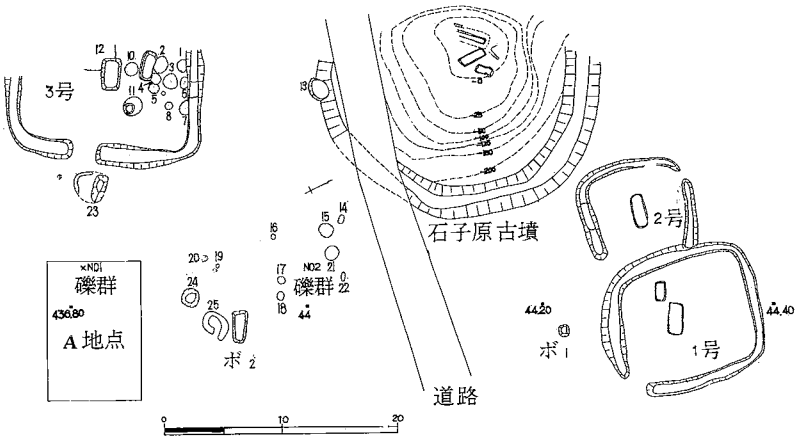


3．上の金谷遺跡（1～13住居址，14柱穴群）

第5図　飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図　（1：2000）

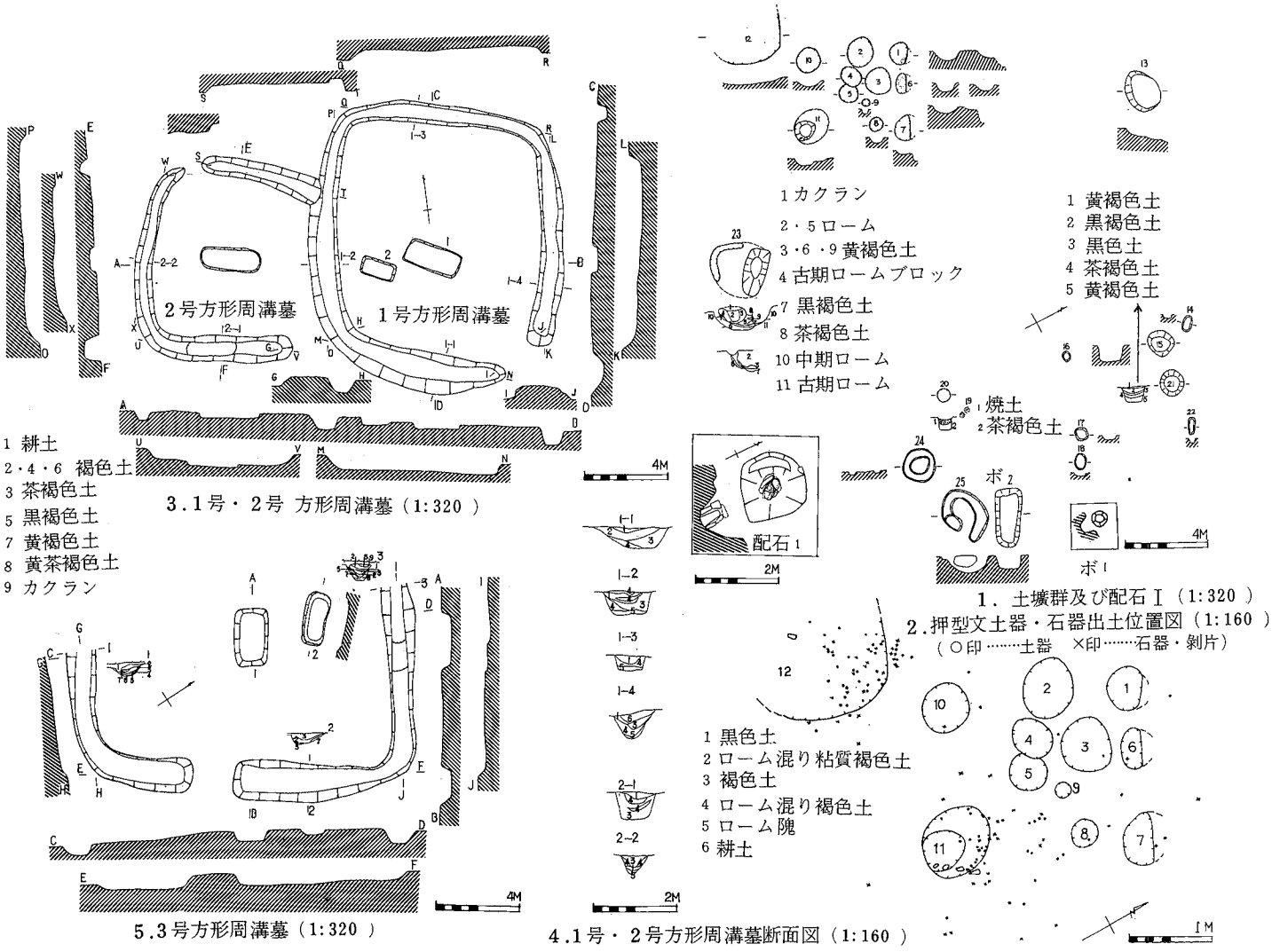


1．柳田遺跡　1号2号住居址及び1号～10号土壙図（1 ： 160）

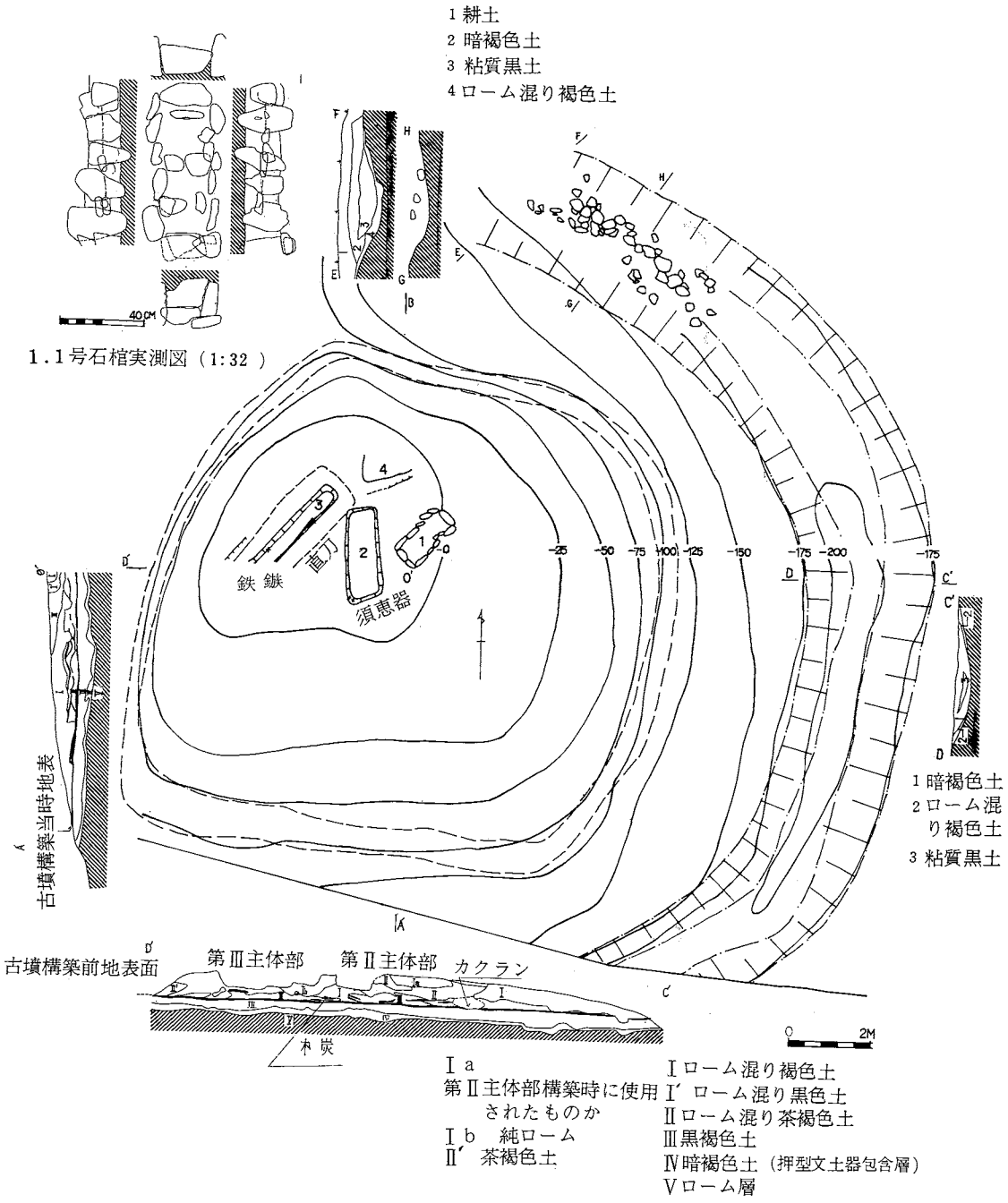


2．石子原古墳・石子原遺跡・遺構全体図（1:640 ）

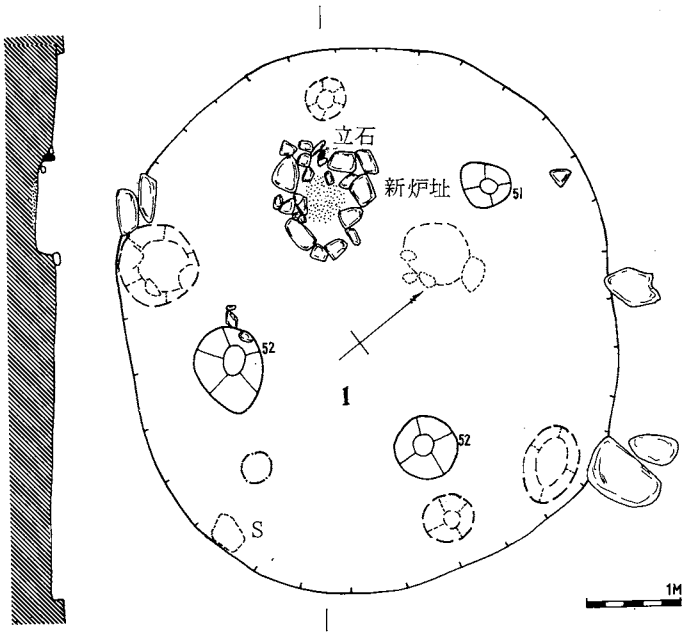
第 6 図　柳田遺跡・石子原古墳・石子原遺跡遺構全体図



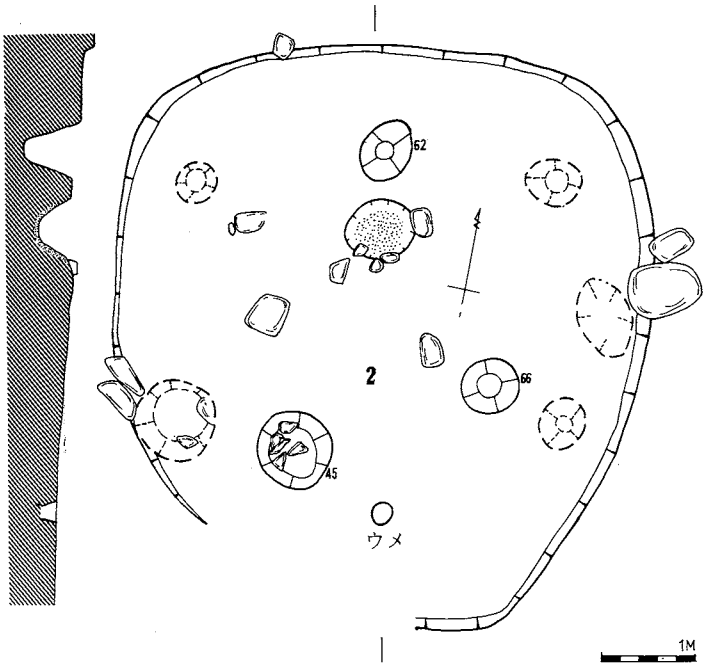
第7図　石子原遺跡土壙群及び方形周溝墓



第８図　石子原古墳実測図

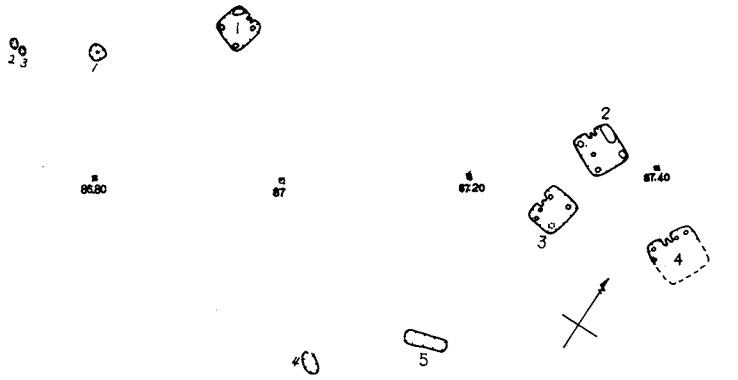


1．1号住居址

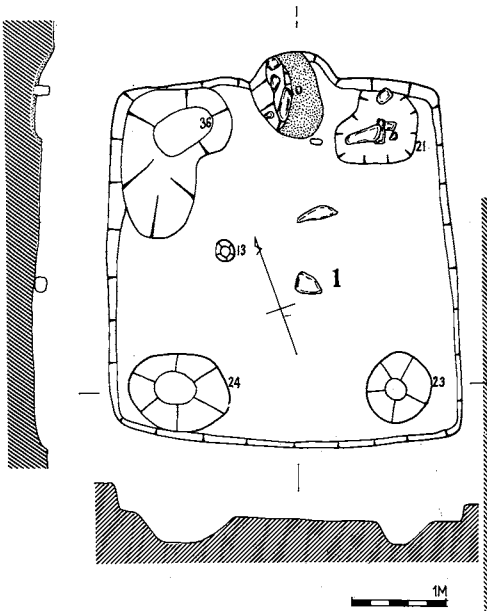


2．2号住居址

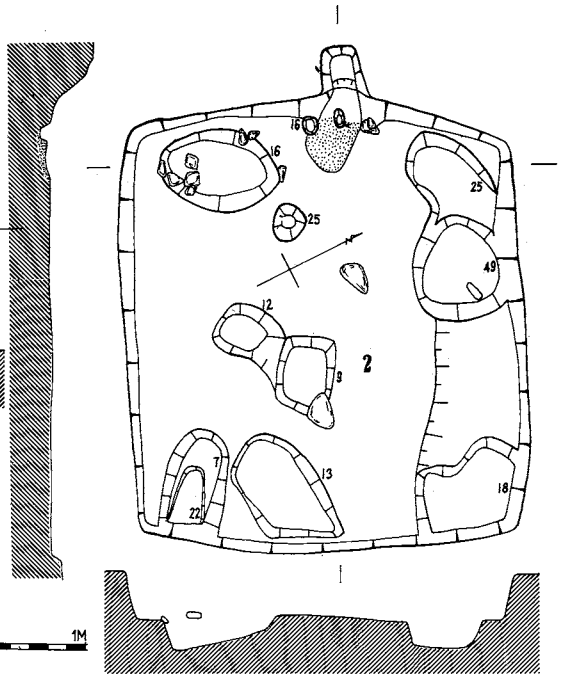
第 9 図　上の平東部遺跡 1 号・2 号住居址（1：80）



1．六反田遺跡遺構全体図（1:800 ）

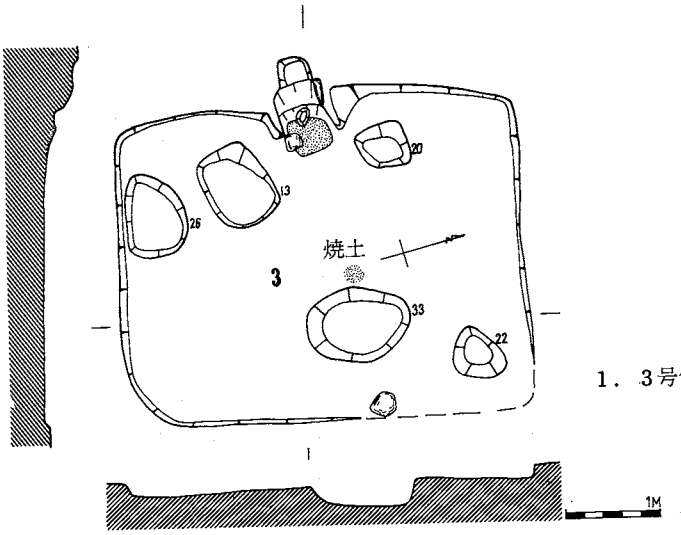


2．1号住居址（1:80 ）

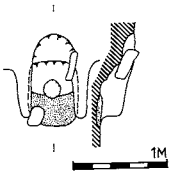


3．2号住居址（1:80 ）

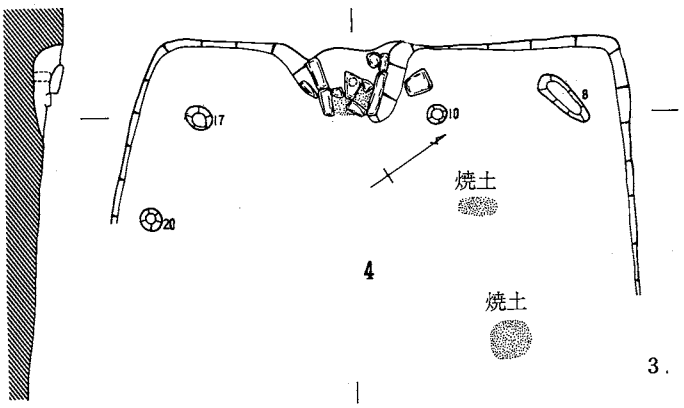
第10図　六反田遺跡遺構全体図及び1号・2号住居址



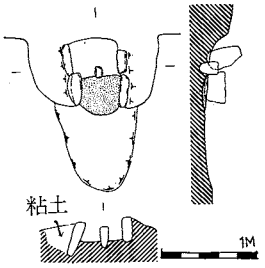
1．3号住居址



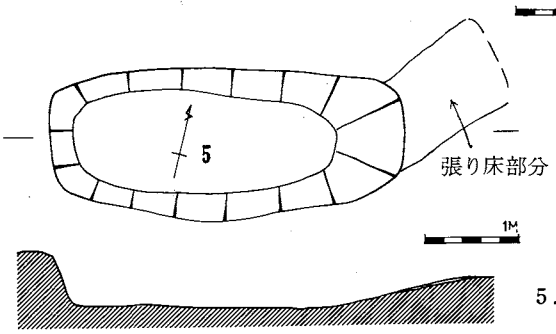
2．3号住居址　カマド



3．4号住居址

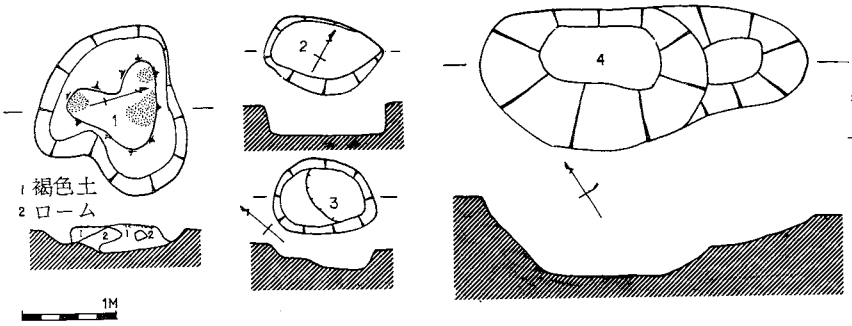


4．4号住居址　カマド

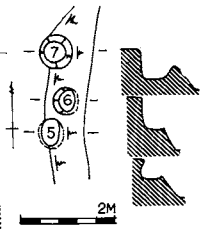


5．5号住居址

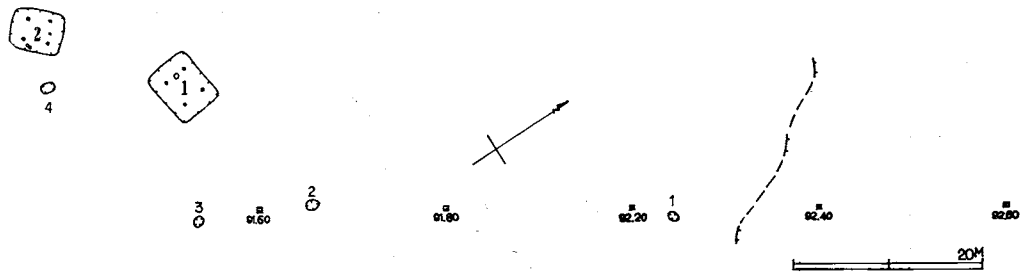
第11図　六反田遺跡3号・4号・5号住居址（1：80）



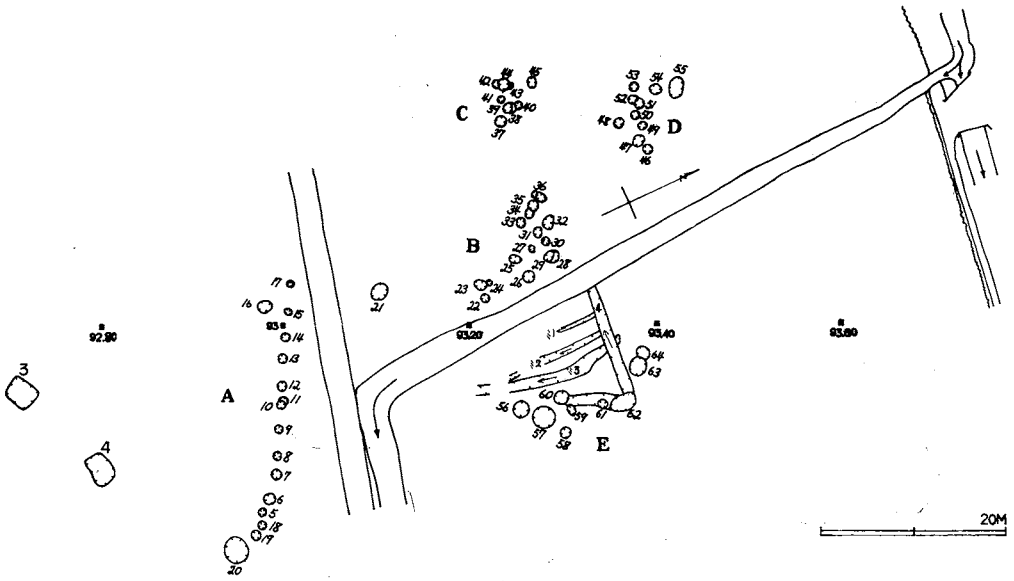
1．六反田遺跡　1号～4号土壙図　（1:80 ）



2．六反田遺跡5号～7号土壙図（1:160 ）

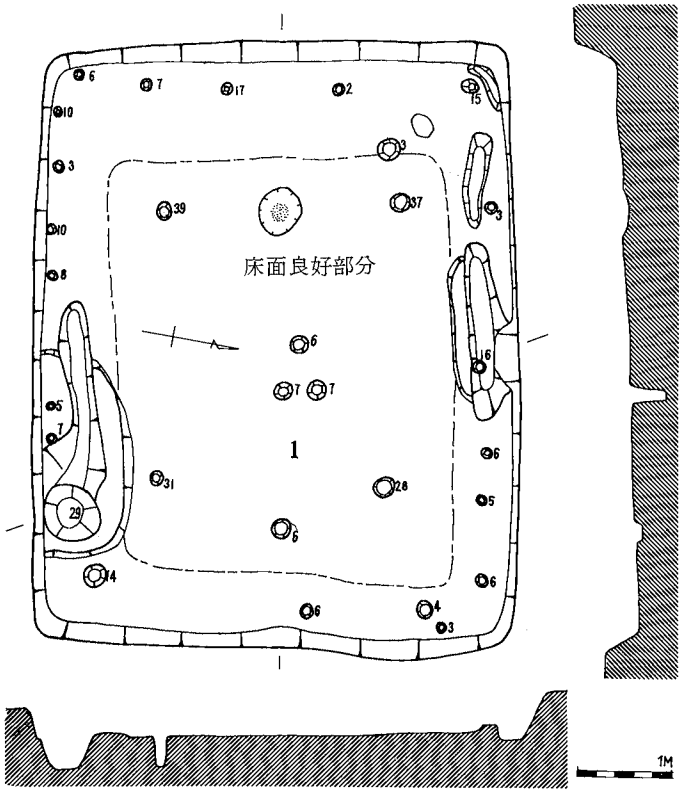


3．大東遺跡A～C地区遺構全体図（1:800 ）

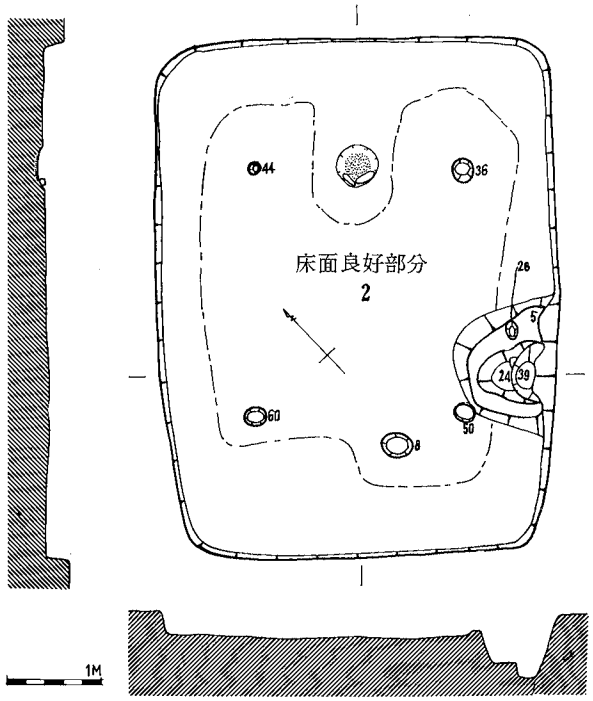


4．大東遺跡D～E地区遺構全体図（1:800 ）
（1～4　住居址，1～64 土壙，A～E 土壙群）

第12図　六反田遺跡土壙図及び大東遺跡遺構全体図

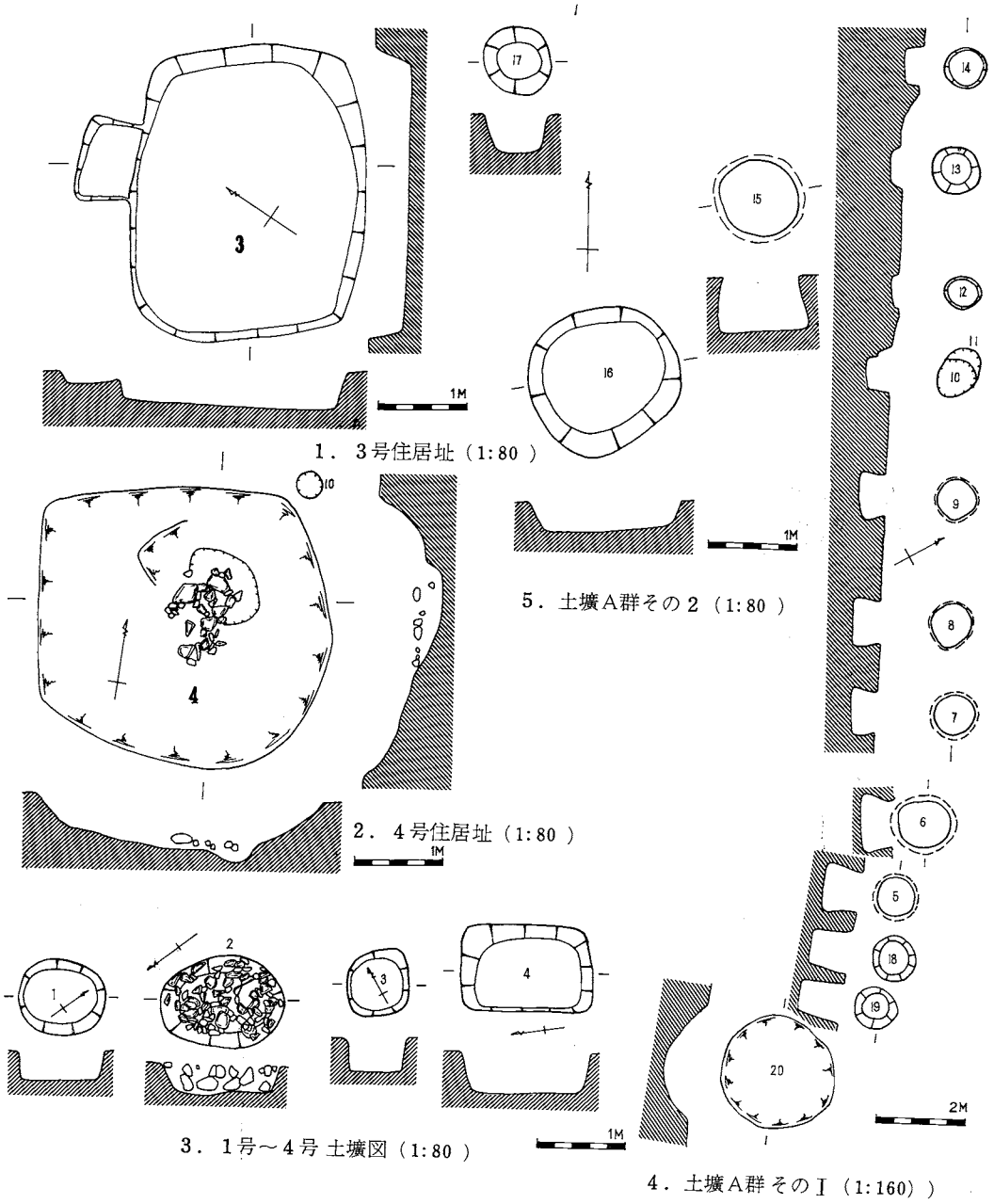


1号住居址



2号住居址

第 13図　大東遺跡 1 号・ 2号住居址（1：80）



1．3号住居址（1:80）

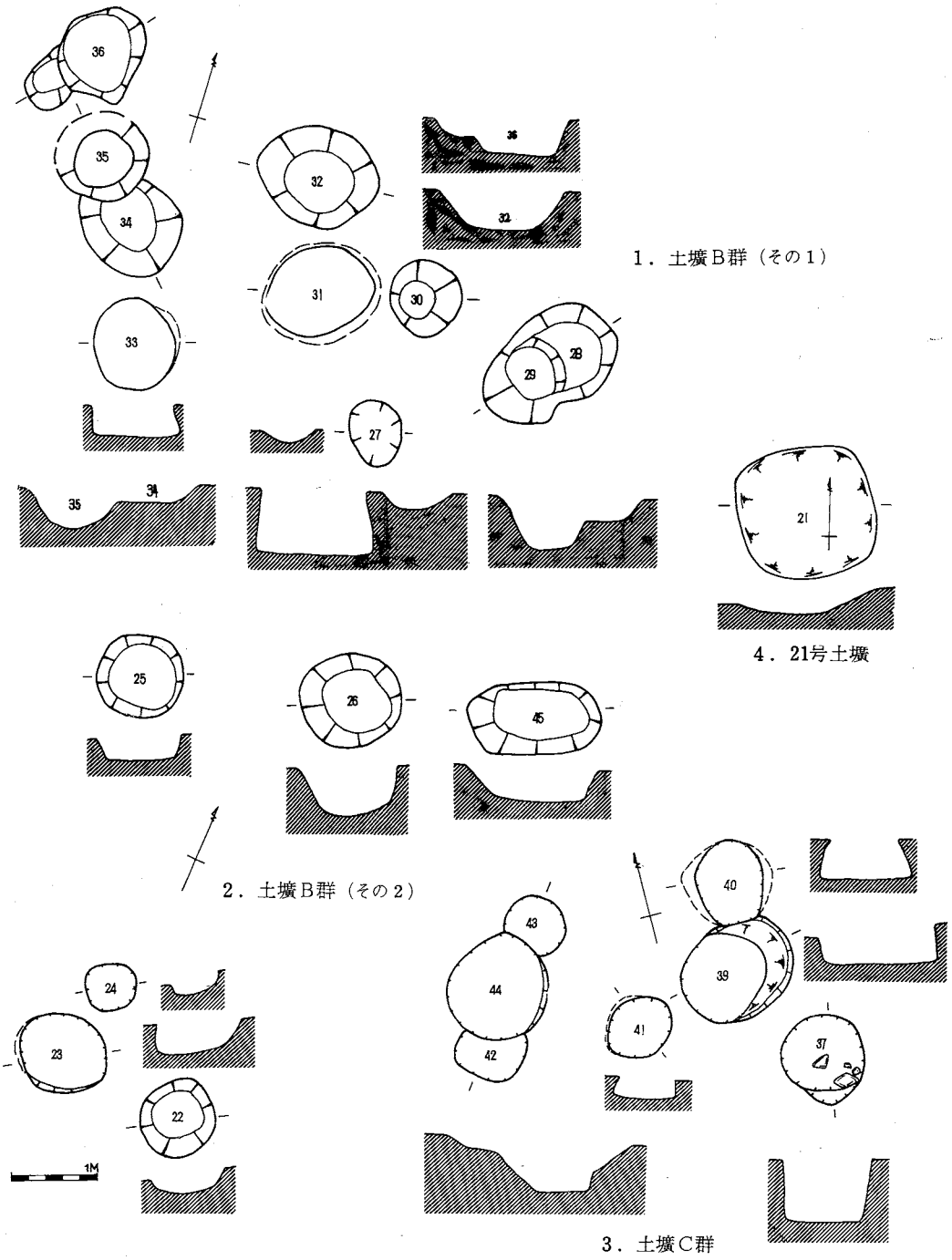
2．4号住居址（1:80）

3．1号～4号 土壙図（1:80）

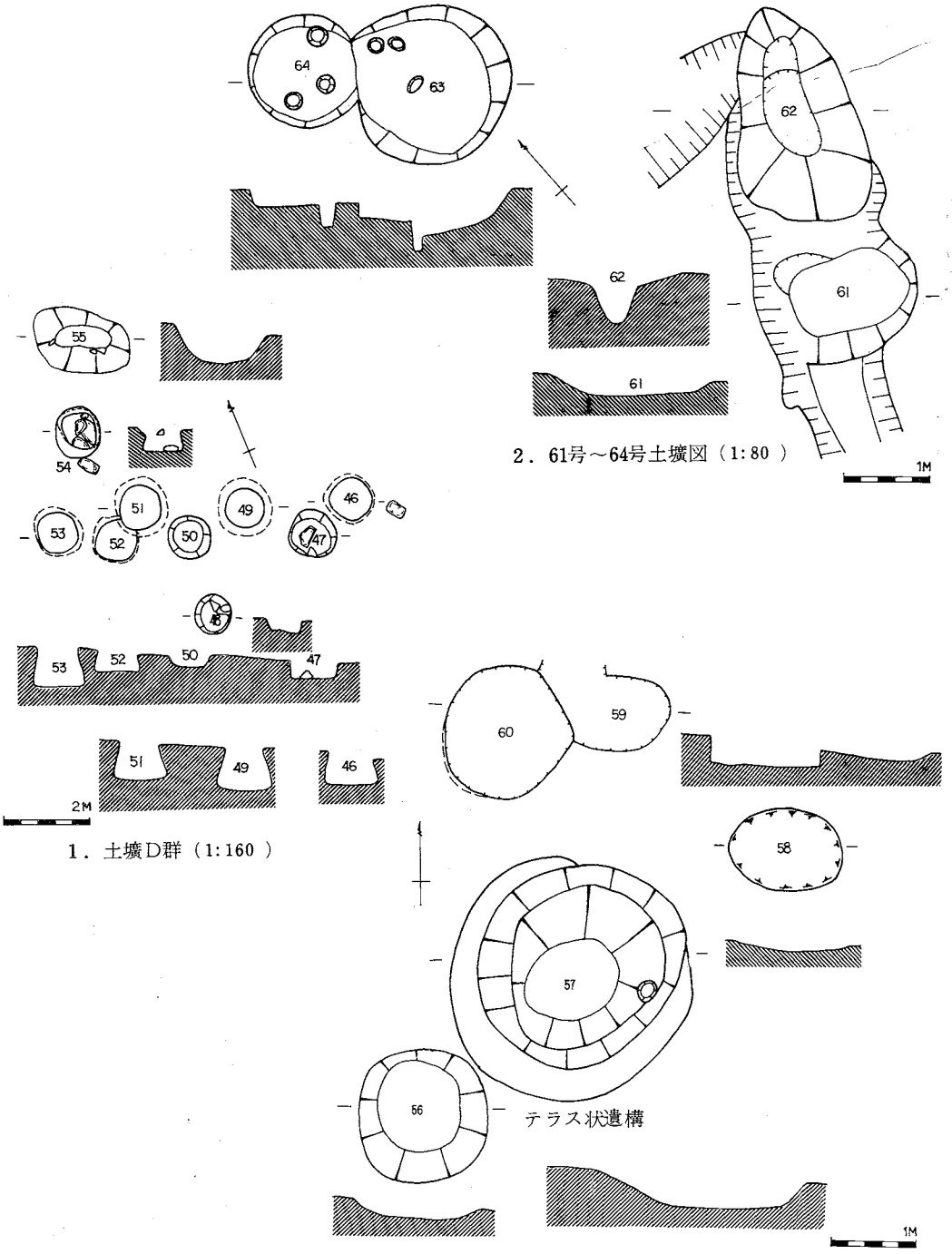
4．土壙A群その I（1:160））

5．土壙A群その2（1:80）

第14図　大東遺跡3号・4号住居址及び土壙図



第15図　大東遺跡土壙図（1:80 ）

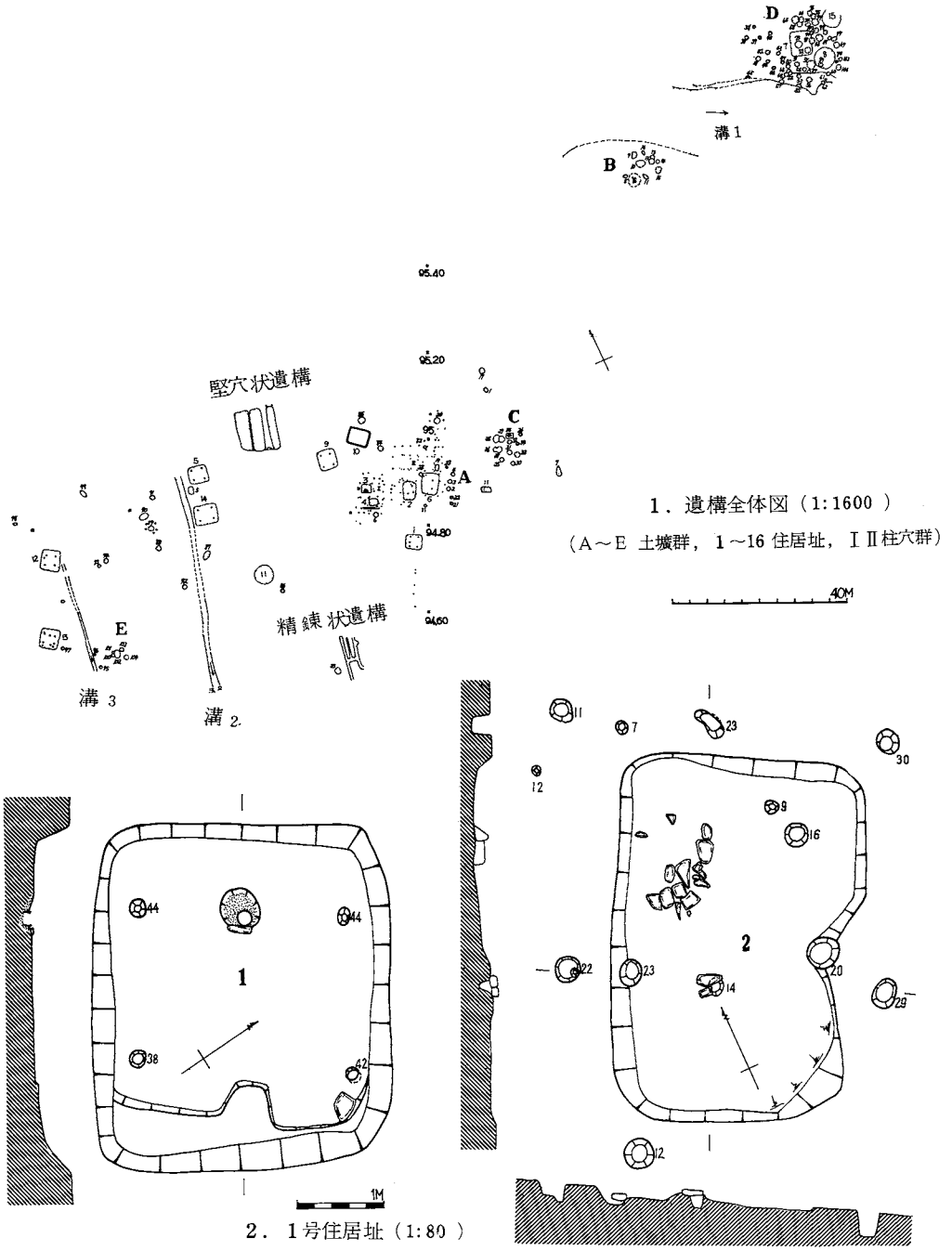


1．土壙D群（1:160 ）

2．61号～64号土壙図（1:80 ）

3．56号～60号土壙図（1:80 ）

第16図　大東遺跡土壙図

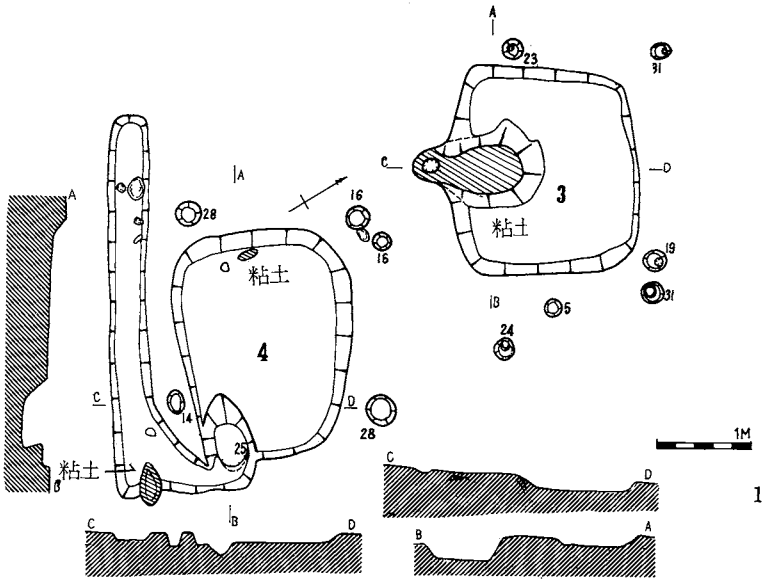


1．遺構全体図（1:1600 ）
（A～E 土壙群，1～16 住居址，ⅠⅡ柱穴群）

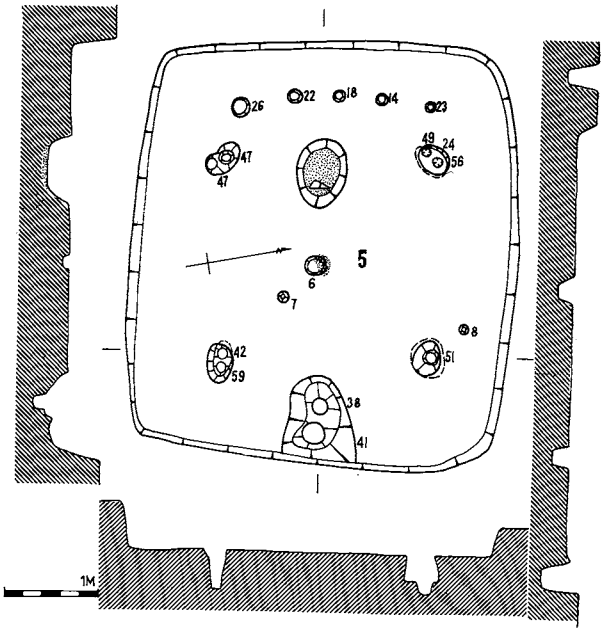
2．1号住居址（1:80 ）

3．2号住居址

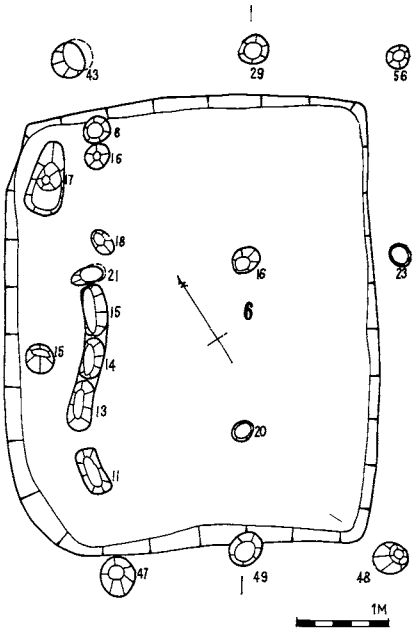
第17図　酒屋前遺構全体図及び1号・2号住居址



1．3号・4号住居址

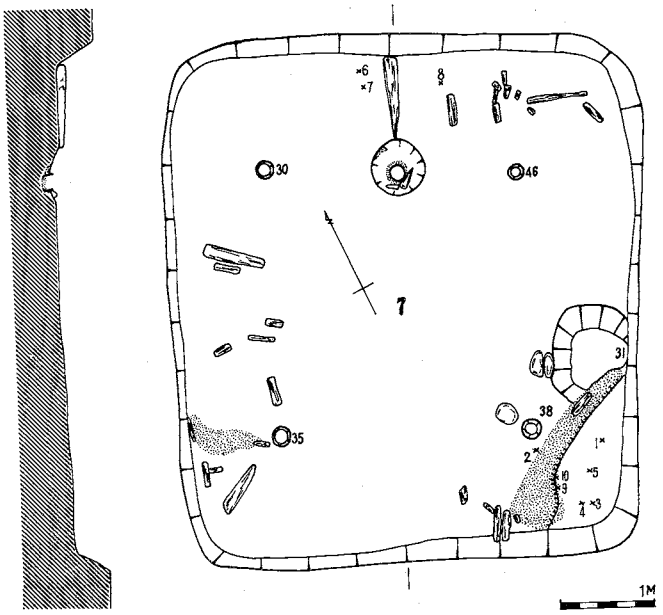


2．5号住居址

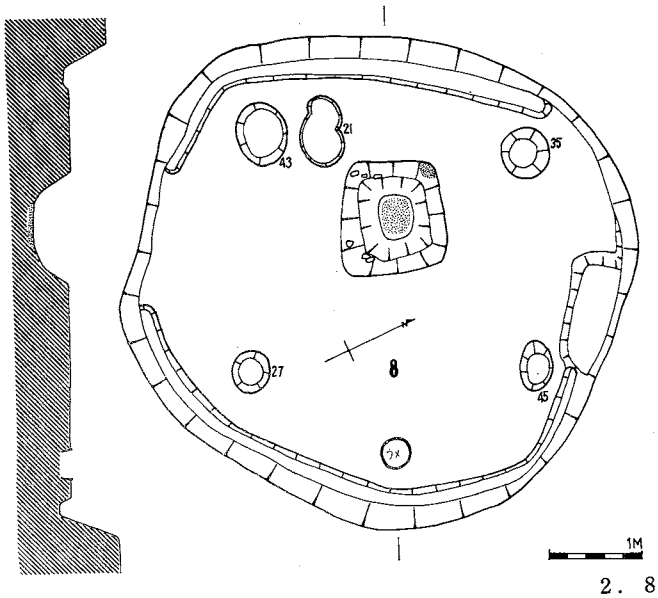


3．6号住居址

第18図　酒屋前遺跡3号・4号・5号・6号住居址（1：80）

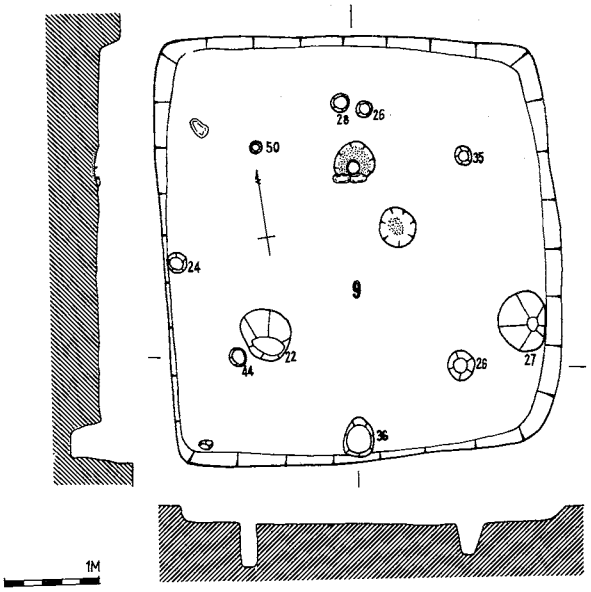


1．7号住居址

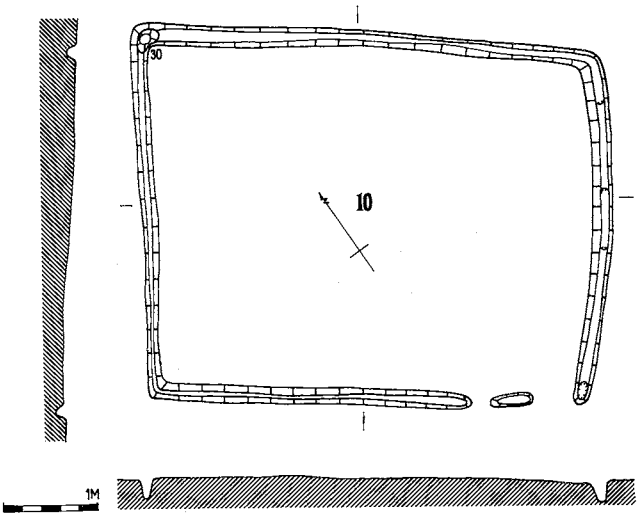


2．8号住居址

第19図　酒屋前遺跡7号・8号住居址（1：80）

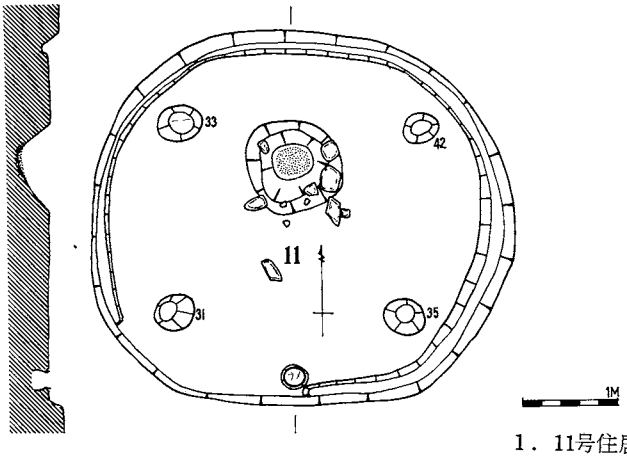


1．9号住居址

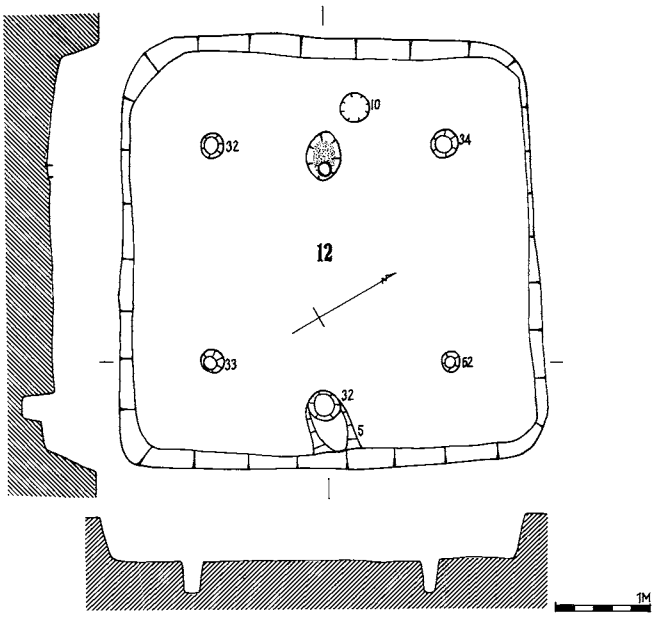


2．10号住居址

第20図　酒屋前遺跡9号・10号住居址（1：80）

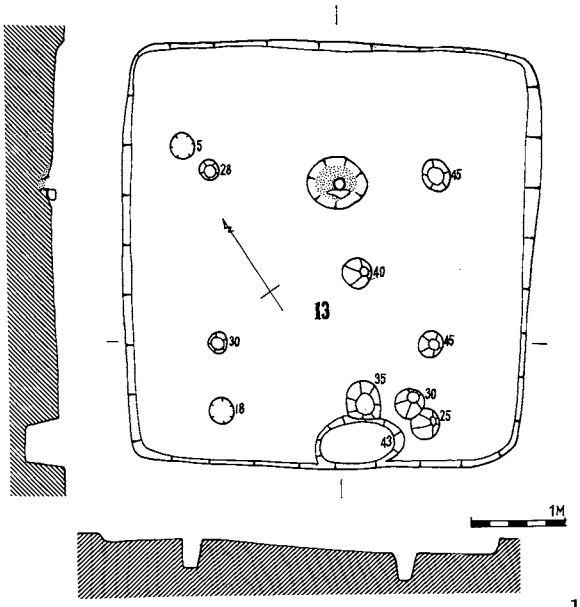


1．11号住居址

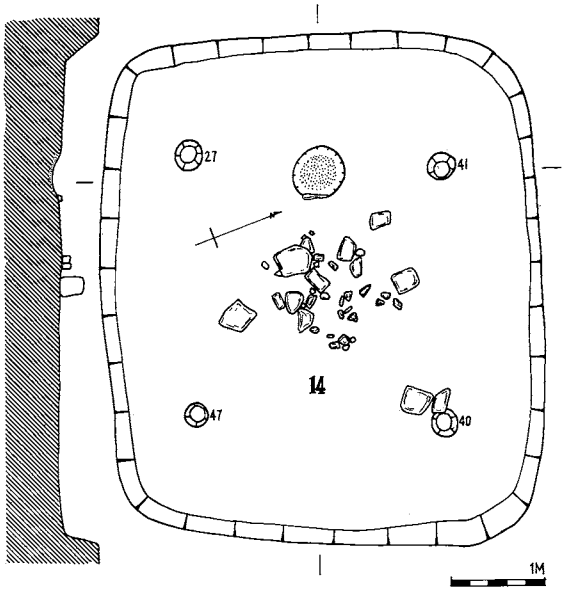


2．12号住居址

第 21図　酒屋前遺跡11号・12号住居址（1：80）

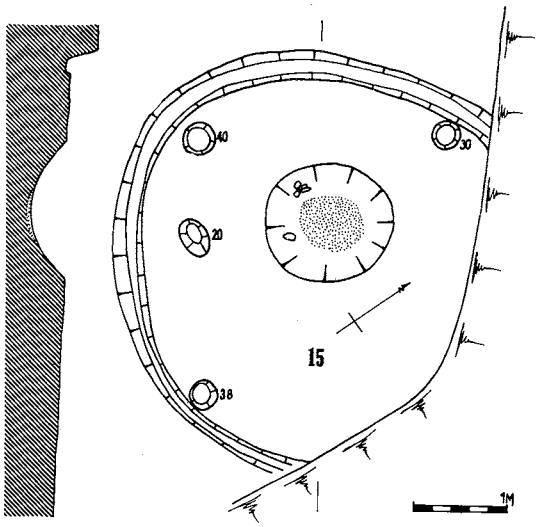


1．13号住居址

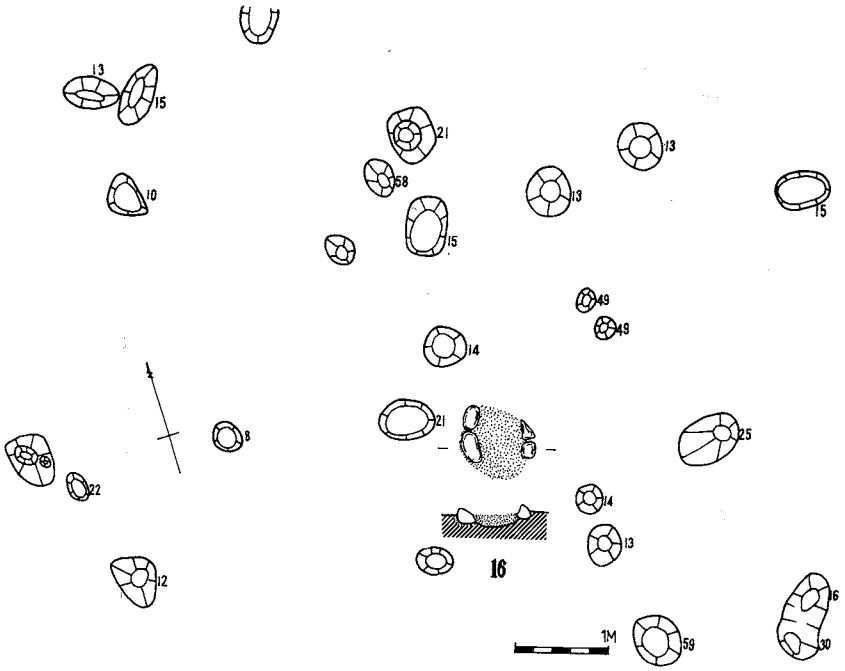


2．14号住居址

第22図　酒屋前遺跡13号・14号住居址（1：80）

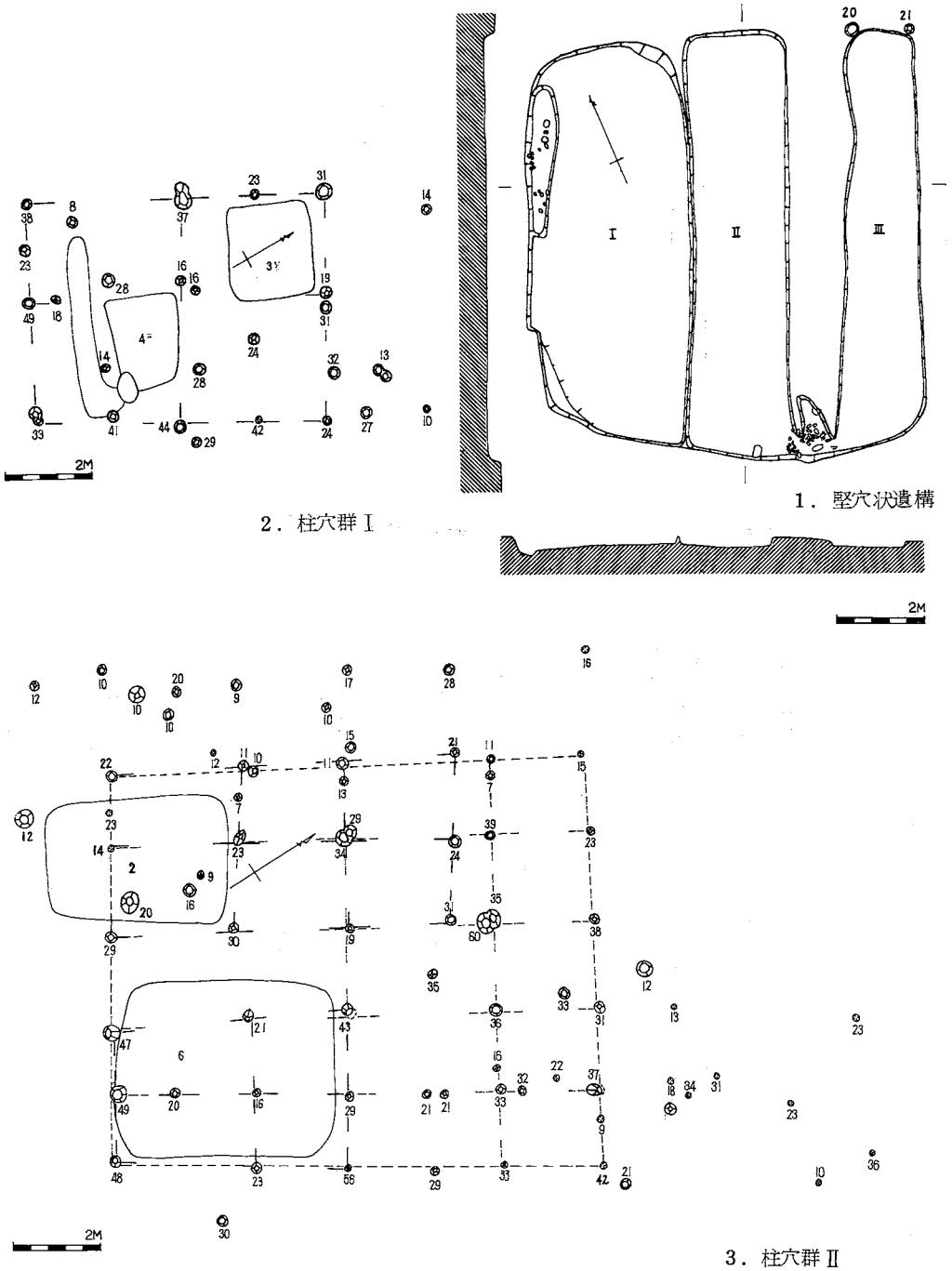


1．15号住居址

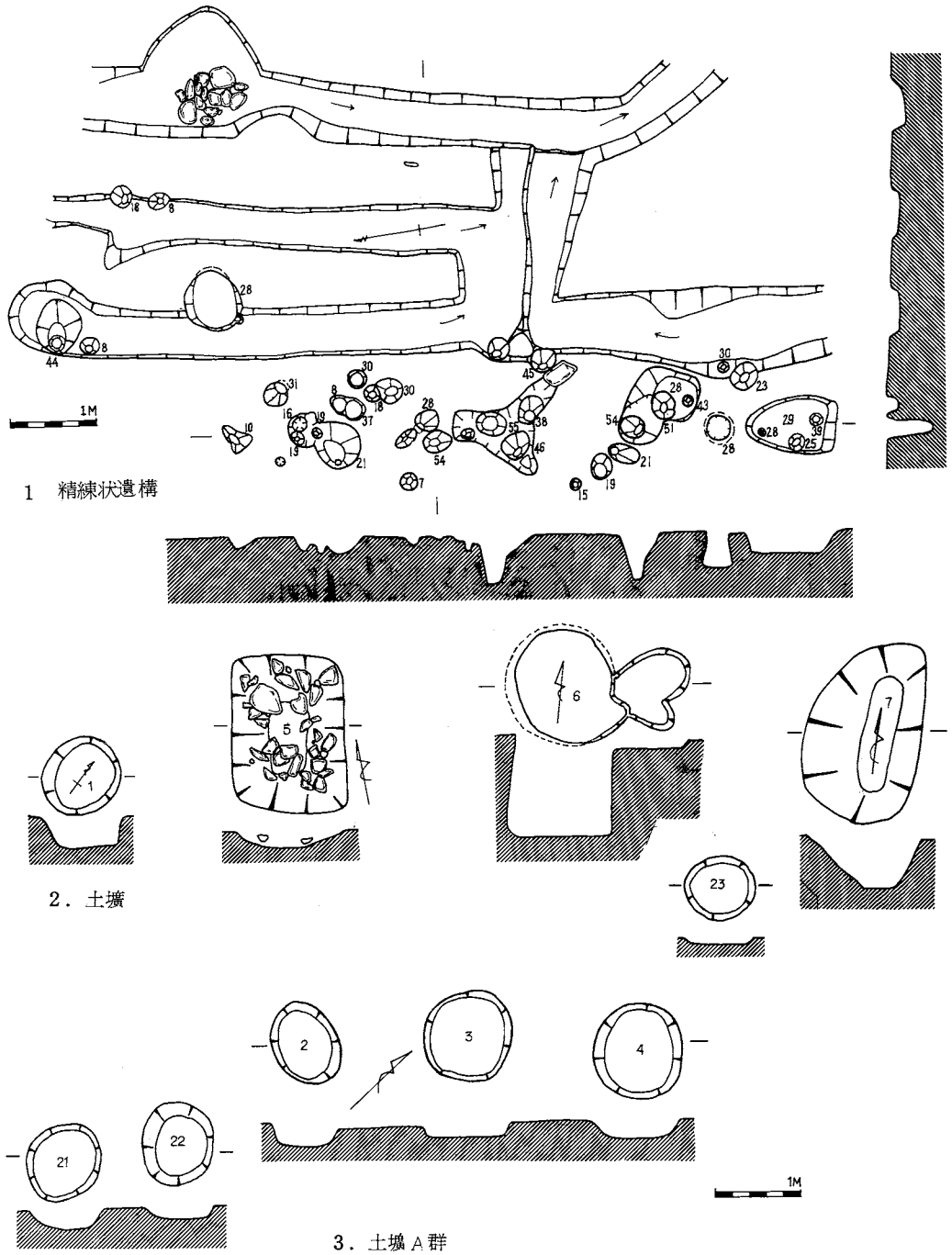


2．16号住居址

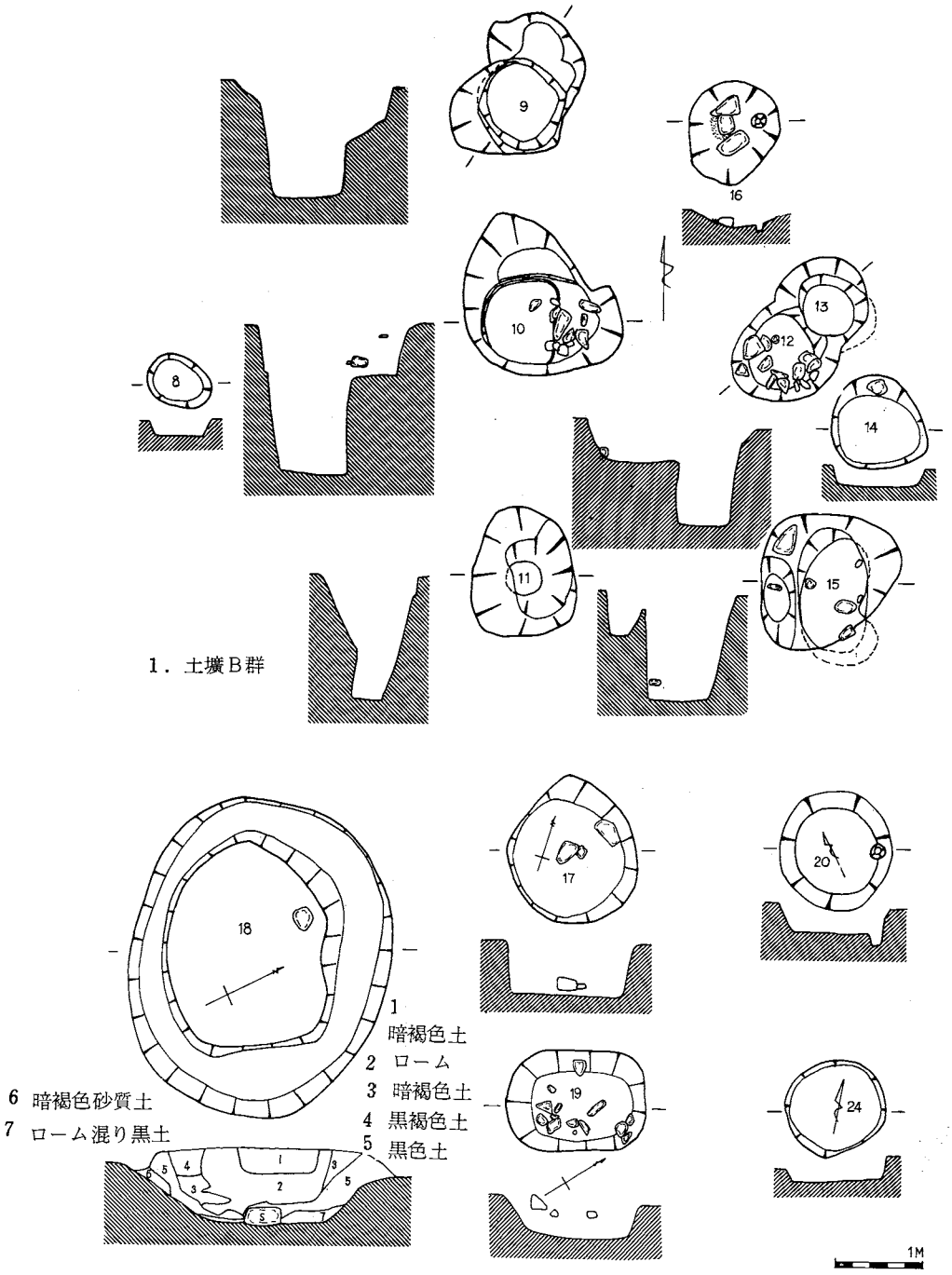
第23図　酒屋前遺跡15号・16号住居址（1：80）



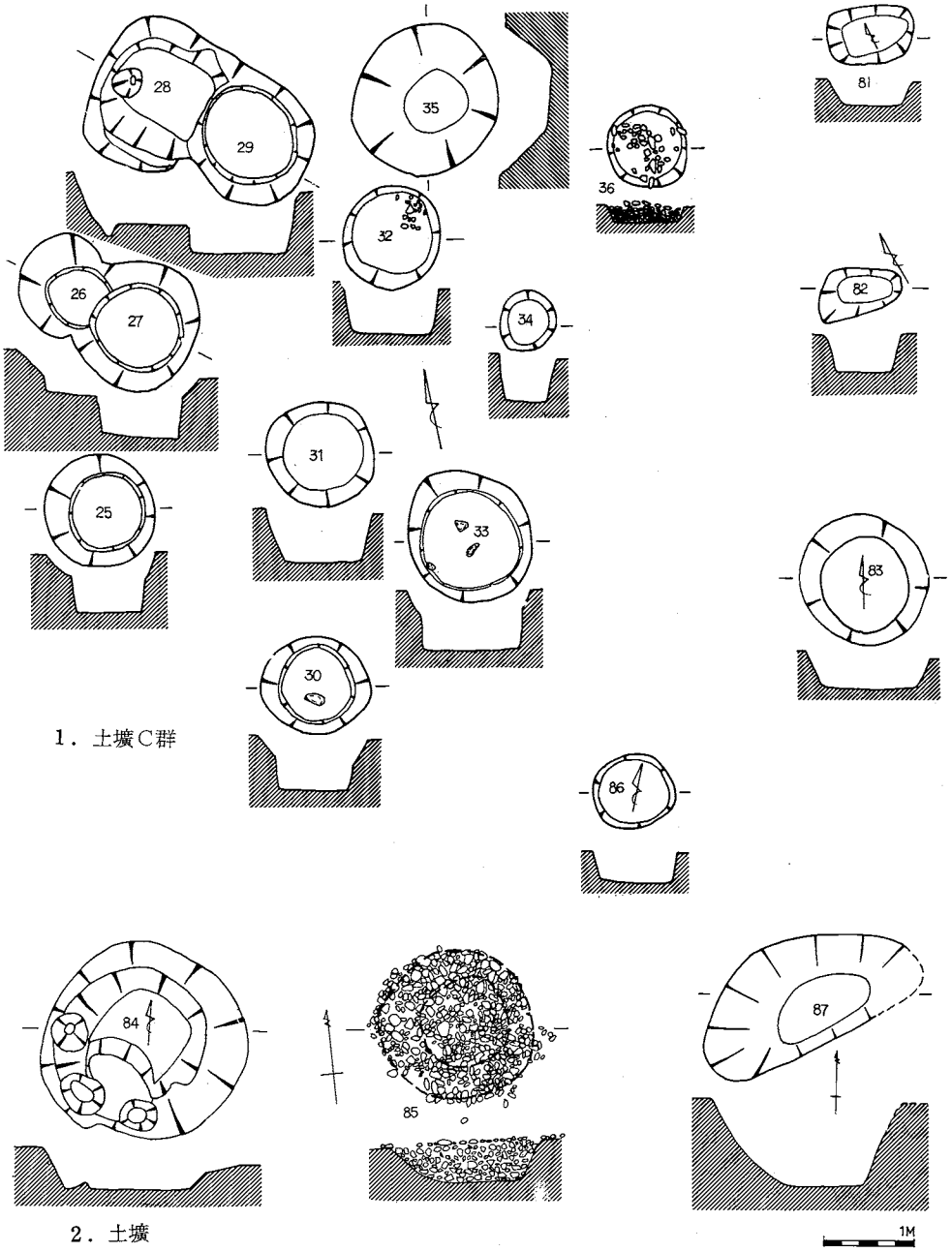
第 24図　酒屋前遺跡竪穴状遺構及び柱穴群Ⅰ・Ⅱ（1： 160）



第 25図　酒屋前遺跡精練状遺構及び土壙図（1：80）



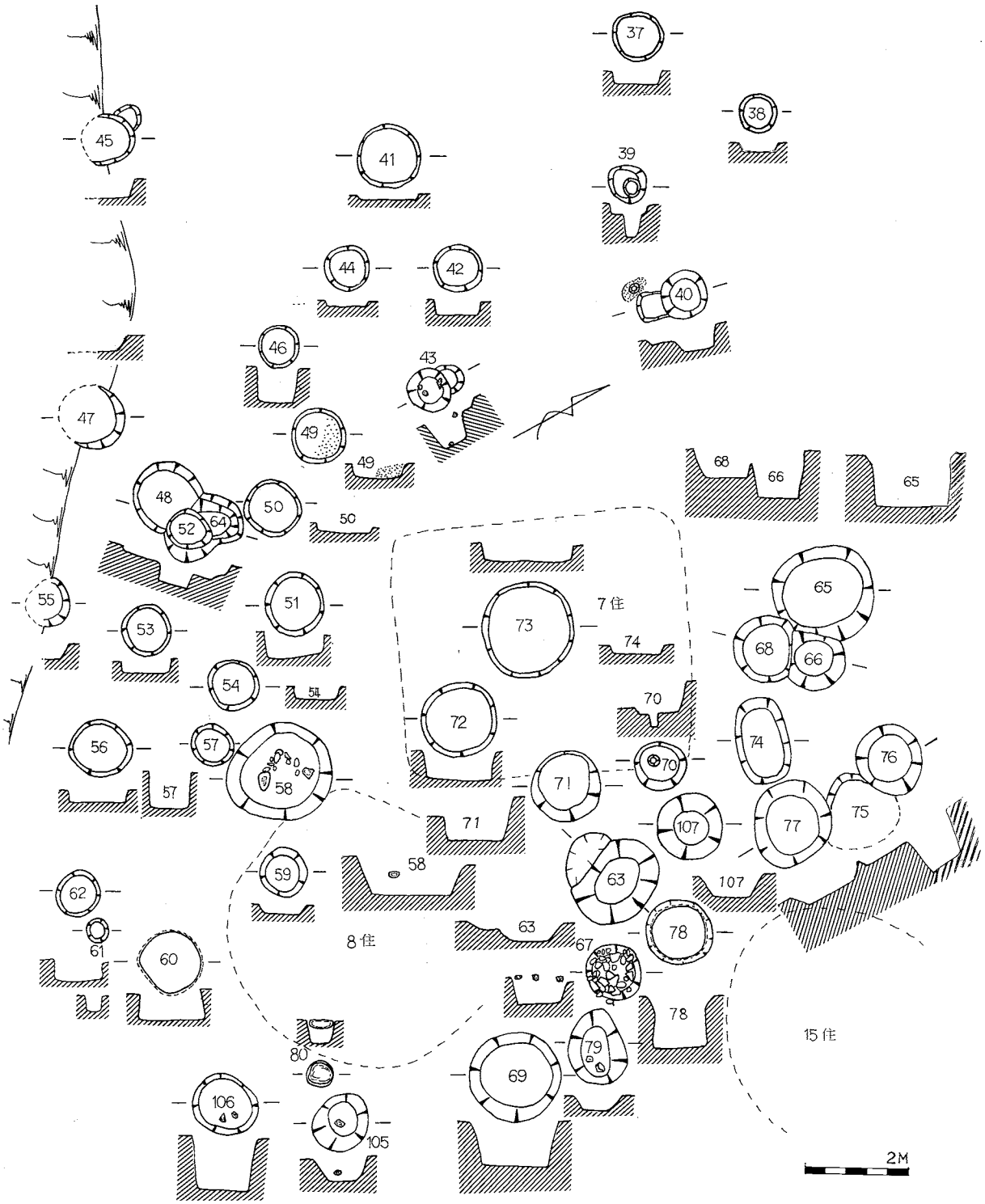
第 26図　酒屋前遺跡土壙図（1：80）



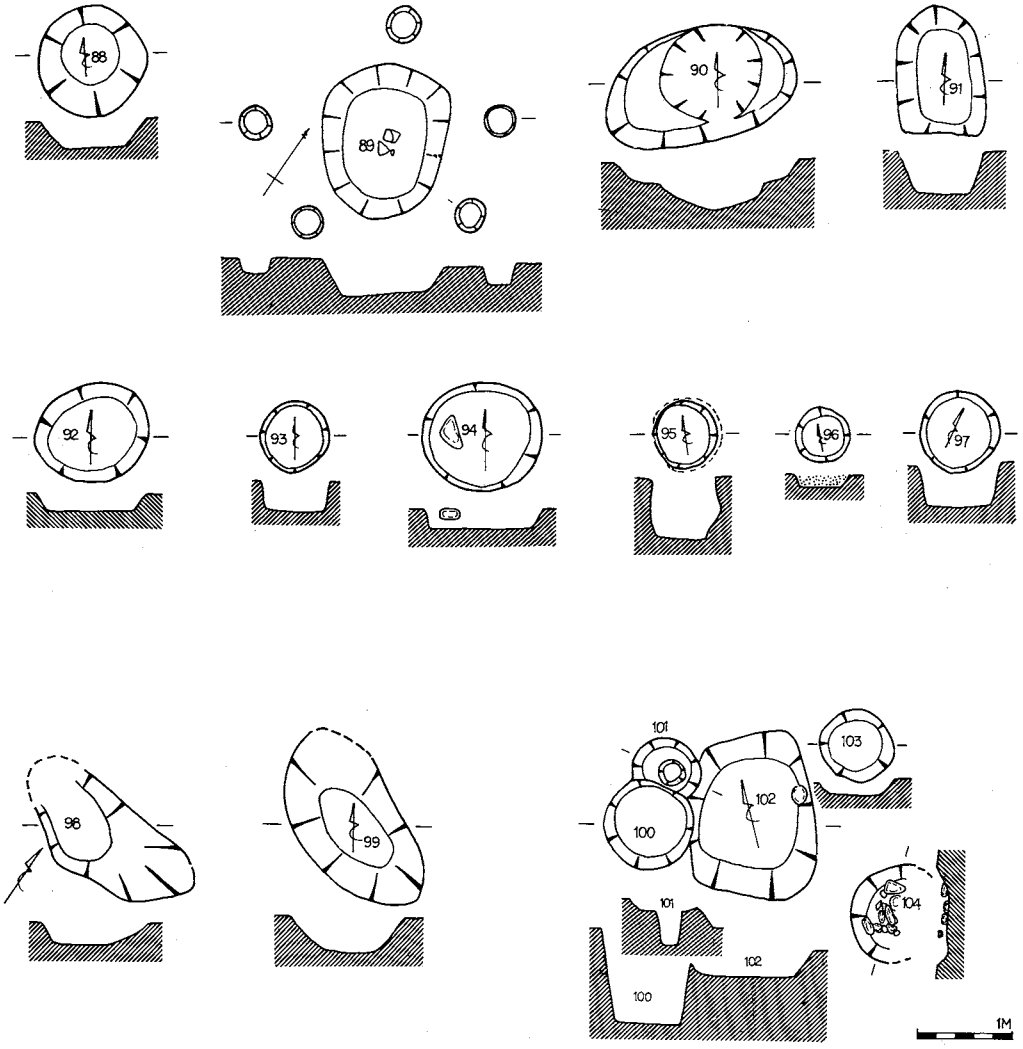
1．土壙C群

2．土壙

第27図　酒屋前遺跡土壙図（1：80）

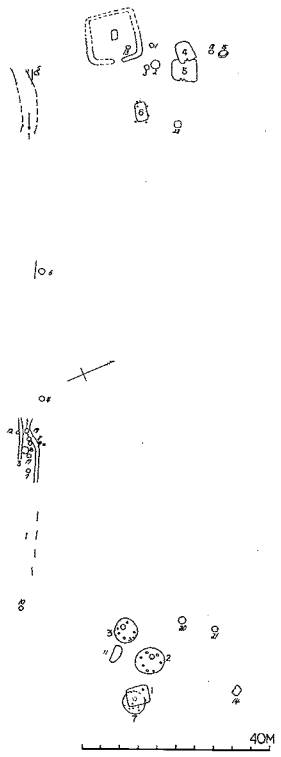


第28図　酒屋前遺跡土壙D群　（1：120）

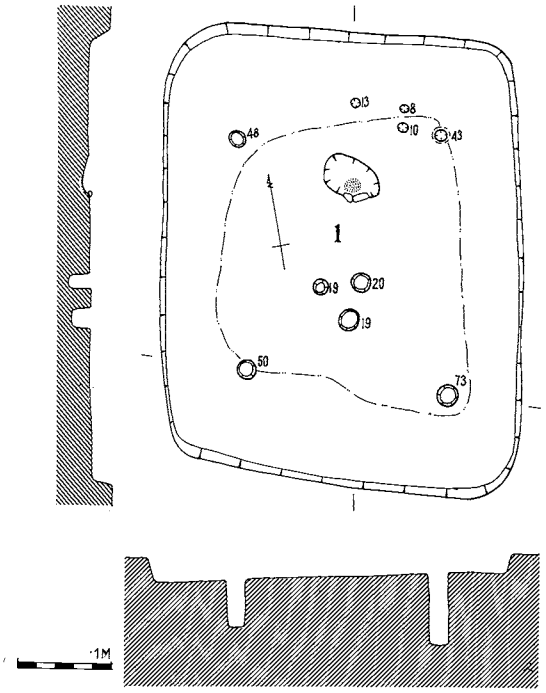


土壙E群

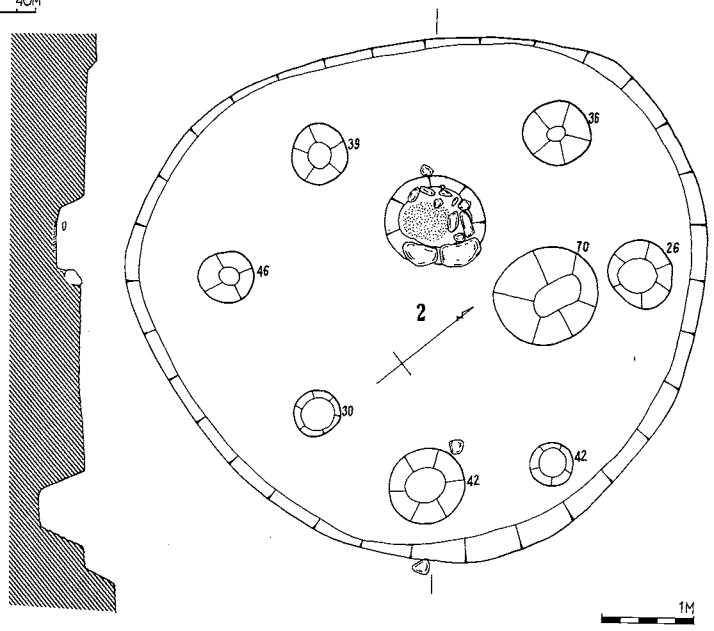
第 29図　酒屋前遺跡土壙図（1：80）



1．遺構全体図（1:800 ）

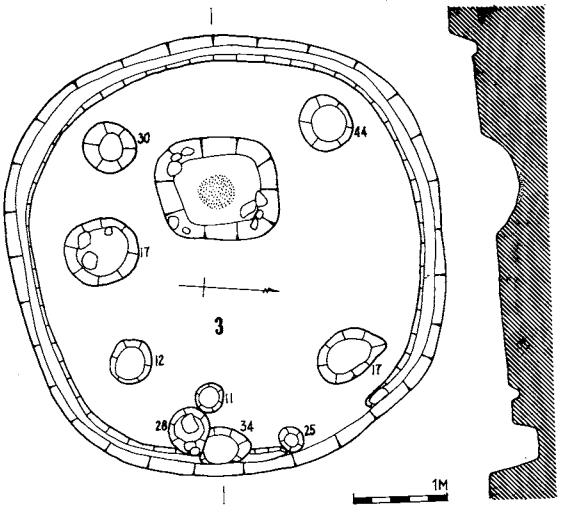


2．1号住居址（1:80 ）

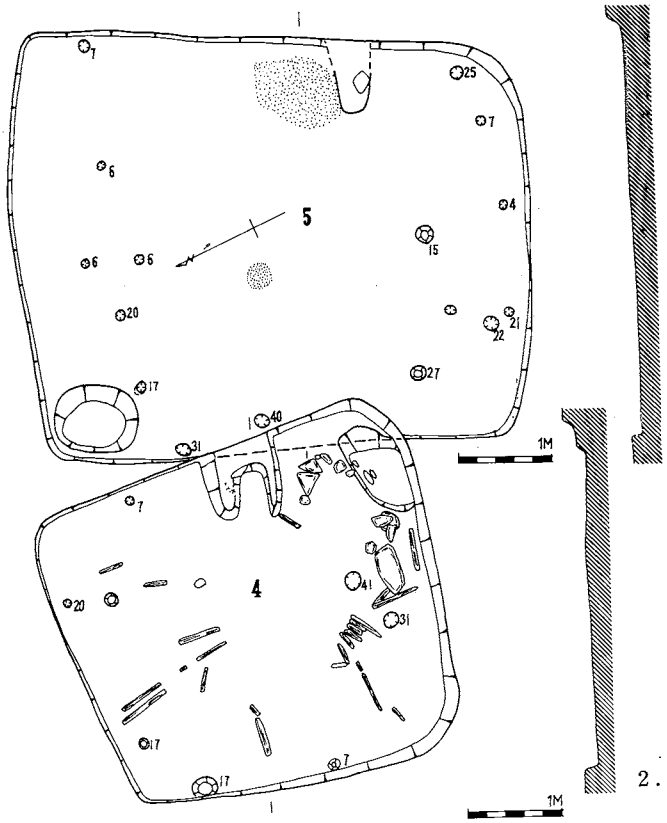


3．2号住居址（1:80 ）

第 30図　滝沢井尻遺跡遺構全体図及び1号・2号住居址

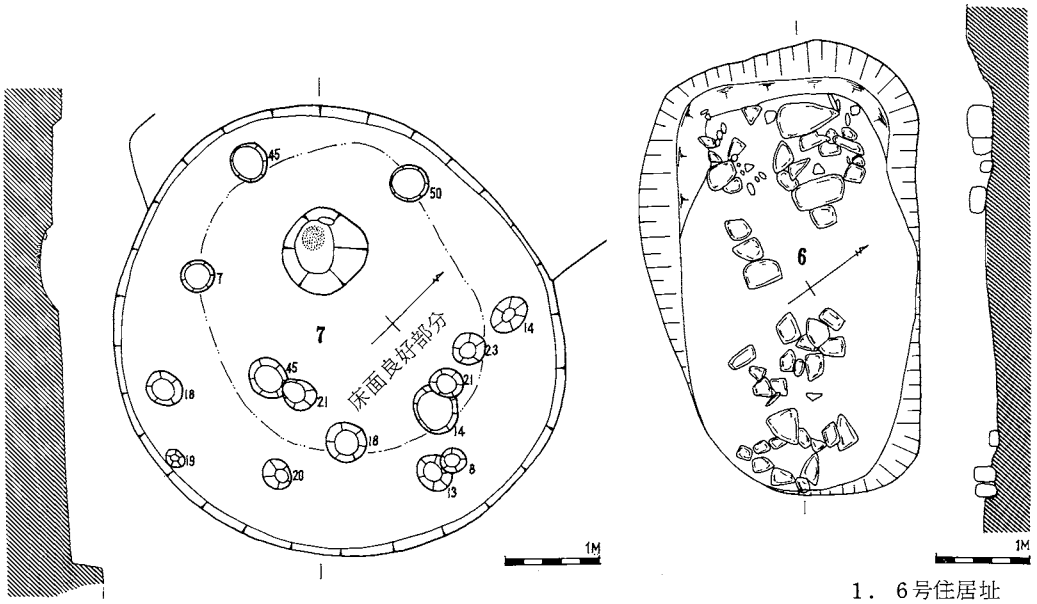


1．3号住居址



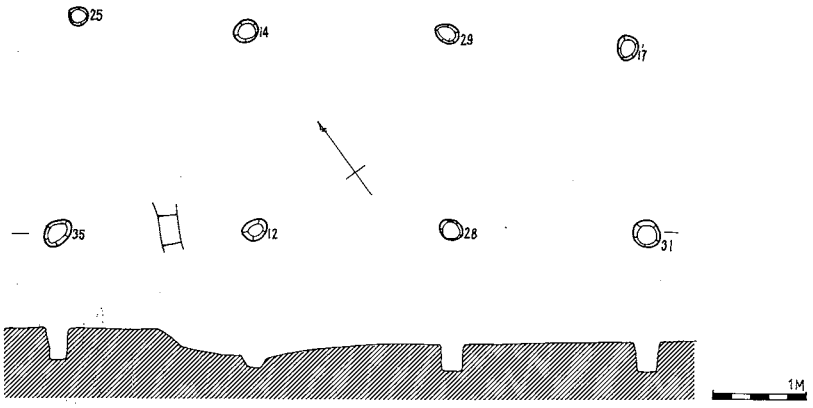
2．4号・5号住居址

第31図　滝沢井尻遺跡3号・4号・5号住居址（1：80）



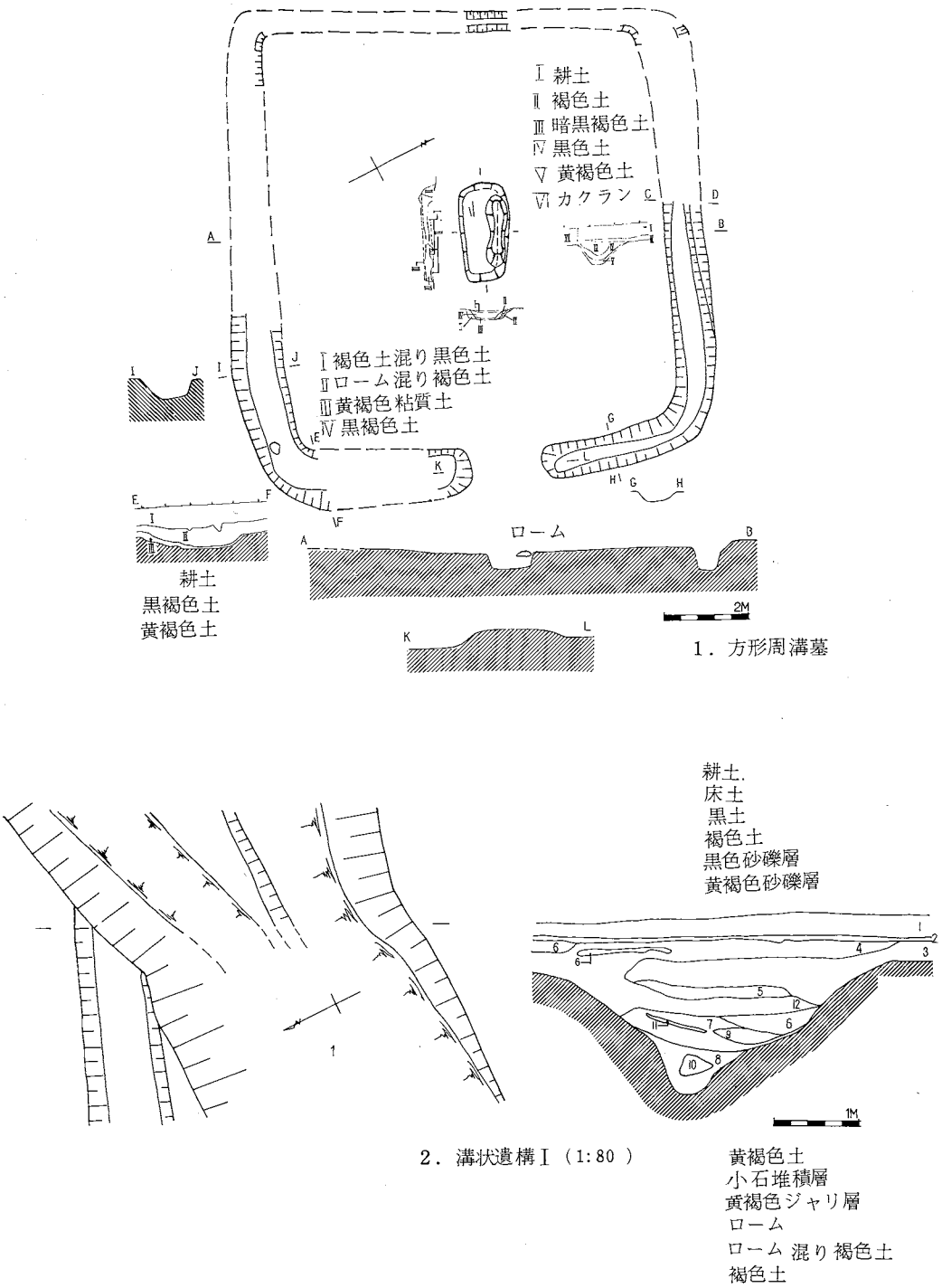
1．6号住居址

2．7号住居址

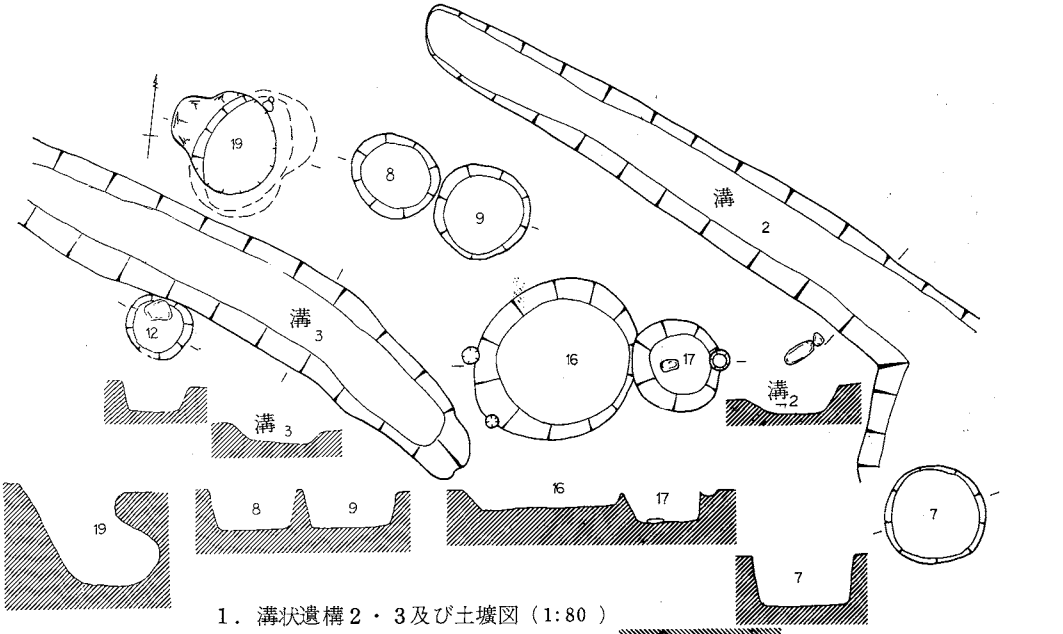


3．柱穴址

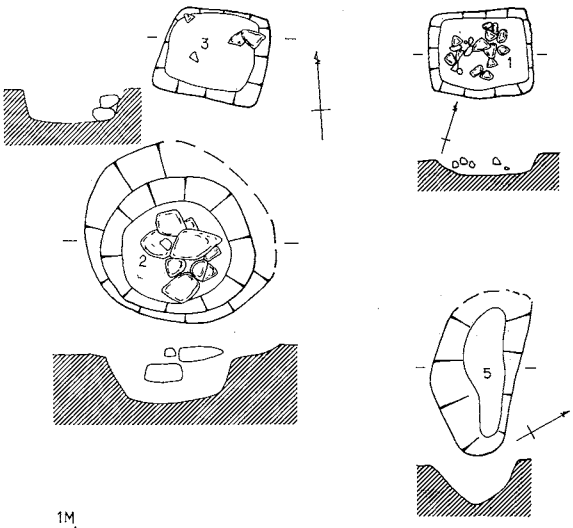
第32図　滝沢井尻遺跡6号・7号住居址及び柱穴址（1：80）



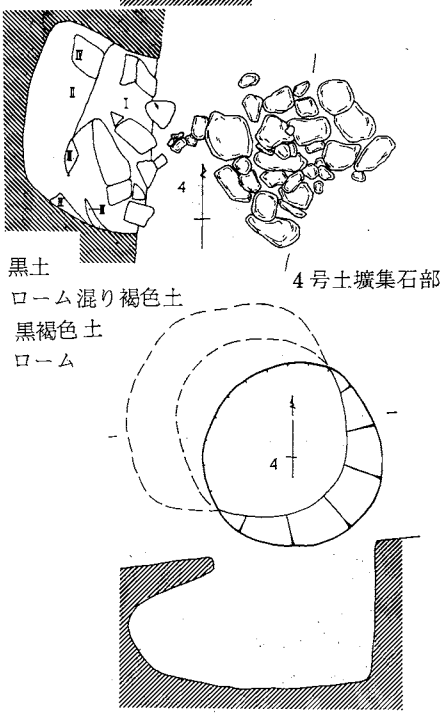
第33図　滝沢井尻遺跡方形周溝墓及び溝状遺構1



1．溝状遺構2・3及び土壙図（1:80 ）

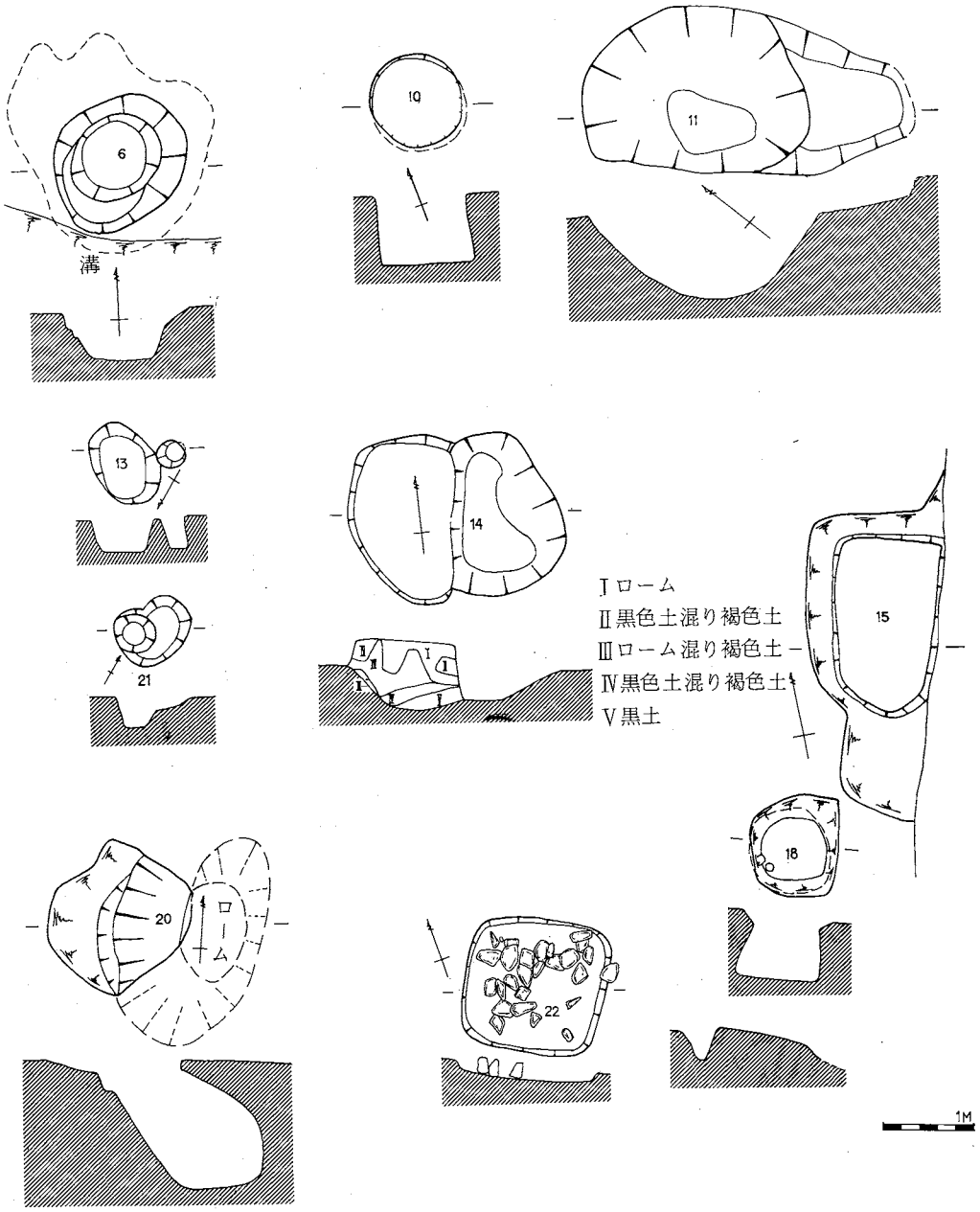


2．1号～3号・5号土壙図（1:80 ）

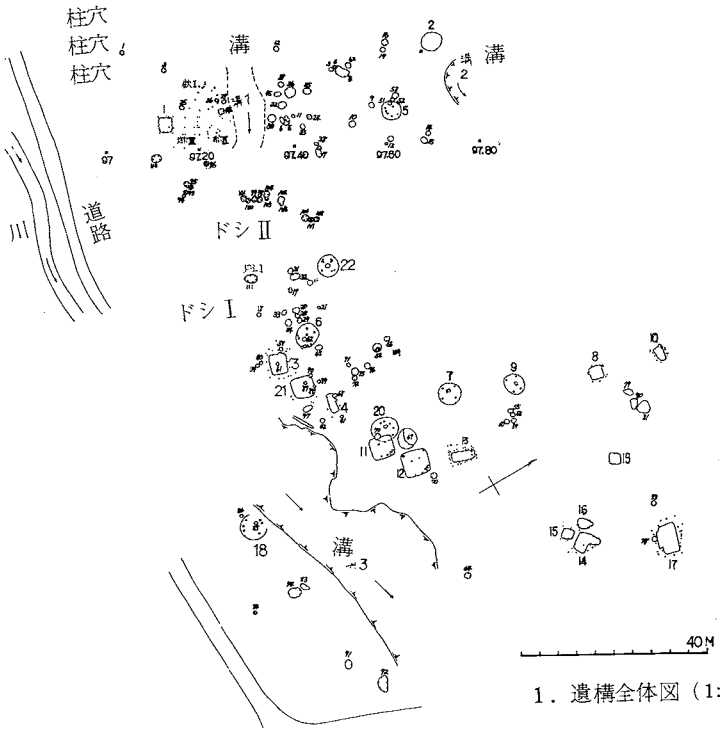


3．4号土壙図（1:40 ）

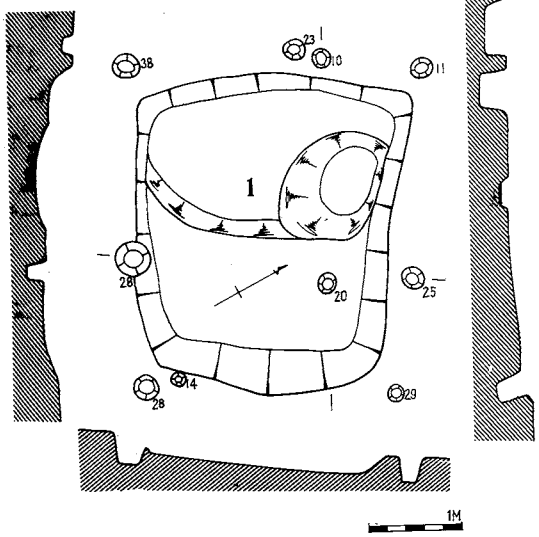
第 34図　滝沢井尻遺跡溝状遺構2・3及び土壙図



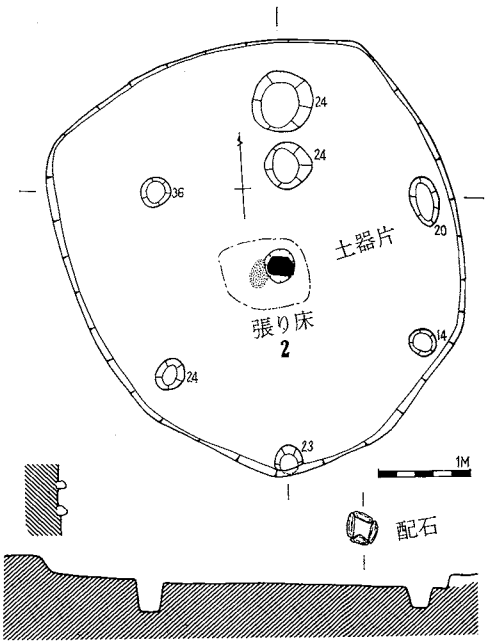
第35図　滝沢井尻遺跡土壙図（1：80）



1．遺構全体図（1:1800 ）

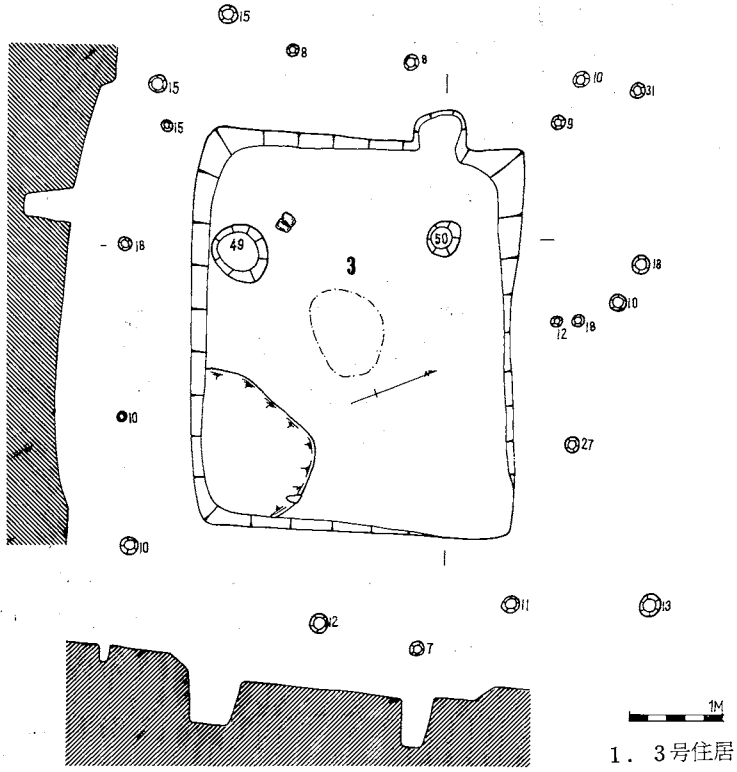


2．1号住居址（1:80 ）

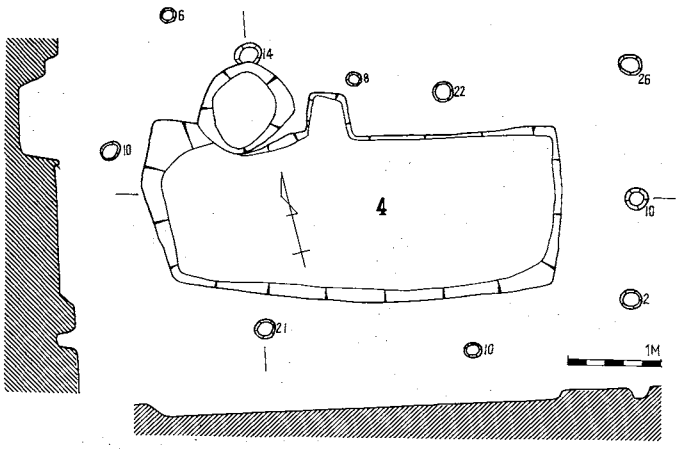


3．2号住居址（1:80 ）

第36図　小垣外・辻垣外遺跡遺構全体図及び1号・2号住居址

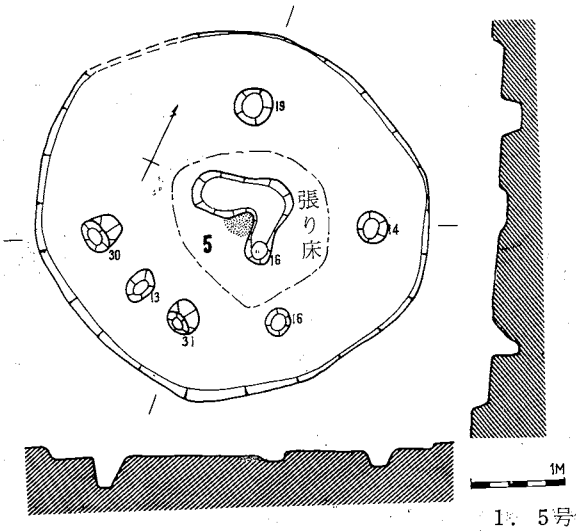


1．3号住居址

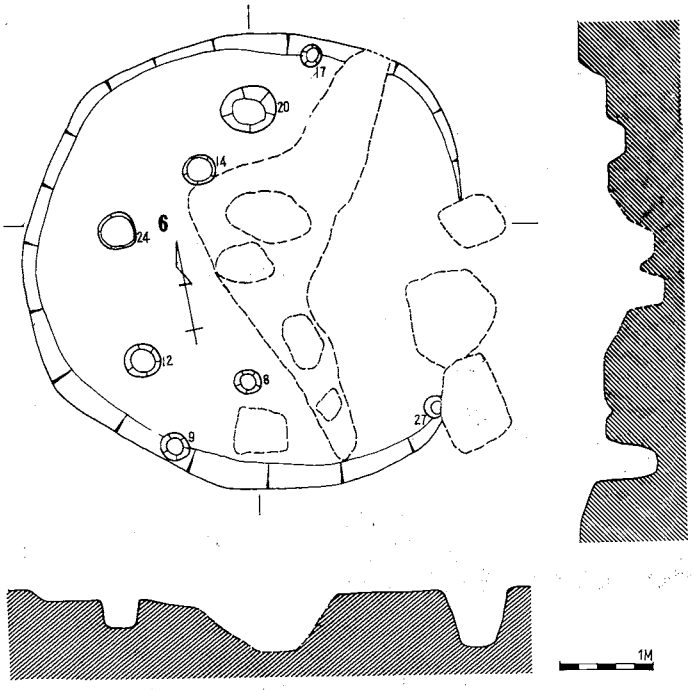


2．4号住居址

第37図　小垣外・辻垣外遺跡3号・4号住居址（1：80）

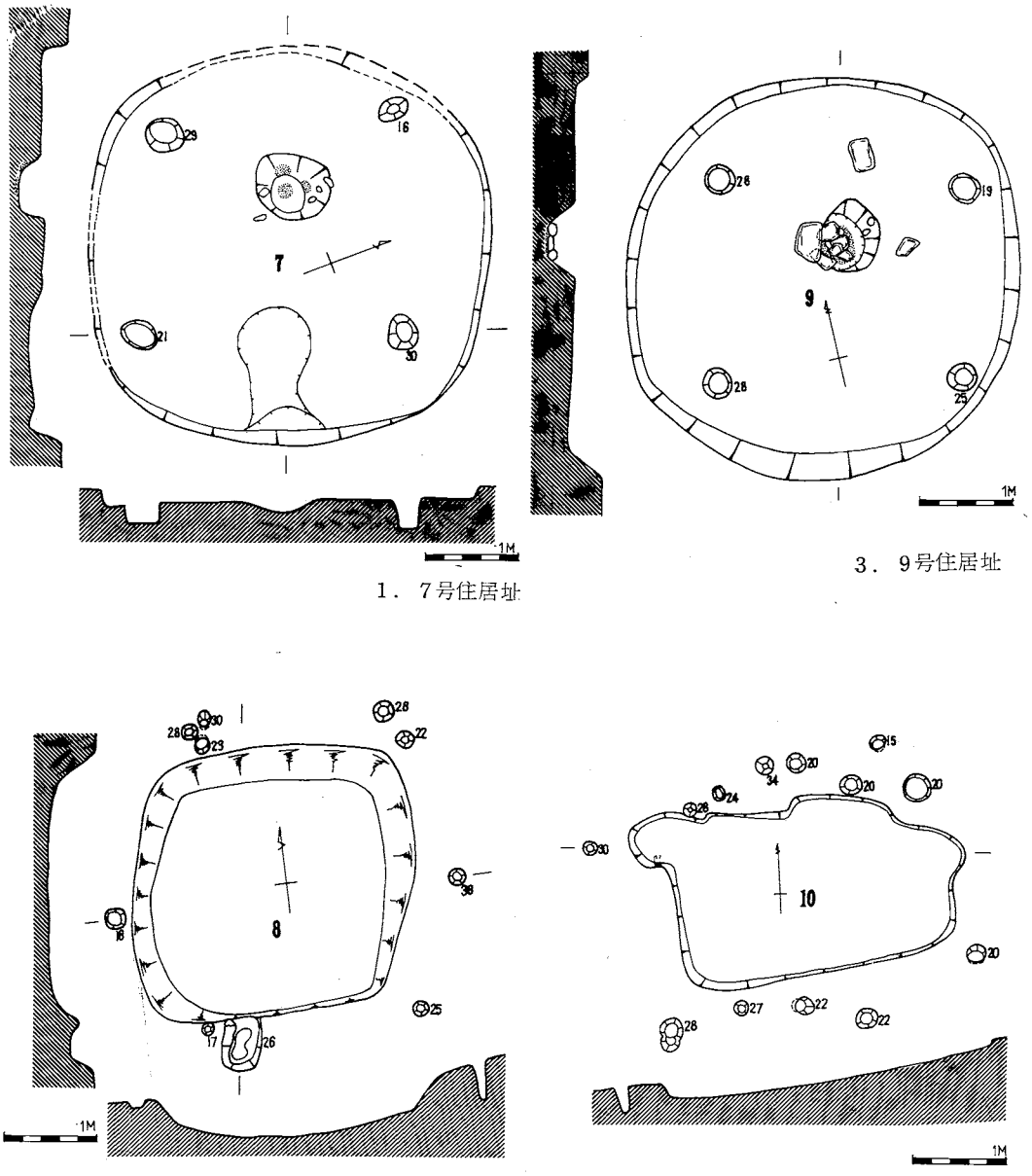


1．5号住居址



2．6号住居址

第38図　小垣外・辻垣外遺跡5号・6号



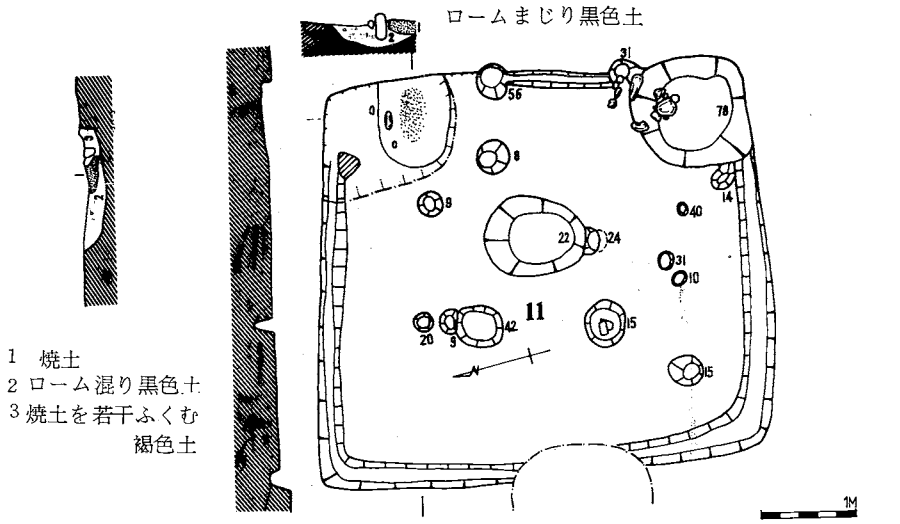
1．7号住居址

3．9号住居址

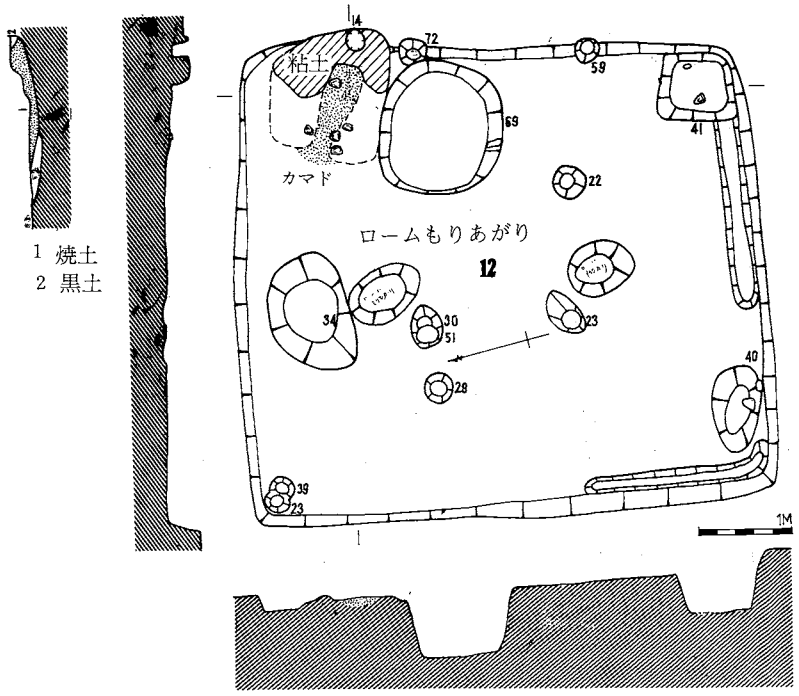
2．8号住居址

4．10号住居址

第39図　小垣外・辻垣外遺跡7号・8号・9号・10号住居址（1：80）

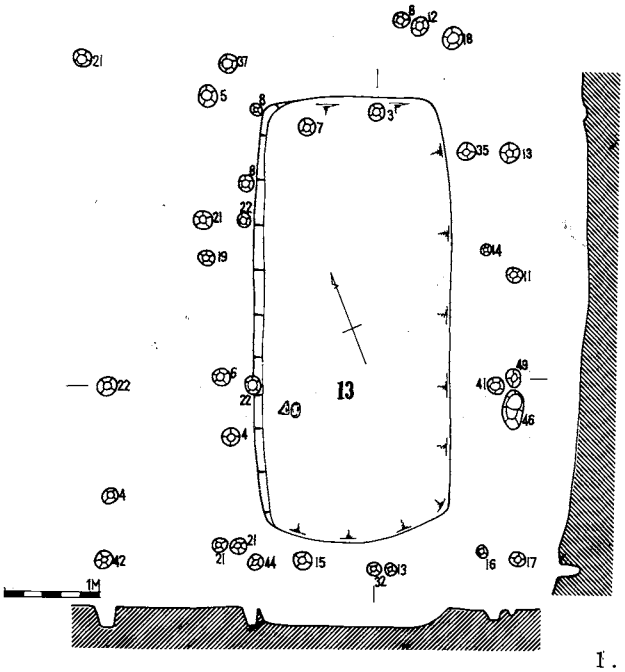


1．11号住居址

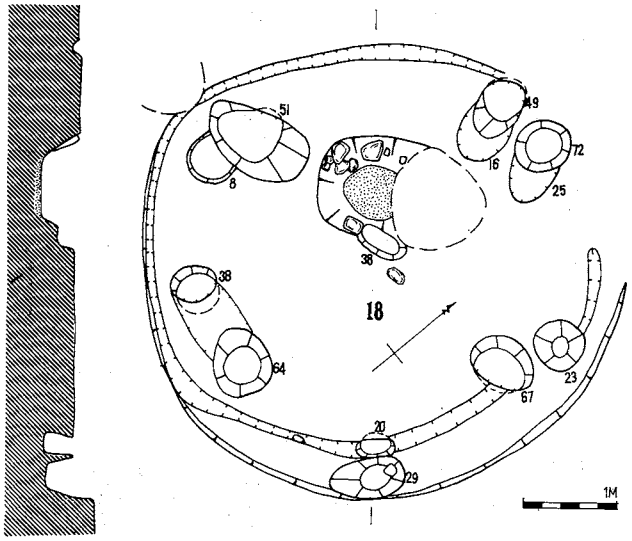


2．12号住居址

第40図　小垣外・辻垣外遺跡11号・12号住居址（1：80）

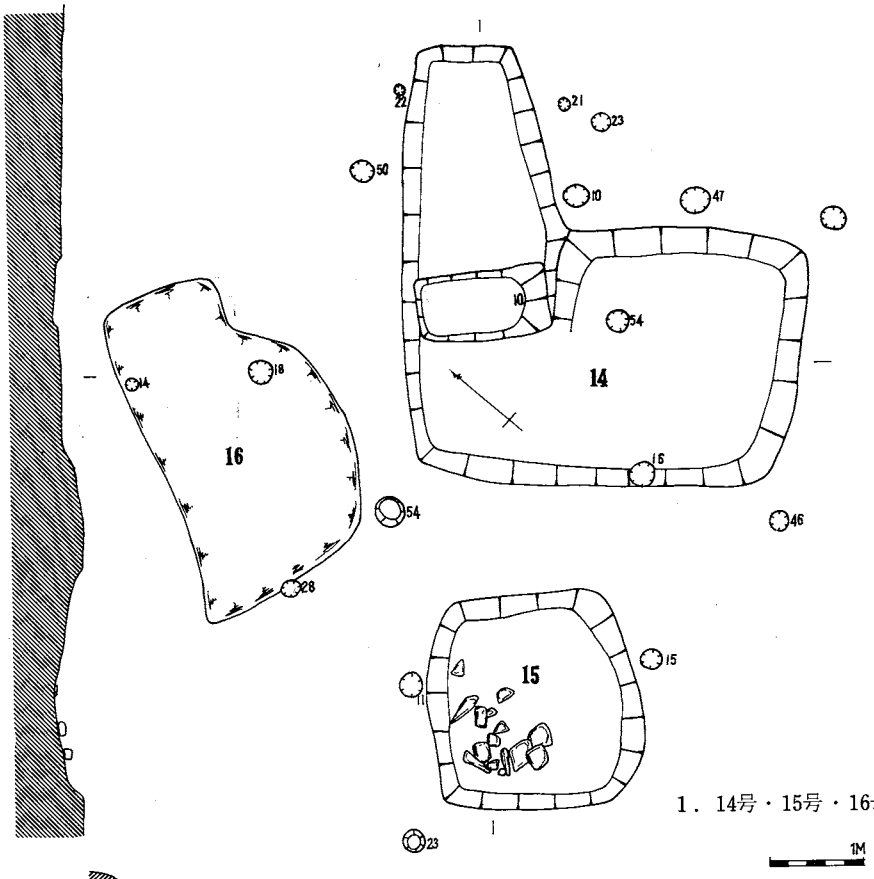


1．13号住居址

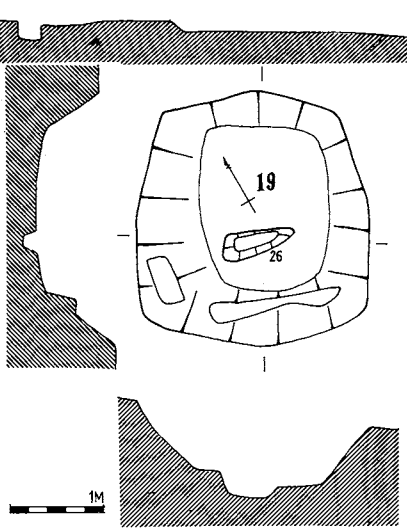


2．18号住居址

第 41図　小垣外・辻垣外遺跡13号・18号住居址（1：80）

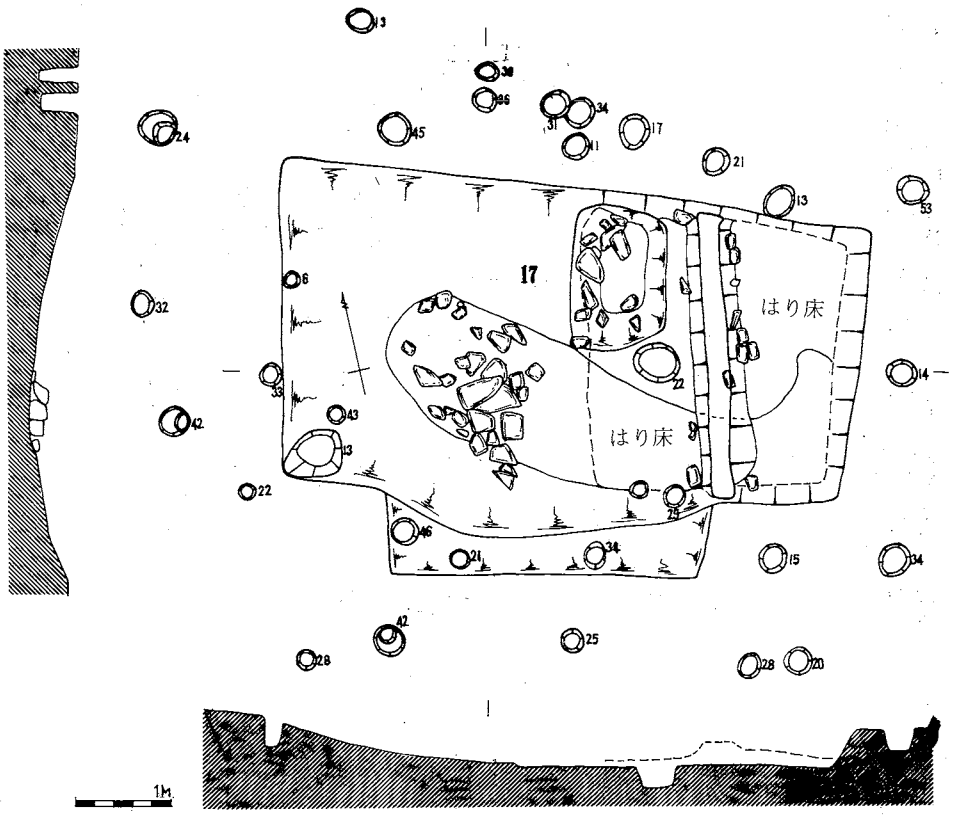


1．14号・15号・16号住居址

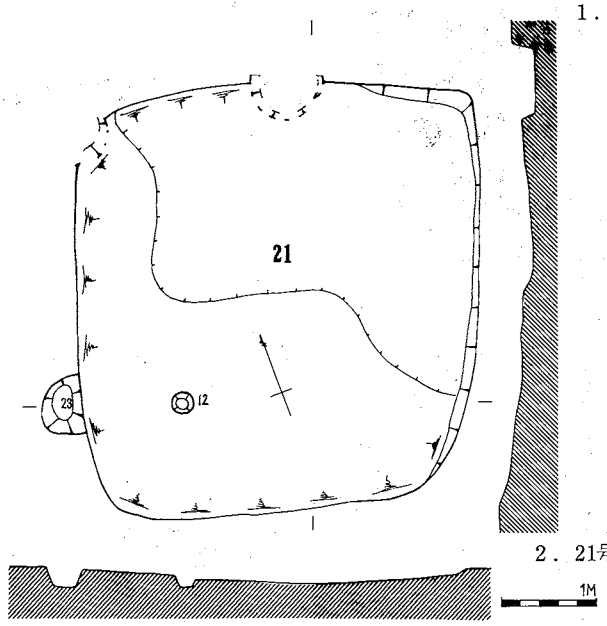


2．19号住居址

第42図　小垣外・辻垣外・跡14号・15号・16号・19号住居址（1：80）

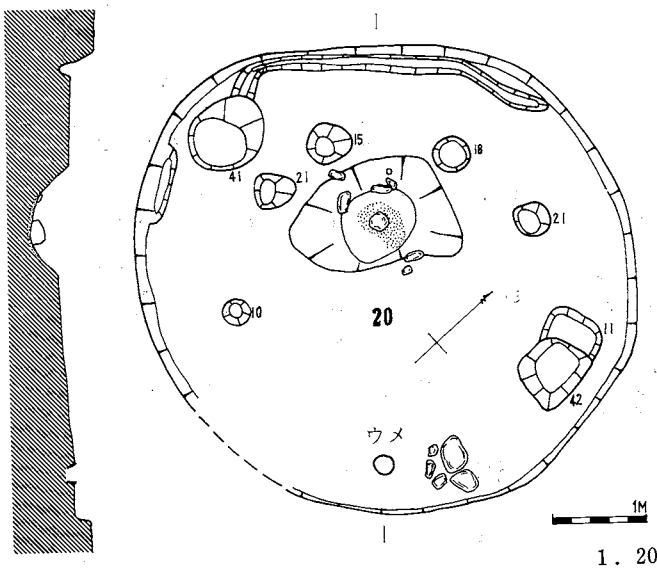


1．17号住居址

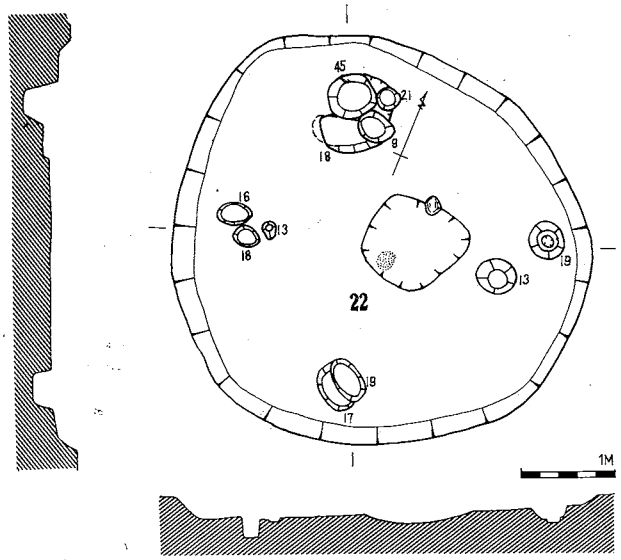


2．21号住居址

第 43図　小垣外・辻垣外遺跡17号・21号住居址（1：80）

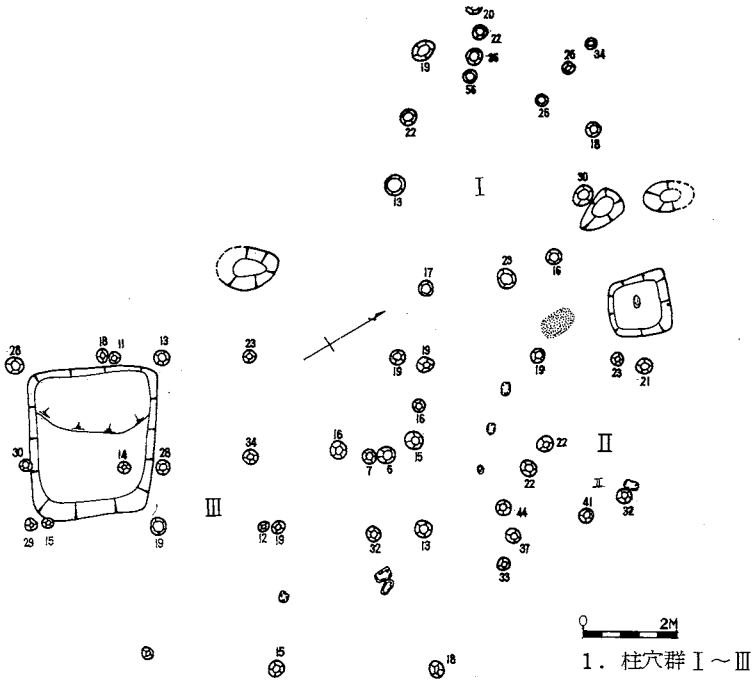


1．20号住居址

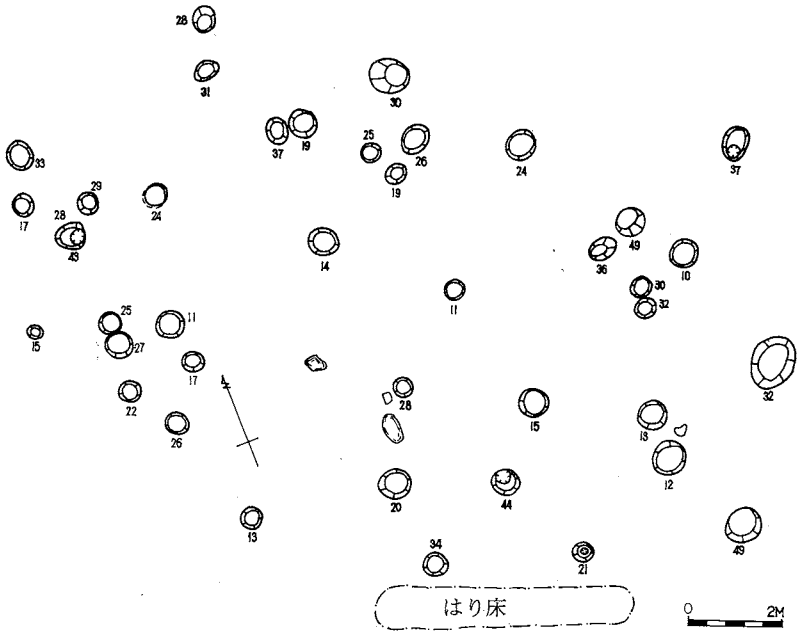


2．22号住居址

第 44図　小垣外・辻垣外遺跡20号・22号住居址（1：80）

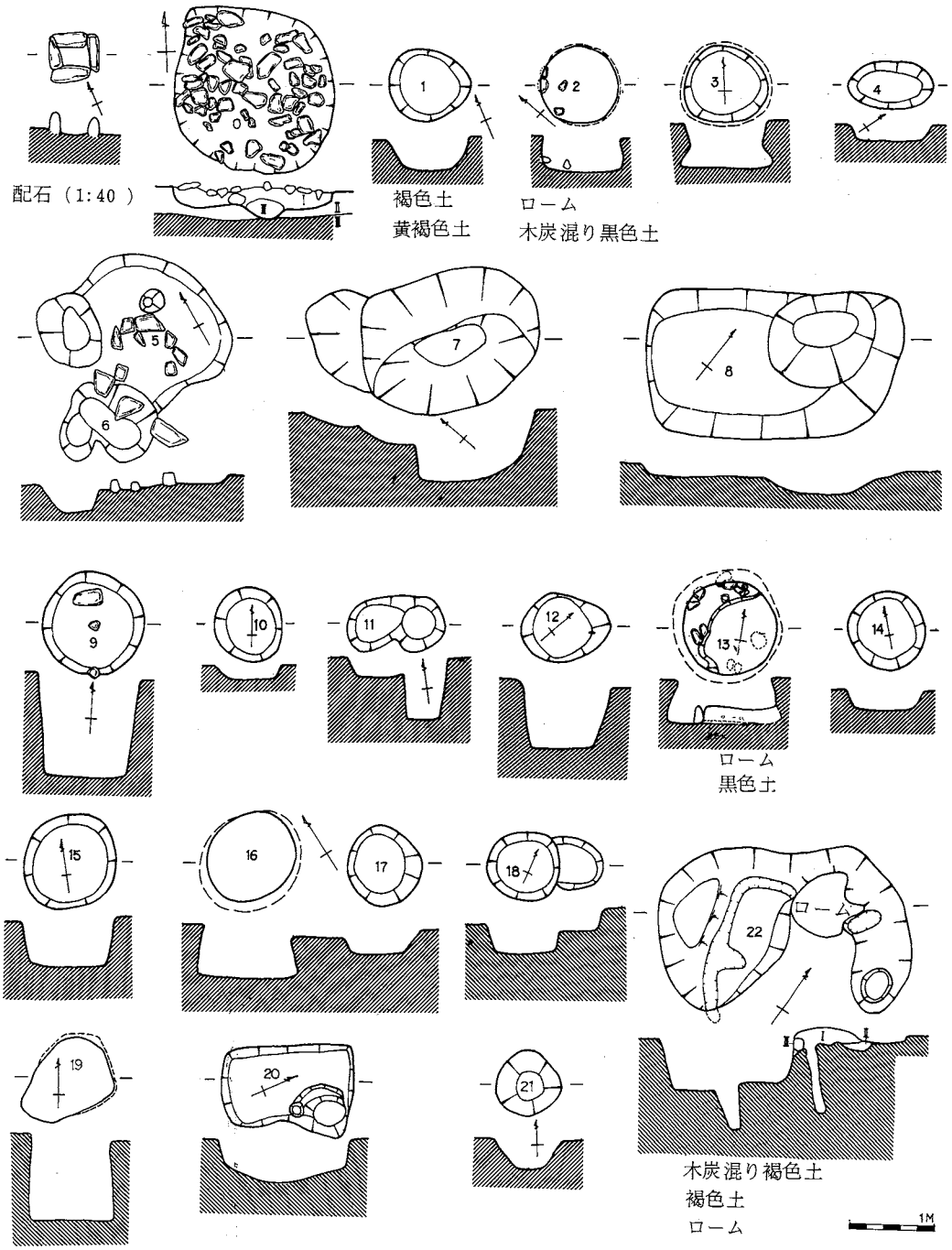


1．柱穴群Ⅰ～Ⅲ

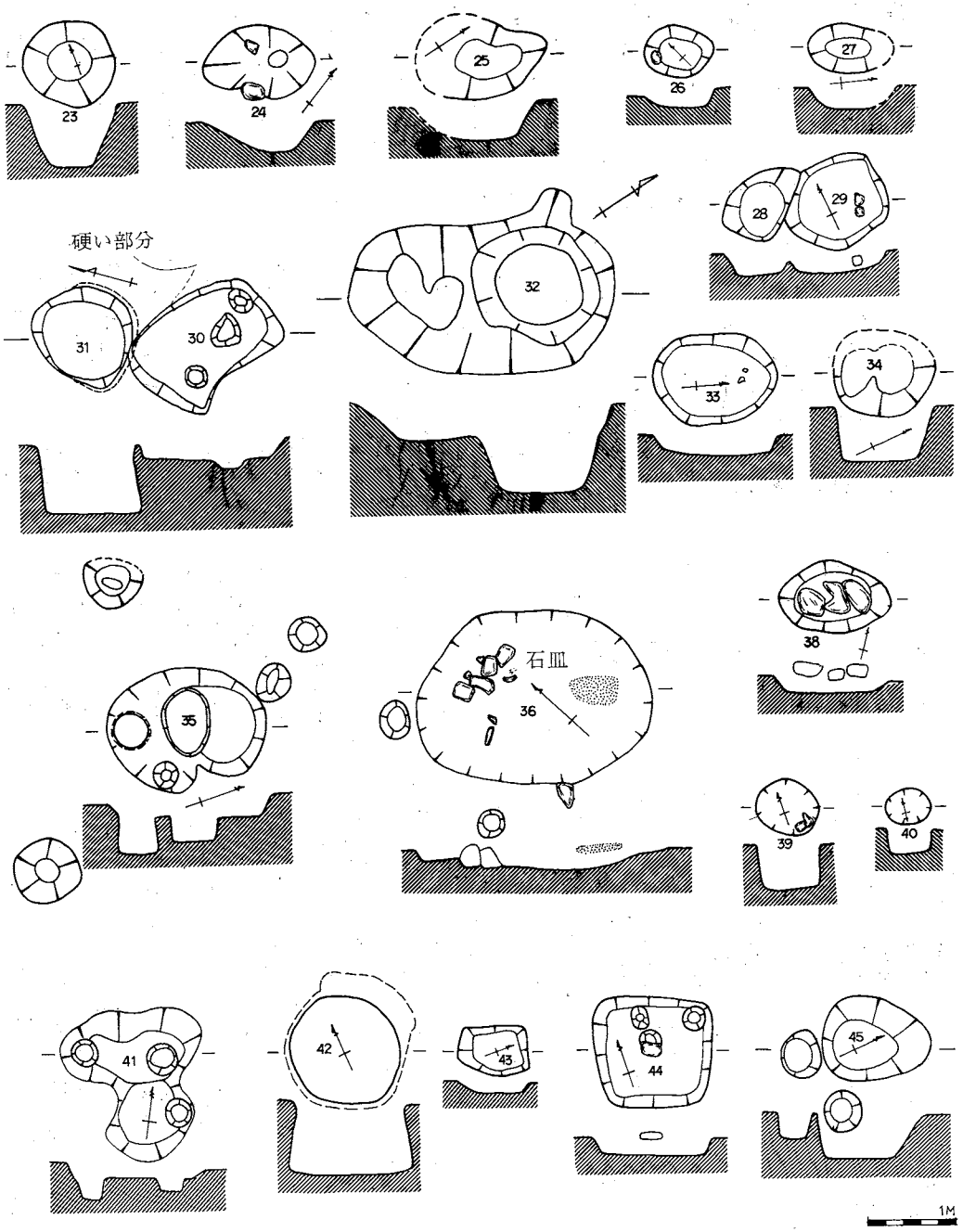


2．土器集中地Ⅱ下部ピット

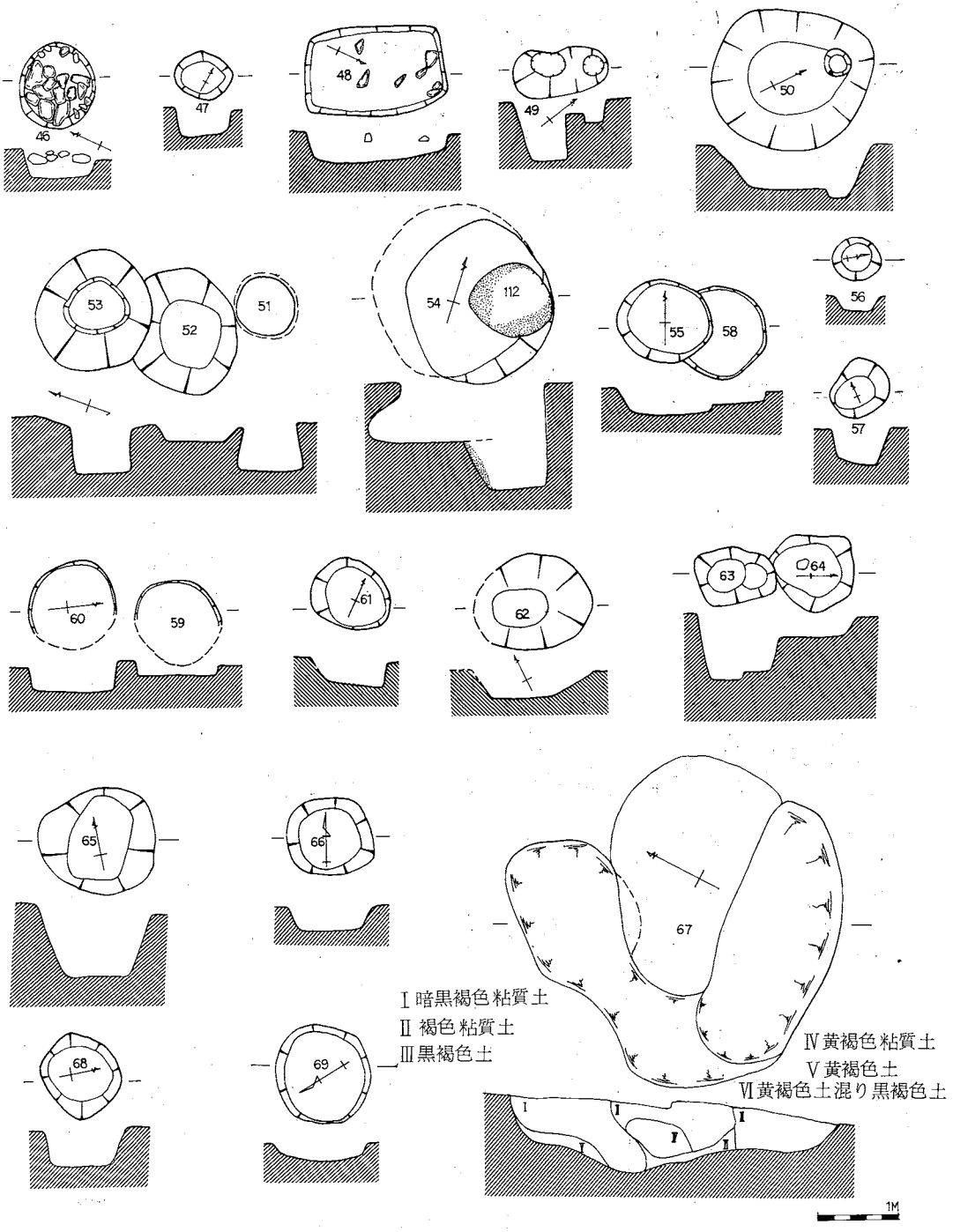
第45図　小垣外・辻垣外・遺跡柱穴群及び土器集中地Ⅱ（1：80）



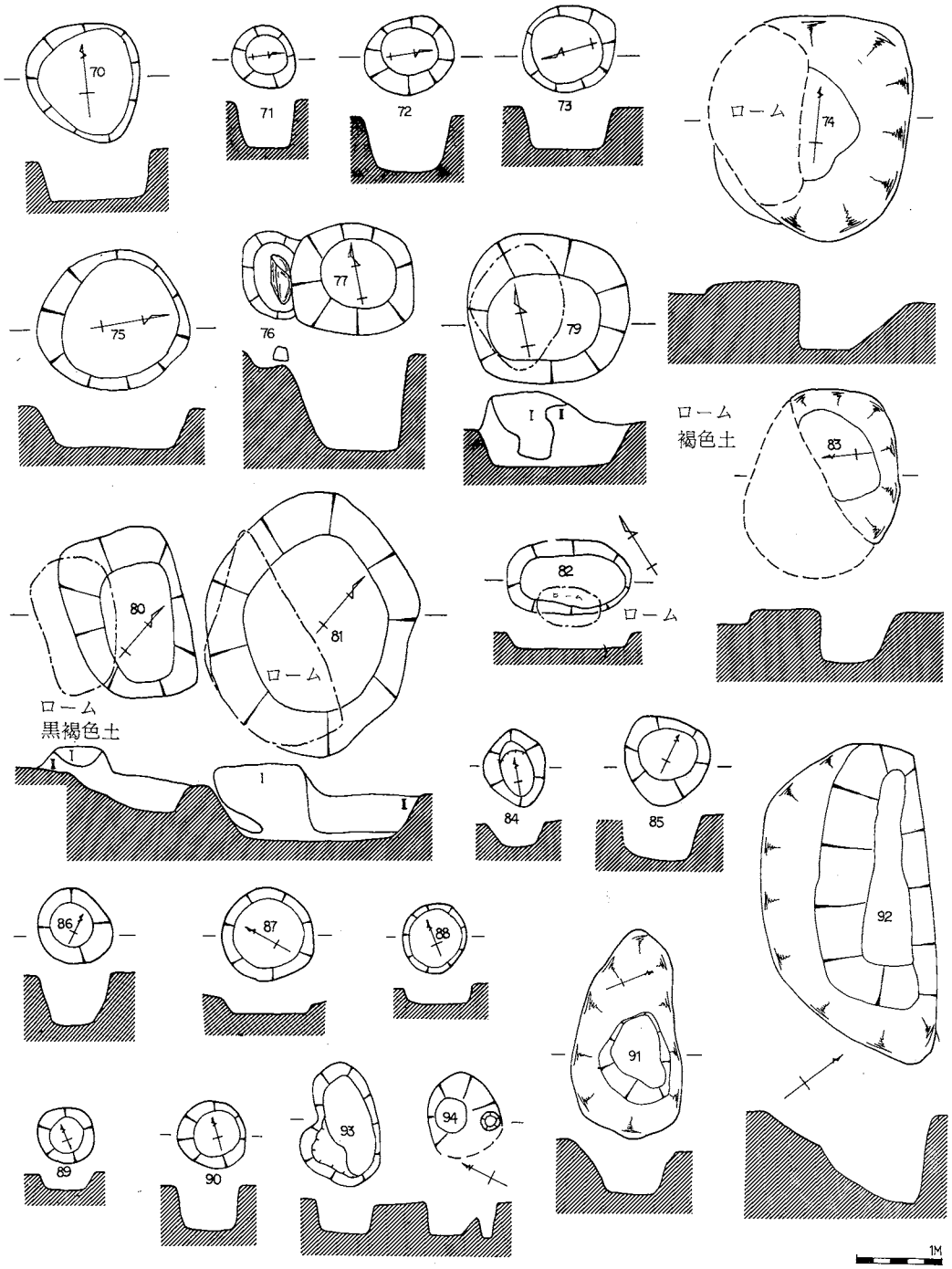
第46図　小垣外・辻垣外遺跡配石及び0号～22号土壙図（1：80）



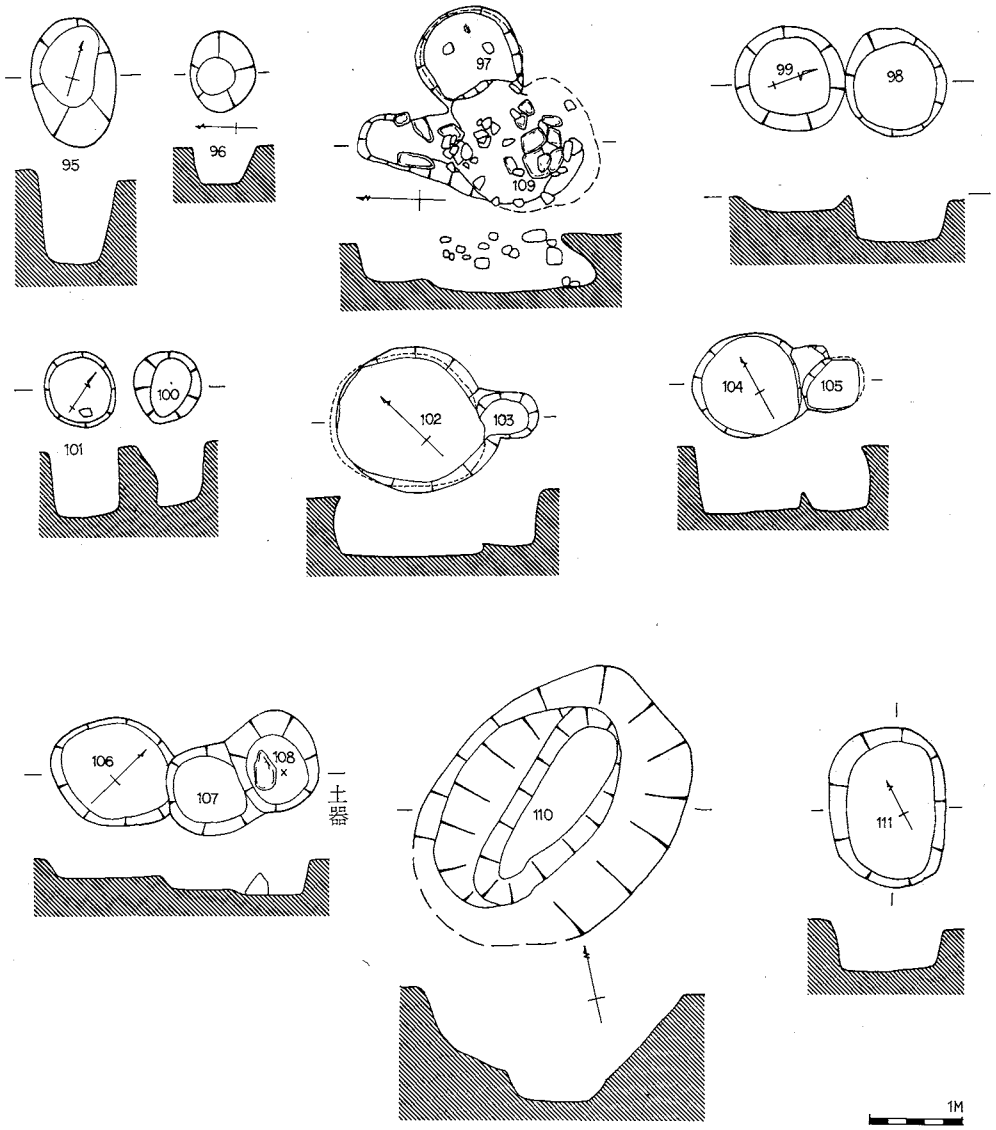
第 47図　小垣外・辻垣外遺跡23 ～45号土壙図（1：80）



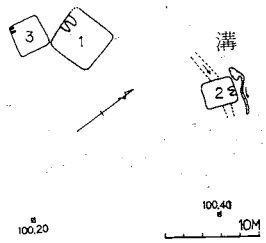
第48図　小垣外・辻垣外遺跡46～69号・ 112号土壙図（1：80）



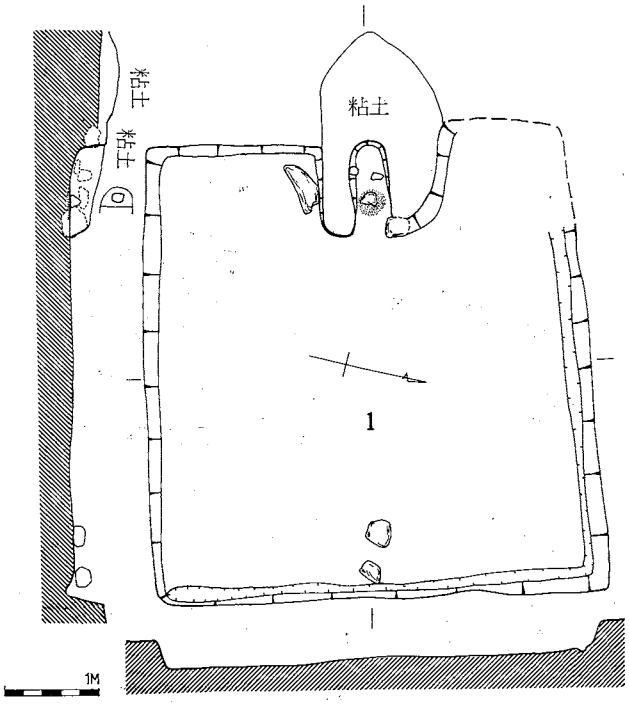
第 49図　小垣外・辻垣外遺跡70～94号土壙図（1：80）



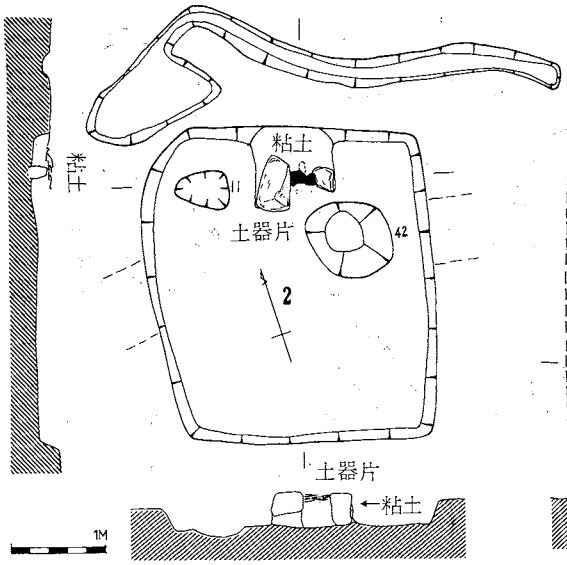
第50図　小垣外・辻垣外遺跡95号～ 111号土壙図（1：80）



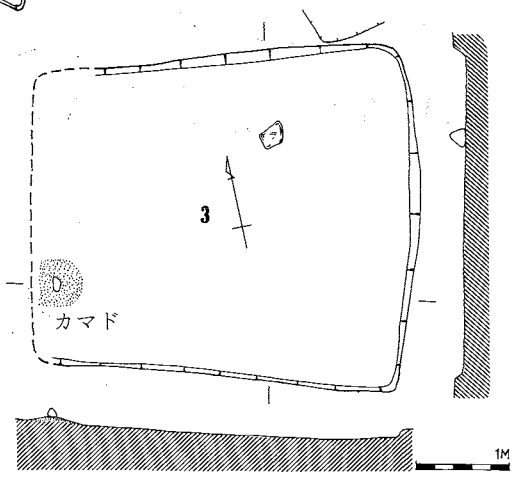
1．遺構全体図（1:800 ）



2．1号住居址（1:80 ）

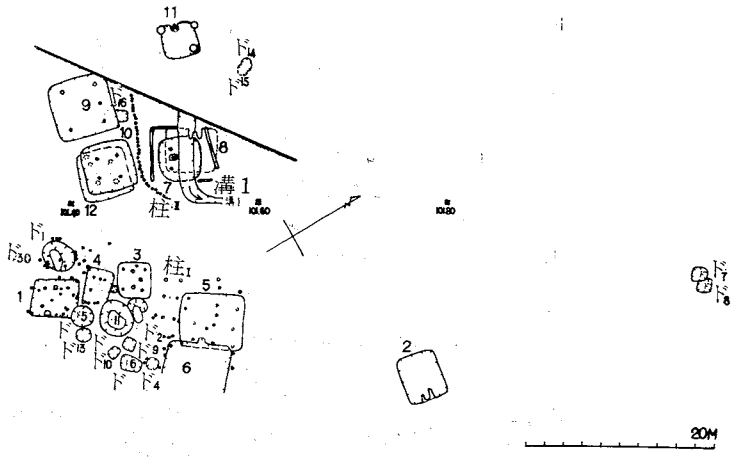


3．2号住居址（1:80 ）

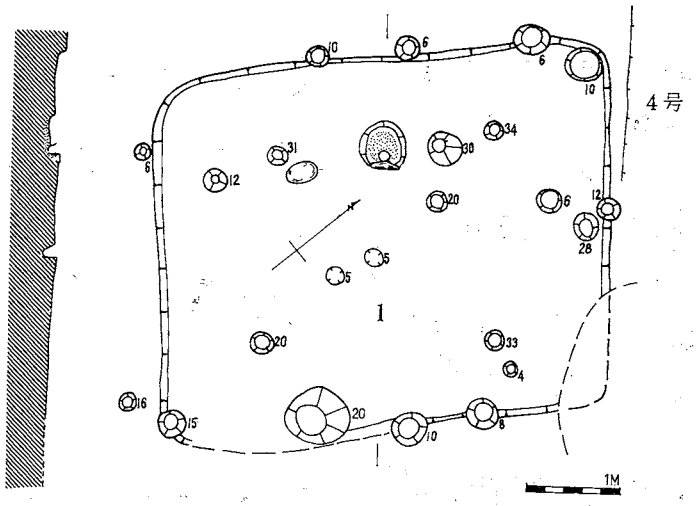


4．3号住居址（1:80 ）

第51図　三壺渕遺跡遺構全体図及び1号・2号・3号住居址

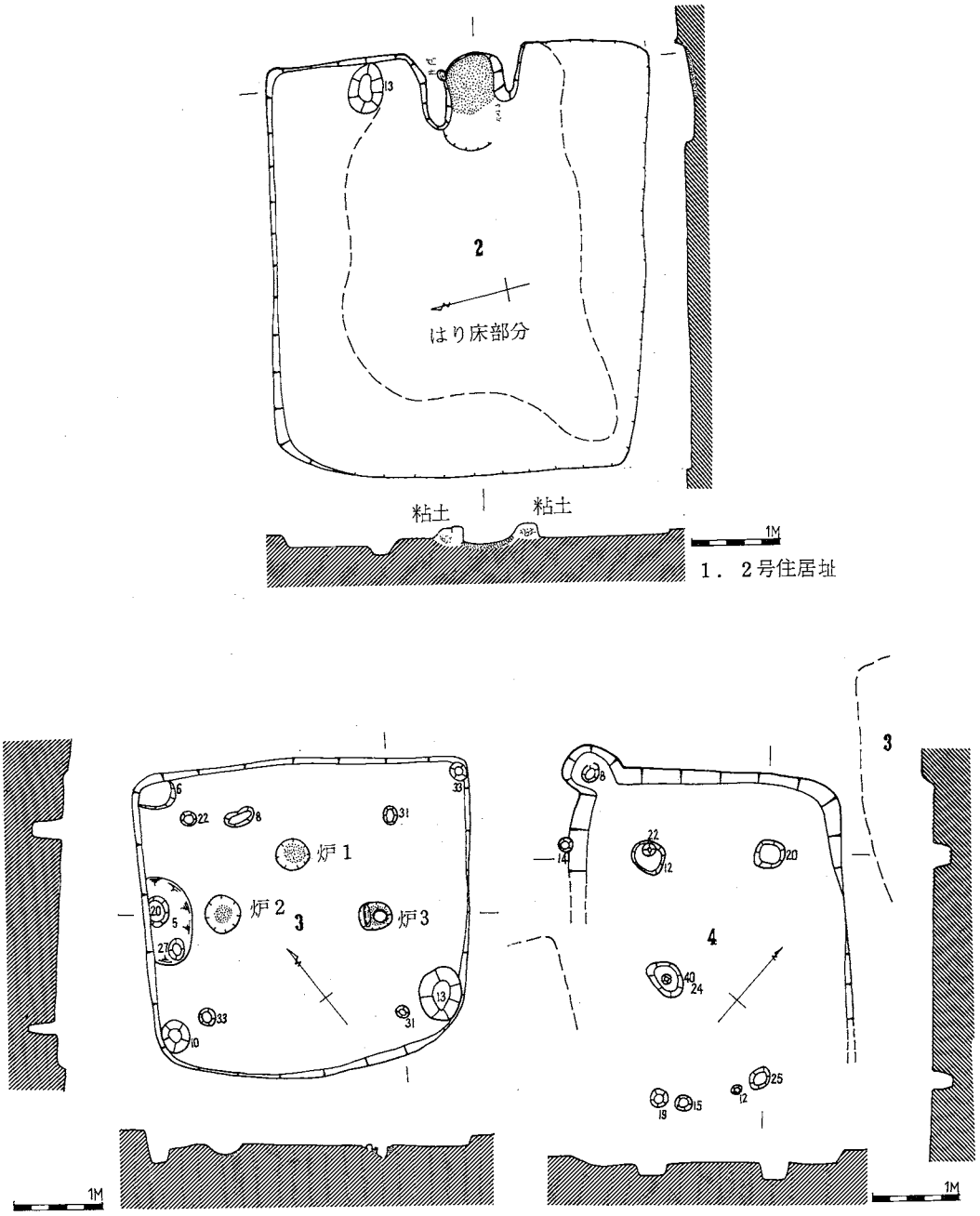


1．遺構全体図（1:800 ）

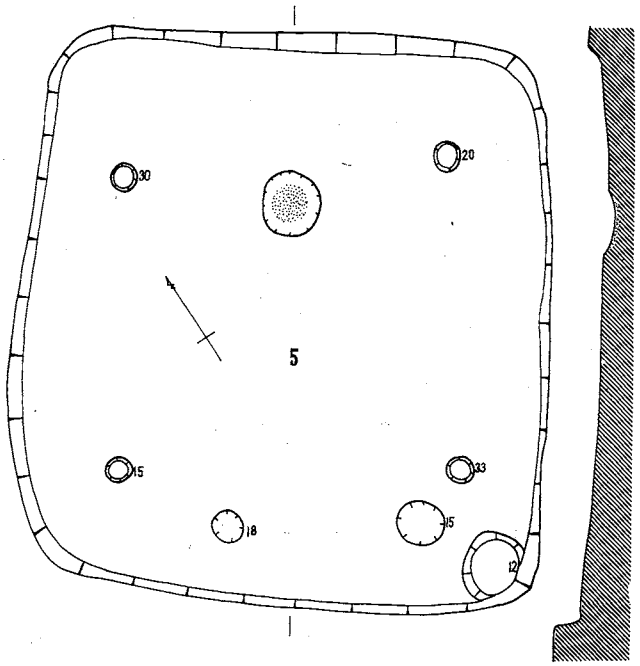


2．1号住居址（1:80 ）

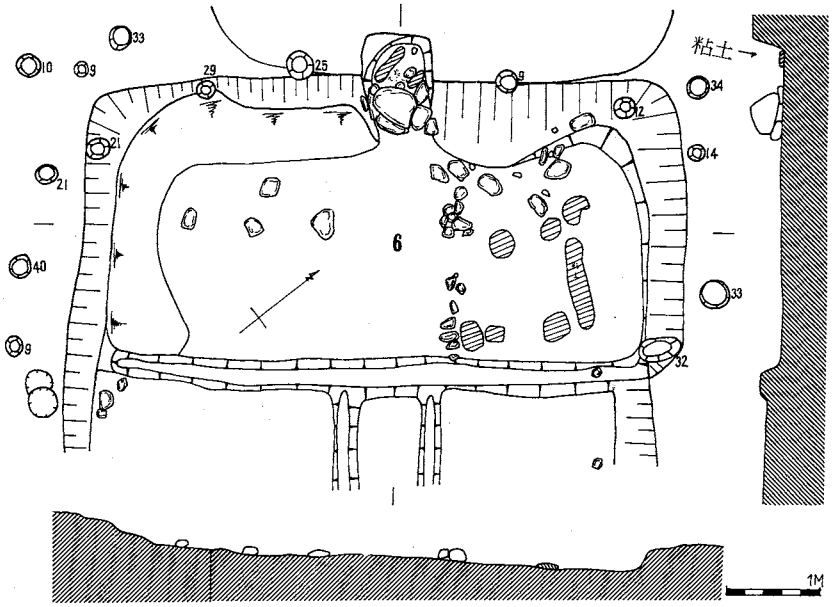
第52図　上の金谷遺跡遺構全体図及び1号住居址



第53図　上の金谷遺跡2号・3号・4号住居址（1：80）

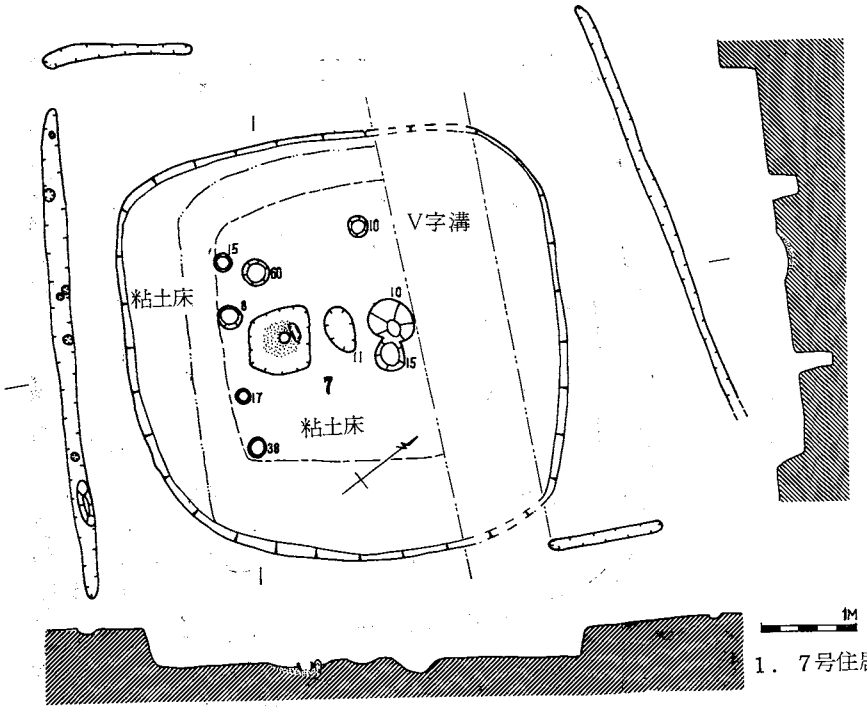


1．5号住居址

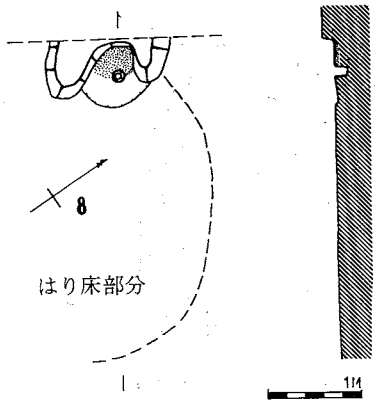


2．6号住居址

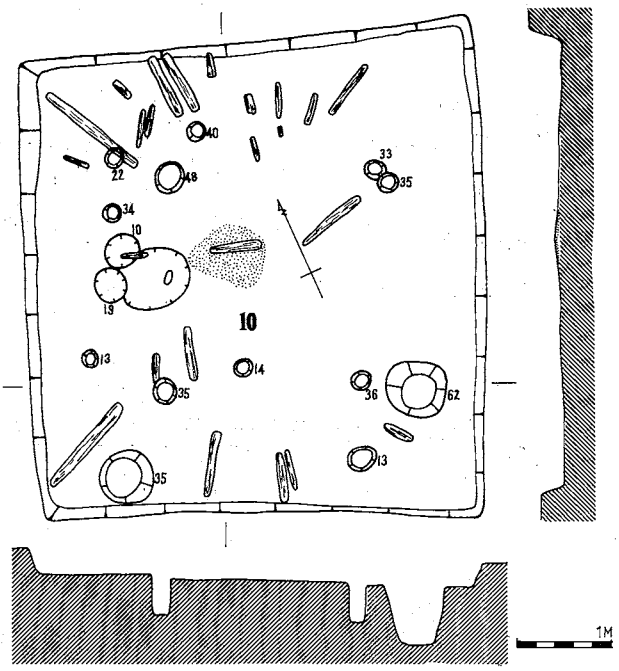
第54図　上の金谷遺跡5号・6号住居址（1：80）



1．7号住居址

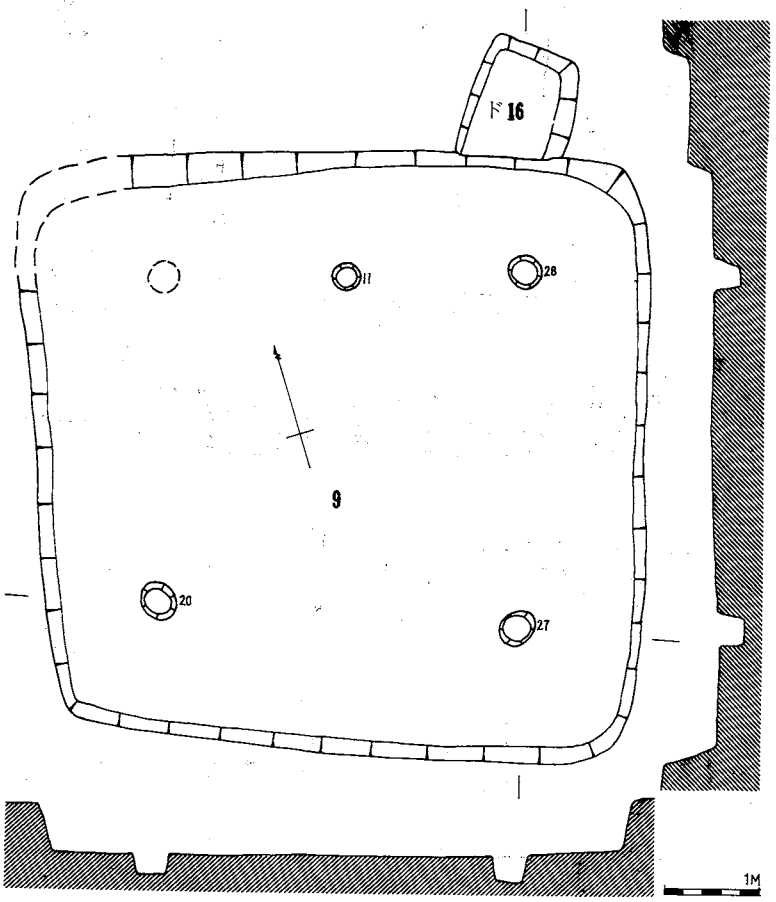


2．8号住居址

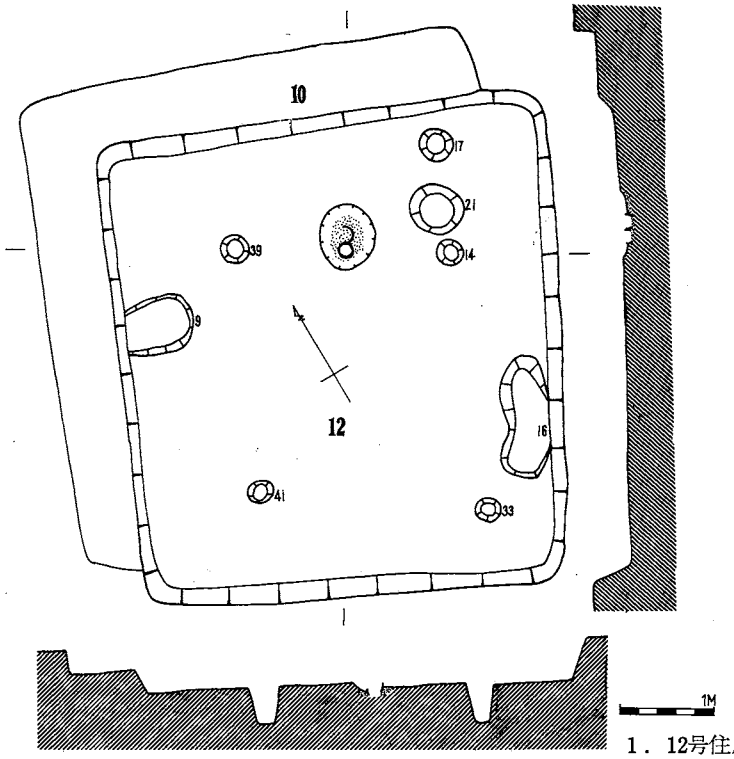


3．10号住居址

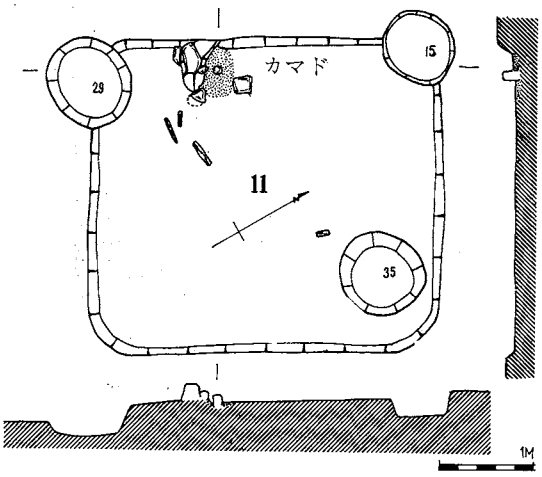
第55図　上の金谷遺跡7号・8号・住居址（1：80）



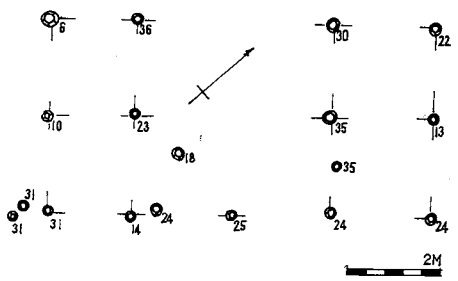
第56図　上の金谷遺跡9号住居址及び14号土壙図（1：80）



1．12号住居址（1:80 ）

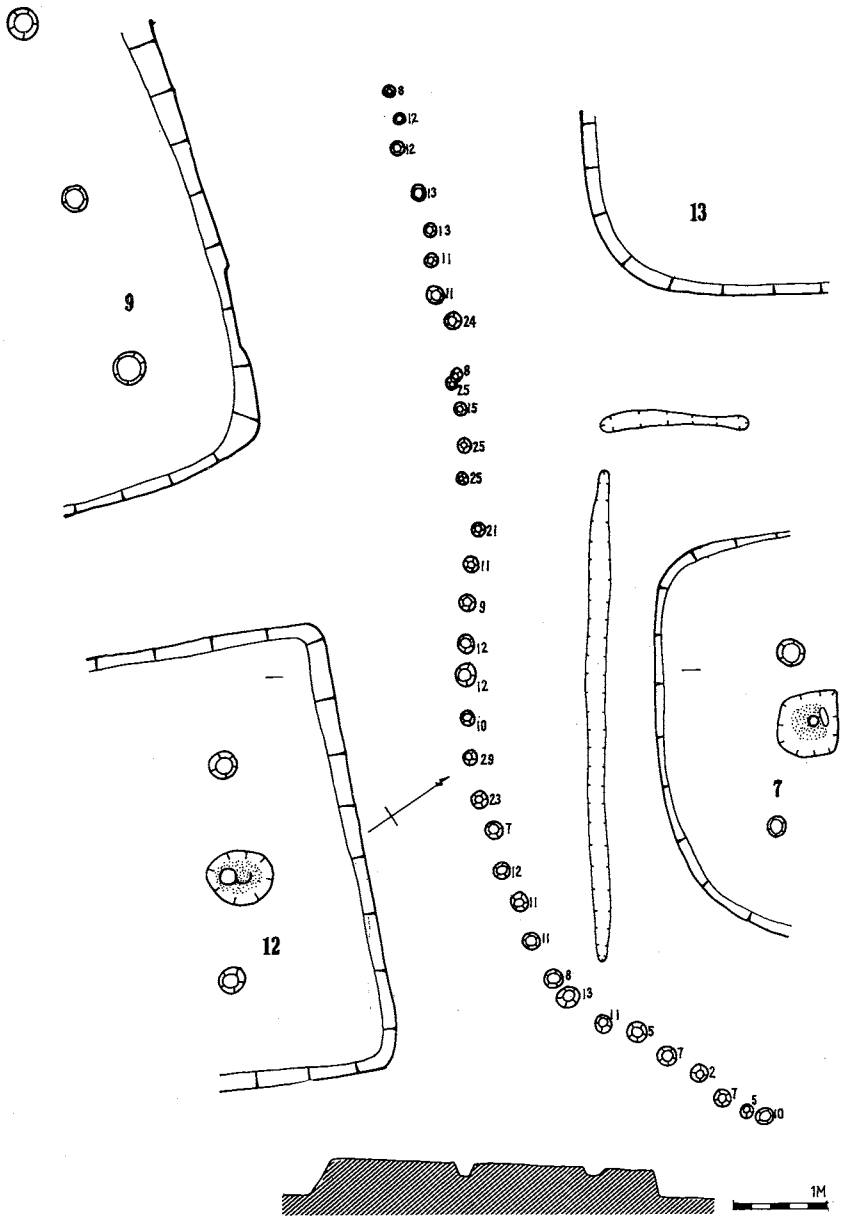


2．11号住居址

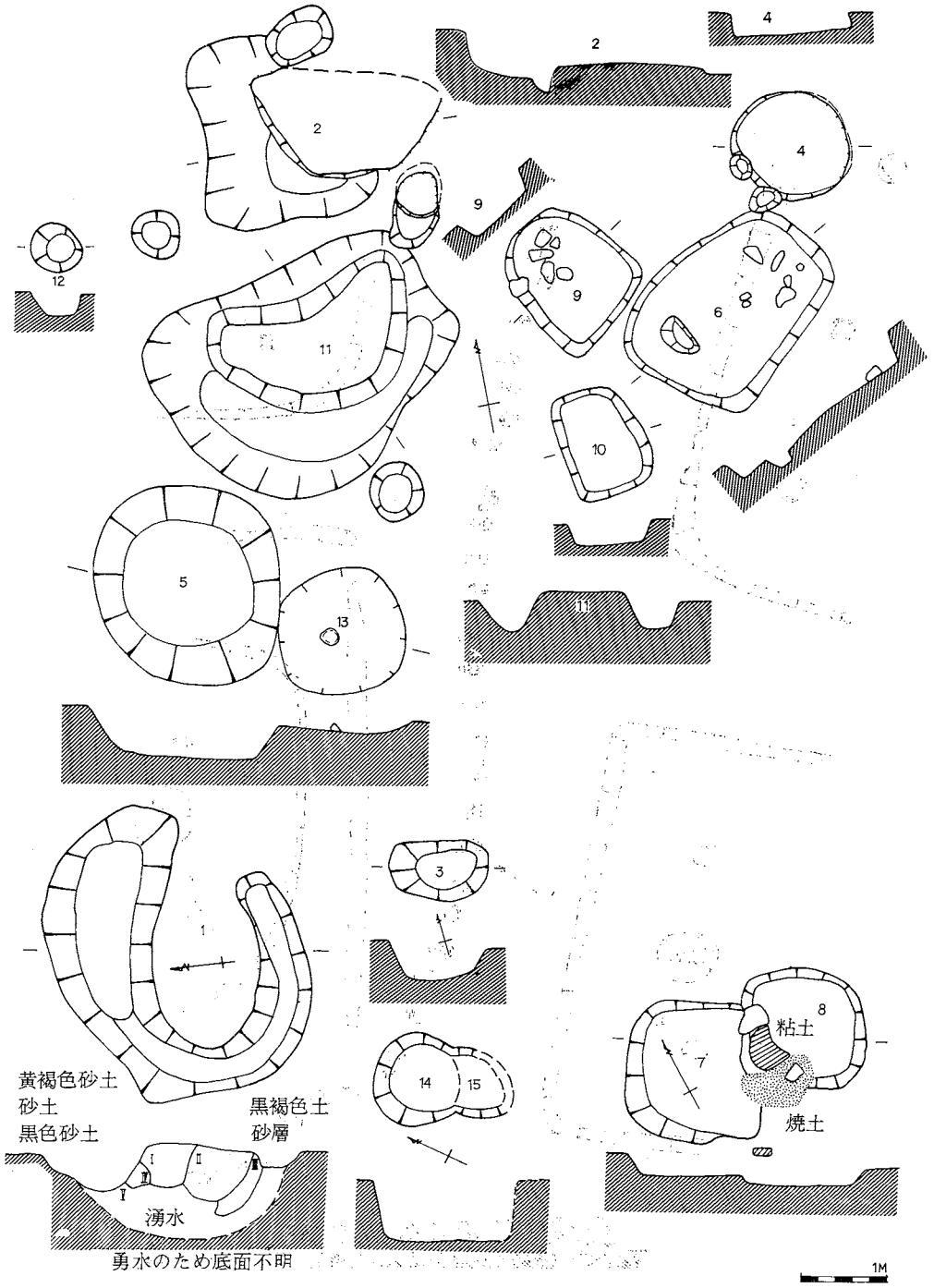


3．柱穴群Ⅰ（1:160 ）

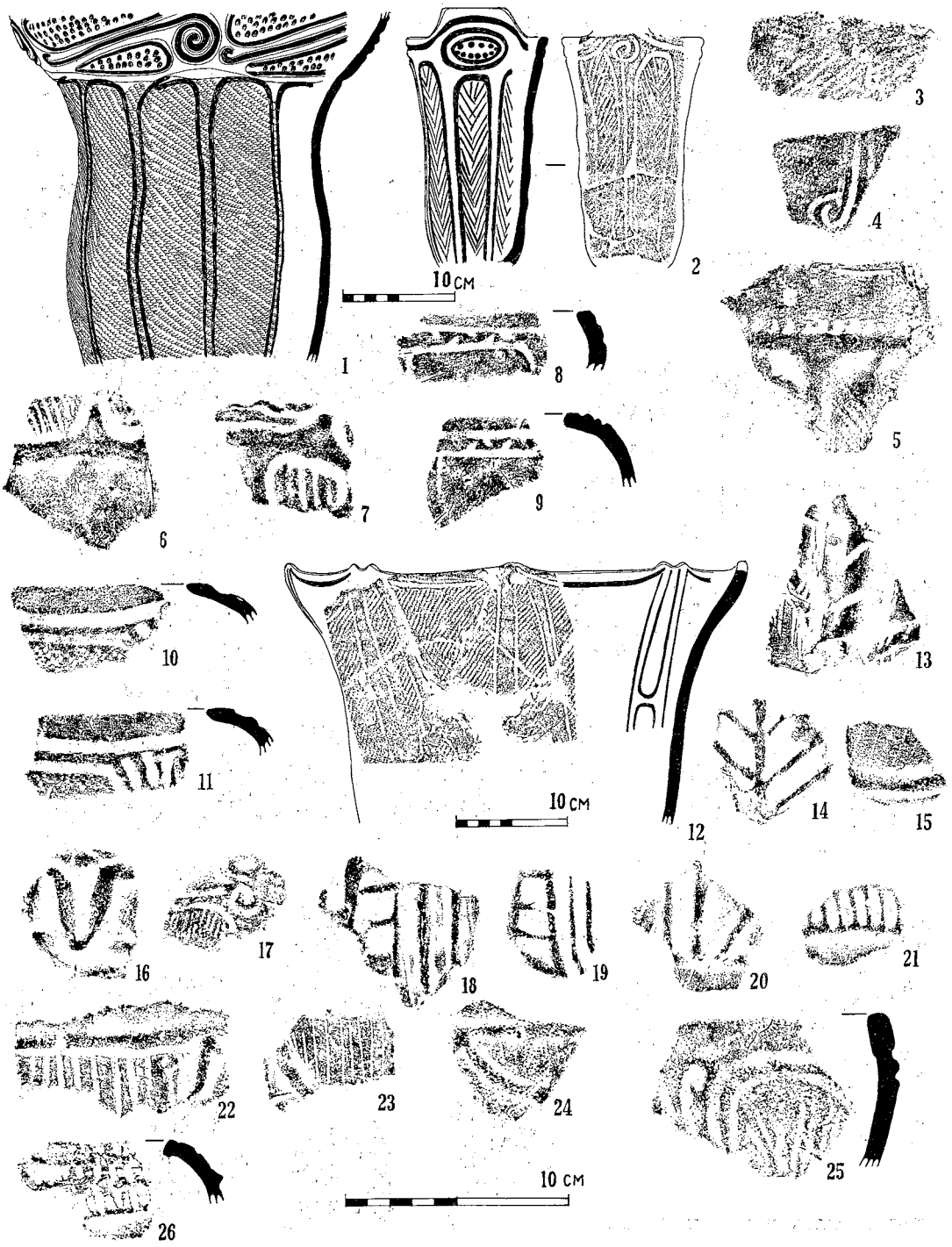
第57図　上の金谷遺跡11号・12号住居址及び柱穴群Ⅰ



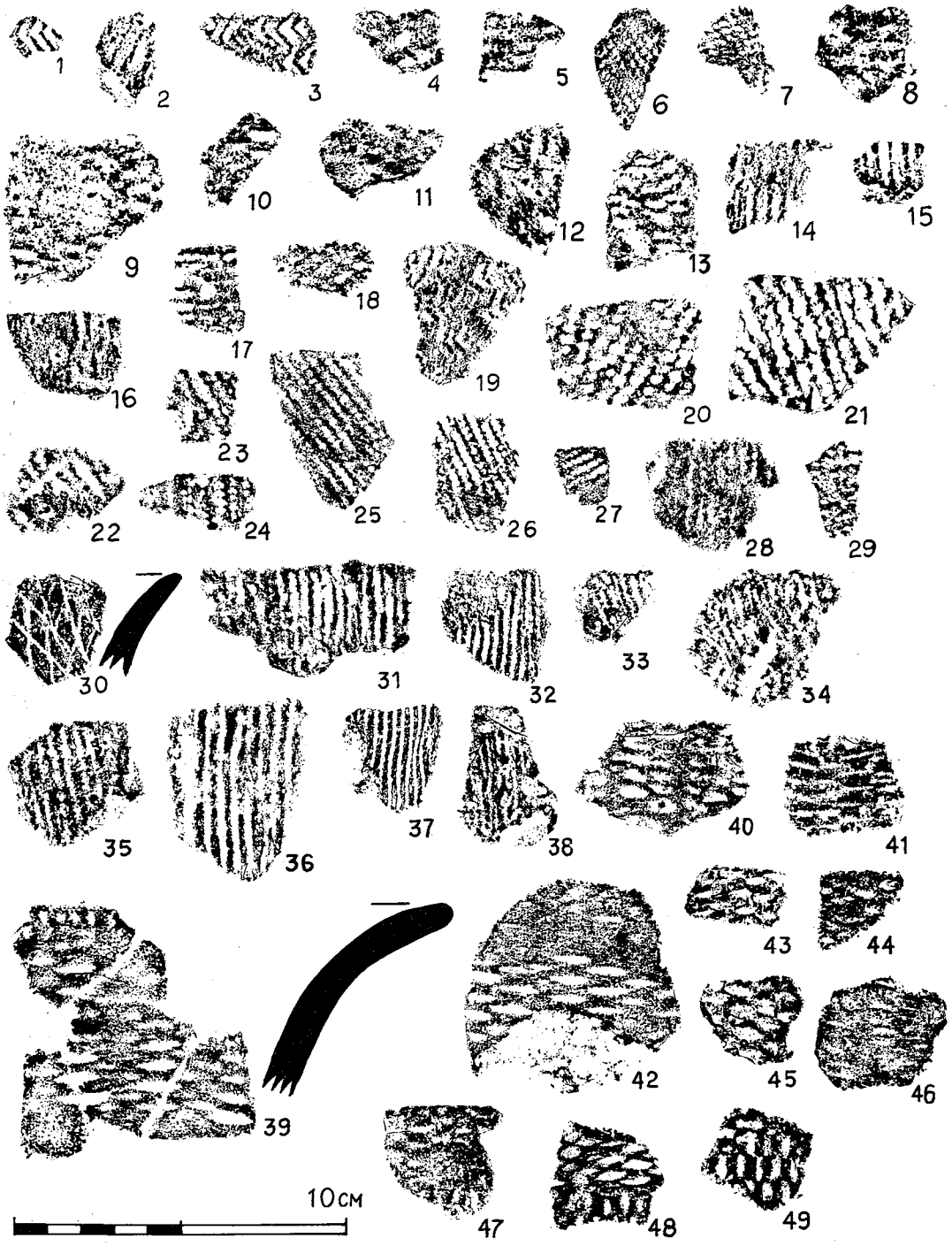
第58図　上の金谷遺跡柱穴群Ⅱ（1：80）



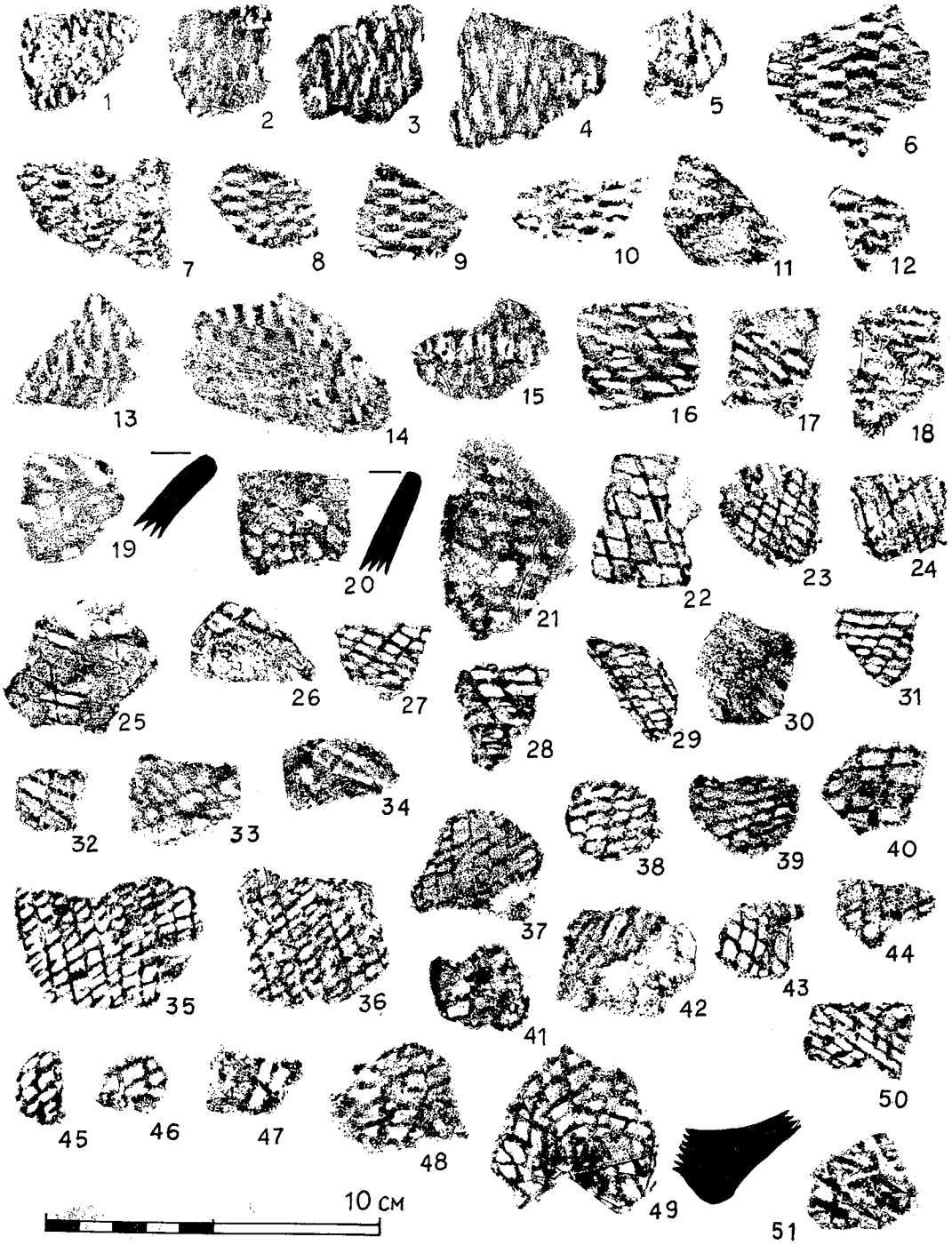
第59図　上の金谷遺跡土壙図　1：80)



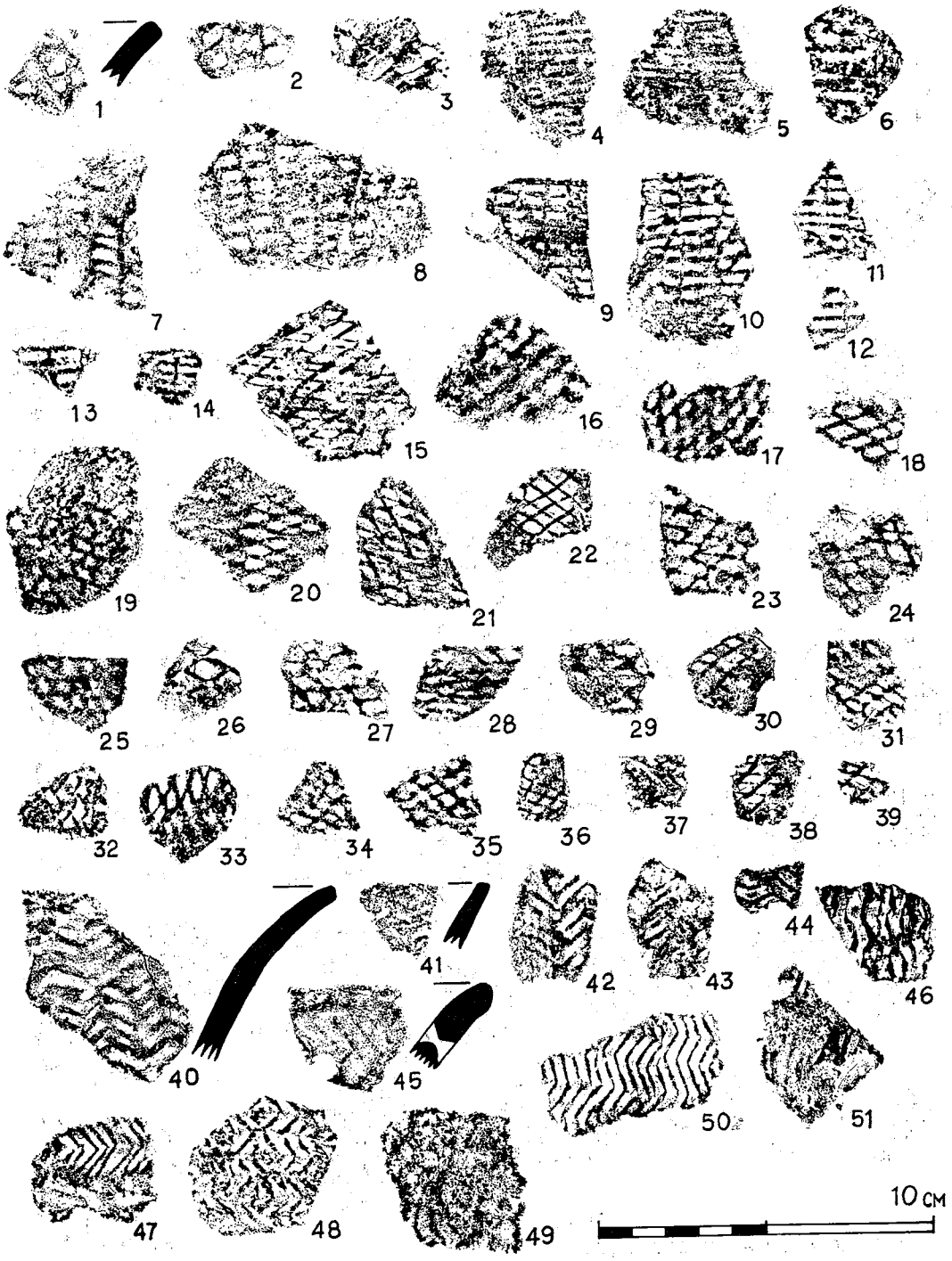
第60図　柳田遺跡出土土器（1：3，但し1・2・12，1：6）
（1・2　1号住居址，3～9　2号住居址，
10・11　土壙1，12　土壙4，13～15　土壙5，16・17　土壙8，　18～26 その他）



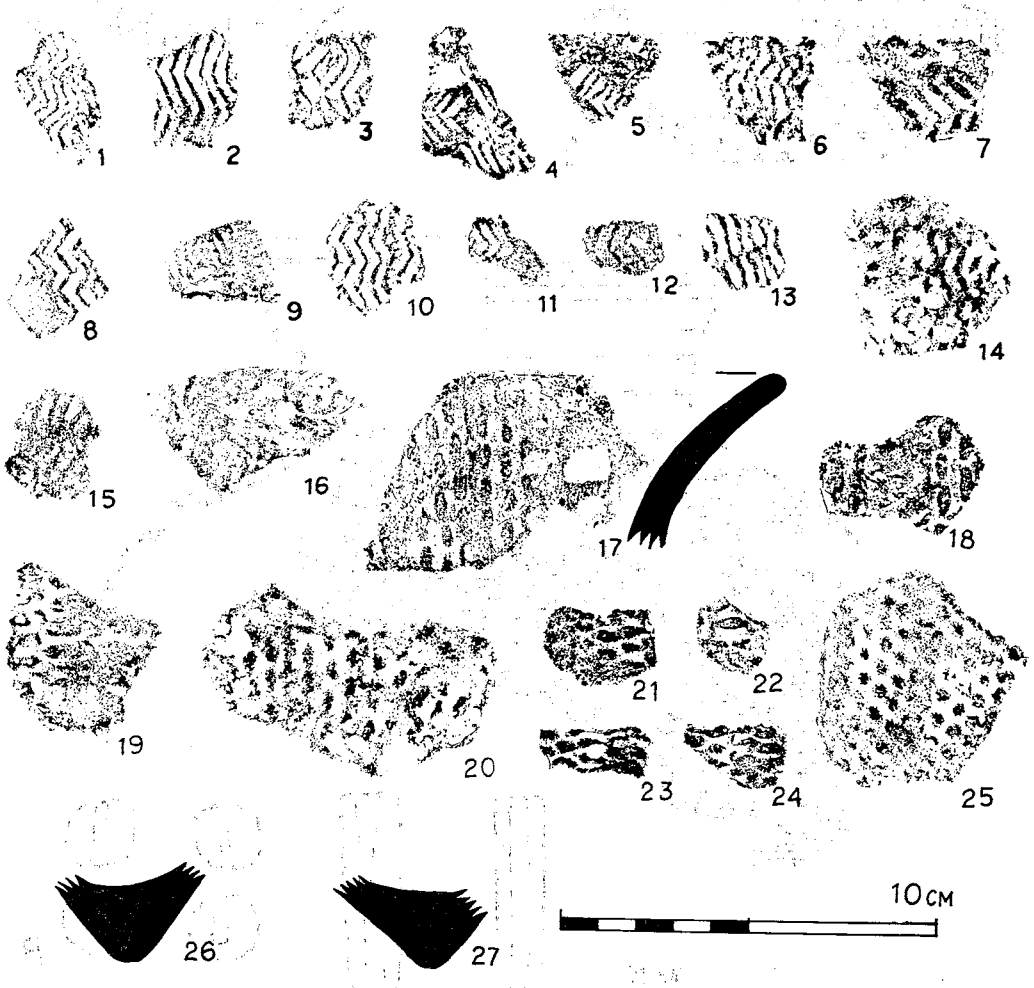
第61図　石子原遺跡出土土器（1：2）（1土壙1，2土壙3，3土壙4，4土壙7，5～7土壙8，8～11土壙11，12～19土壙12，20～49その他）



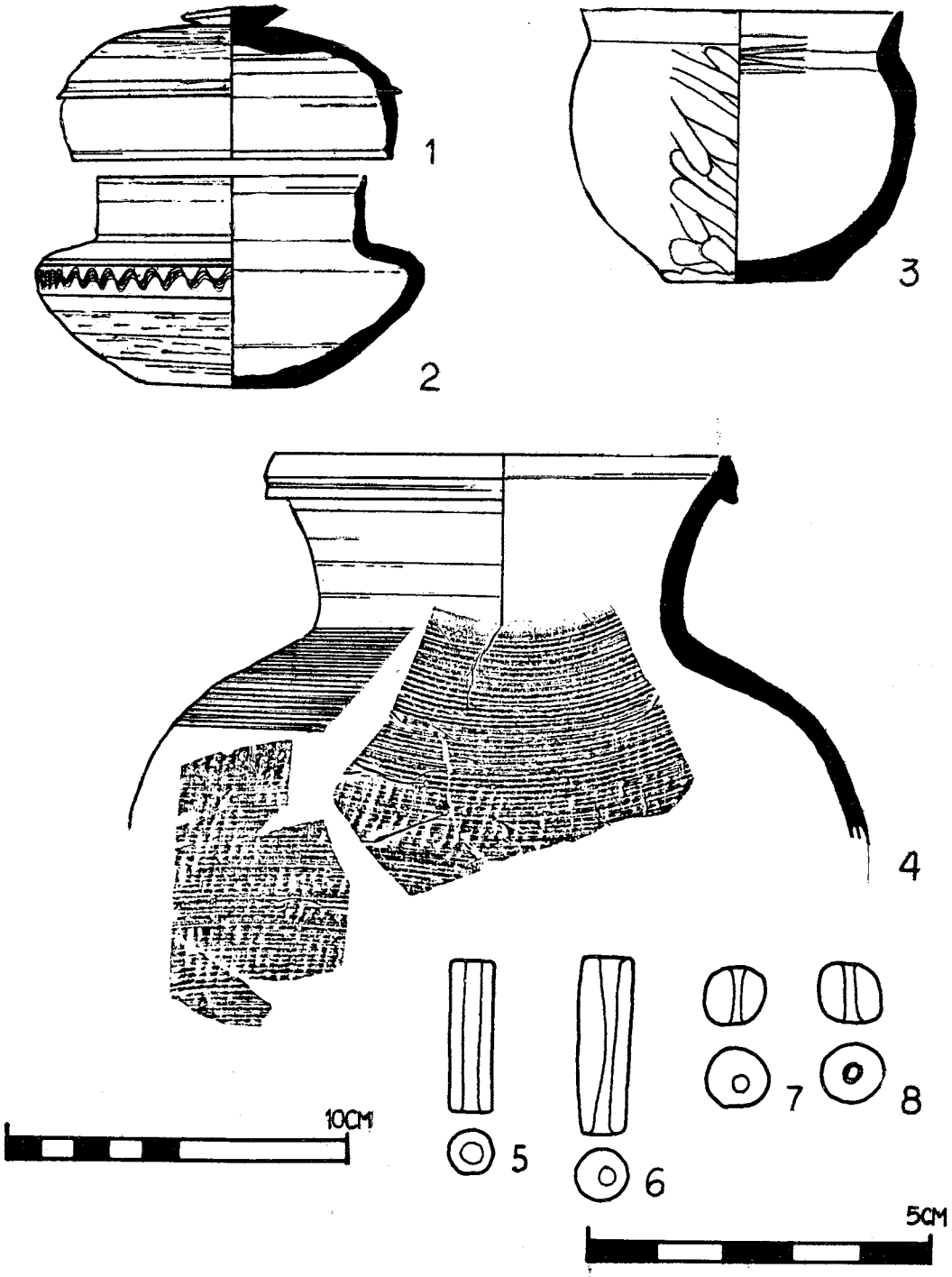
第62図　石子原遺跡出土土器（1：2）



第63図　石子原遺跡出土土器（1：2）

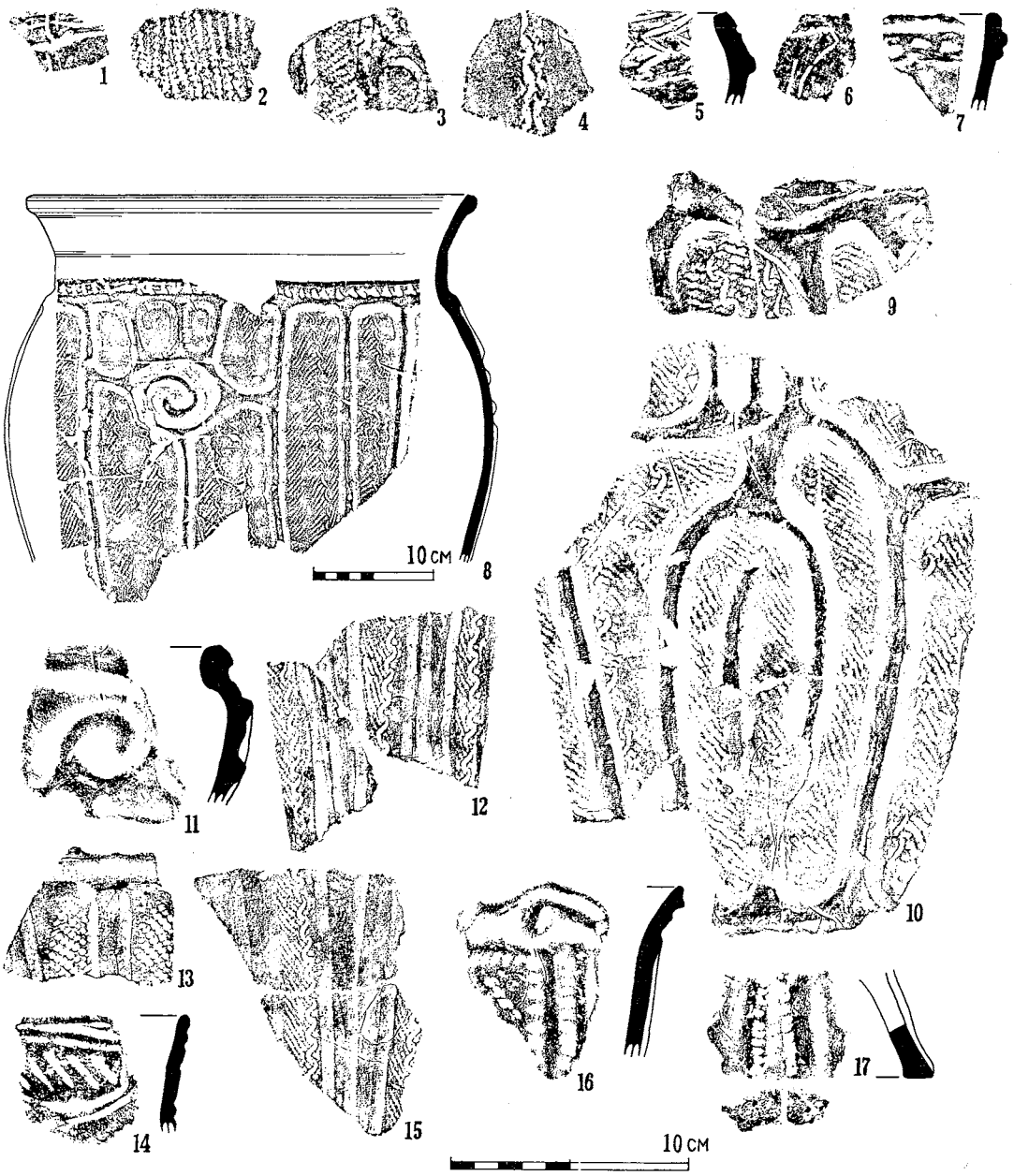


第64図　石子原遺跡出土土器（1：2）

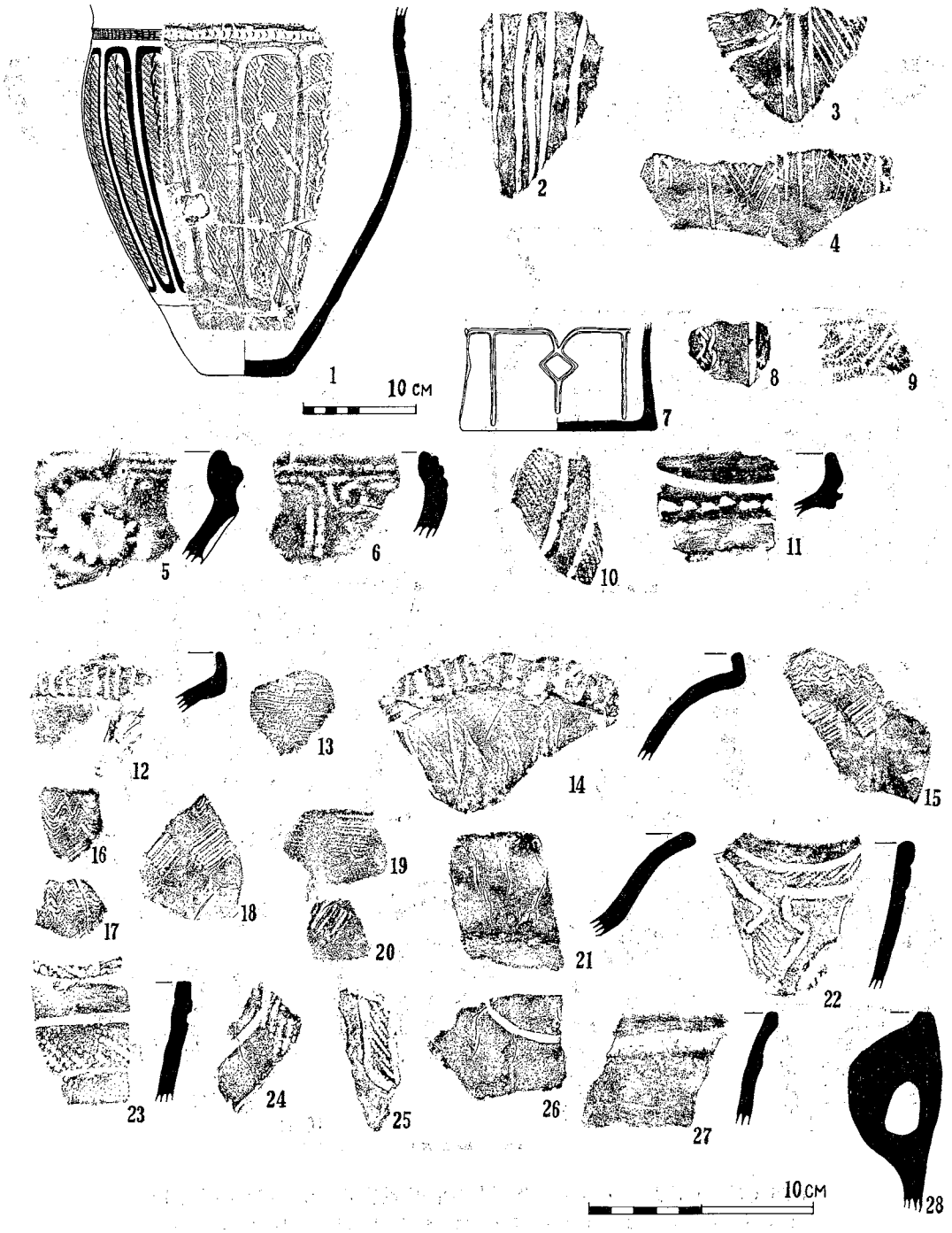


第65図　石子原古墳及び石子原遺跡出土土器・石製品（1：1，但し1～4，1：2）

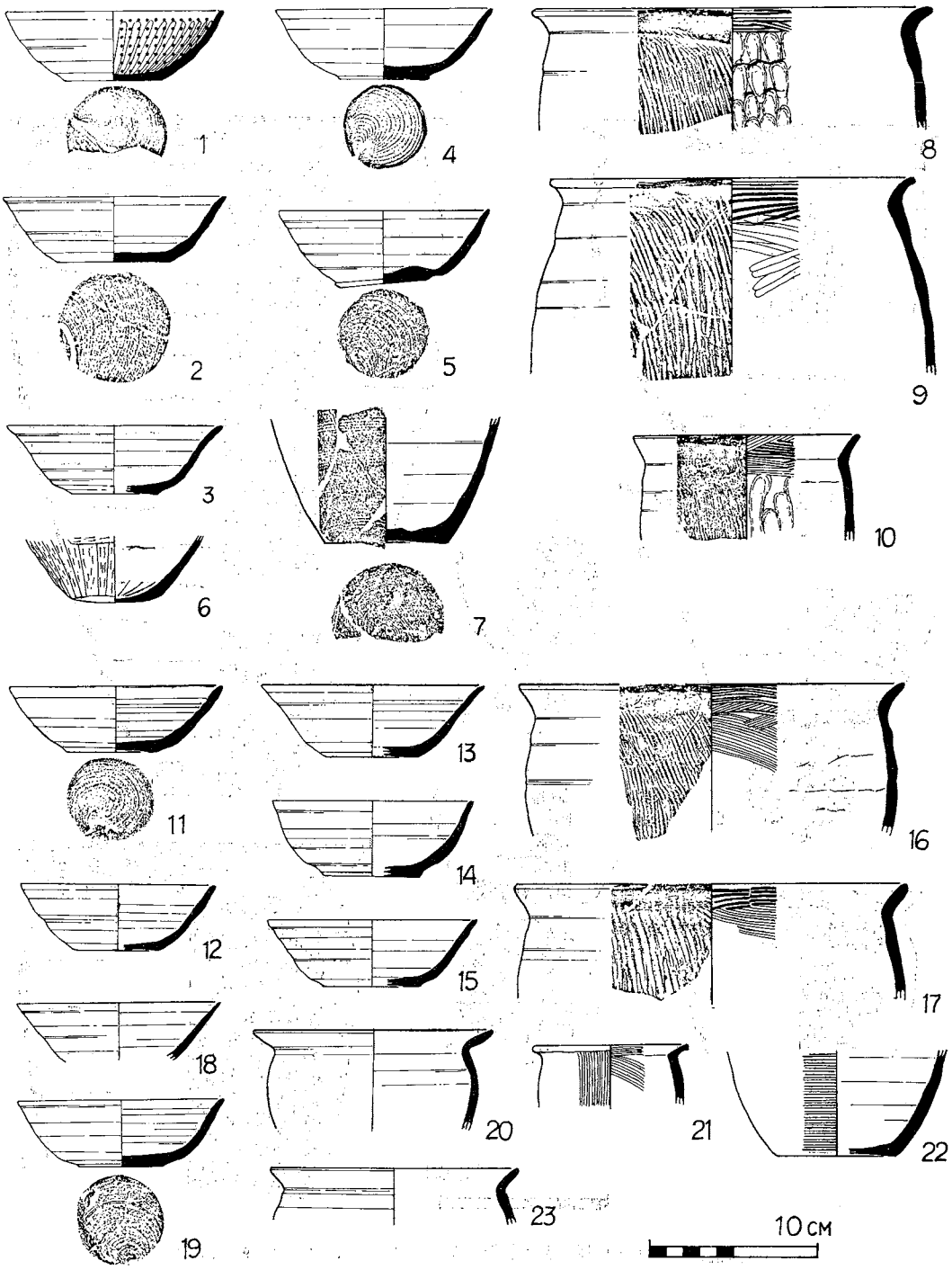
（1～3　2号土壙，4～6封土；7・8　1号方形周溝墓主体部）



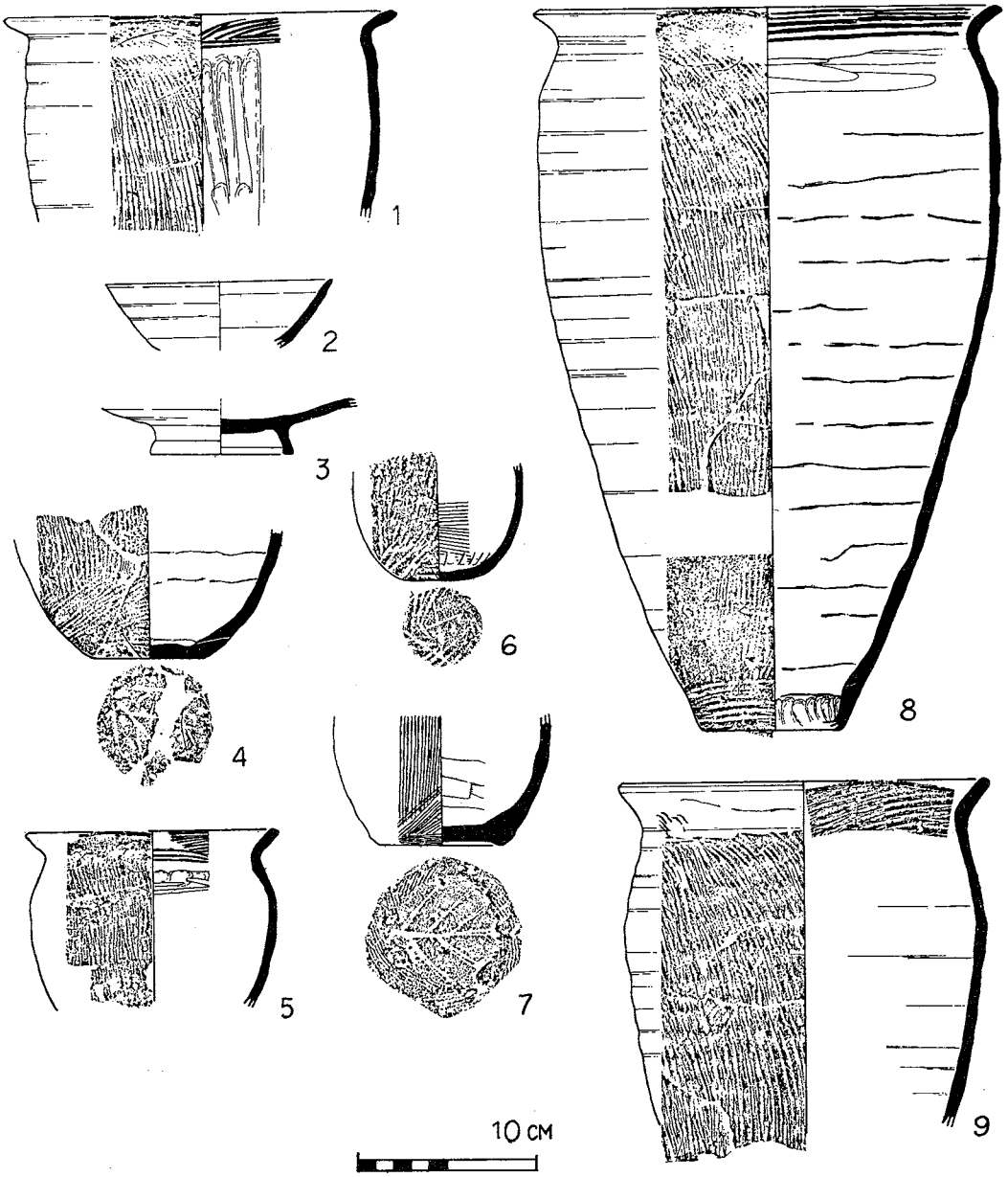
第66図石子原遺跡（1～7）及び上の平東部遺跡（8～17）出土土器
（1：3，但し8，1：6）（1～7 その他，8～10 1号住居址，11～17 2号住居址）



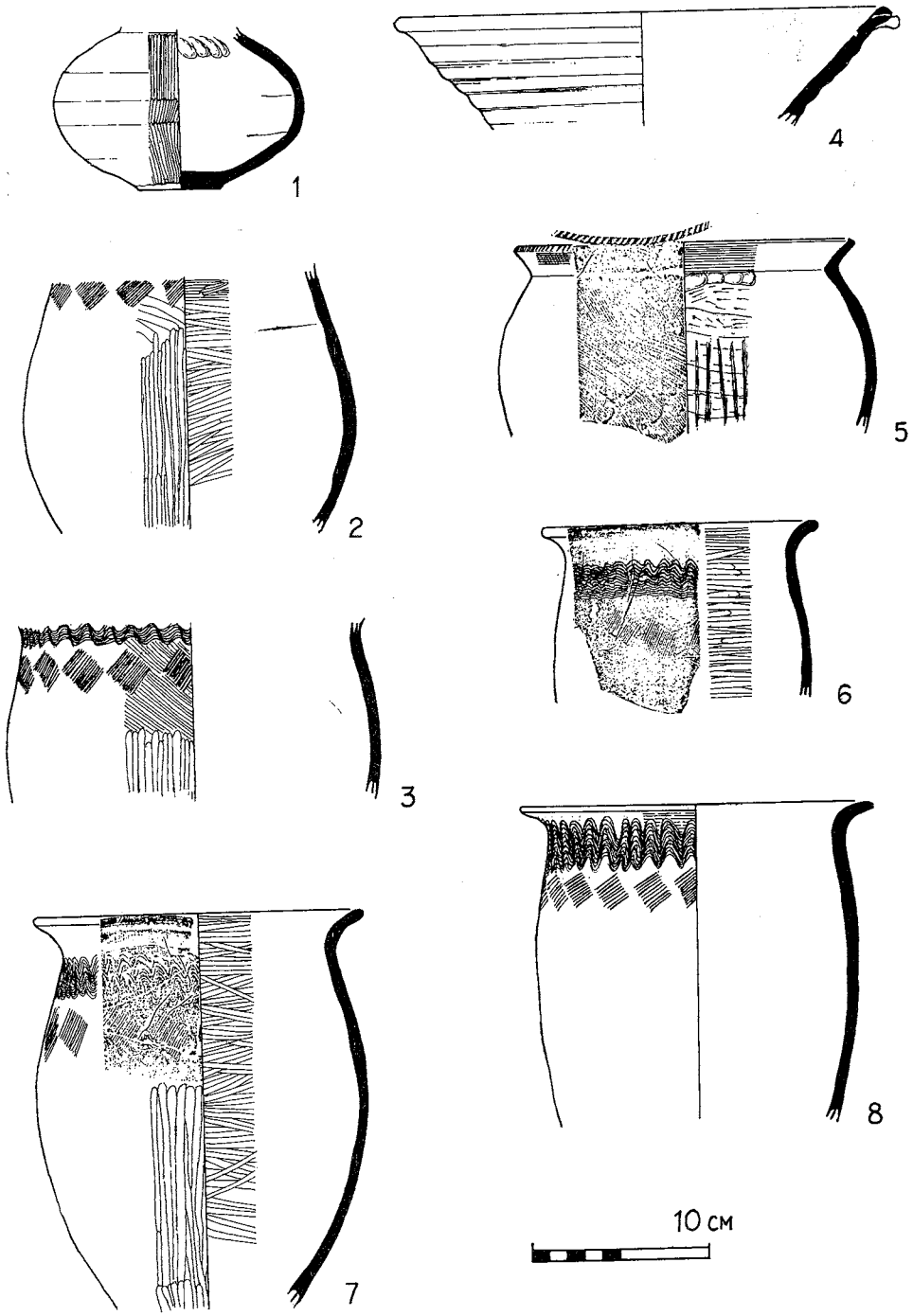
第67図　上の平東部遺跡（1～4）・六反田遺跡（5～11）及び大東遺跡（12～28）
出土土器(1：3，但し1・7　1：6)



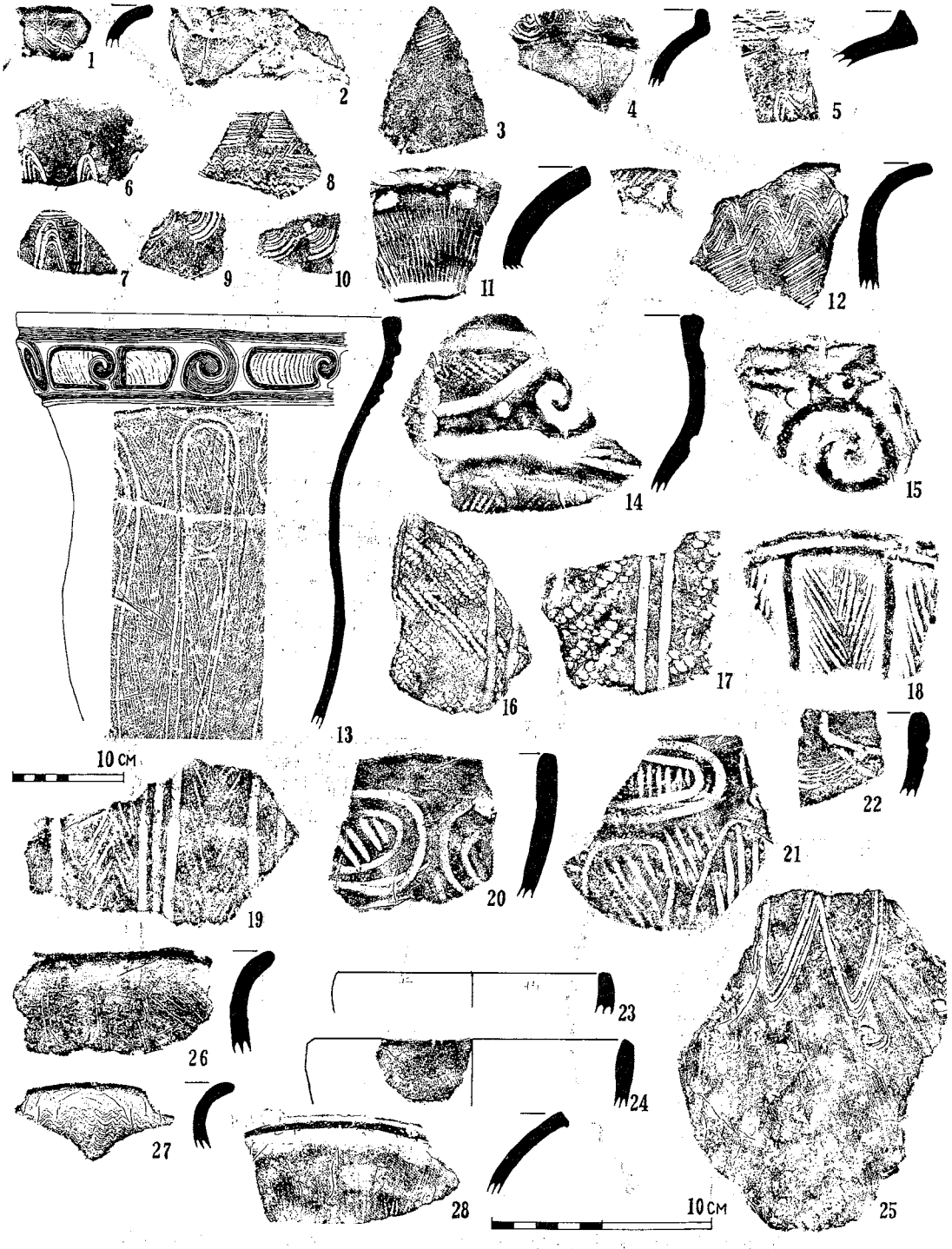
第68図　六田田遺跡出土土器（1：4）（1～10　1号住，11～17　2号住，18～23　3号住）



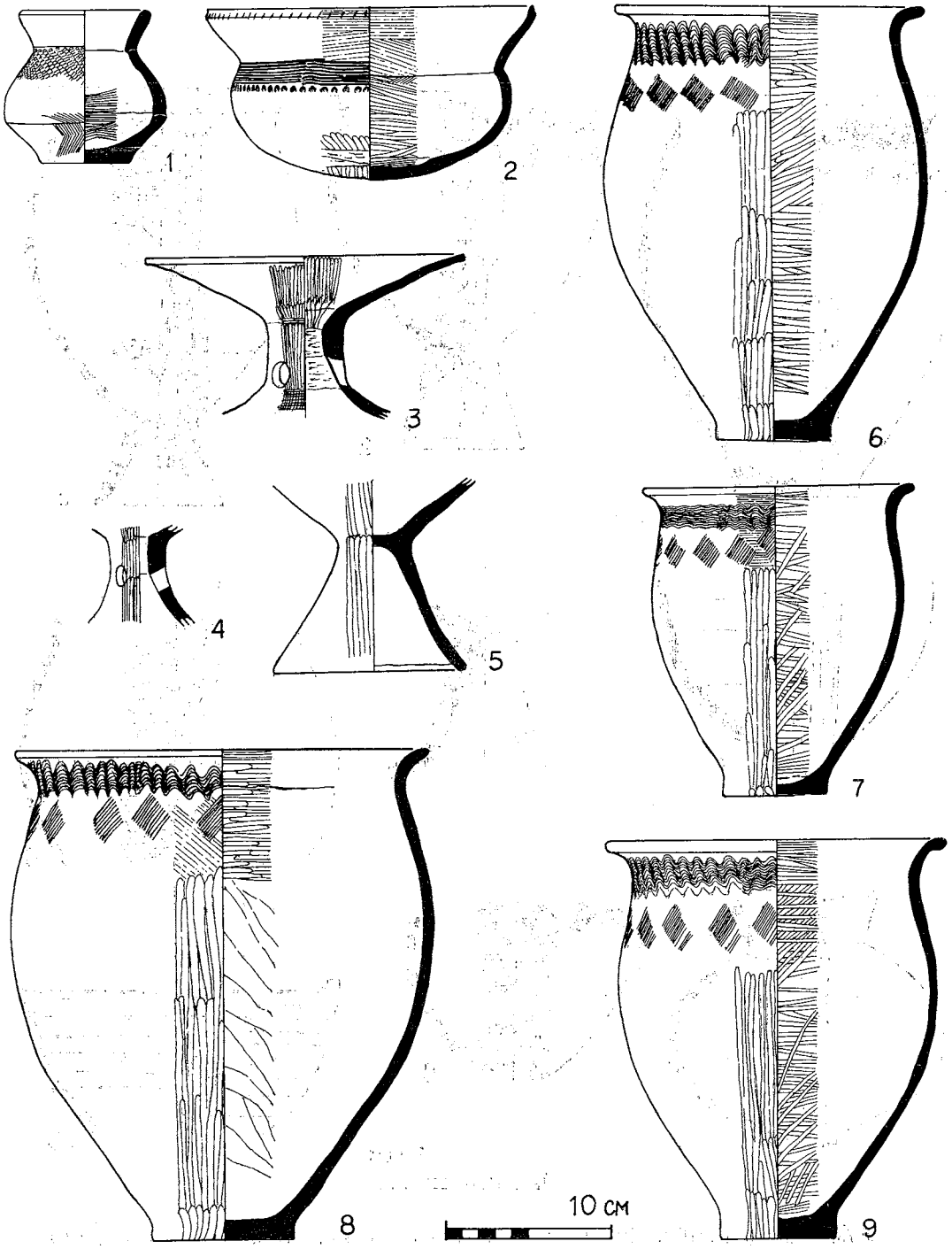
第69図　六反田遺跡出土土器（1：4）（1　3号住，2～9　4号住）



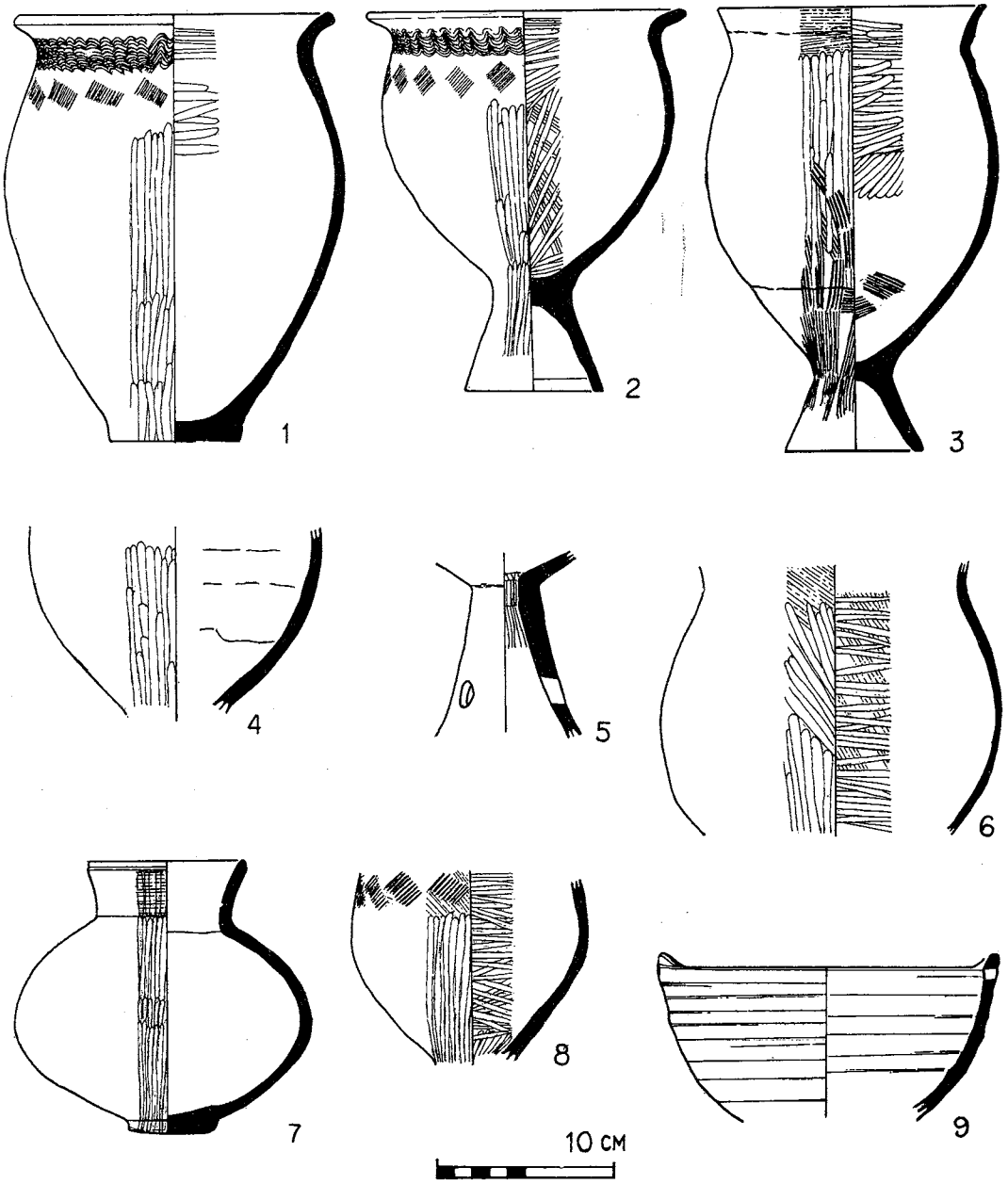
第70図　酒屋前遺跡出土土器（1：4）（1～3　1号住，4　4号住，5～8　5号住）



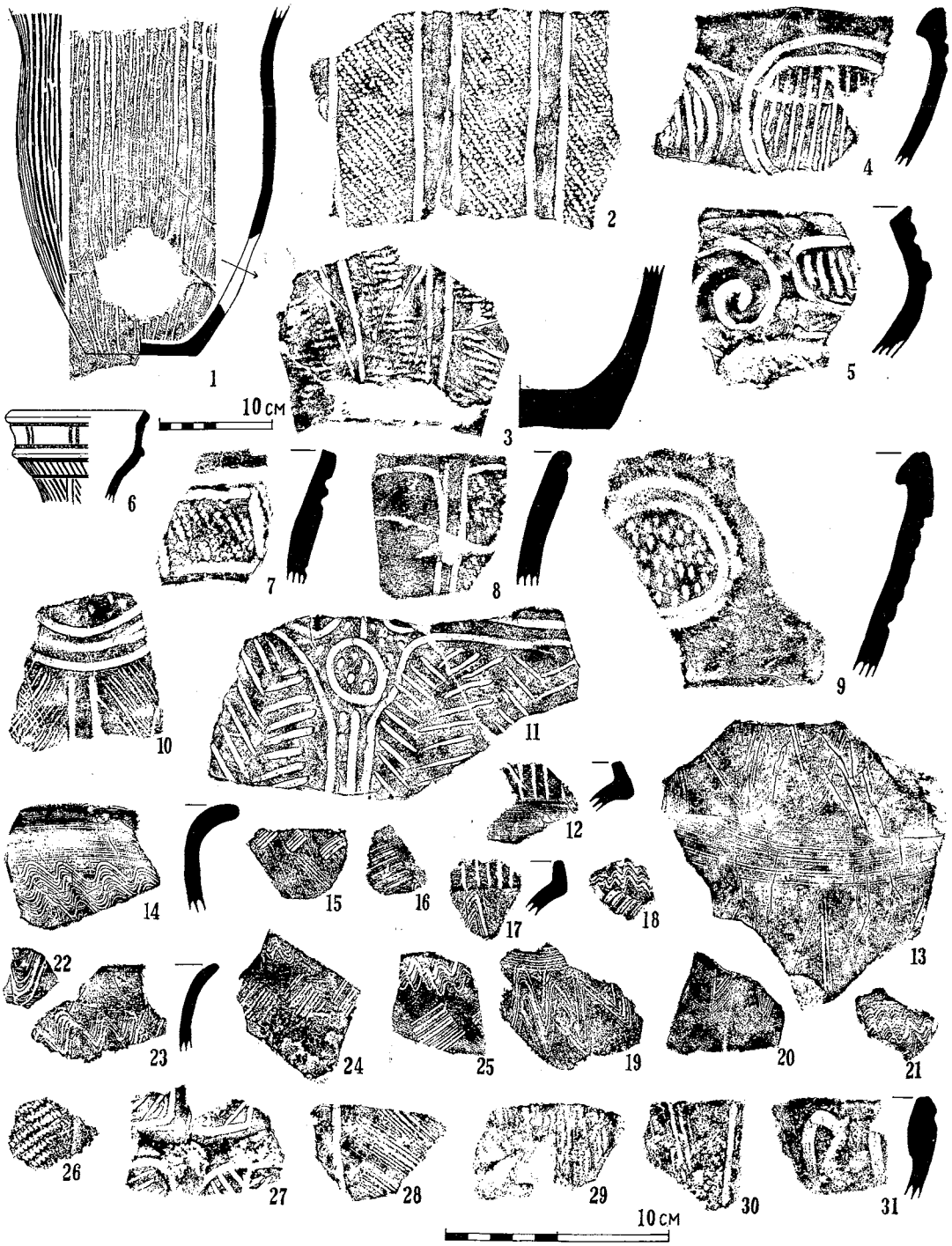
第71図　酒屋前遺跡出土土器（1：3，但し13，1：6）



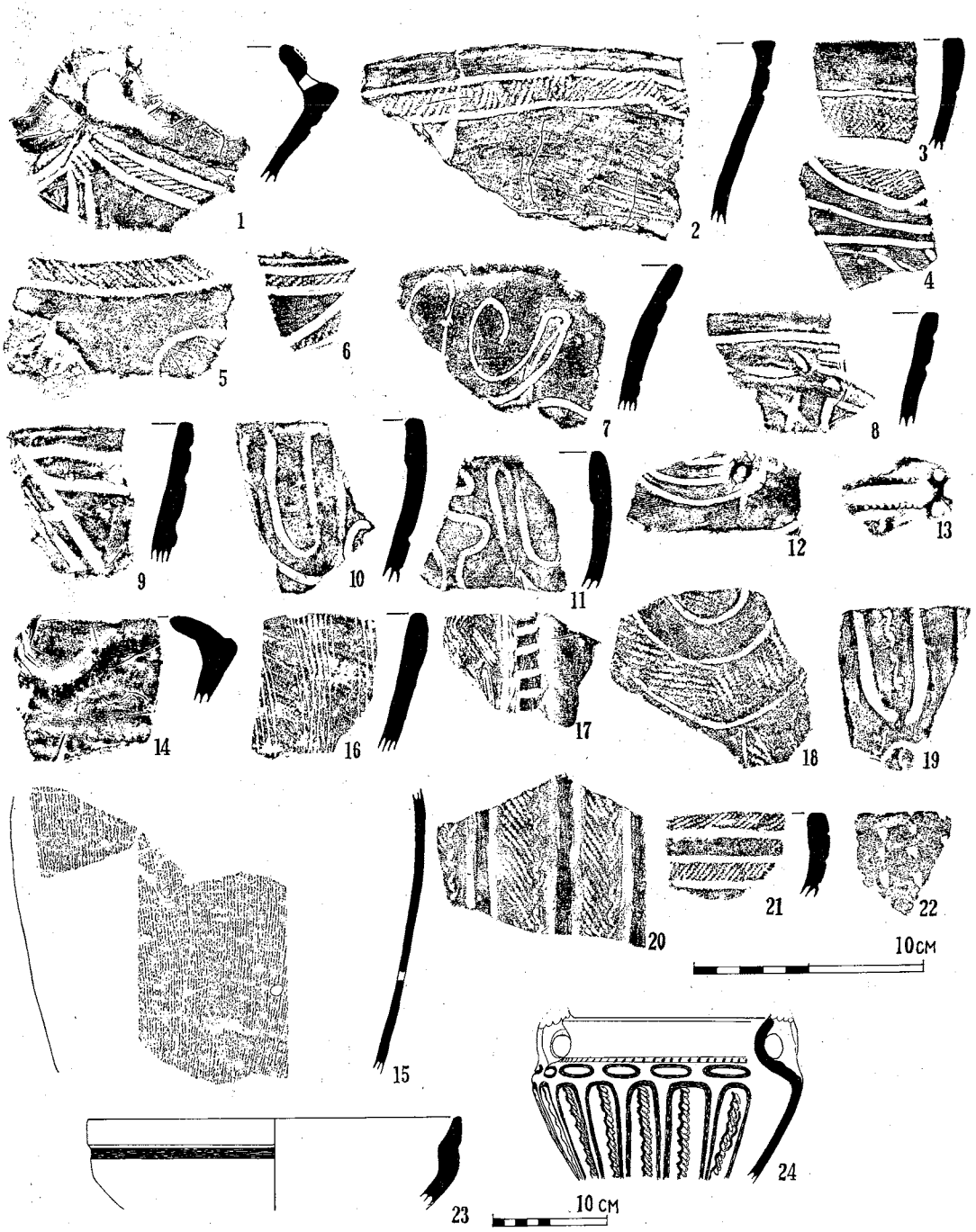
第72図　酒屋前遺跡７号住居址出土土器（１：４）



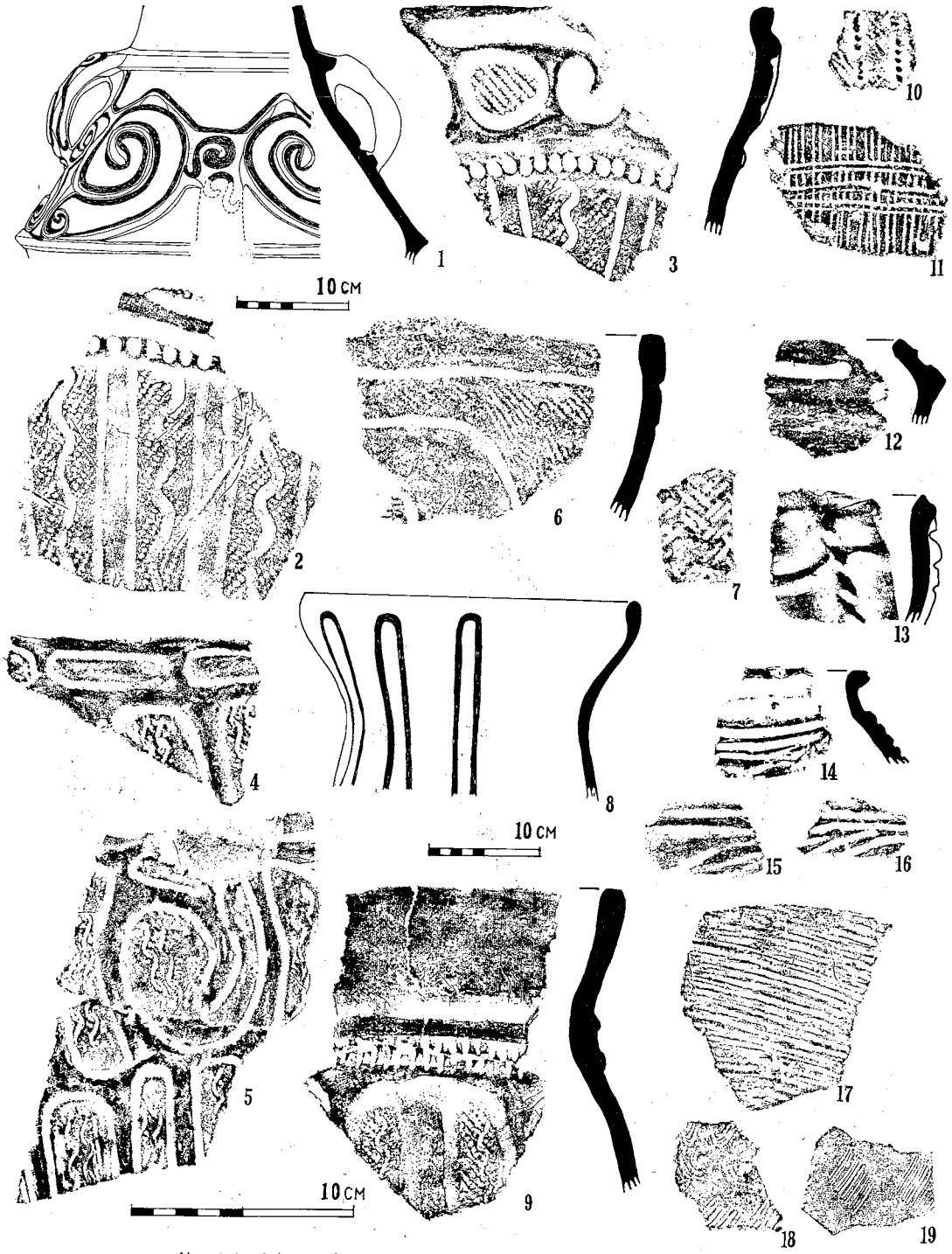
第73図　酒屋前遺跡出土土器（1：4）（1～4　7号住，5　9号住，6　12号住，7・8　13号住，9溝3）



第74図　酒屋前遺跡出土土器（1：3，但し1・6，1：6）
（1～11 11号住居址，
12～16 12号住居址，17～21 13号住居址，22～25 14号住居址，26～31 15号住居址）

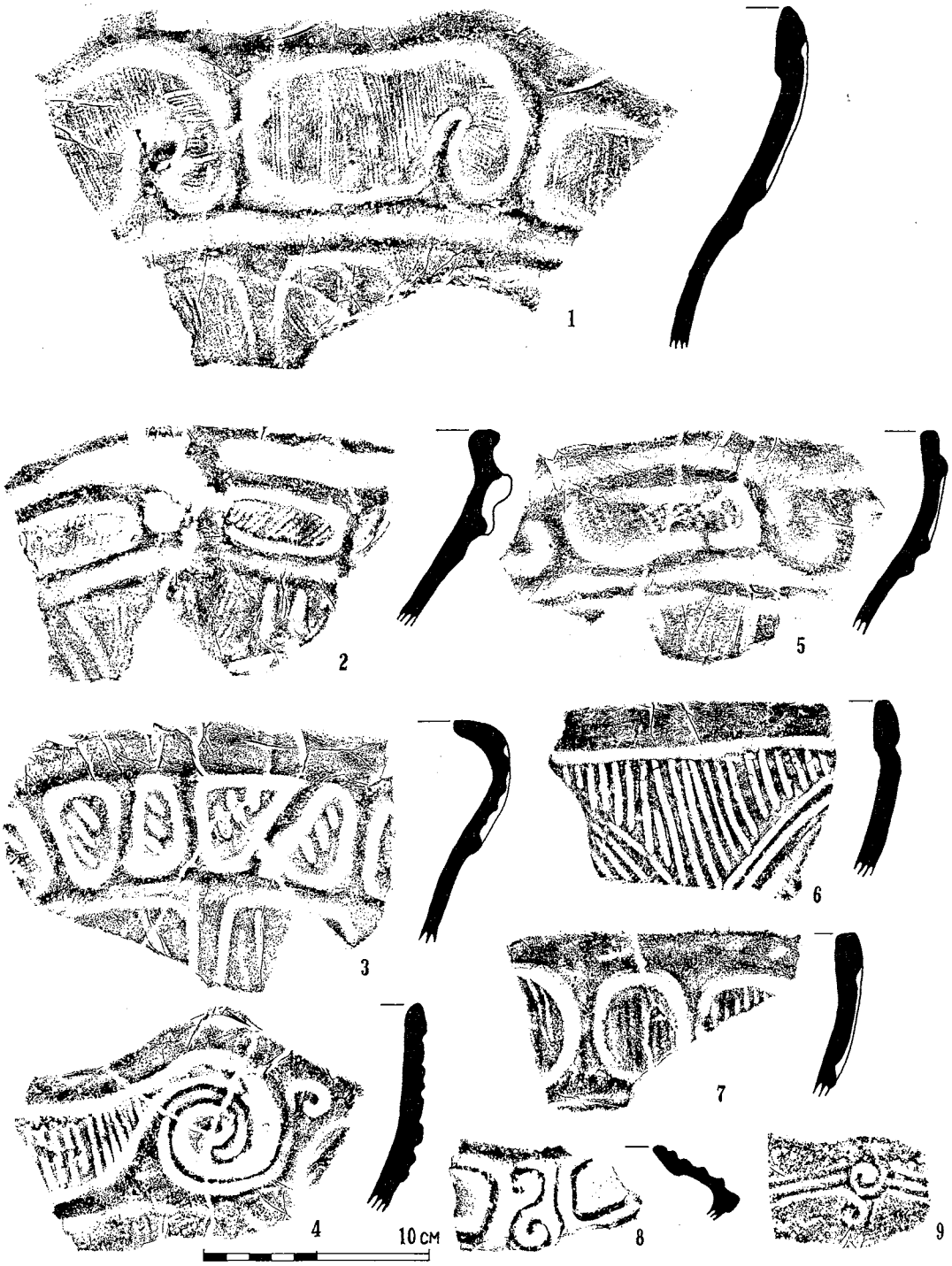


第75図　酒屋前遺跡出土土器（1：3，但し15・23・24，1：6）
（1～14 16竪住居址，15 土壙8，16・17 土壙
10，18 土壙11，19 土壙12，20 土壙15，21・22 21・22 土壙16，23 土壙26，24 土壙53）

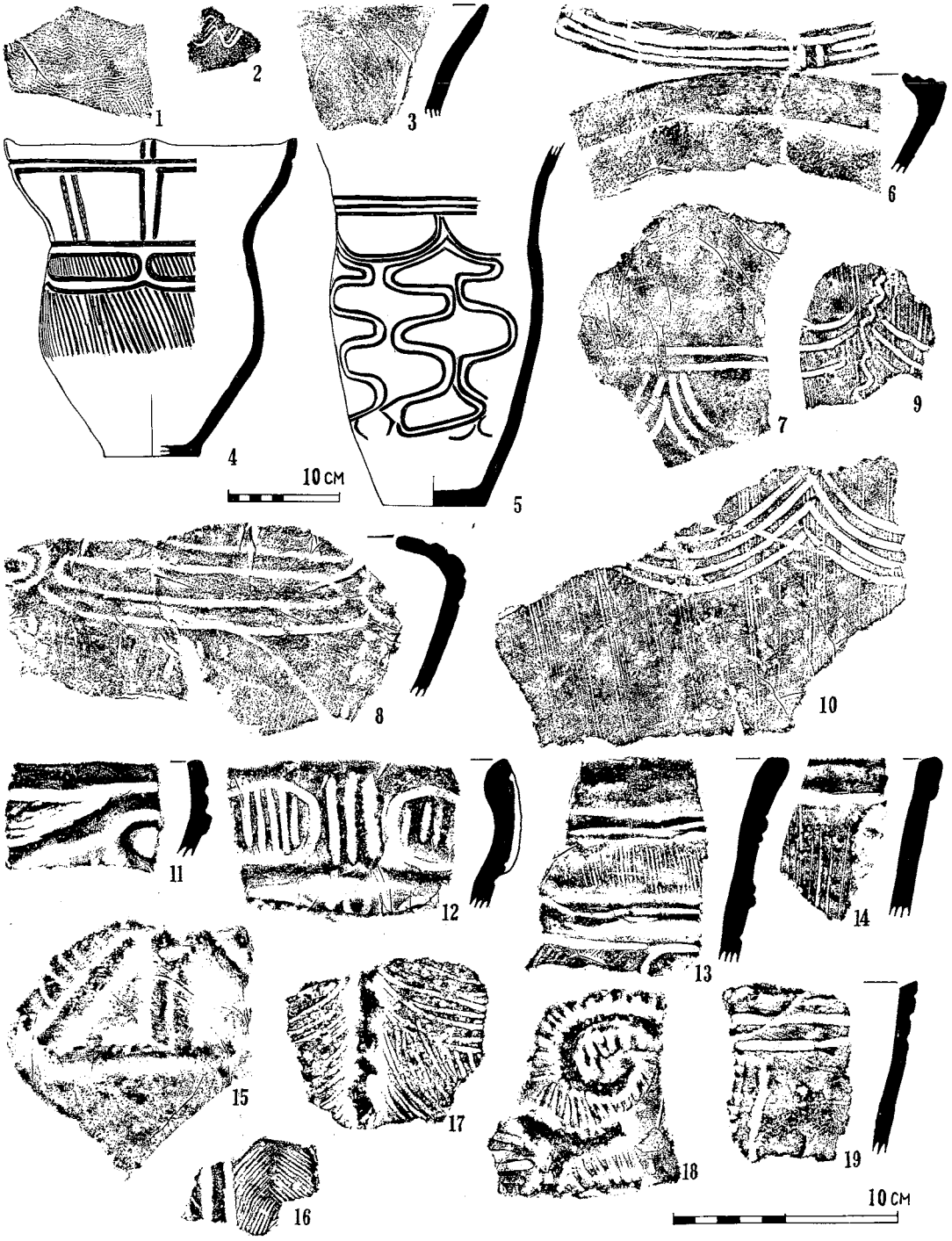


第76図　酒屋前遺跡出土土器（1：3，但し 1・8，1：6）

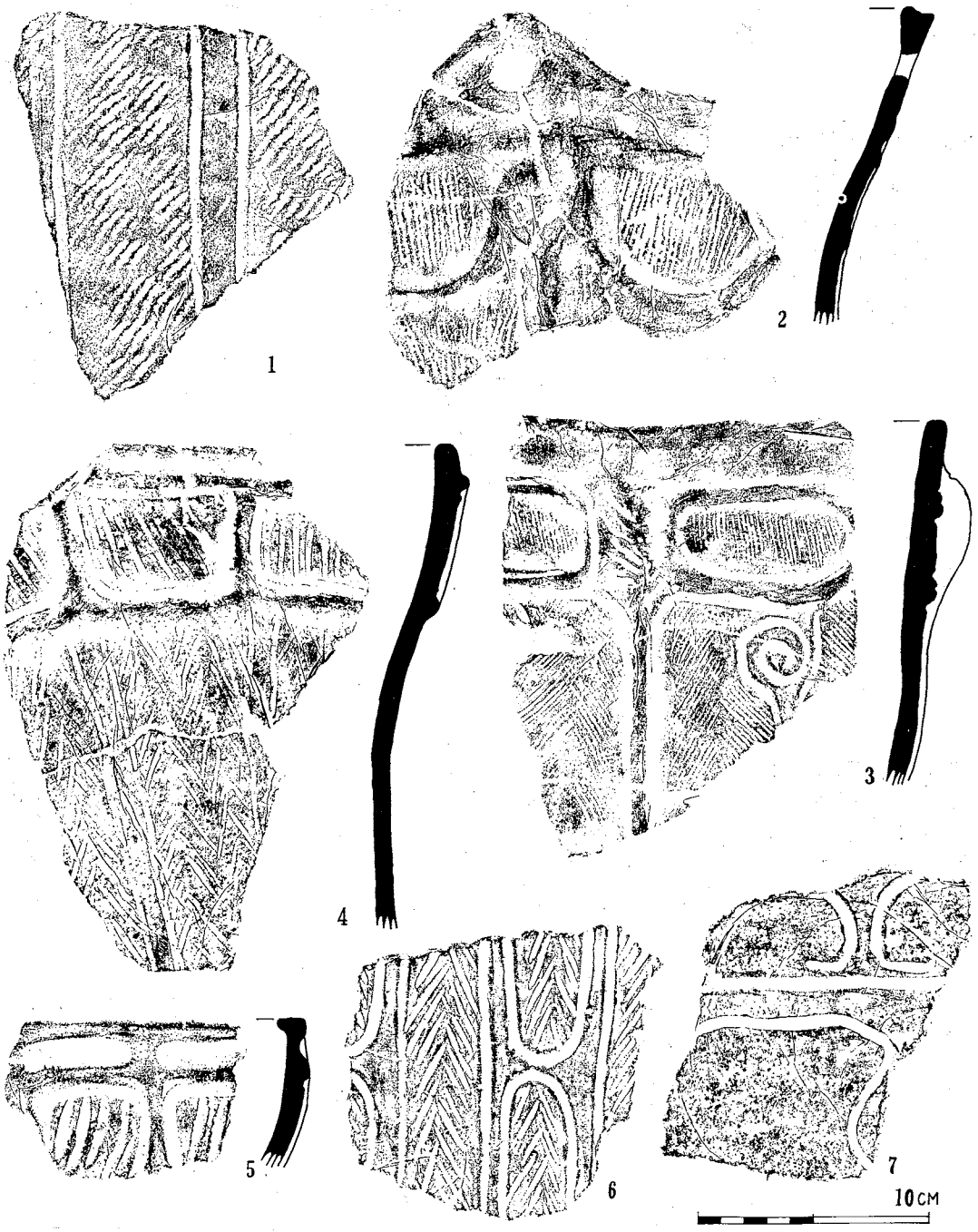
（1・2 土壙17，3 土壙54，4・5 土壙65，6・7 土壙70，8 土壙75，9 土壙92，10～19 その他）



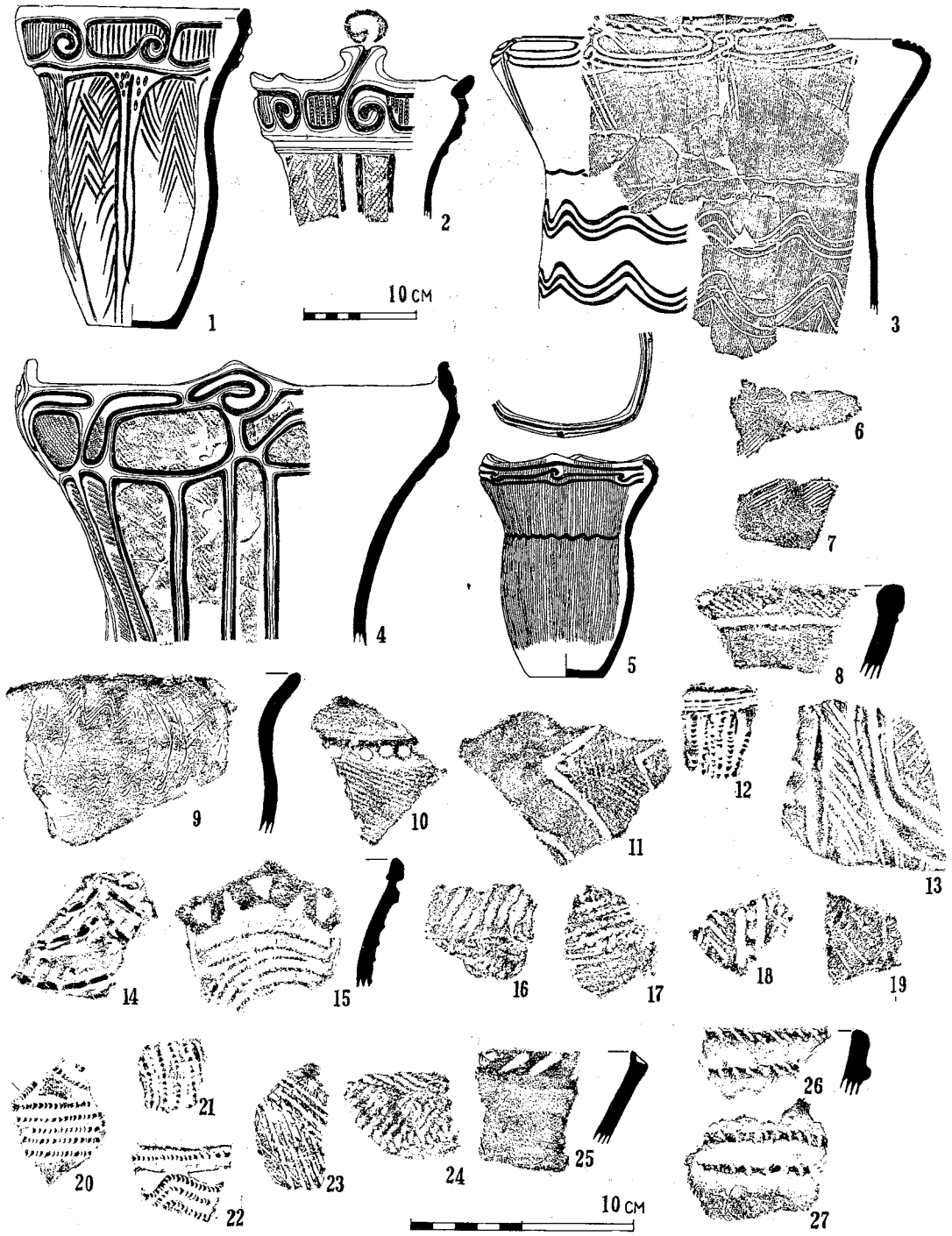
第77図　酒屋前遺跡土壙58出土土器（1：3）



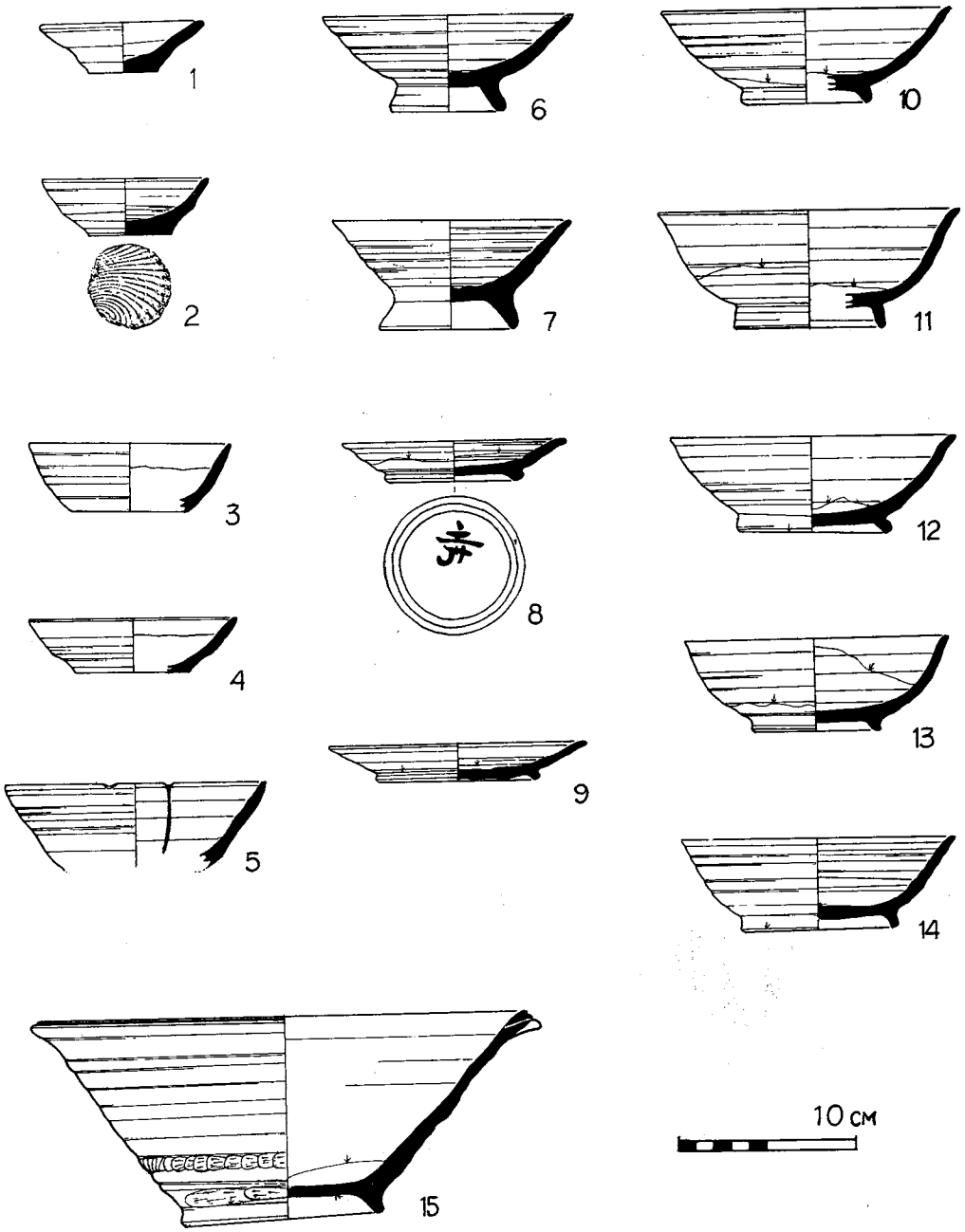
第78図　滝沢井尻遺跡出土土器（1：3，但し4・5，1：6）
（1～3　1号住居址，4～19　2号住居址）



第79図　滝沢井尻遺跡３号住居址出土土器（１：３）

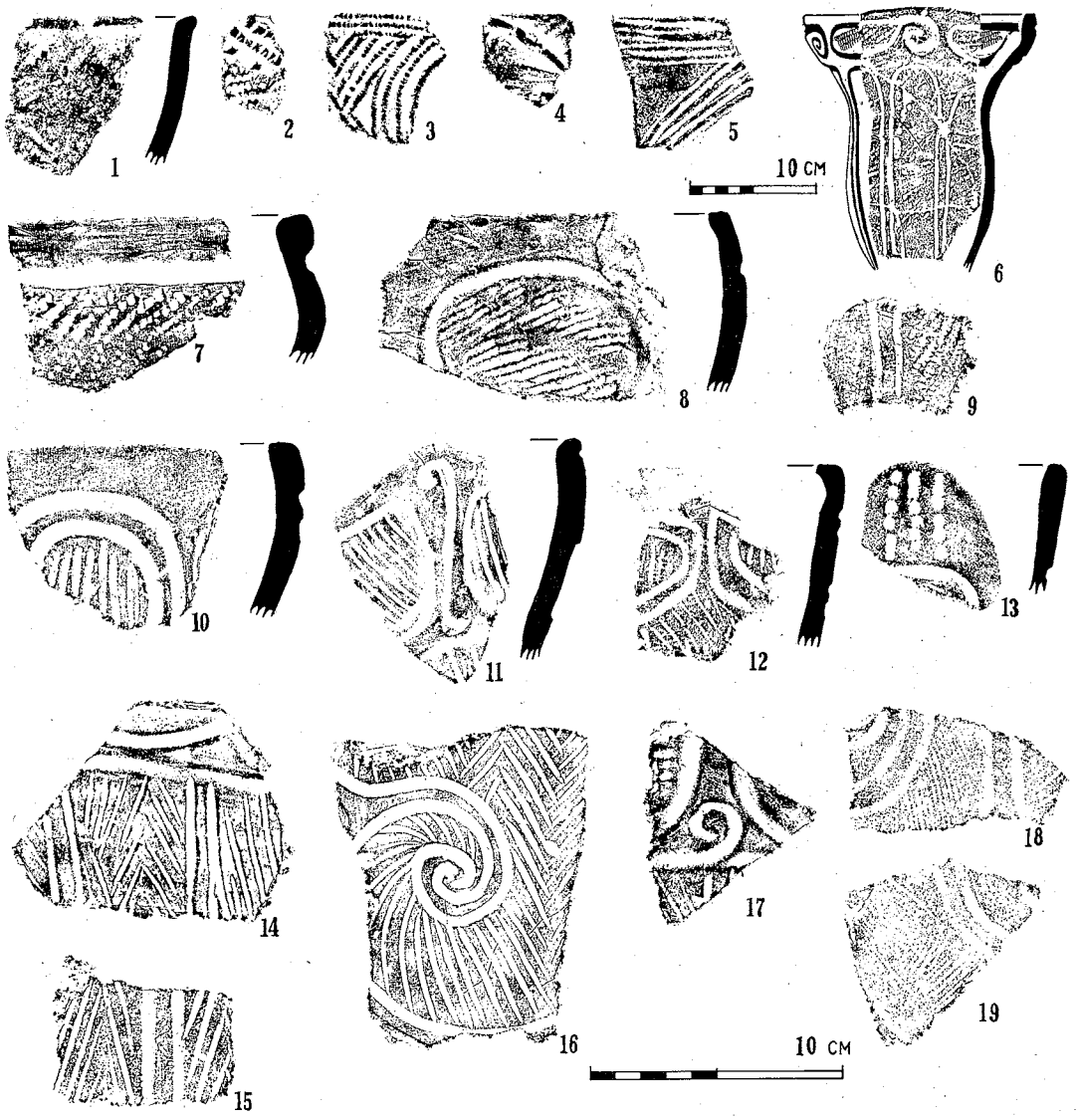


第80図　滝沢井尻遺跡出土土器(1：3但し1～5　1：6)
(1・2　3号住居址，
3～5　7号住居址，6・7方形周溝墓，8・9溝3，10・11土壙6，12土壙13，13土壙14，14土壙15，15～17土壙18，18・19土壙20，20～27 その他)

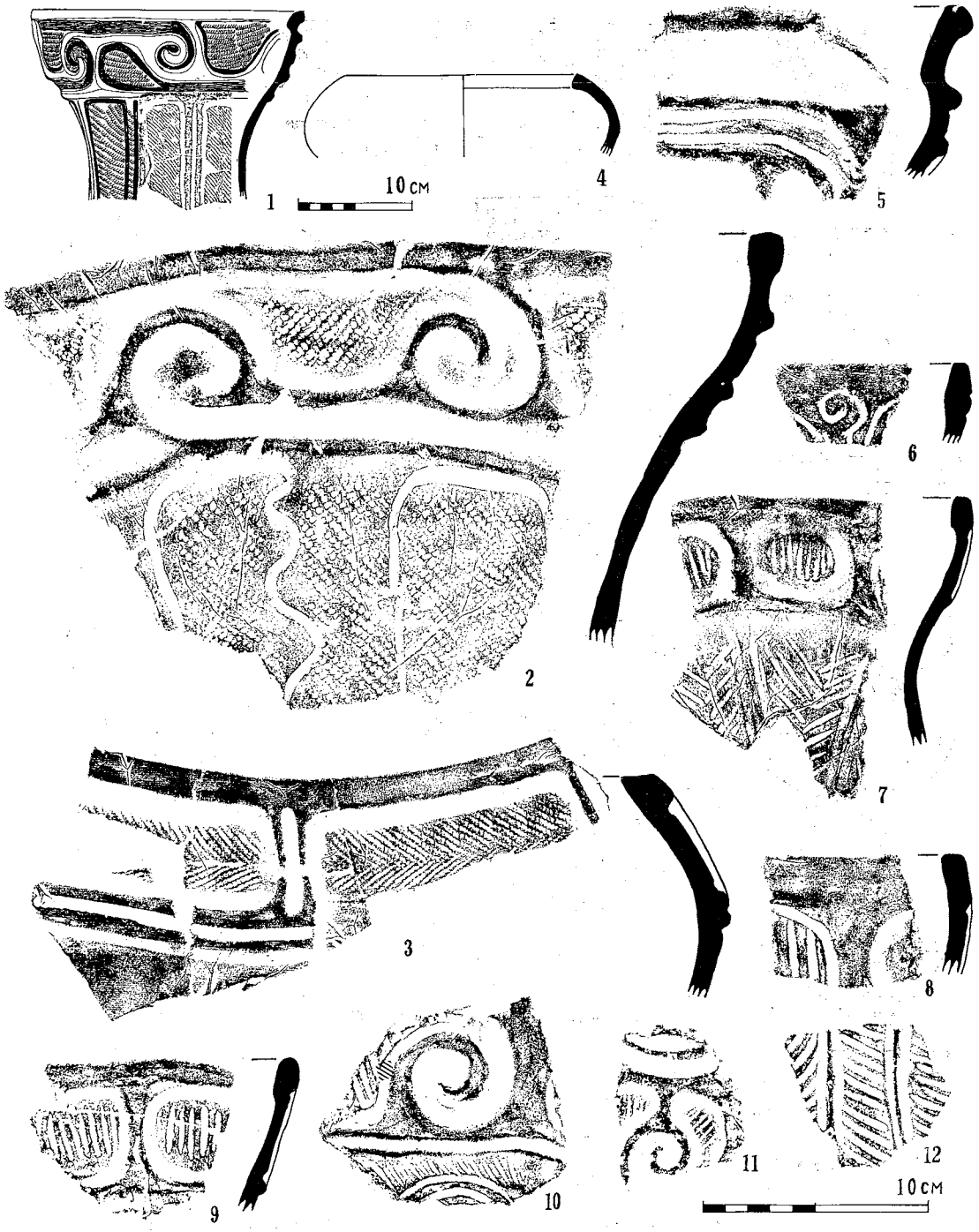


第81図　滝沢井尻遺跡出土土器（1：4）（1～14　4号住，15土壙3）

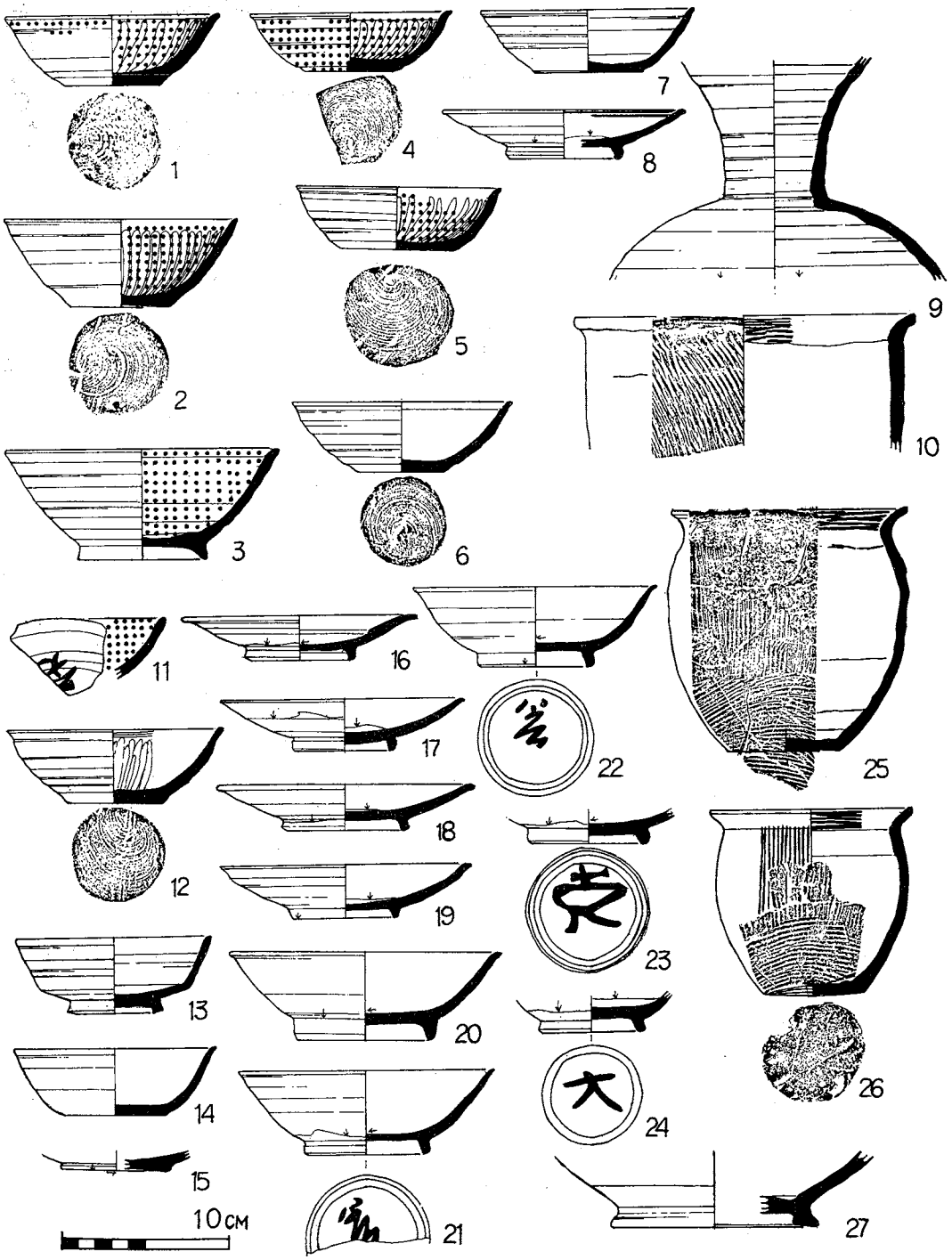
第82図小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3）
（1～11　2号住居址，12～18　5号住居址）



第83図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3，但し6，1：6）
（1～5　6号住居址，6～19　7号住居址）

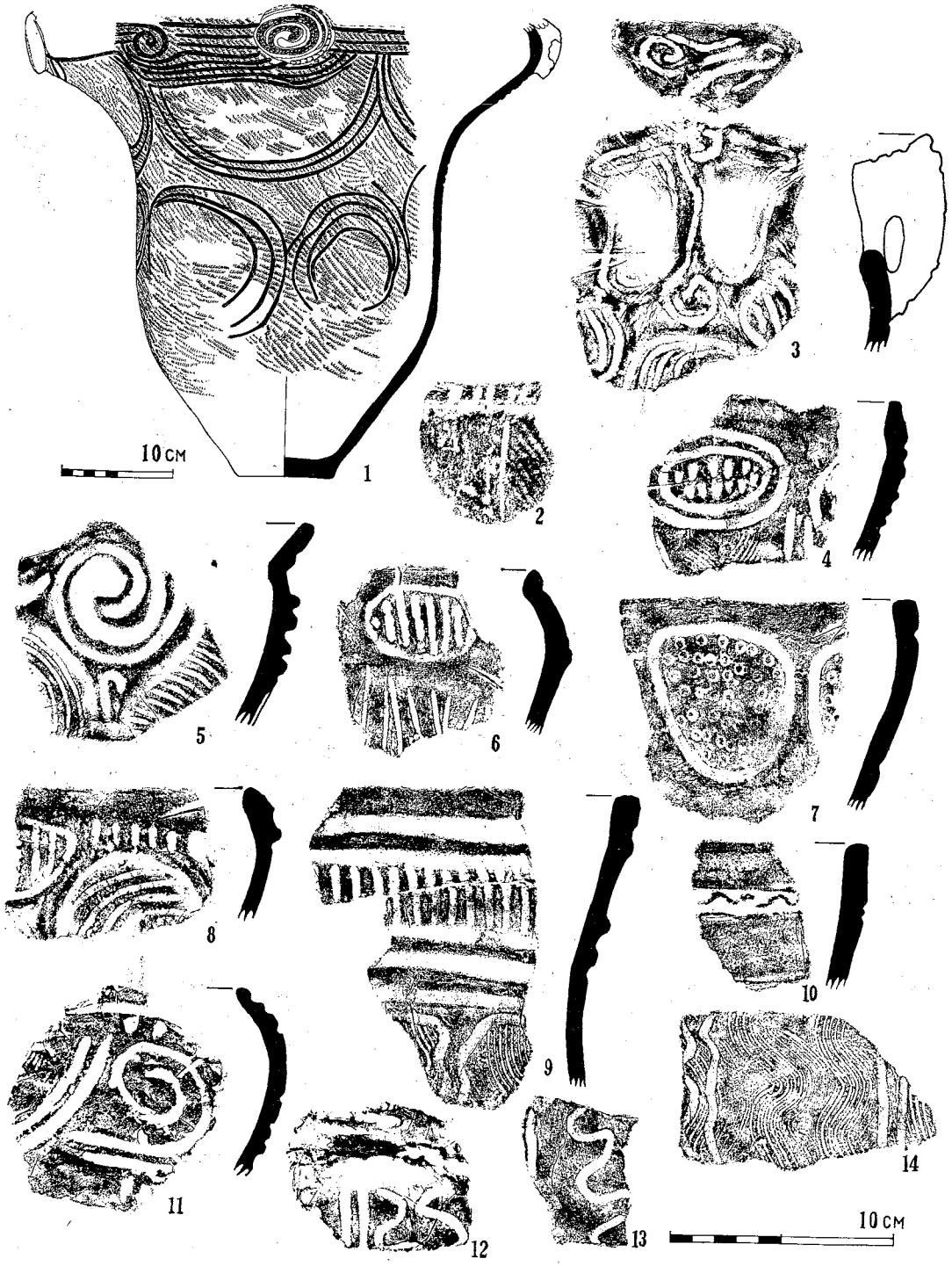


第84図　小垣外・辻垣外遺跡９号住居址出土土器（１：３，但し１・２，１：６）

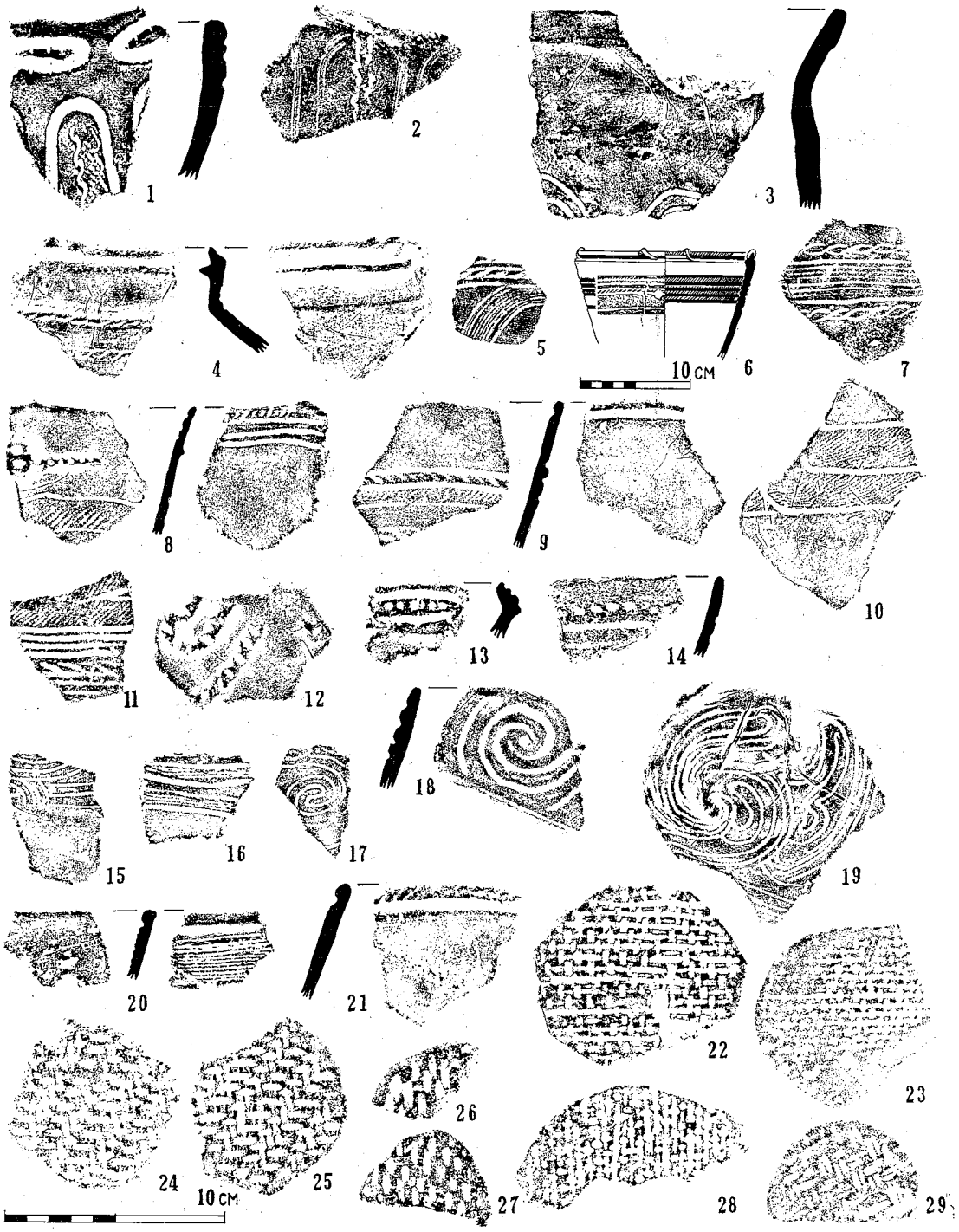


第85図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：4）（1～10　11号住，11～27　12号住）

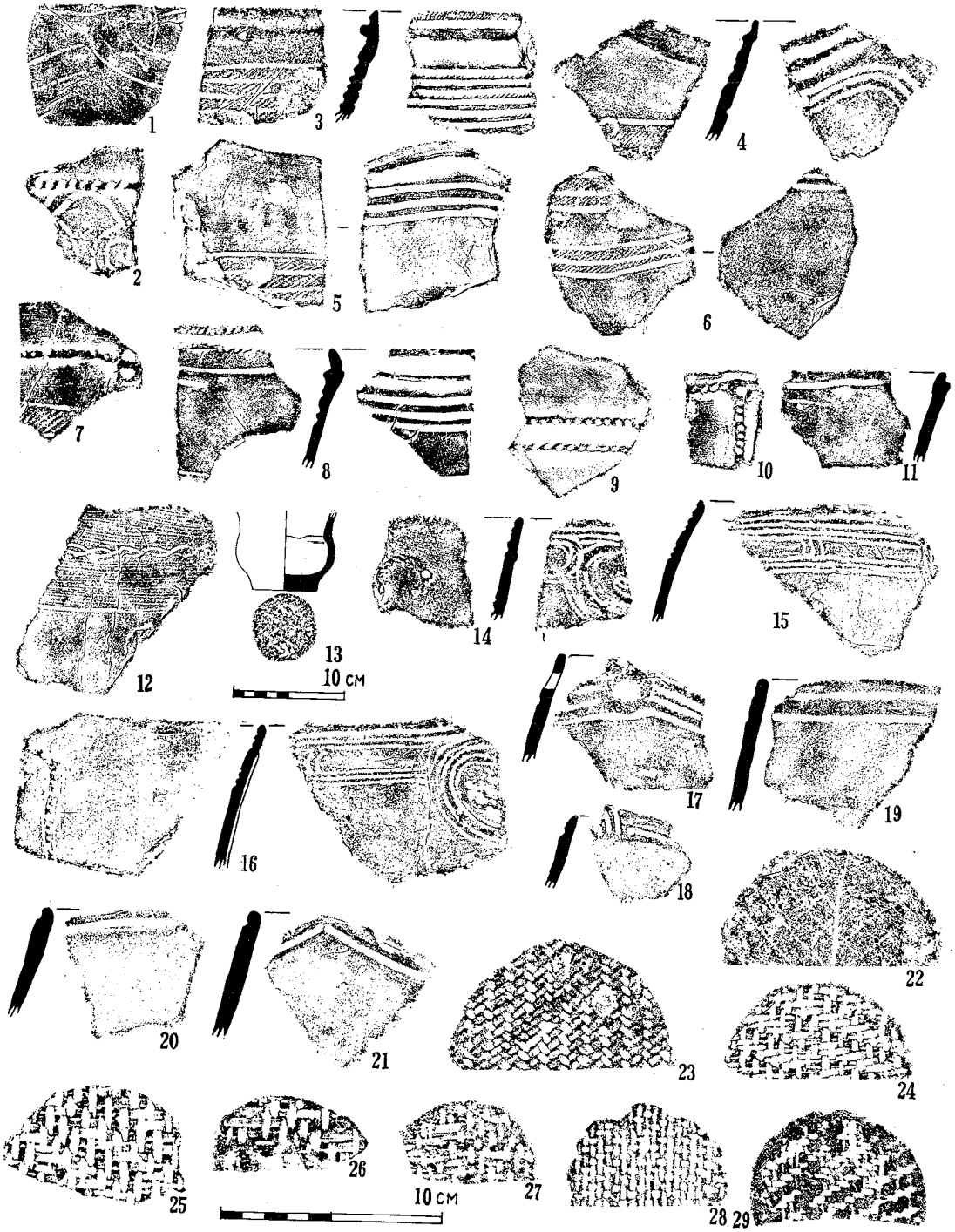
第86図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3，但し2・13，1：6）
（1 16号住居址，2～12 18号住居址，13～35 22号住居址）



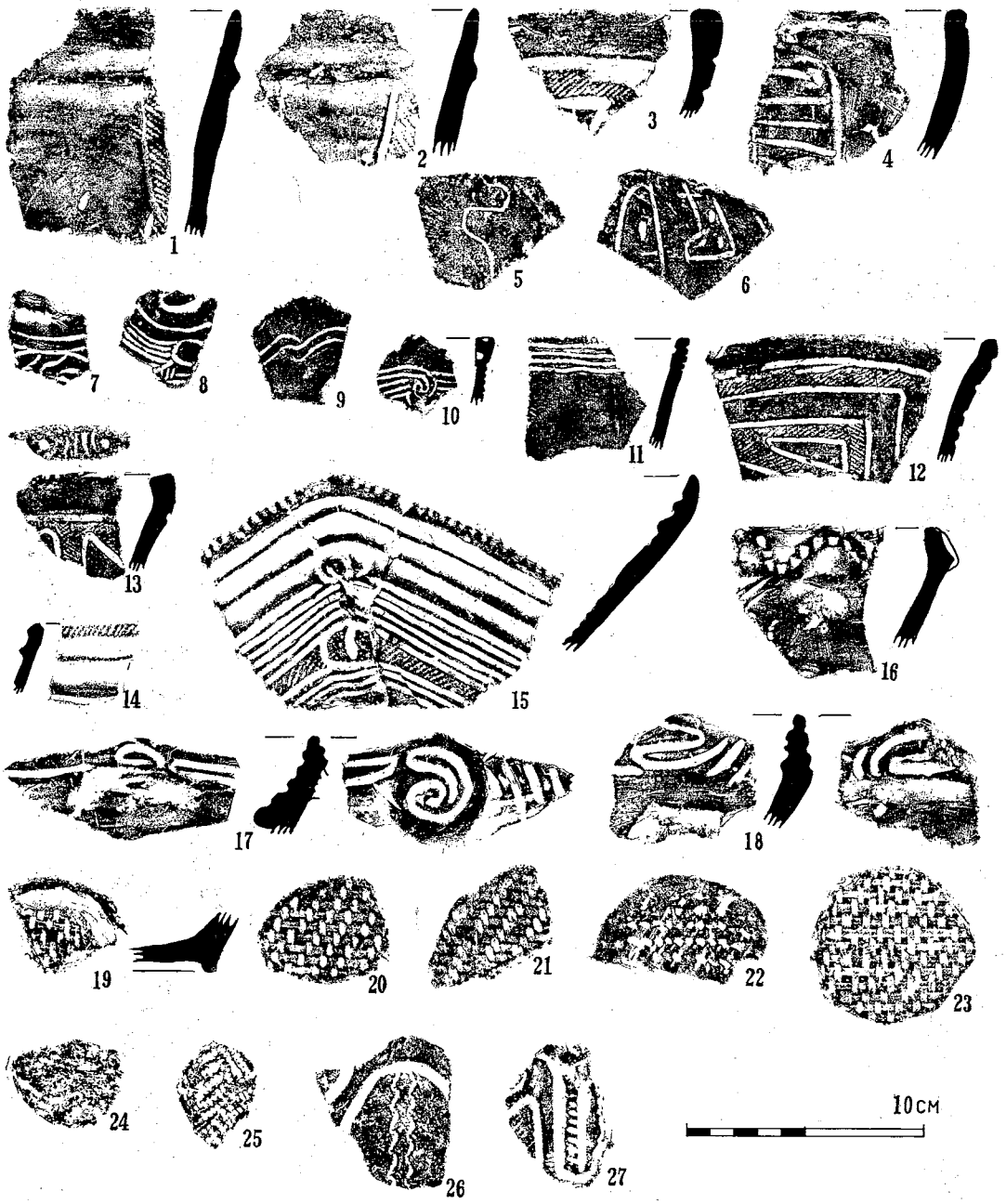
第87図　小垣外・辻外外遺跡20号住居址出土土器（1：3，但し1，1：6）



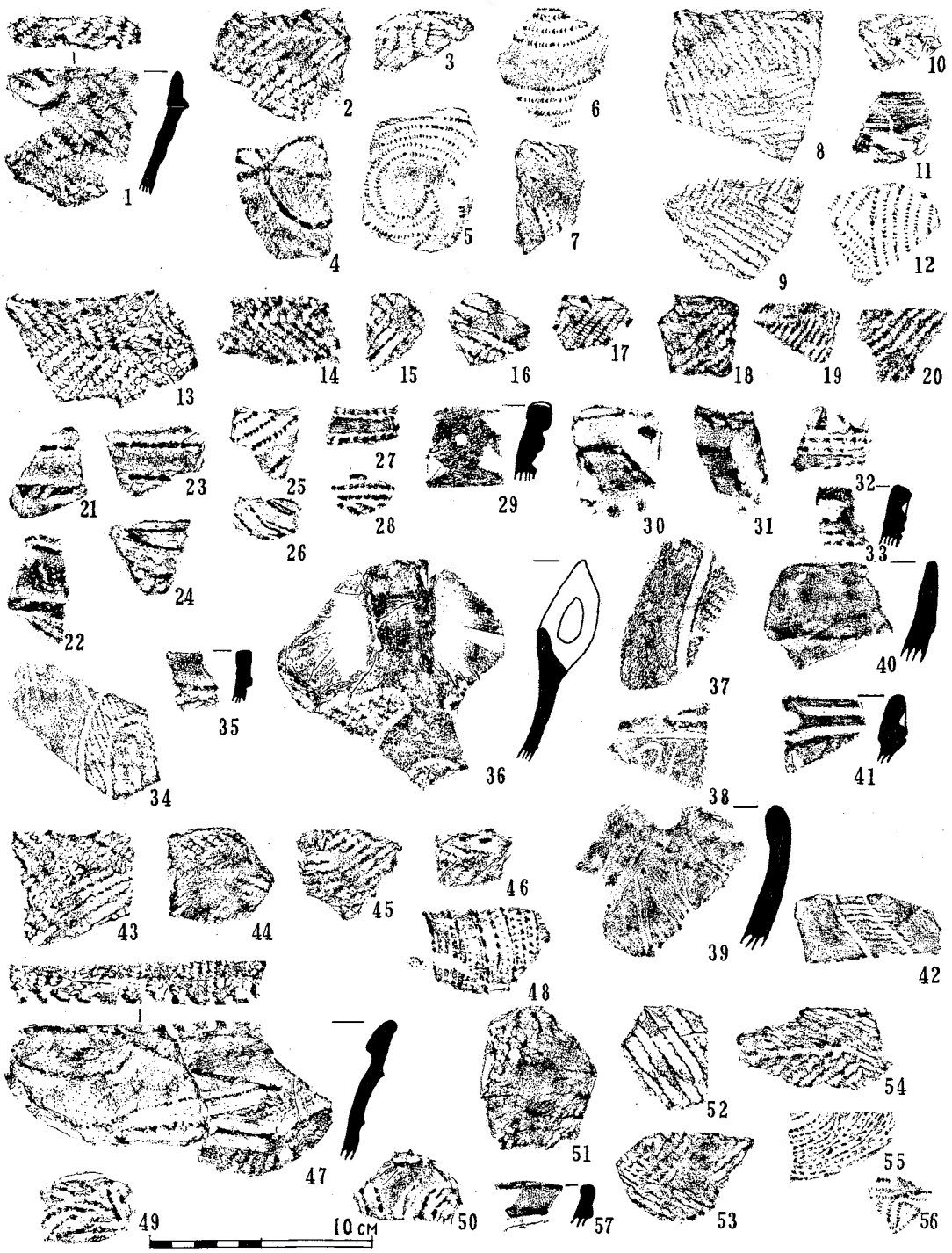
第88図小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3，但し6，1：6）
（1～3 柱穴群Ⅱ，4～29 土器集中地Ⅰ）



第89図　小垣外・辻垣外遺跡土器集中地Ⅱ出土土器（1：，但し13，1：6）

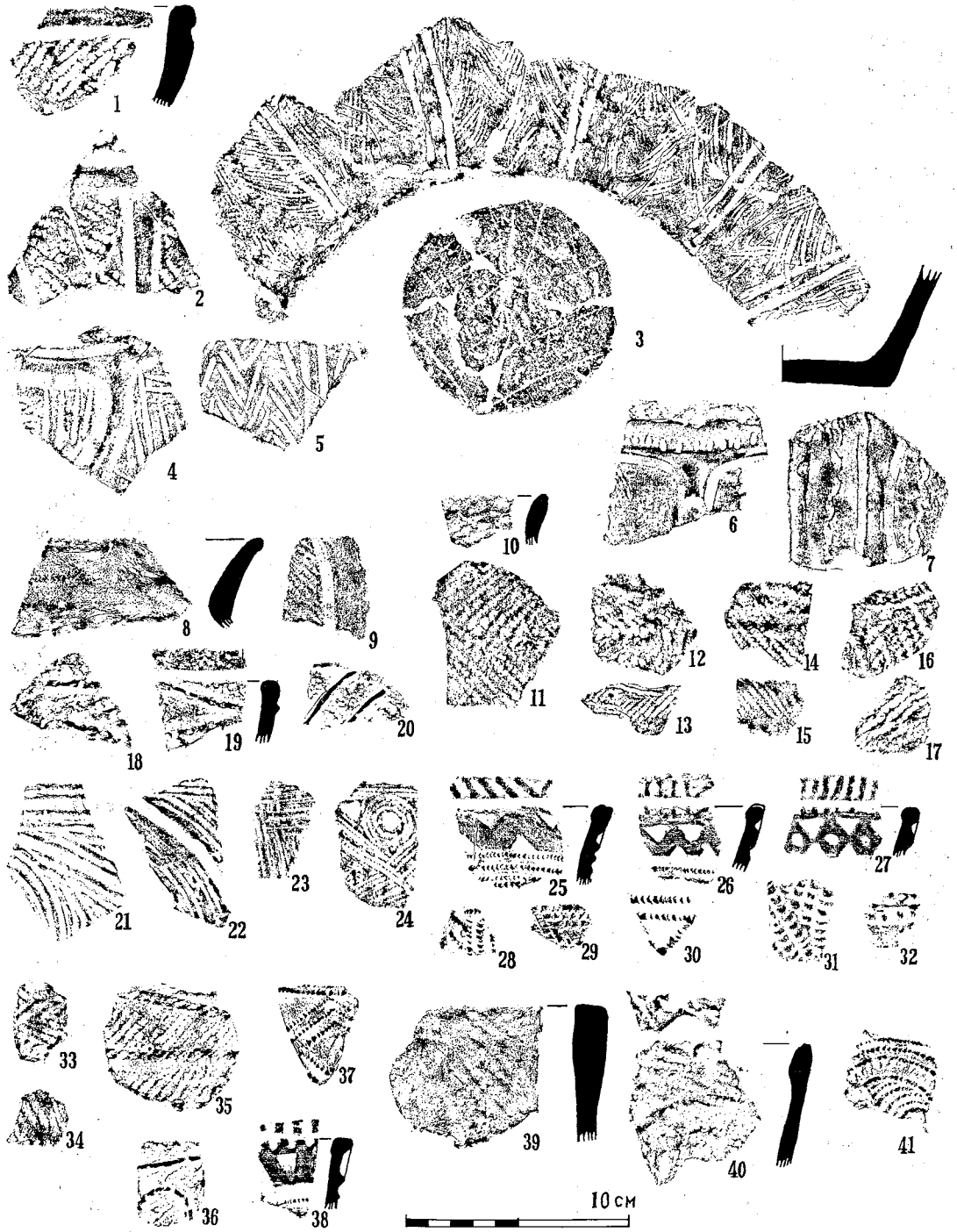


第90図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3）（1～23焼土群，24～27溝2）

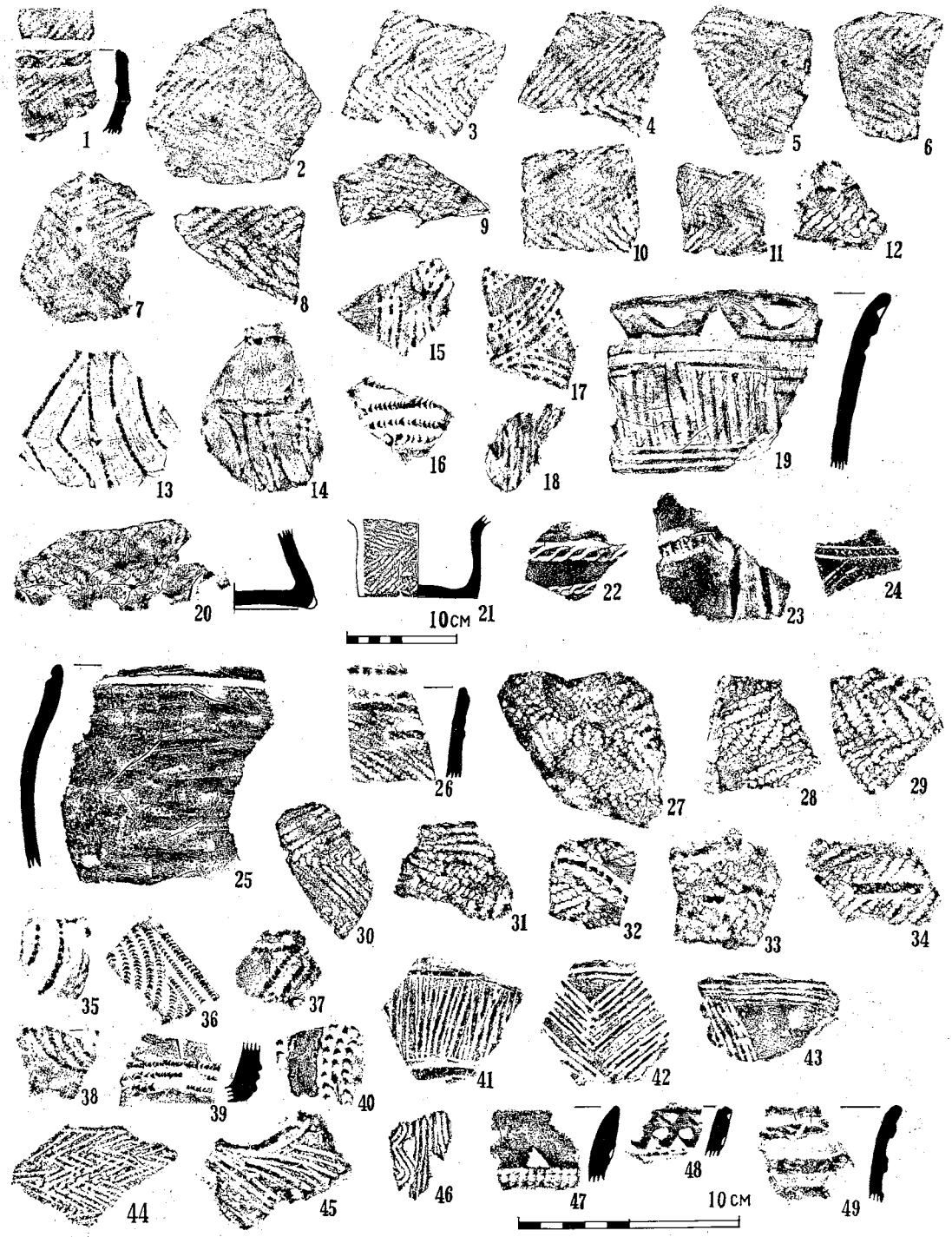


第91図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（１：３）
（１～７土壙１，８～12土壙２，13～33土壙３，34・35土壙５，36～38土壙７，39～42土壙８，43～50土壙９，51～57土壙13）

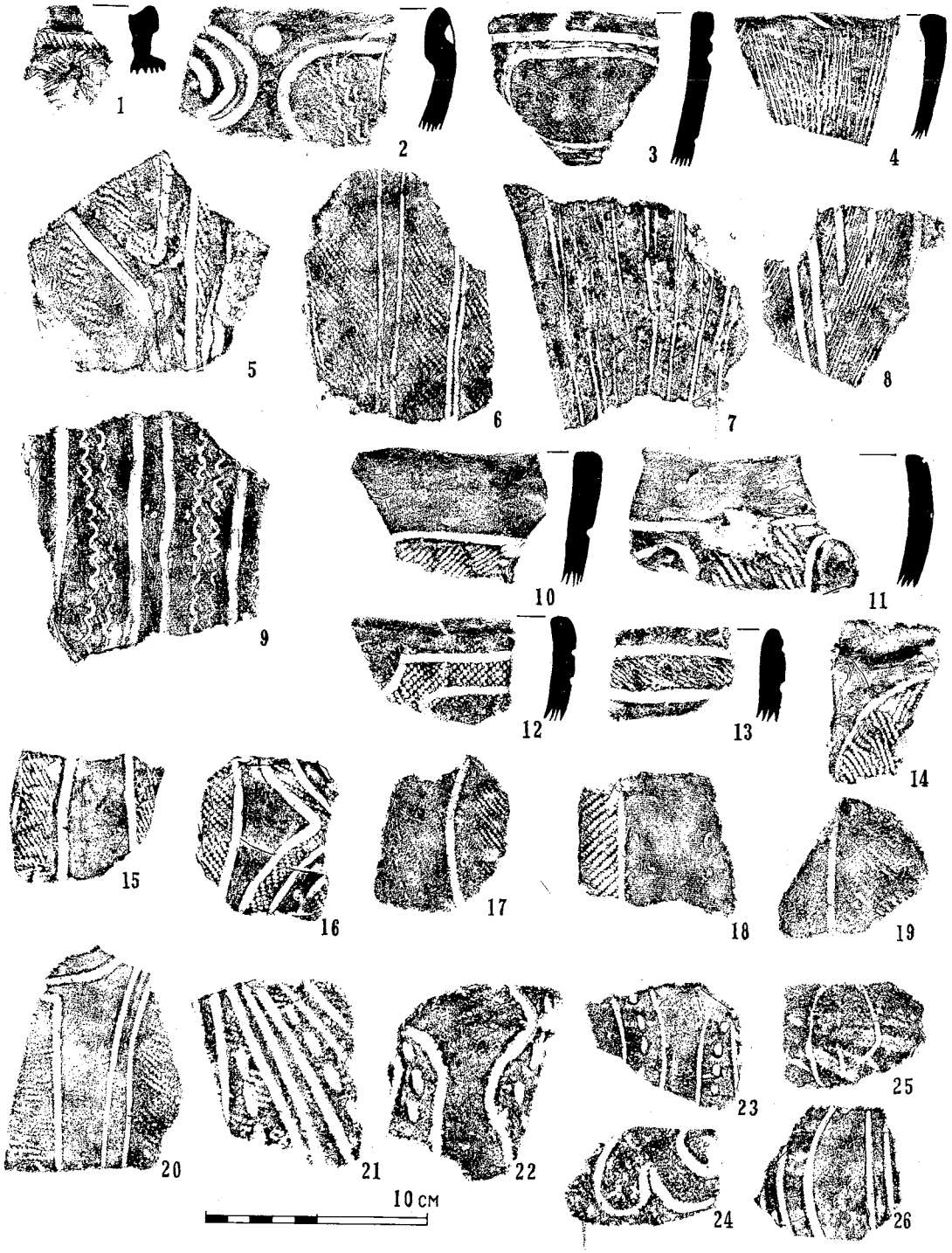
第92図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3）
（1～15土壙12，16～24土壙16，25～28土壙22，29～31土壙30，32～35土壙36，36～38土壙50，39～43土壙52,44土壙68）



第93図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3）
（1～3 土壙19，4・5 土壙70，6・7 土壙93，
8・9 土壙97，10～32 土壙98，33～38 土壙99，39～41 土壙 107）

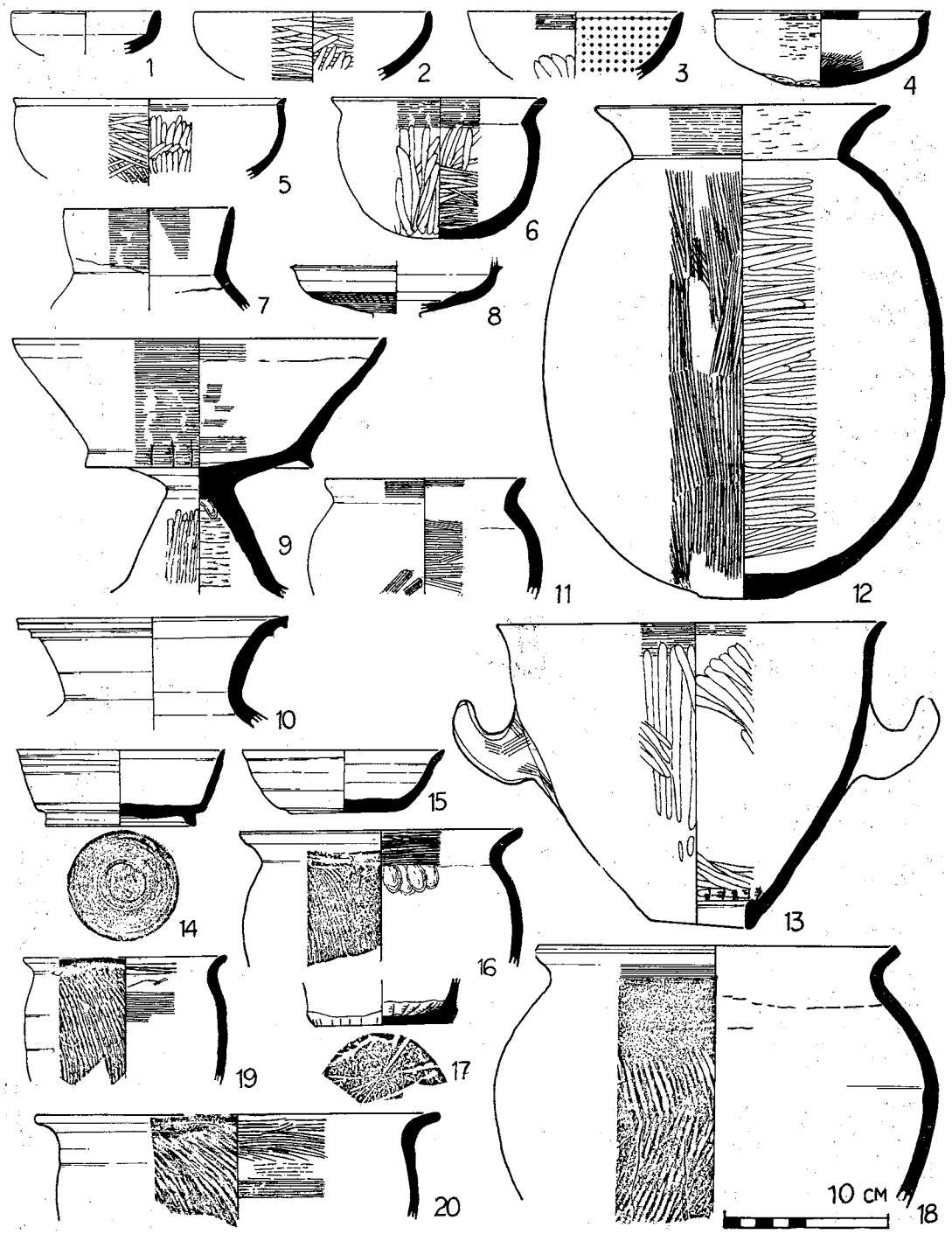


第94図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3，但し21，1：6）
（1～20土壙 102，21土壙 108，22～25土壙 111，26～49その他）



第95図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（1：3）

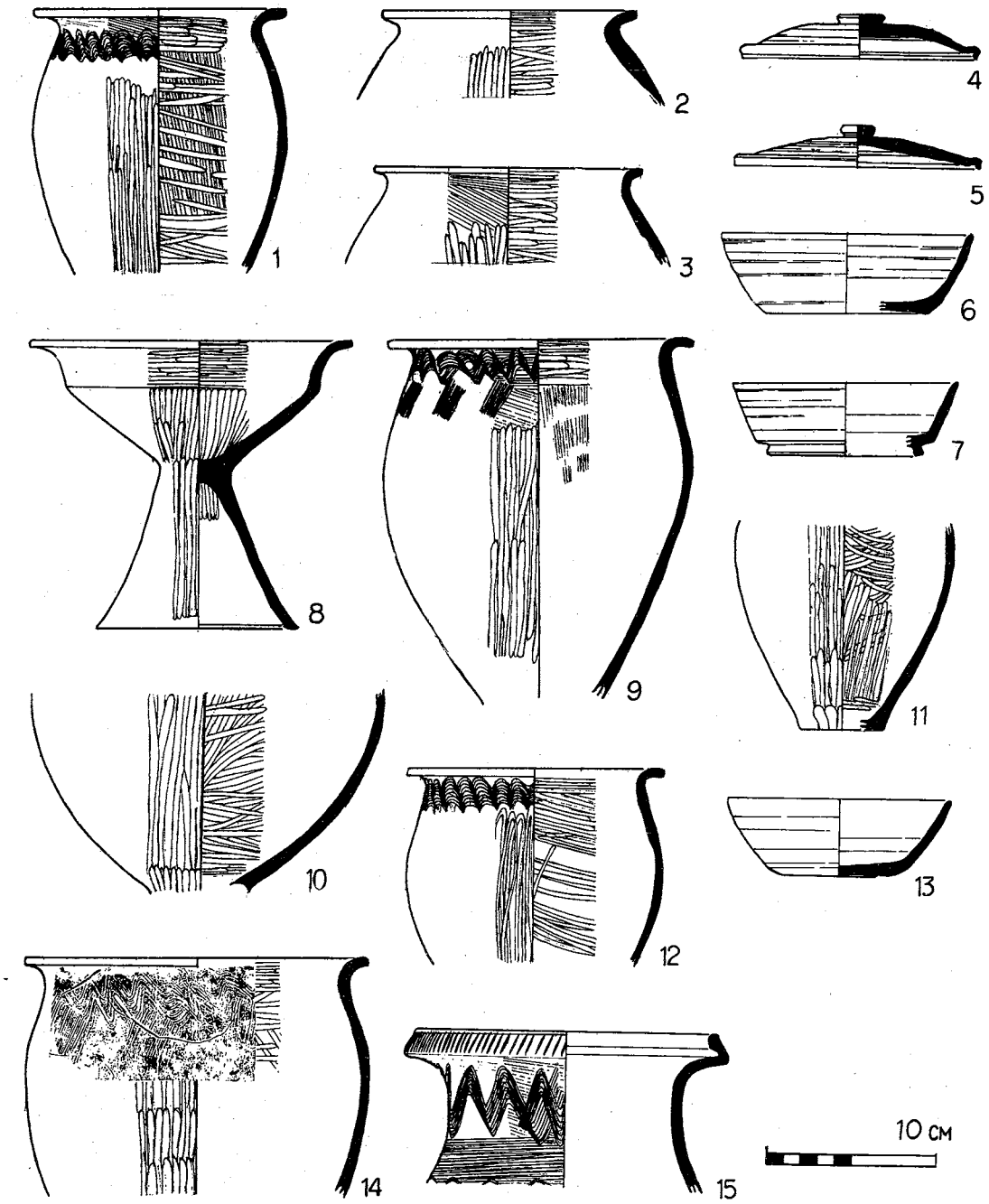
第96図　小垣外・辻垣外遺跡出土土器（１：３）



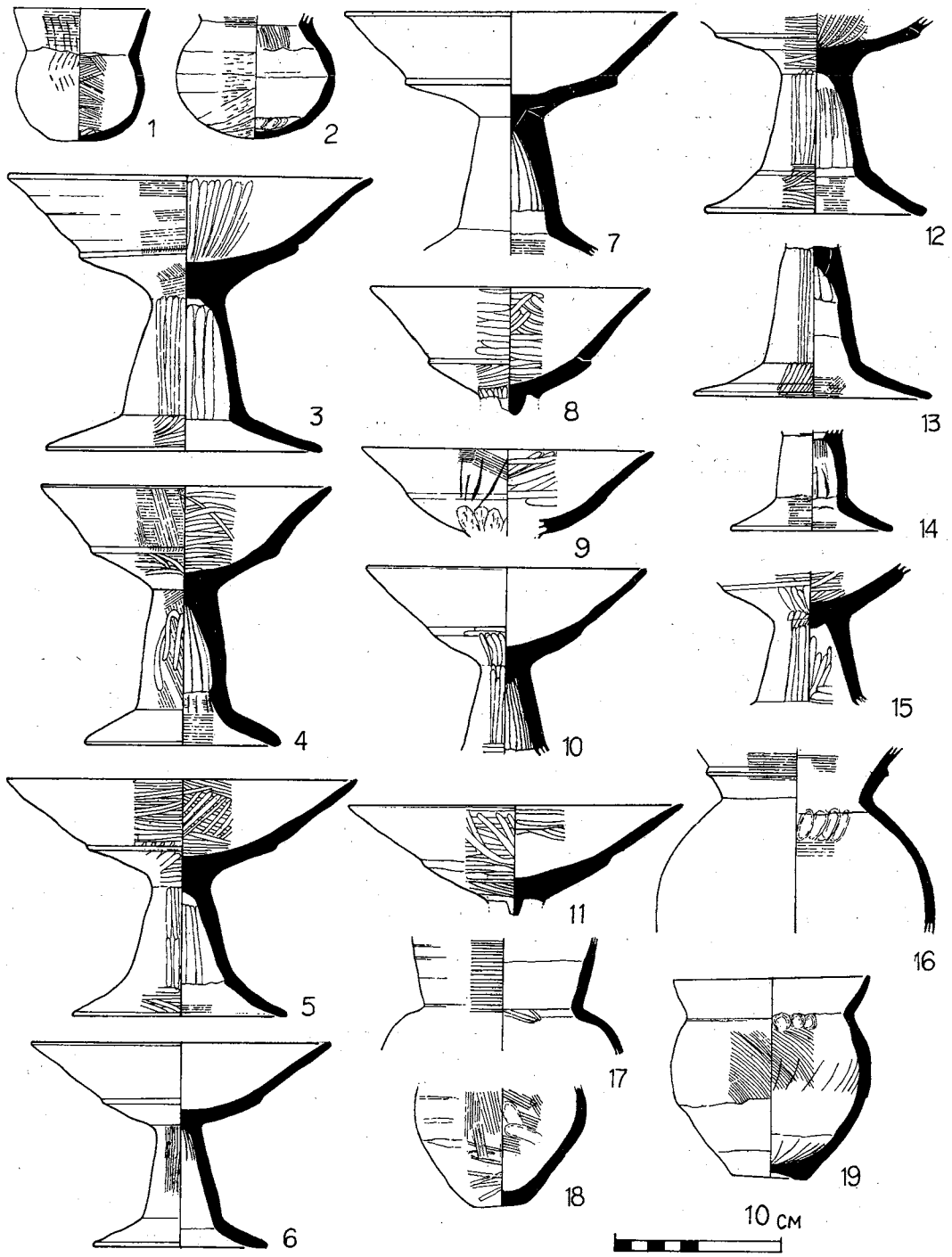
第97図　三壺渕遺跡出土土器（１：４）　（１～13　１号住，14～18　２号住，19・20　３号住）

第98図　三壺渕遺跡（1～14）及び上の金谷遺跡出土土器（1：3）

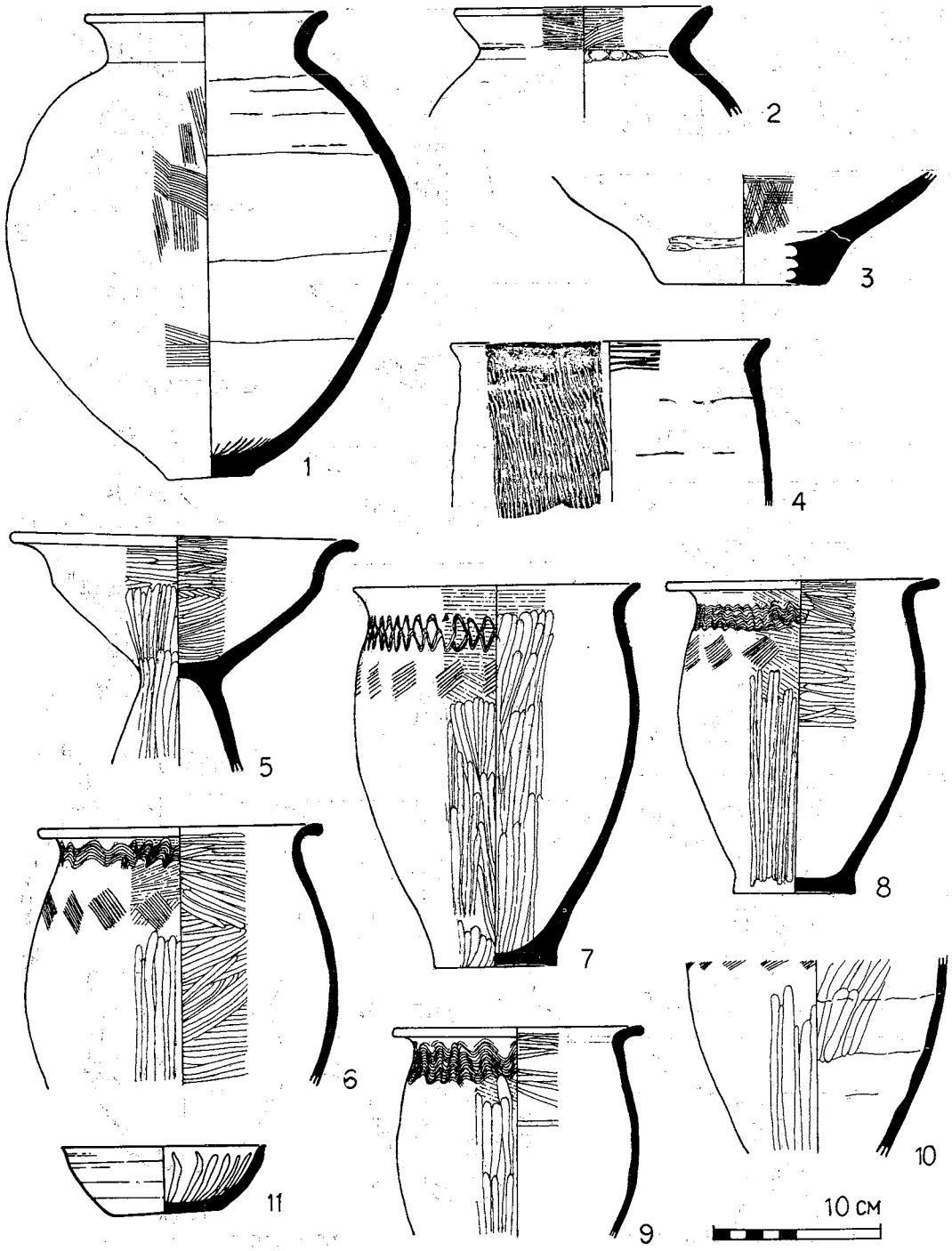
（1～8 土壙1，9～14その他，15・16　1号住居址，17　3号住居址，18　5号住居址，19～23　9号住居址，24～39　12号住居址30～40その他）



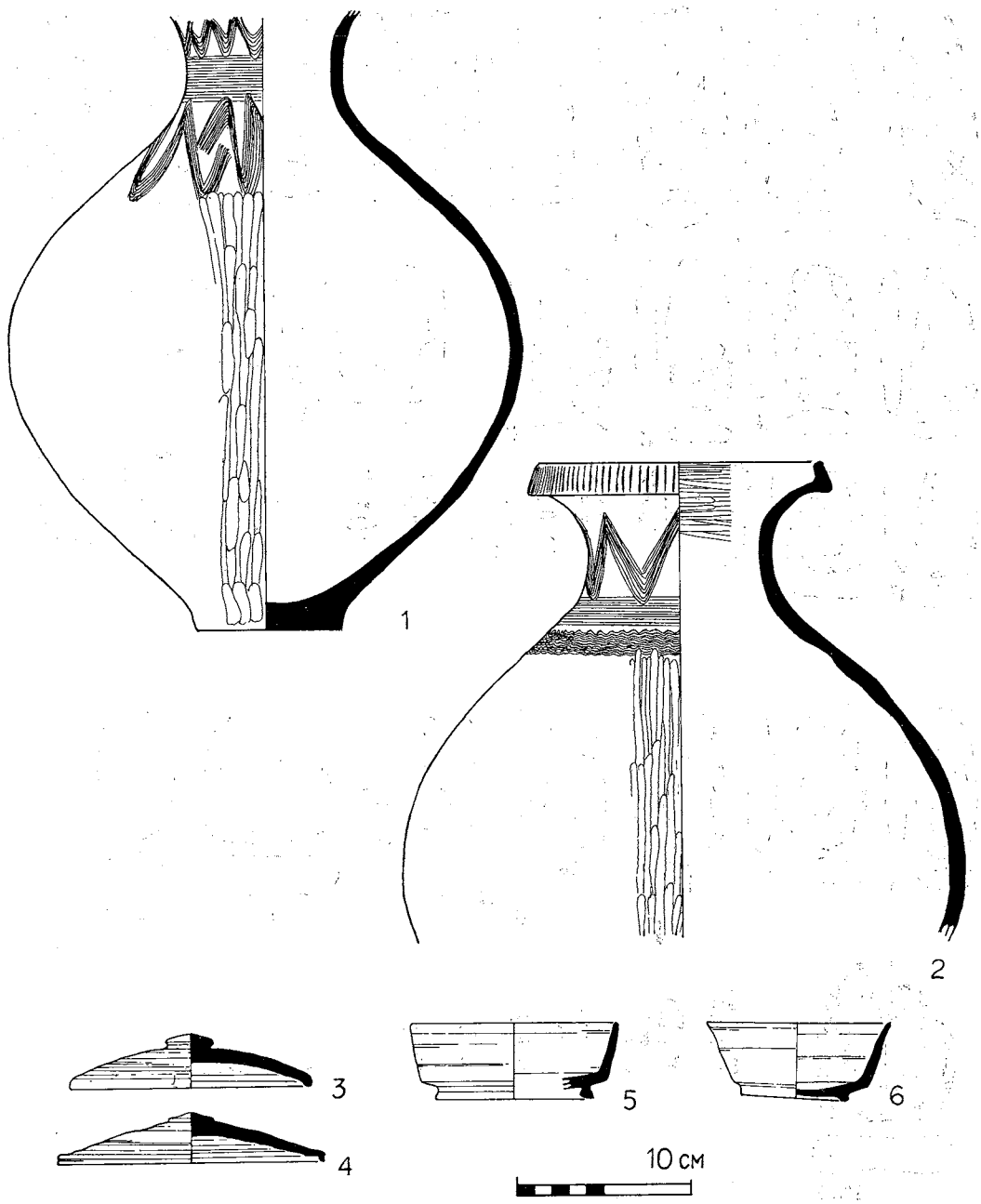
第99図　上の金谷遺跡出土土器（1：4）（1～3　1号住，4～7　2号住，8～10　3号住，11　5号住，12　7号住，13　8号住，14・15　9号住）



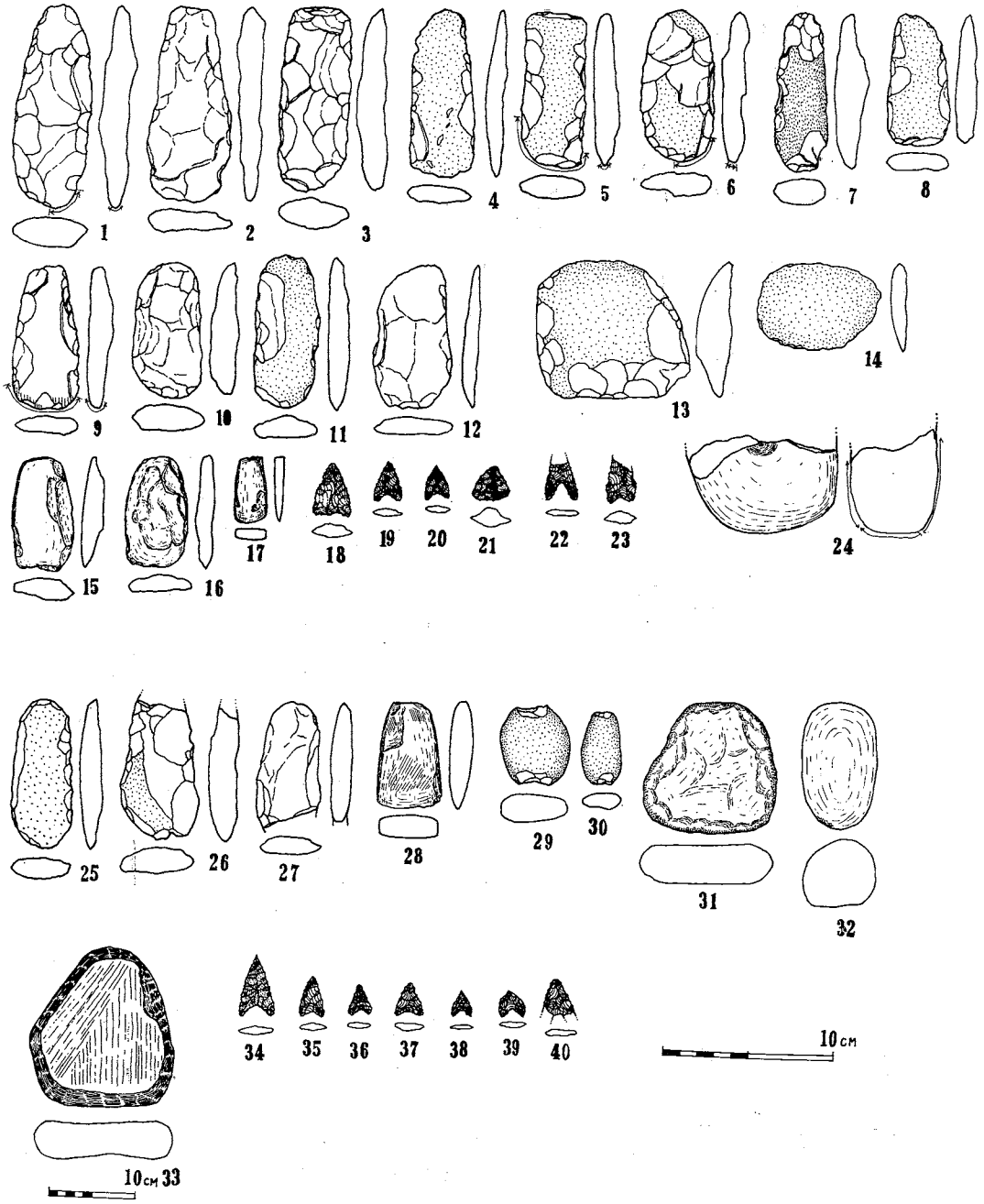
第100図　上の金谷遺跡10号住居址出土土器（1：4）



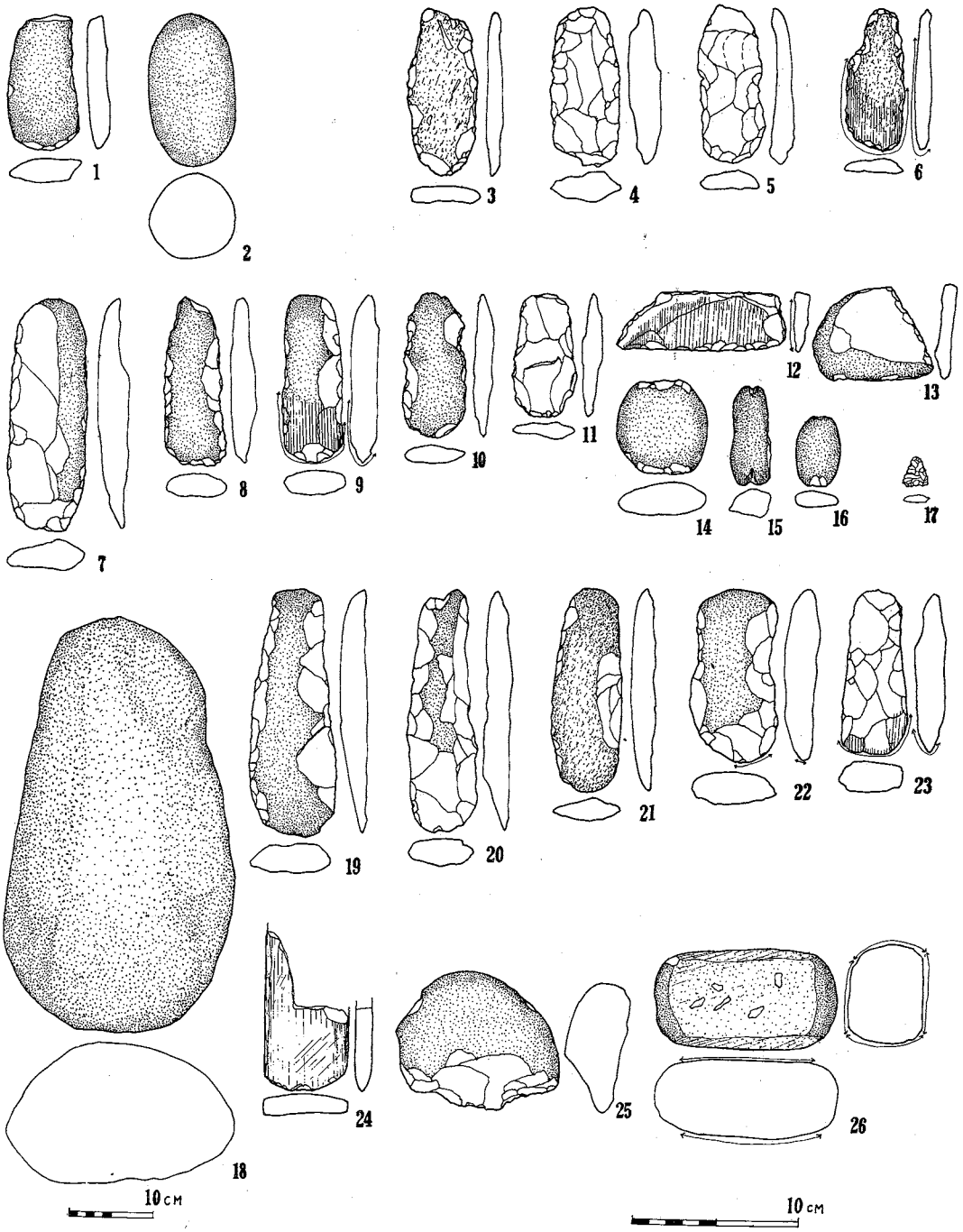
第101図　上の金谷遺跡出土土器（1：4）（1～3　10号住，4・11　11号住，5～10　12号住）



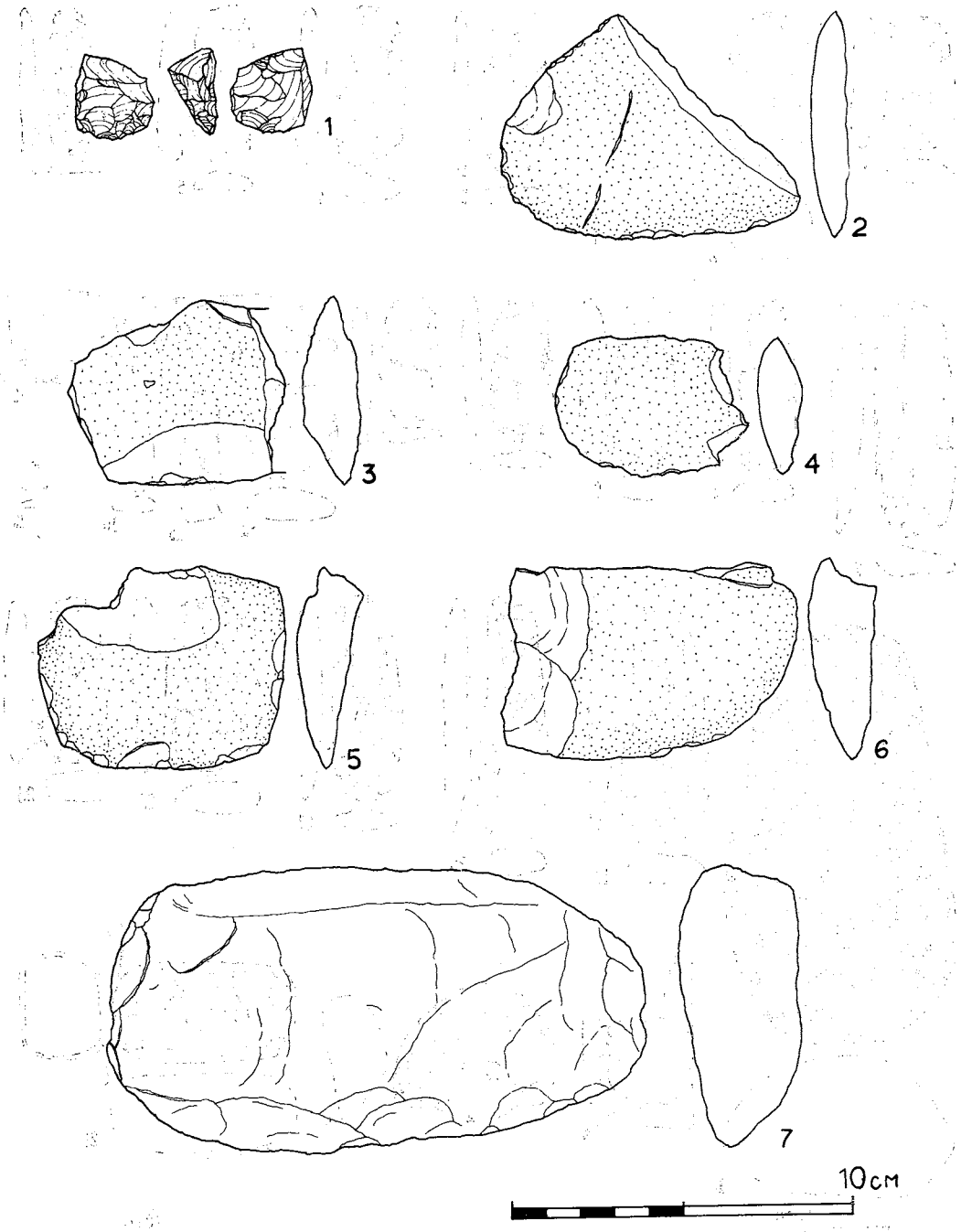
第102図　上の金谷遺跡出土土器（1：4）（1・2　12号住，3・5土壙8，6その他）



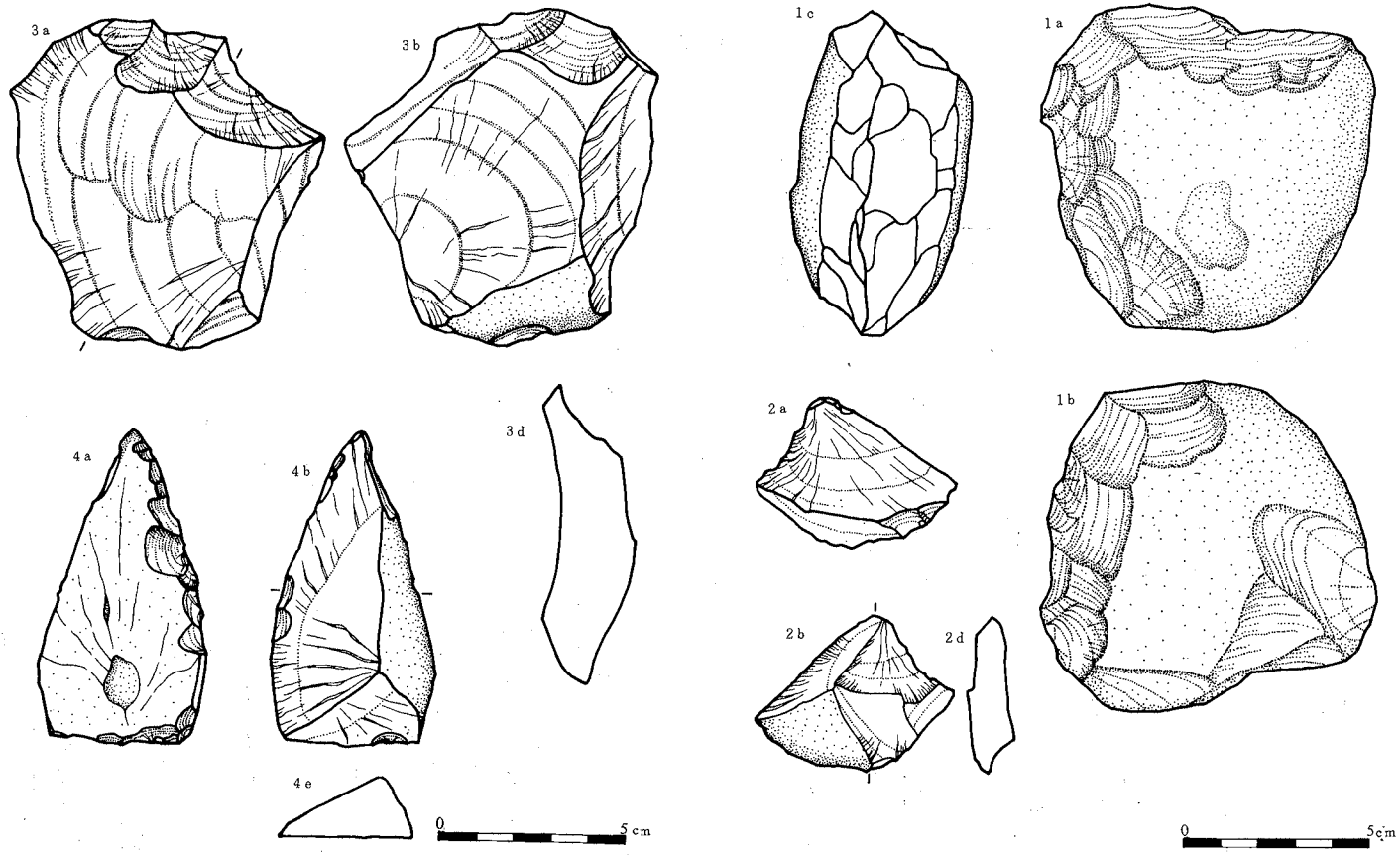
第103図　柳田遺跡出土石器（1：4，但し33，1：8）（1～24　1号住居址，25～40　2号住居址）



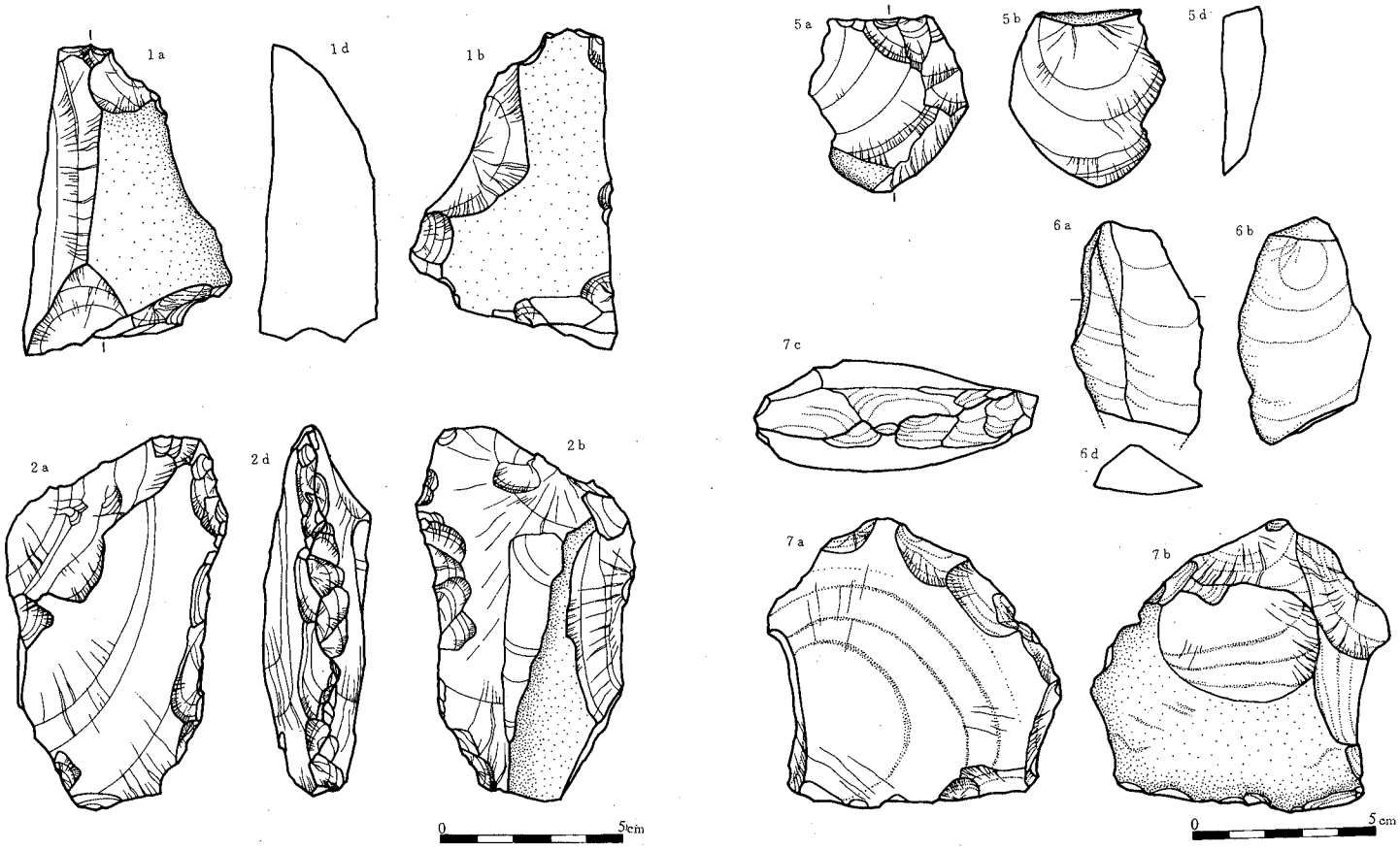
第104図　柳田遺跡（1～16）・山田遺跡⑰及び石子原遺跡（18～26）出土石器（1：4，但し18，1：8）（1・2　土壙4，3～6土壙5，7～16　その他，17　その他，18　配石1，19～26　その他）



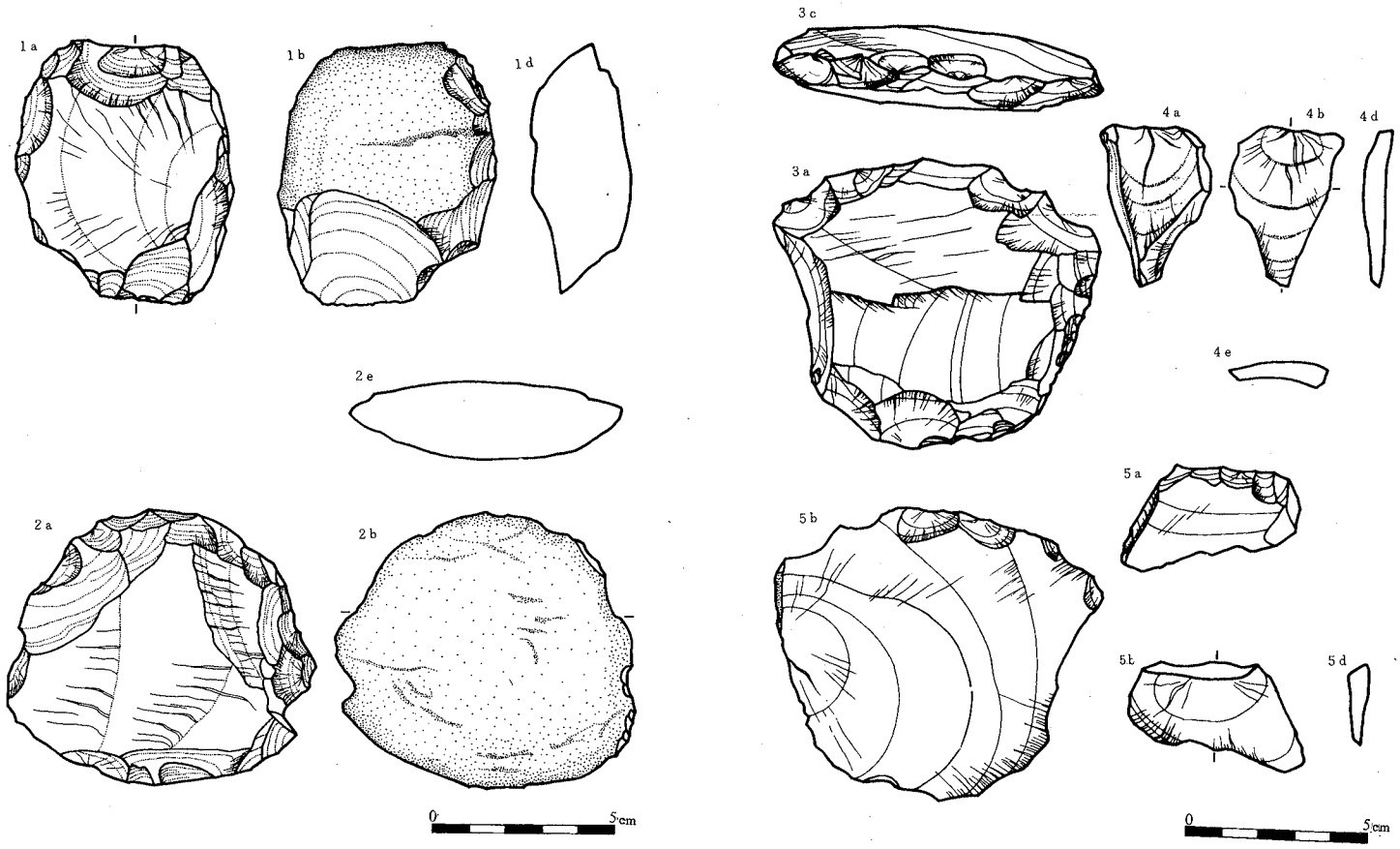
第105図　石子原遺跡出土石器（1：2）（1・2土壙4，3～7土壙12）



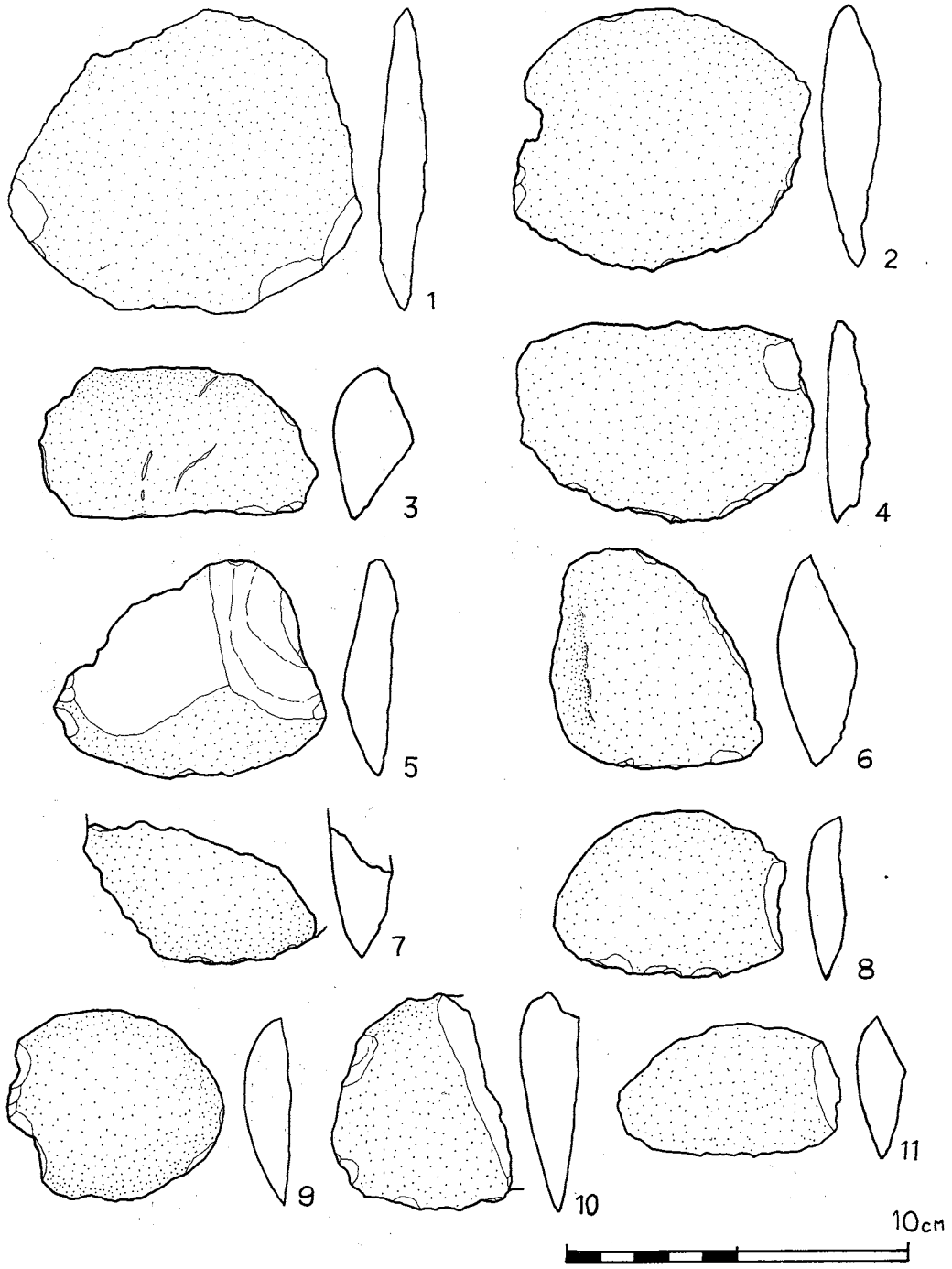
第 106図　石子原遺跡出土石器　（押型文土器伴出？）



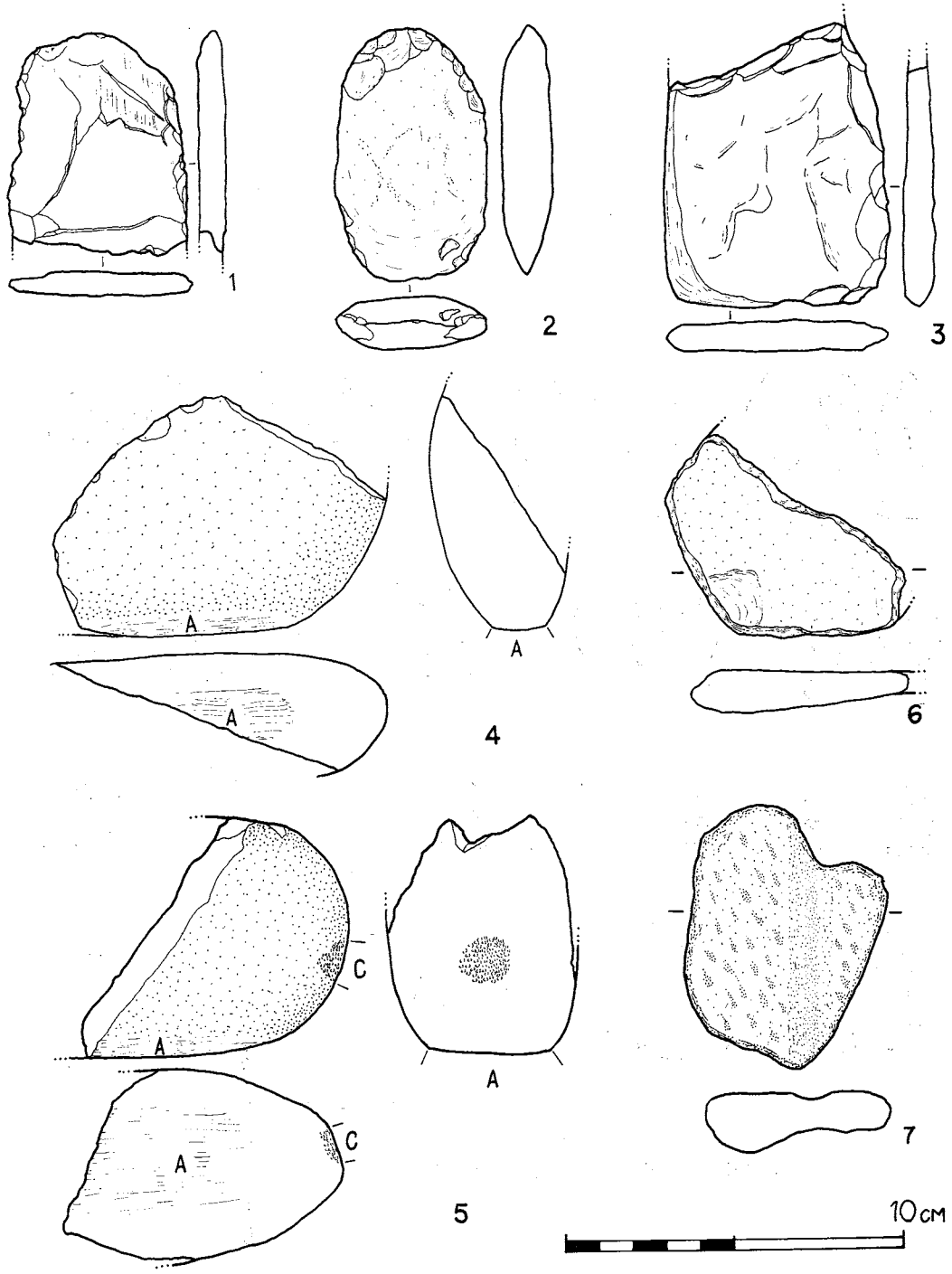
第 107図　石子原遺跡出土石器　（押型文土器伴出？）



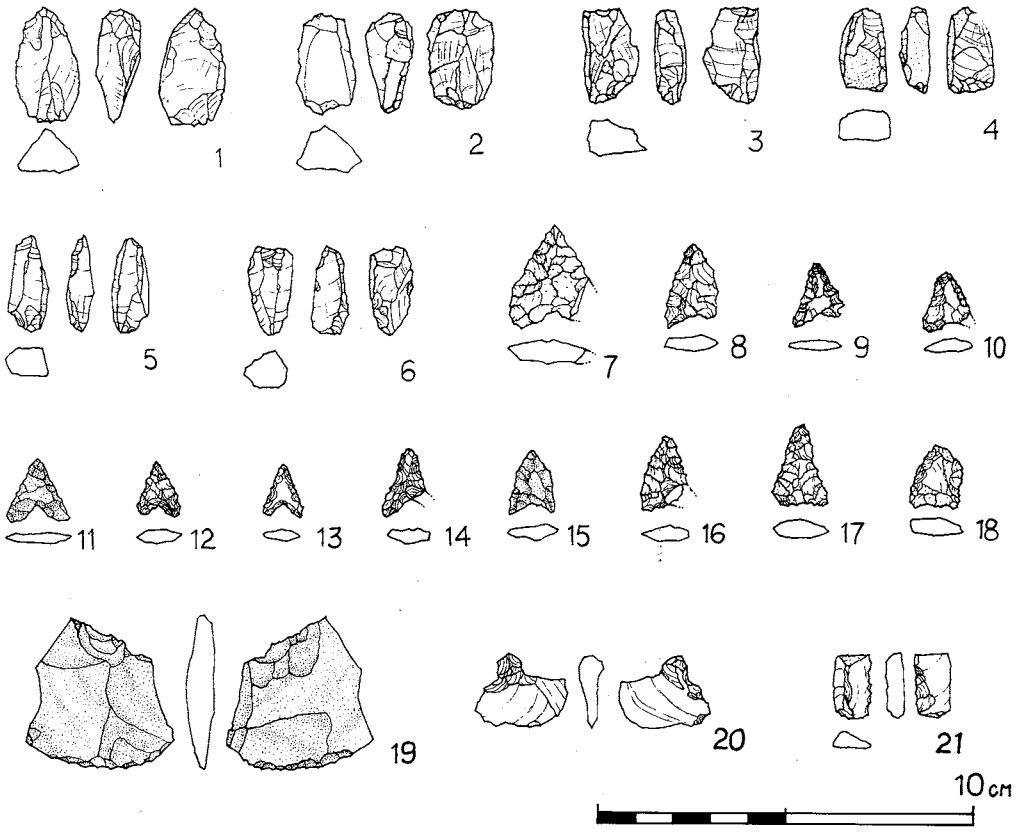
第108図　石子原遺跡出土石器　（押型文土器伴出？）



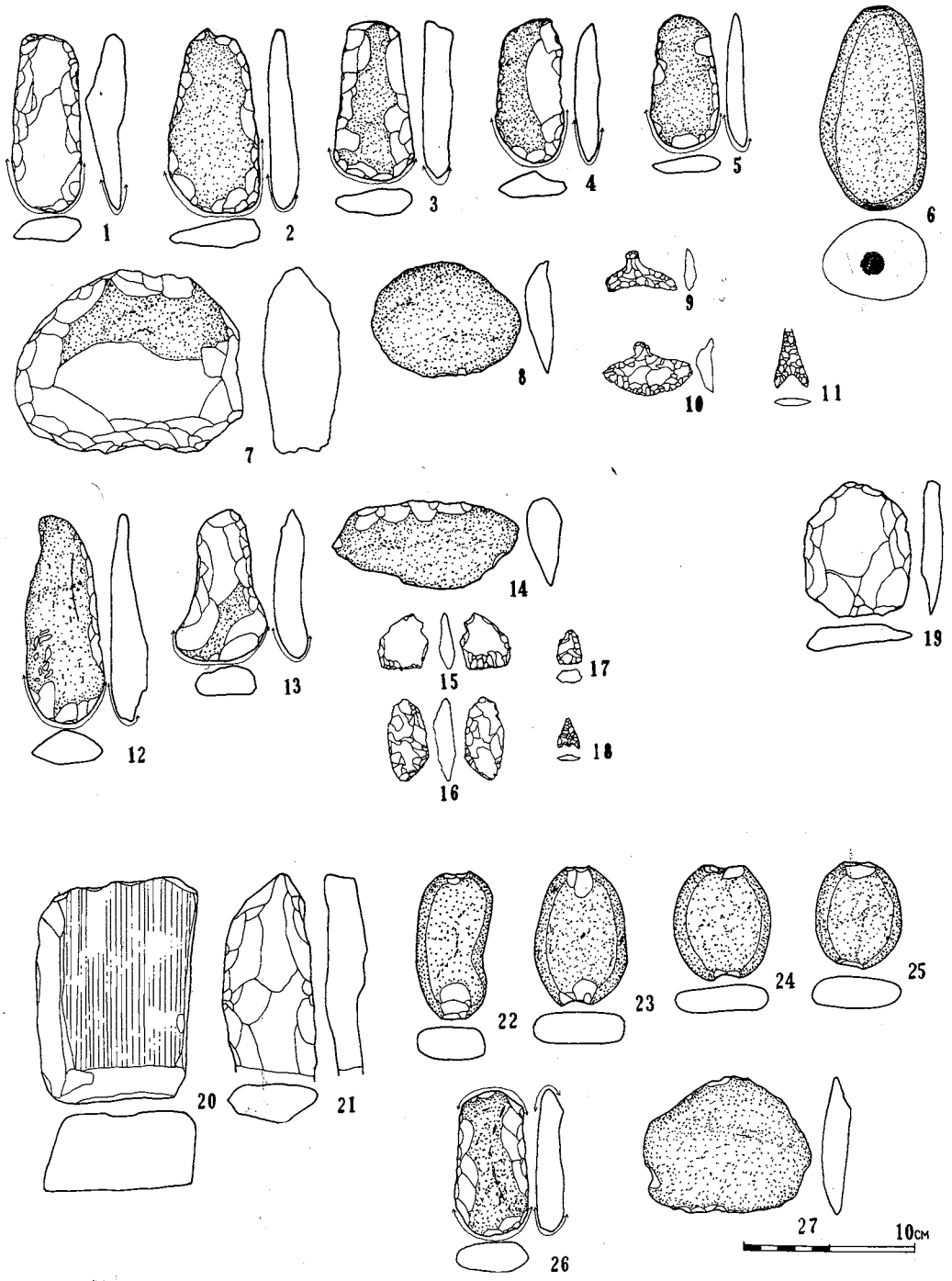
第109図　石子原遺跡出土石器（1：2）（1～11押型文土器伴出）



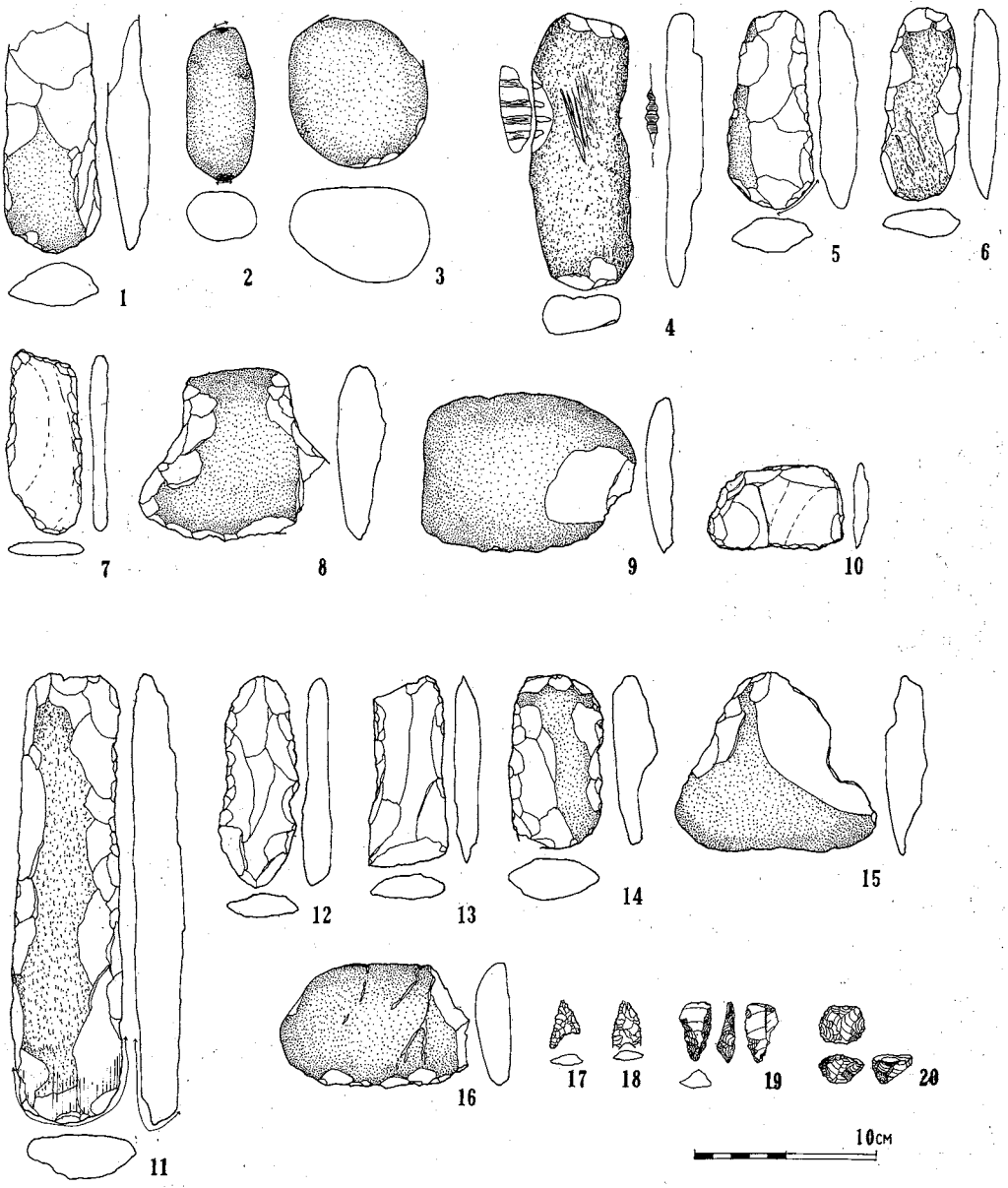
第110図　石子原遺跡出土石器（1：2）（1～7押型文土器伴出）



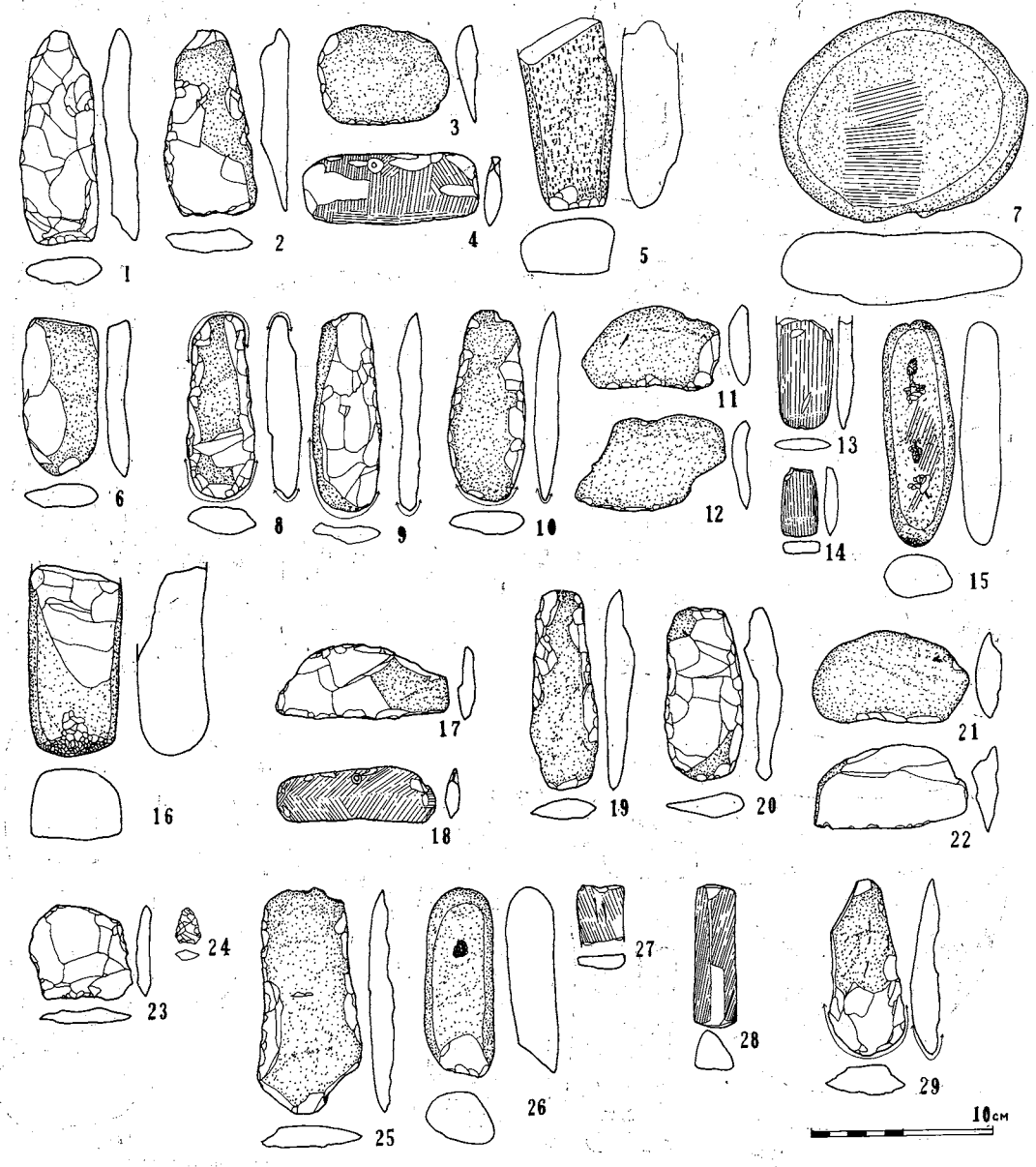
第111図　石子原遺跡出土石器（１：２）（１～21押型文土器伴出）



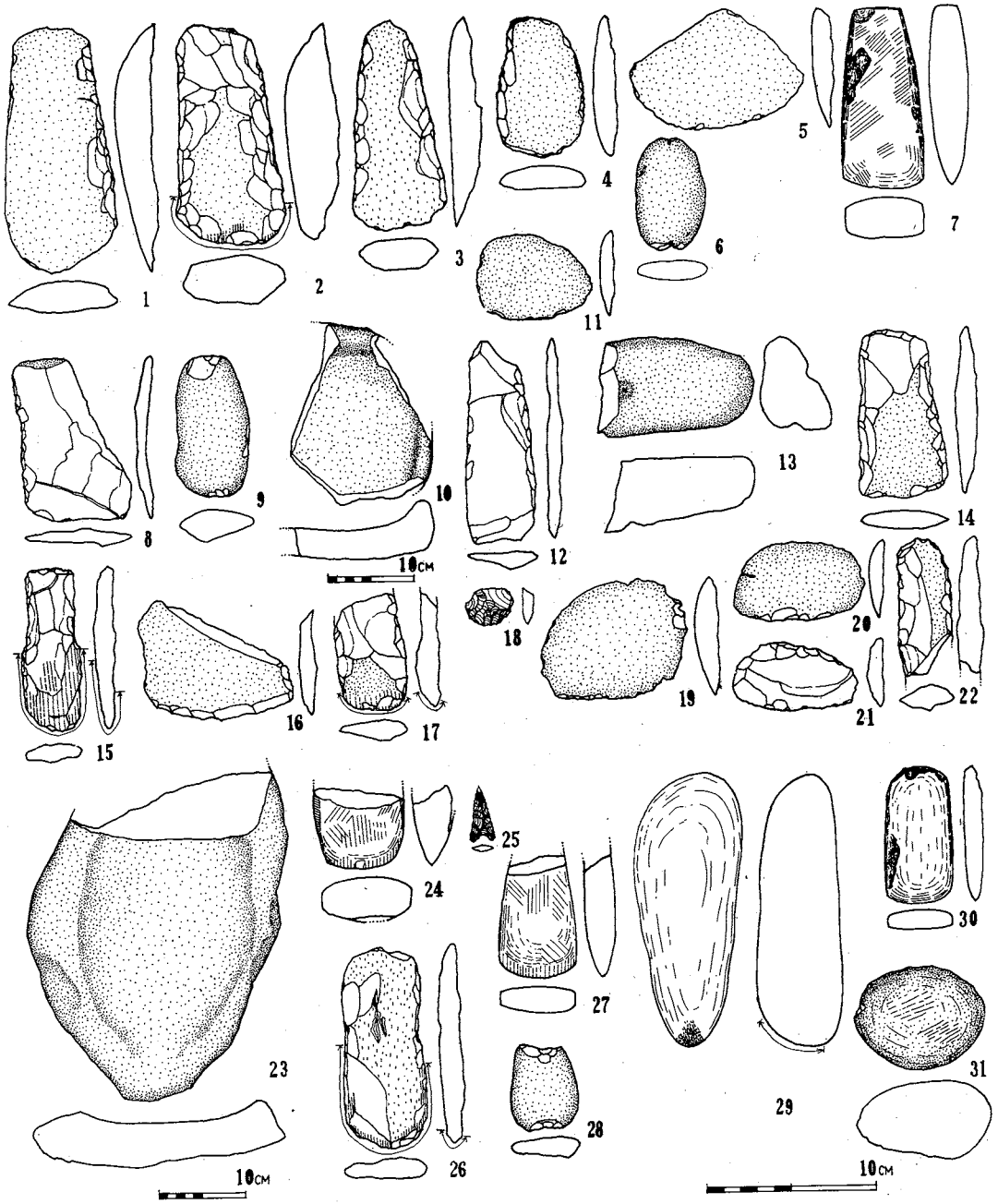
第112図　上の平東部遺跡（1～18）・寺山遺跡⑲及び六反田遺跡（20～27）出土石器（1：4）（1～11　1号住居址，12～18　その他，19　その他，20　1号住居址，21～25　土壙5，26　土壙7，27　その他）



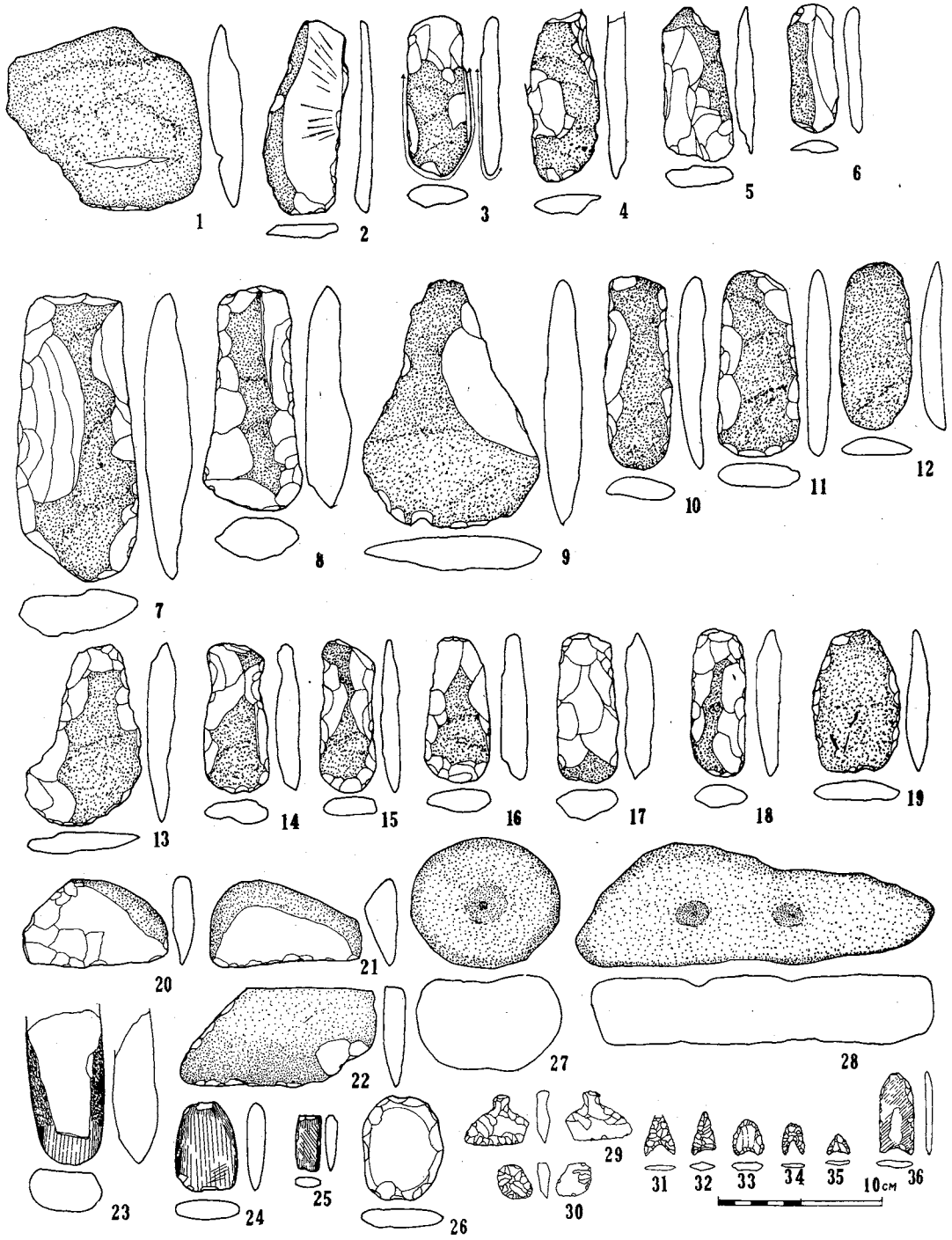
第113図　大東遺跡出土石器（１：４）（１～３　１号住居址，４～10　２号住居址，11～18　その他）



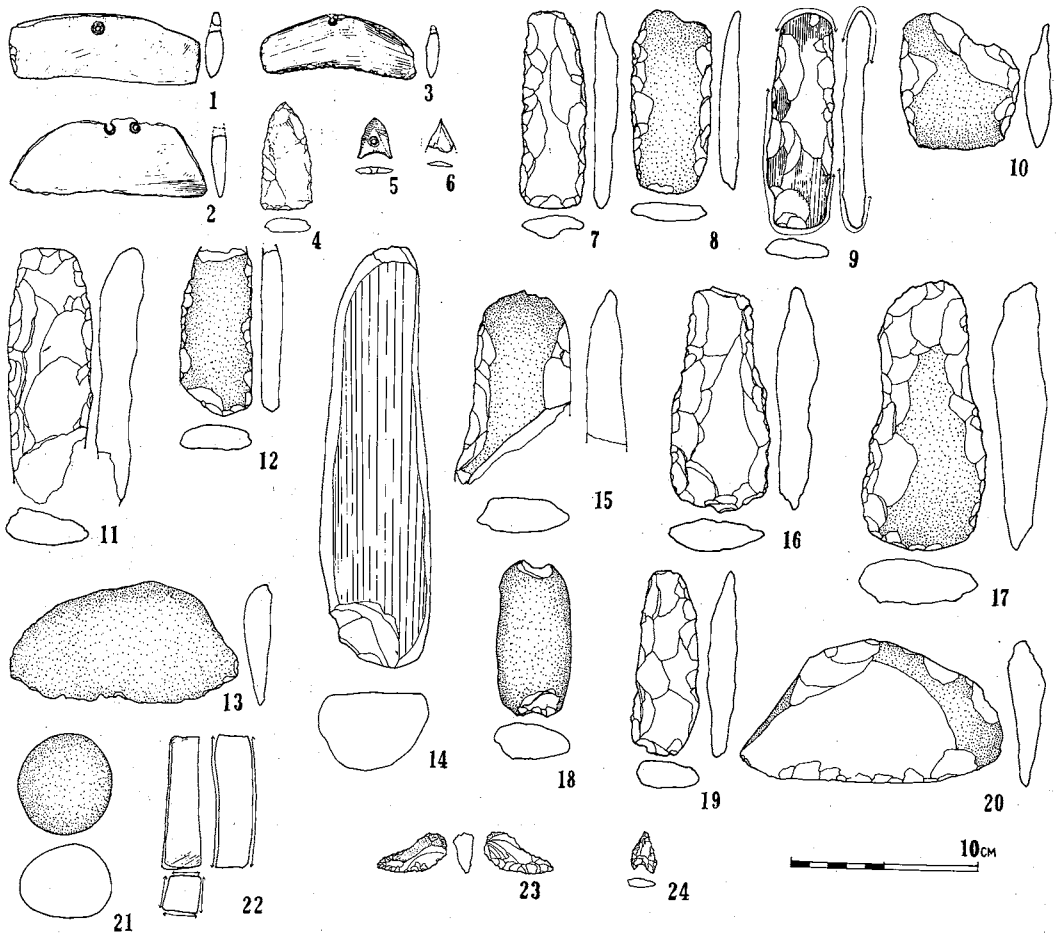
第114図　酒屋前遺跡出土石器（1：4）（1～5　1号住居址，6　6号住居址，7　7号住居址，8～16　8号住居址，17・18　9号住居址，19～24　11号住居址，25～27　13号住居址，28　14号住居址，29　15号住居址）



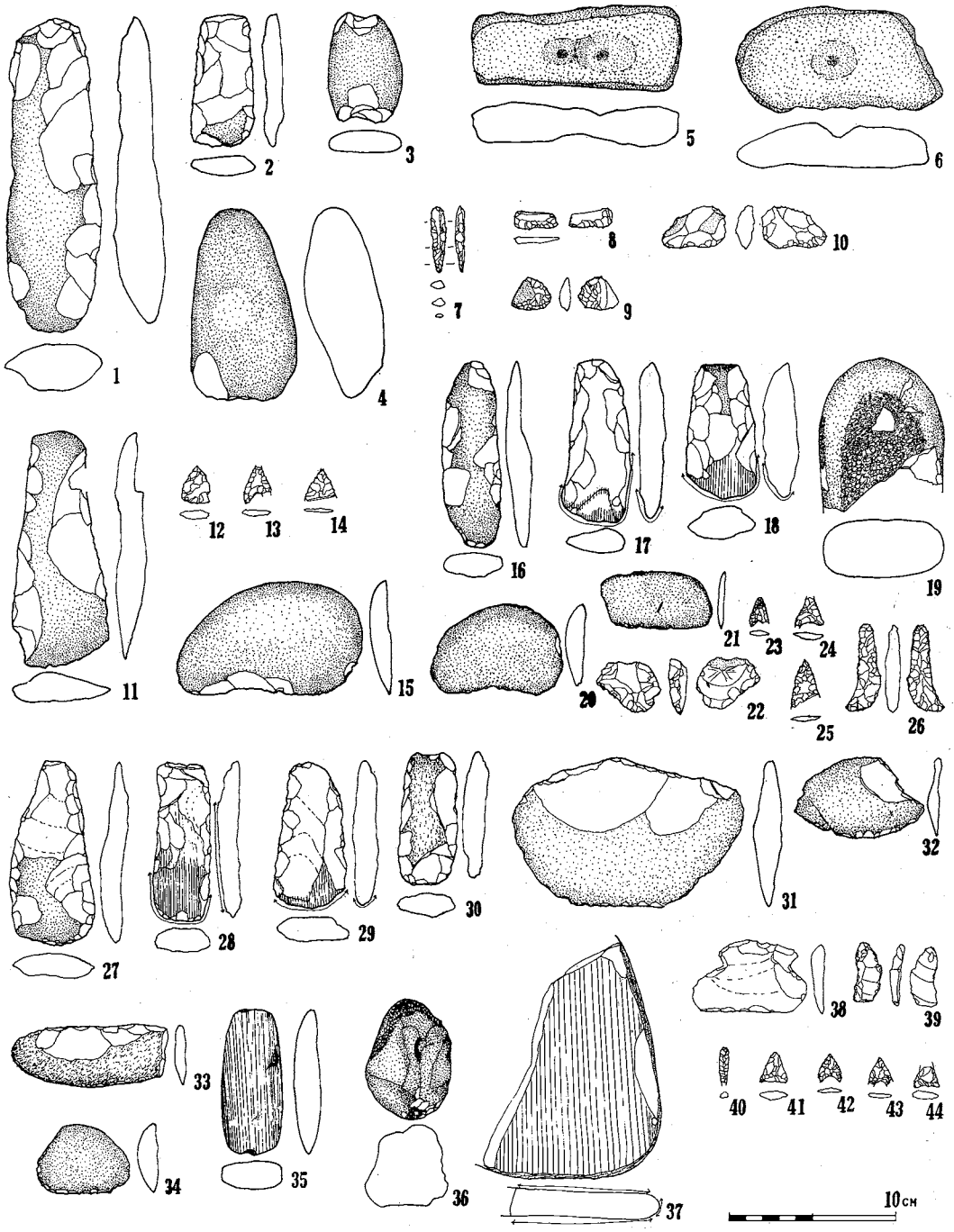
第115図　酒屋前遺跡出土石器（1：4，但し10・23・1：8）（1～6　16号住居址，7　土壙9，8・9　土壙10，10　土壙12，11・12　土壙15，13・14　土壙16，15・16　土壙17，17・18　土壙18，19　土壙33，20　土壙44，21　土壙54，22　土壙56，23　土壙58，24・25　土壙63，26　土壙66，27～29　土壙67，30　土壙71，31　土壙72）



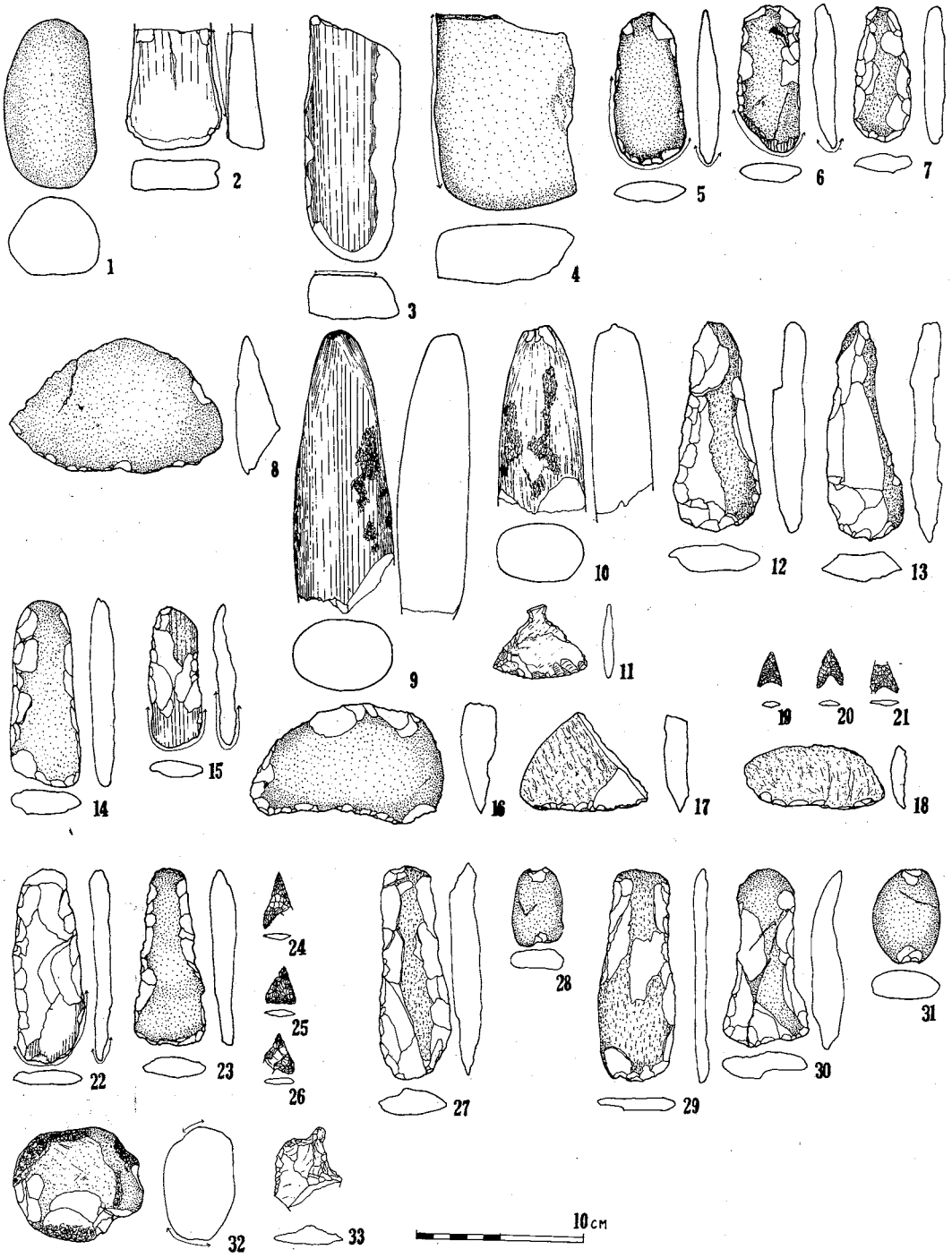
第116図　酒屋前遺跡出土石器（1：4）（1～3　土壙75，4　土壙83，5・6　土壙92，7～36　その他）



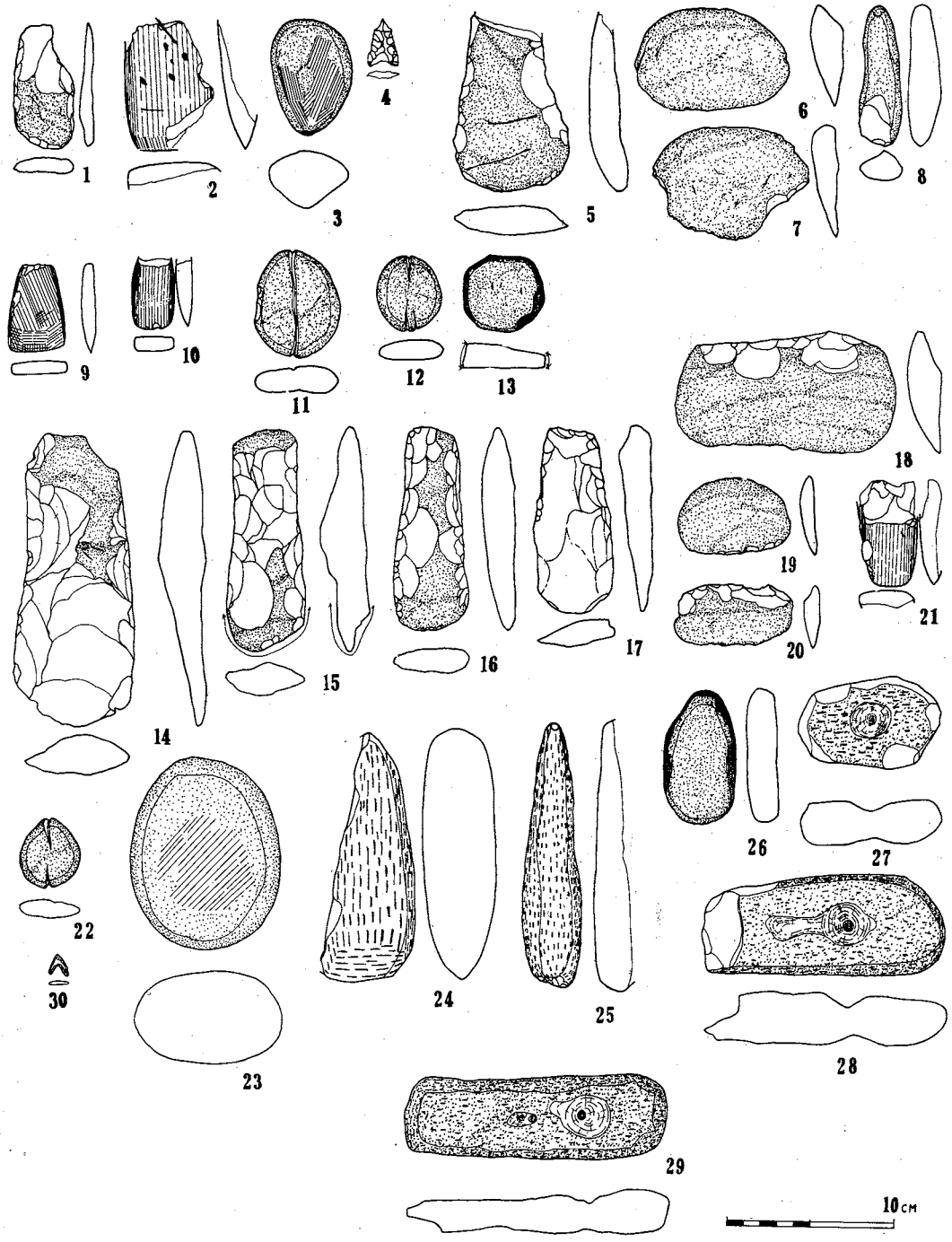
第117図　滝沢井尻遺跡出土石器（1：4）（1～6　1号住居址，7～10　2号住居址，11～13　3号住居址，14　4号住居址，15　5号住居址，16　溝状遺構3，17　土壙9，18　土壙20，19～24　その他）



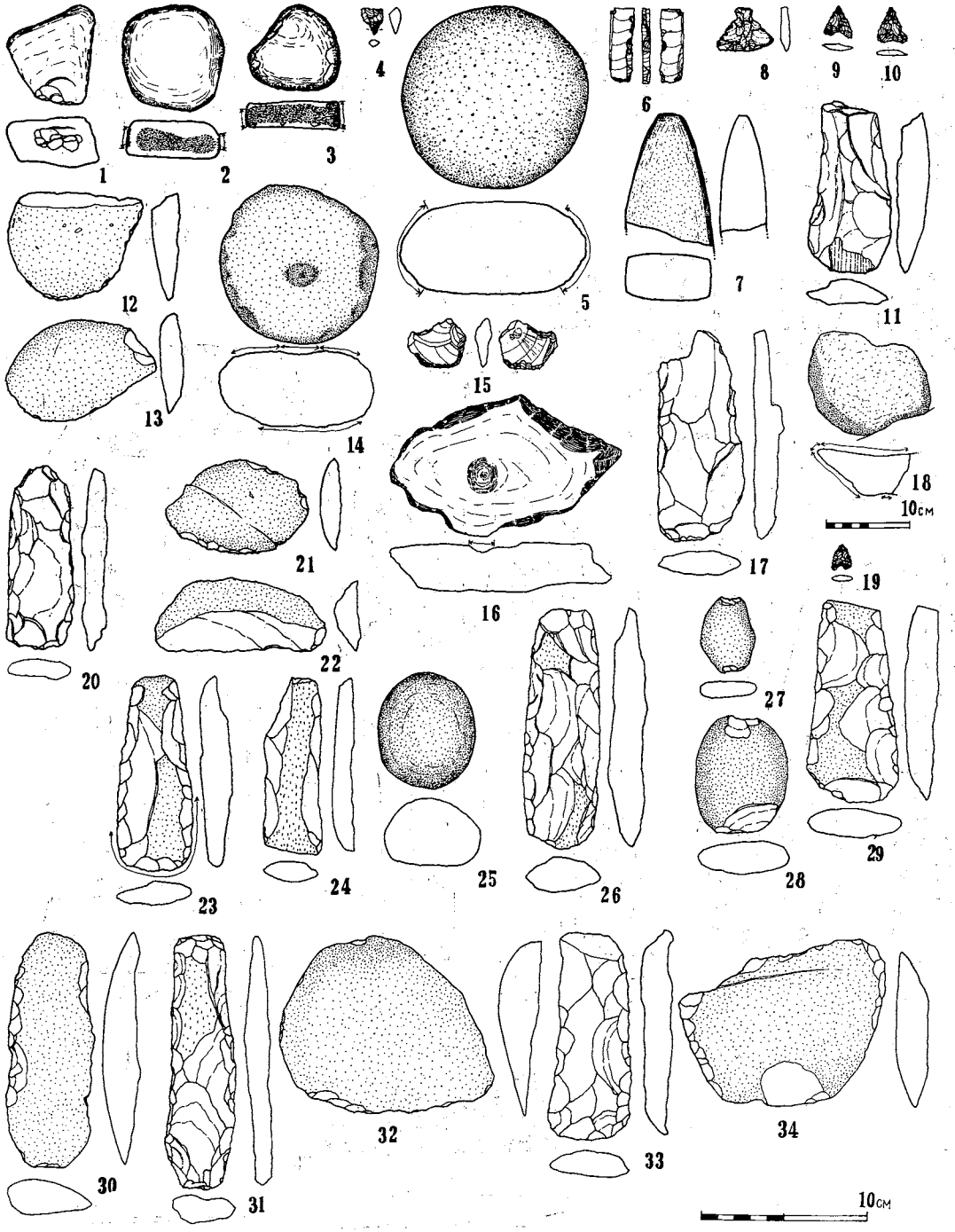
第118図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器（1：4）（1～10　2号住居址，11～14　5号住居址，15　6号住居址，16～26　7号住居址，27～44　9号住居址）



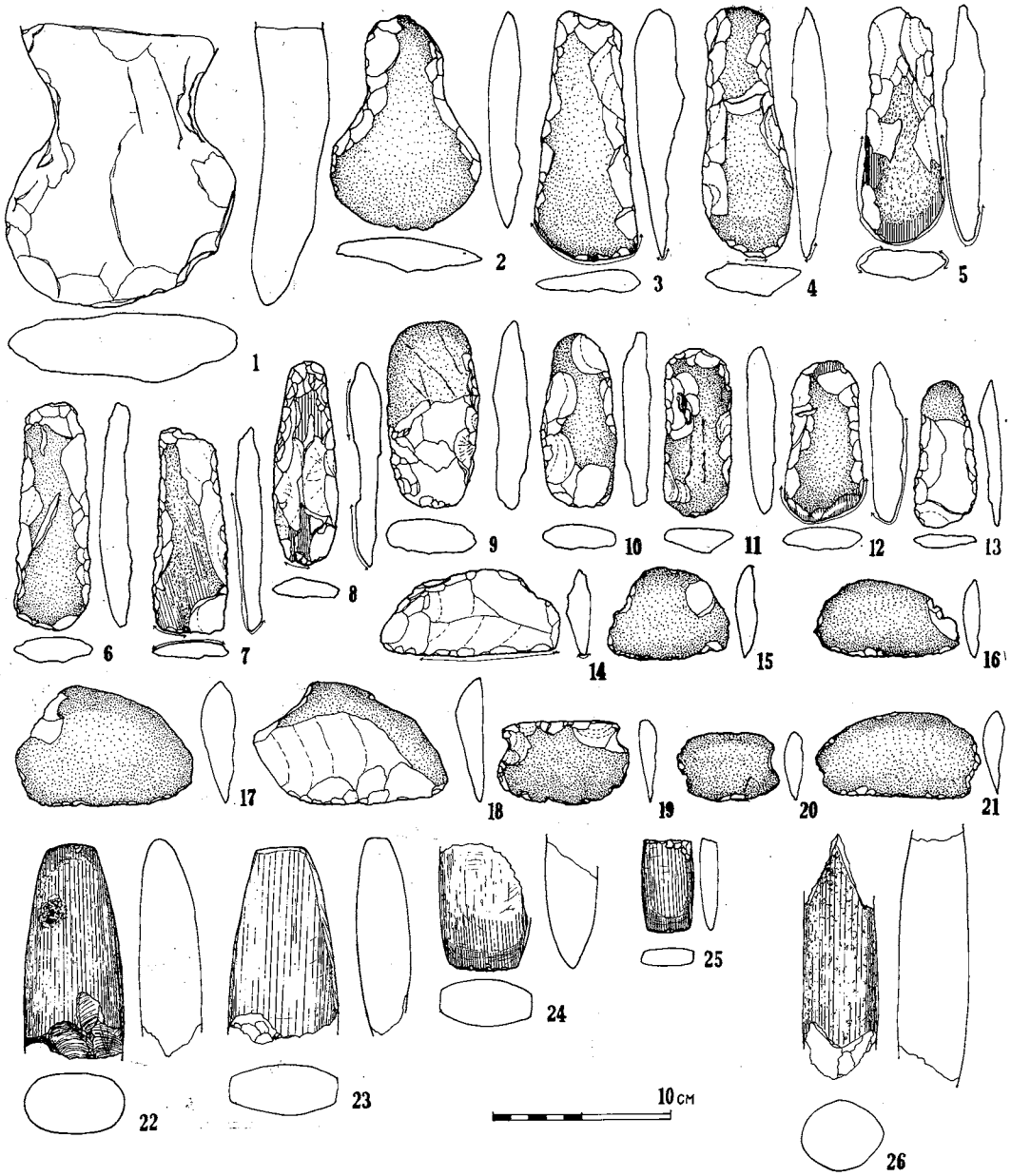
第119図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器（1：4）（1・2　11号住居址，3　12号住居址，4　15号住居址，5～11　18号住居址，12～21　20号住居址，22～26　22号住居址，27・28　柱穴群Ⅰ，29～33　柱穴群Ⅱ）



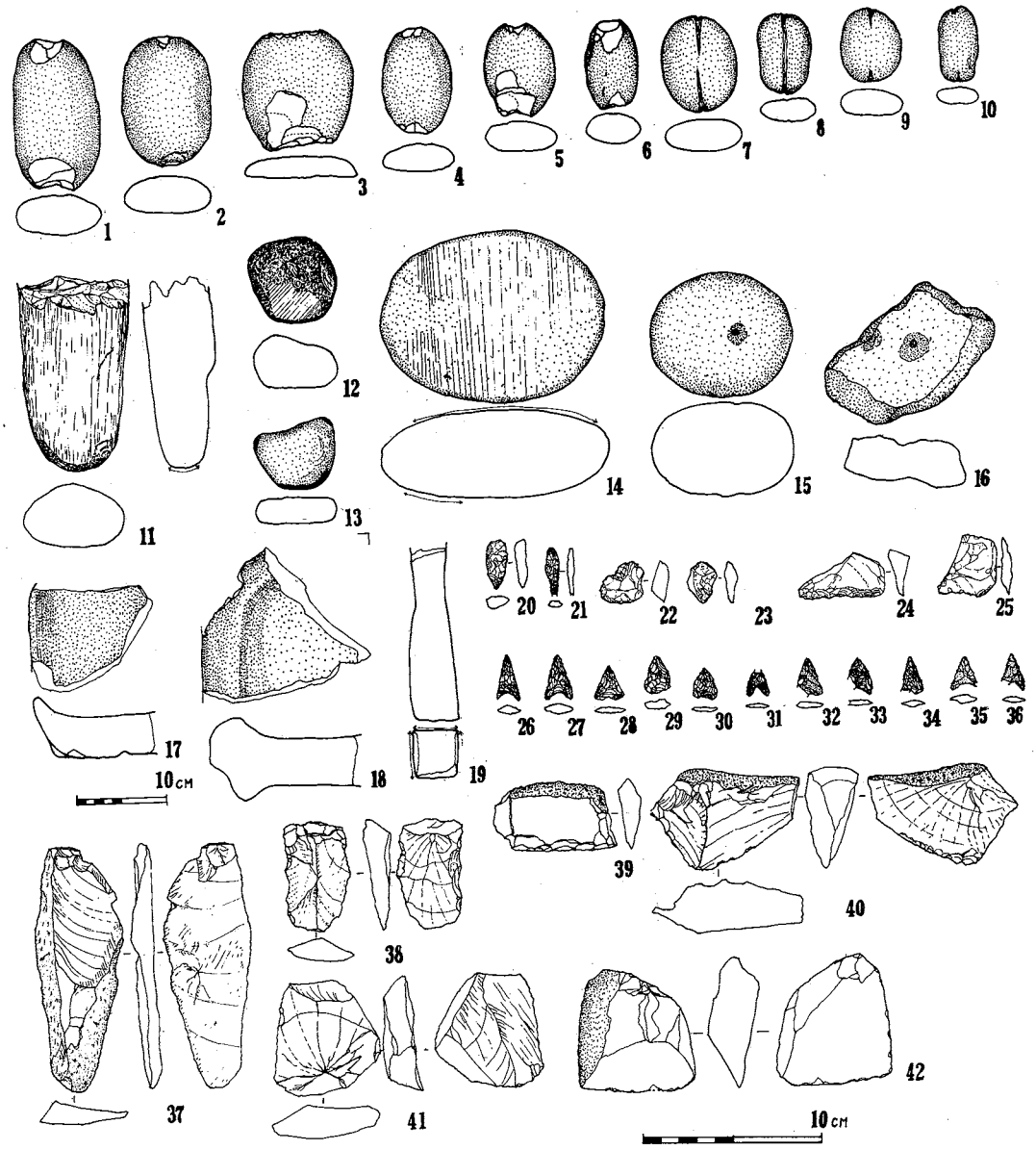
第120図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器（1：4）（1～4　土器集中地Ⅰ，5～13　土器集中地Ⅱ，14～30　焼土群）



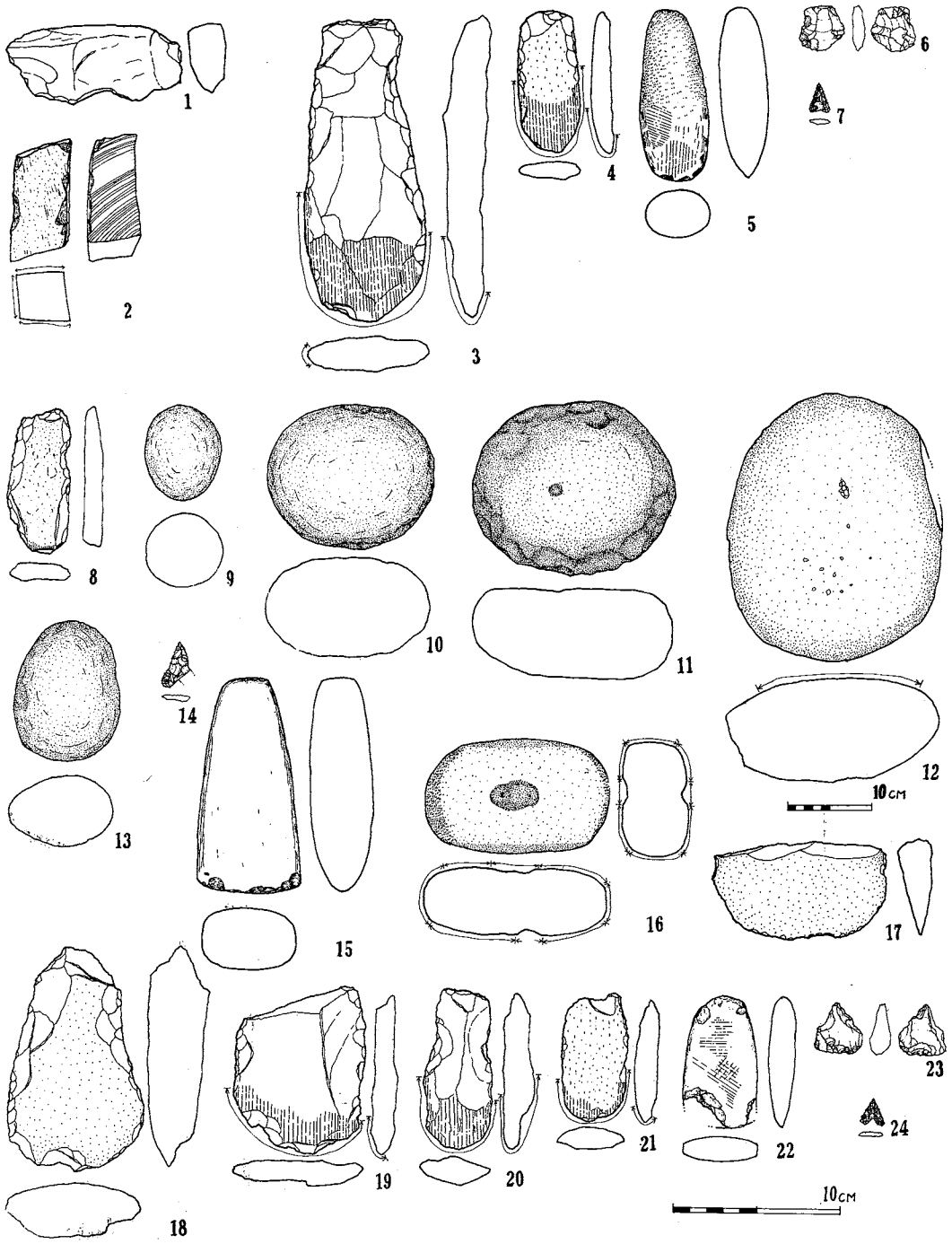
第121図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器（1：4，但し18，1：8）（1～4　土壙8，5・6　土壙9，7　土壙12，8～10　土壙13，11　土壙19，12　土壙20，13～15　土壙21，16　土壙22，17～19　土壙36，20　土壙46，21　土壙48，22・23　土壙50，24・25　土壙52，26・27　土壙54，28・29　土壙67，30　土壙69，31　土壙70，32　土壙90，33　土壙93，34　土壙 102）



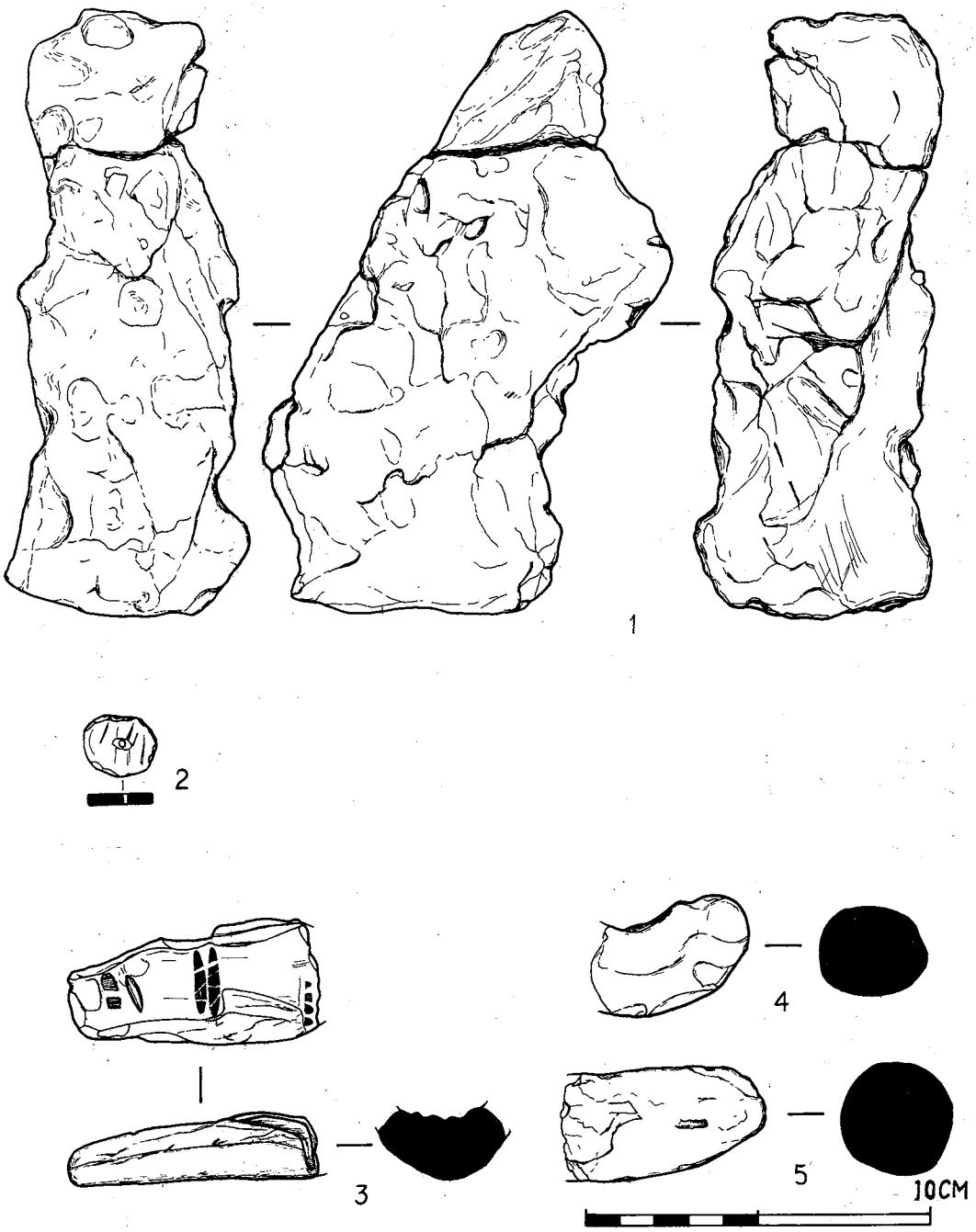
第 122図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器　（1：4）（1～26 その他）



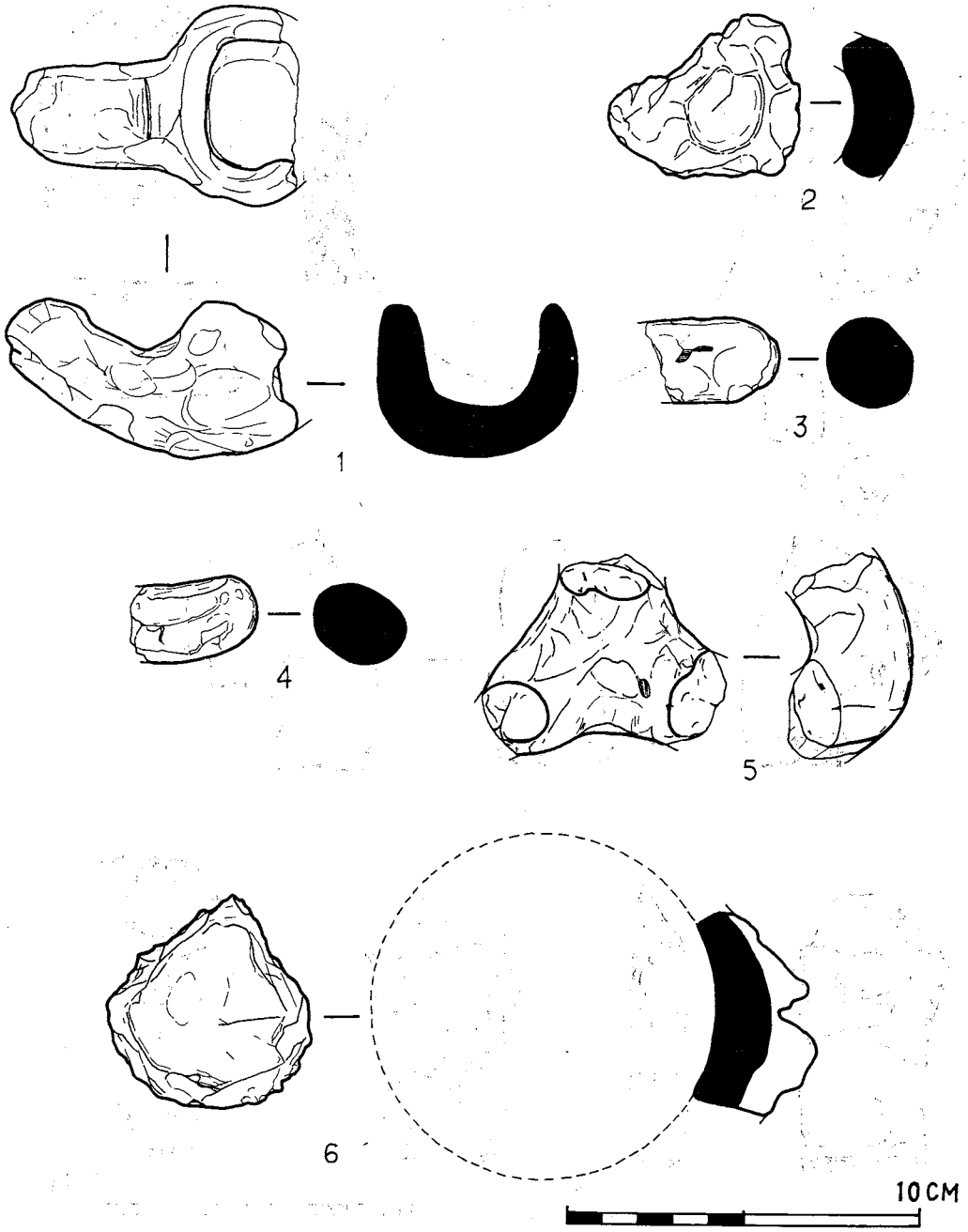
第 123図　小垣外・辻垣外遺跡出土石器　（1：4，但し17・18，1：8）（1～42　その他）



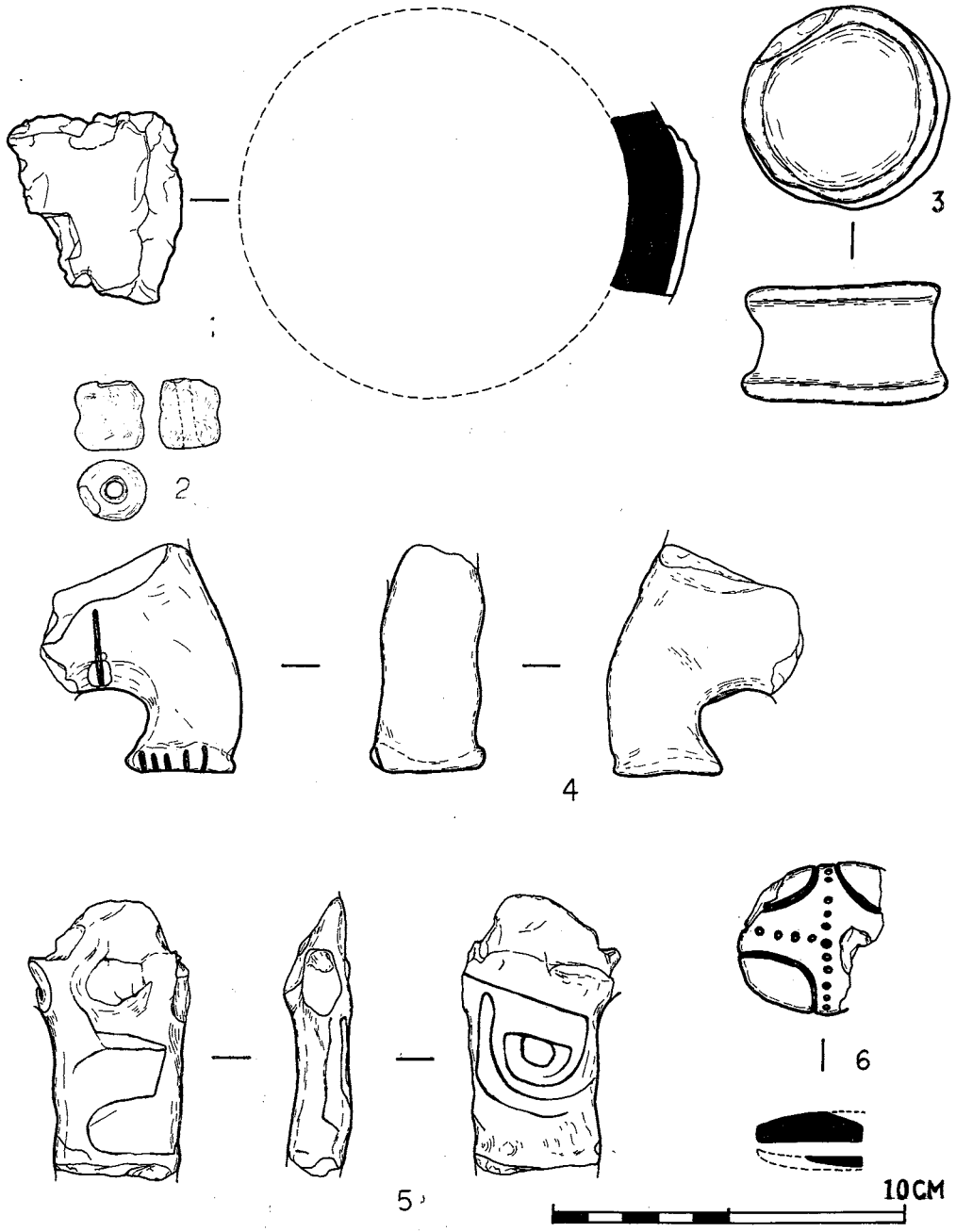
第 124図　三壺渕遺跡（1～7）及び上の金谷遺跡（8～24）出土土器（1：4，但し12，1：8）
（1・2　3号住居址，3～7　その他，8～12　1号住居址，13　3号住居址　14　5号住居址，15　9号住居址，
16・17　12号住居址，　18～24　その他）



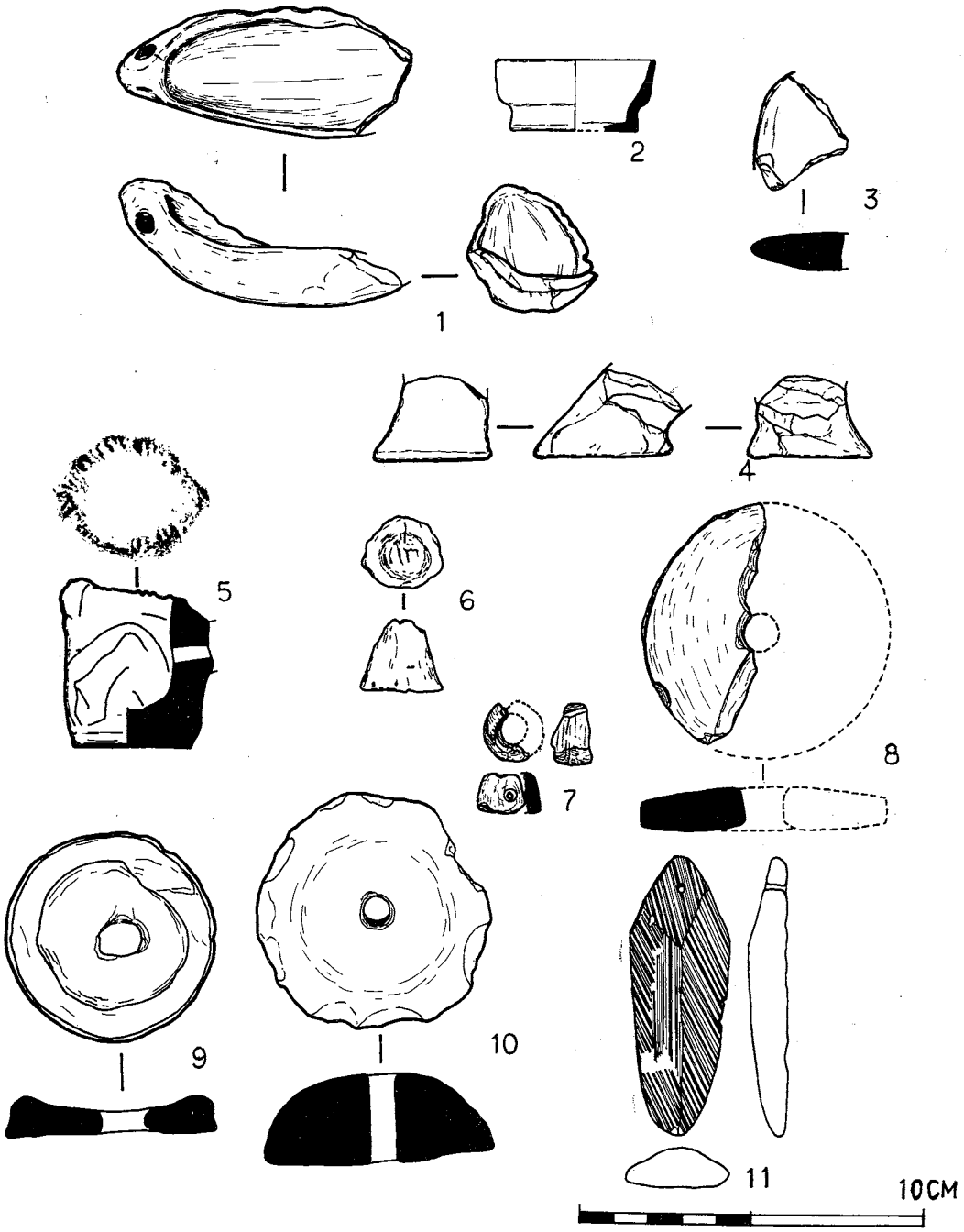
第125図　上の平東部遺跡(1)・寺山遺跡(2)・酒屋前遺跡（３～５）出土土器品及び石製品（１：２）　（１．１号住居址南側ピット，３～５精錬状遺構）



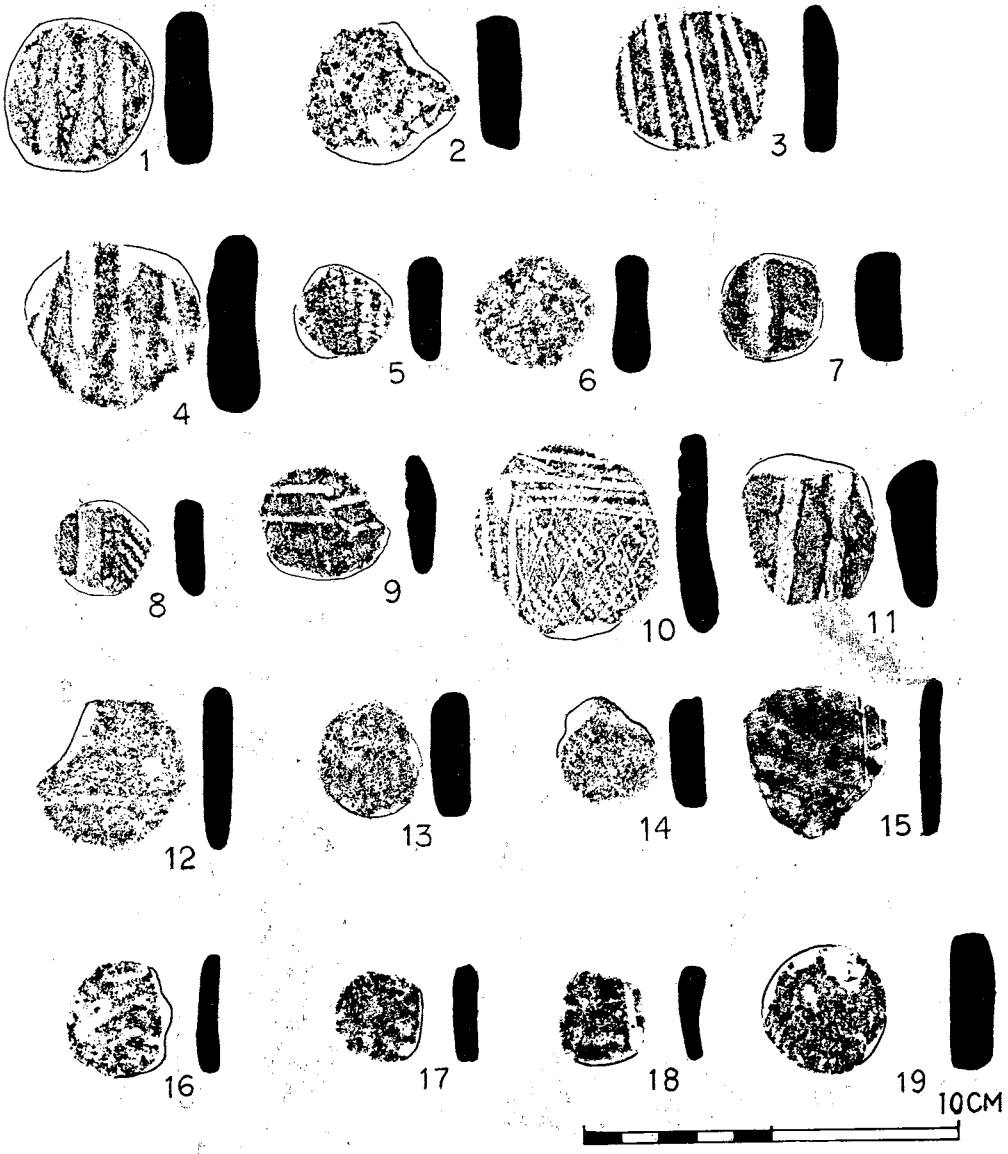
第126図　酒屋前遺跡精錬状遺構出土土製品（1：2）



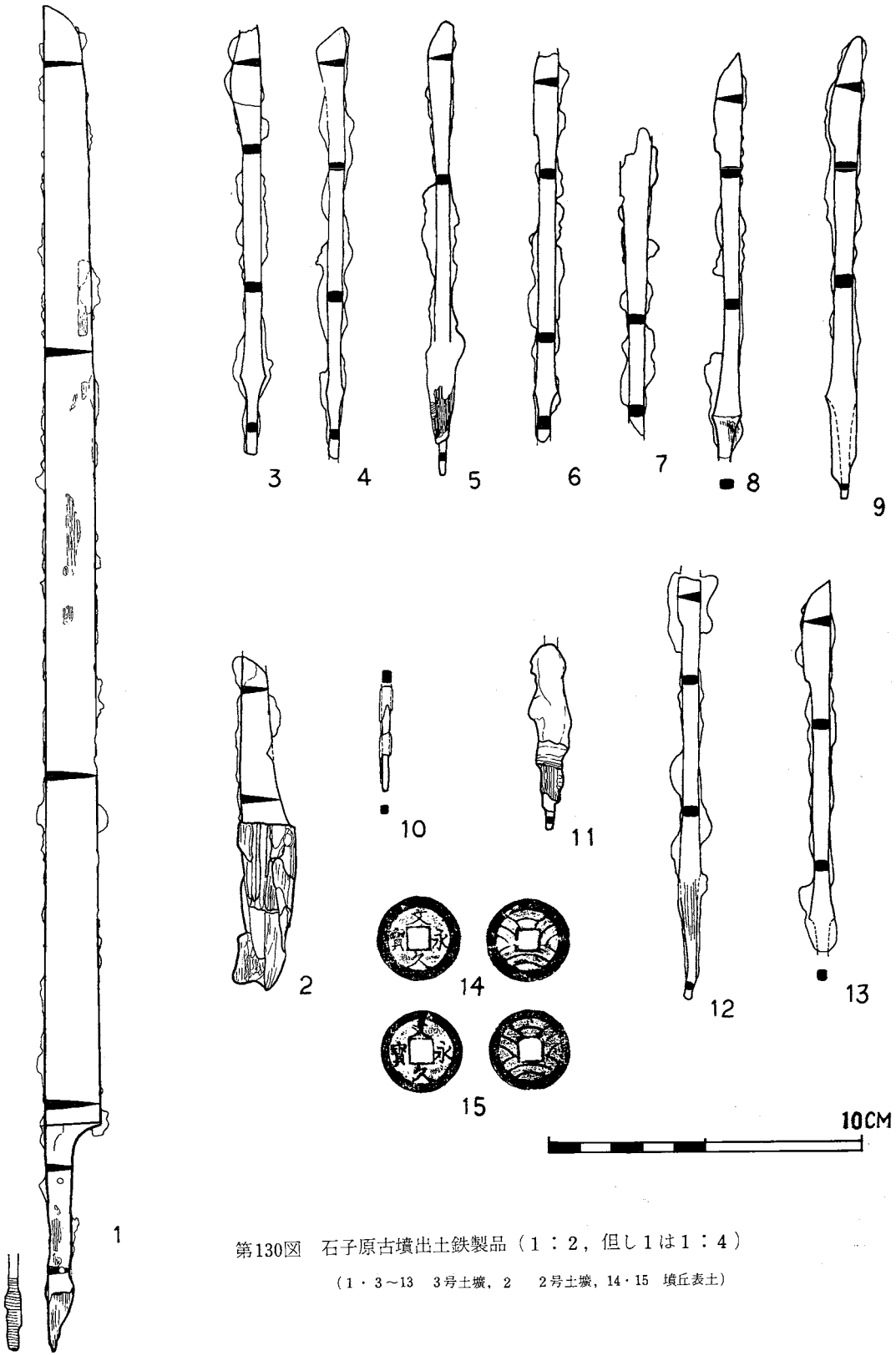
第127図　酒屋前遺跡(1)・滝沢井尻遺跡(2)・小垣外・辻垣外遺跡（３～６）
出土土製品及び石製品（１：２）（1．精錬状遺構，４・６ 焼土群，２・３・５その他）



第128図　小垣外・辻垣外遺跡（１～５・７・８）・三壺渕遺跡(6)・上の金谷遺跡（９～11）出土土製品及び石製品（１：２）
（１ 焼土群，
２　５号住，３６号住，６　１号住，７土壙36，８　17号住，９　７号住，10　８号住，４・５・11その他）

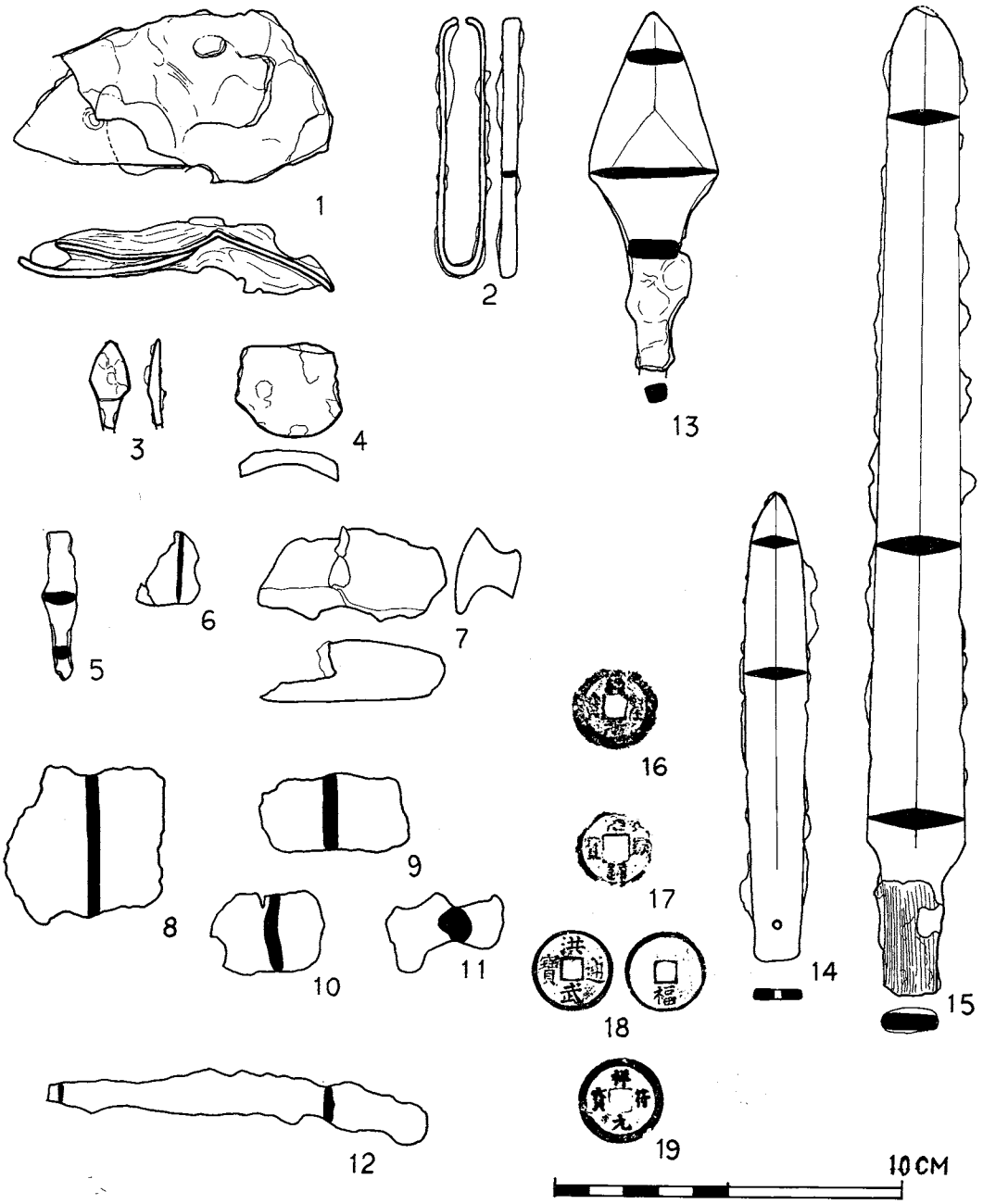


第129図　柳田遺跡(1)・酒屋前遺跡（2～6）・小垣外・辻垣外遺跡（7～18）・上の金谷遺跡(19)出土土製円板（1：2）
（2　土壙16，3・4　土壙59，5・6　6号住，9　9号住，12～14　焼土群，15～18　土壙12，1・7・8・10・11・19　その他）



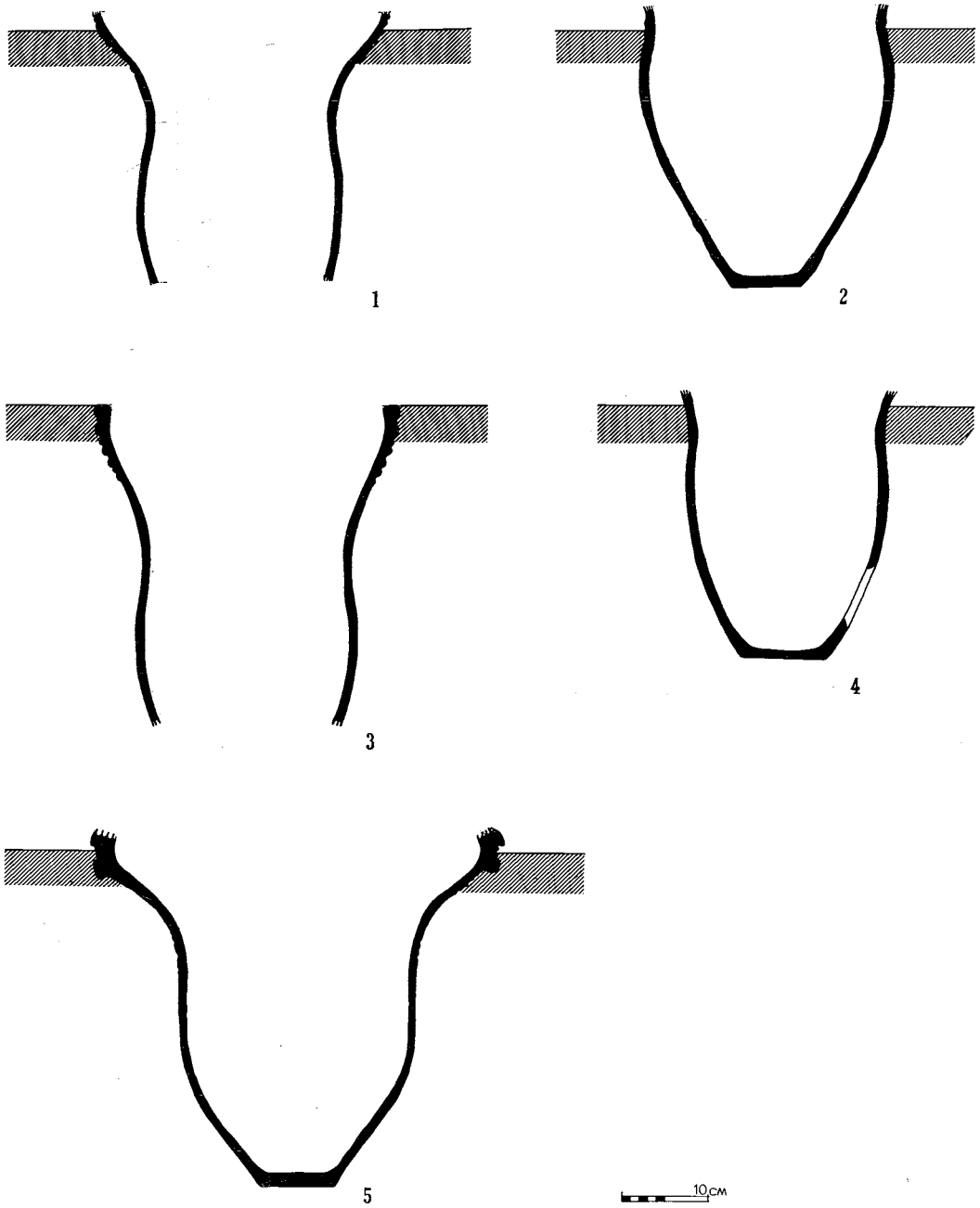
第130図　石子原古墳出土鉄製品（1：2，但し1は1：4）

（1・3～13　3号土壙，2　2号土壙，14・15　墳丘表土）



第131図　酒屋前遺跡（1～13）・滝沢井尻遺跡（14・15）・小垣外・辻垣外遺跡・三壺渕遺跡(17)・上の金谷遺跡（18・19）出土鉄製品及び古銭（1：2）

（1・2　2号住，3・4　12号住，5～7　竪穴状遺構2号，8～11　精練状遺構，12　土壙57，13・16～19　その他，14・15　方形周溝墓土壙）



第132図　柳田遺跡(1)・上の平東部遺跡(2)・酒屋前遺跡（３・４）及び小垣外遺跡(5)埋甕状態図（１：８）
（１・２　２号住居址，３　８号住居址，４　11号住居址，５　20号住居址）

第一図　かぶき畑・柳田遺跡

1.　かぶき畑遺跡遠景（東より）

2.　柳田遺跡遠景（北西より）

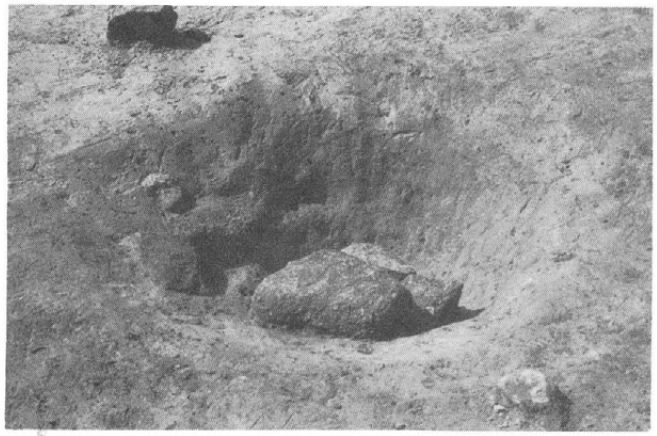
第二図　山本地区Ⅳ遺跡

3．　山本地区の遺跡 航空写真

1　柳田遺跡　2　山田遺跡　3石子原遺跡・石子原古墳

第三図　柳田遺跡住居址

4.　1号住居址



5.　同　炉

6.　同　埋甕

第四図　柳田遺跡出土土器

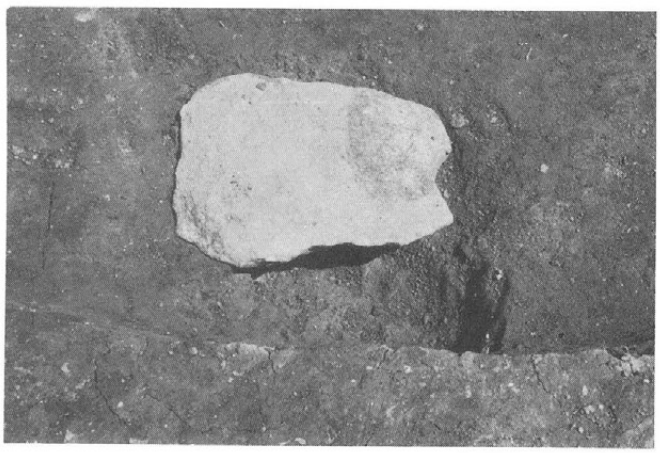
7.　1号住居址出土埋甕

8.　同　鉢形土器

第五図　柳田遺跡住居址

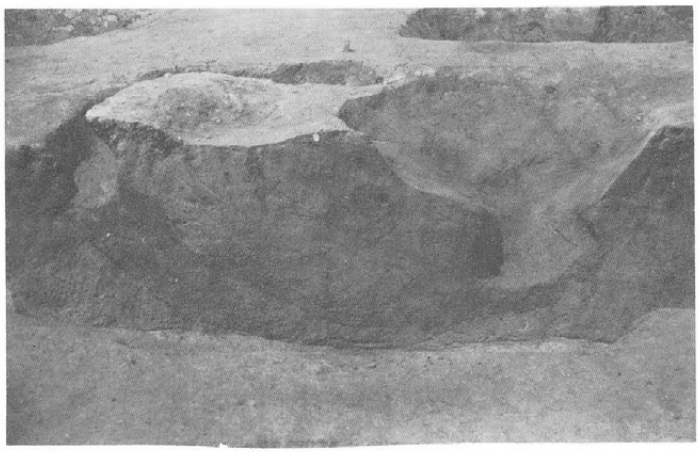
9.　2号住居址

10.　同入口部ピットと石蓋

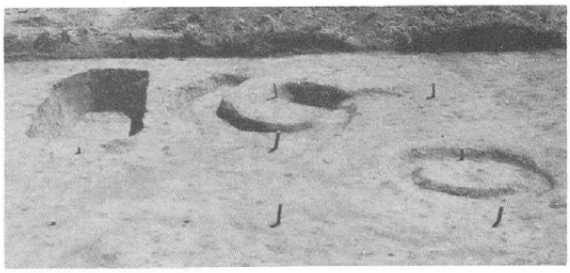


第六図　石小原遺跡ピット・土壙

11.　押型文土器ピット群と方形周溝墓3号の墓壙

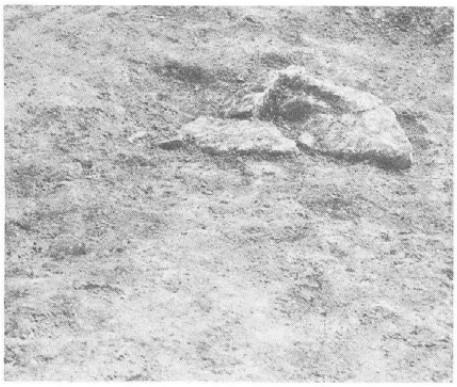


12.　ローム・マウンド土壙断面

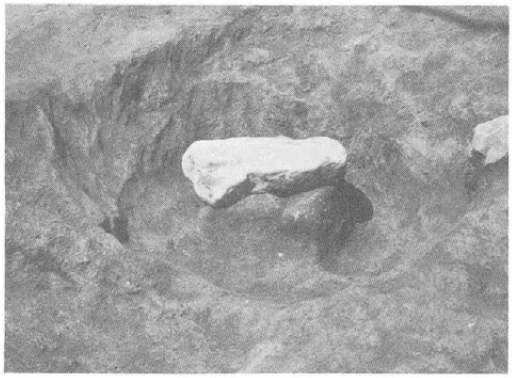


13.　ローム・マウンド土壙と墓壙

第七図　石子原遺跡配石

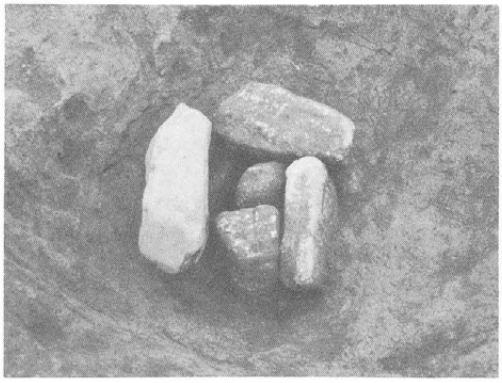


14.　配石最上の石



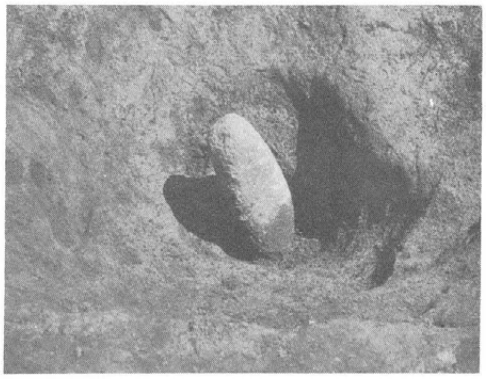
15.　配石上部石蓋

16. 配石の石蓋を取除く



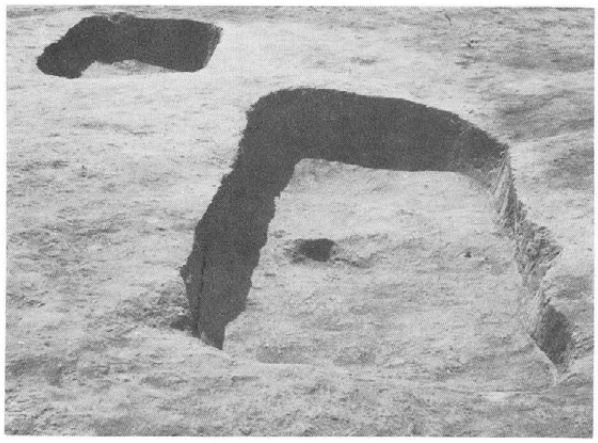
17.　上より中央に石棒ある

18.　配石の上部の石囲を除く

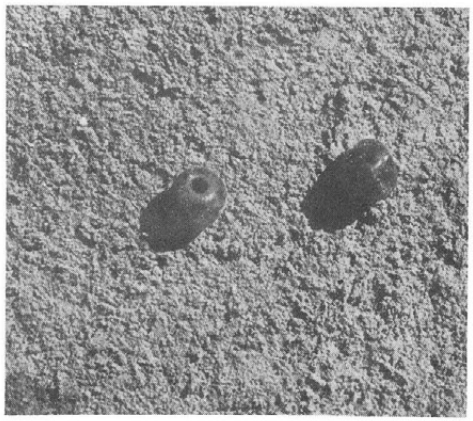


19.　石囲を取除く　石棒が立つ

20.　方形周溝墓1・2号（南より）

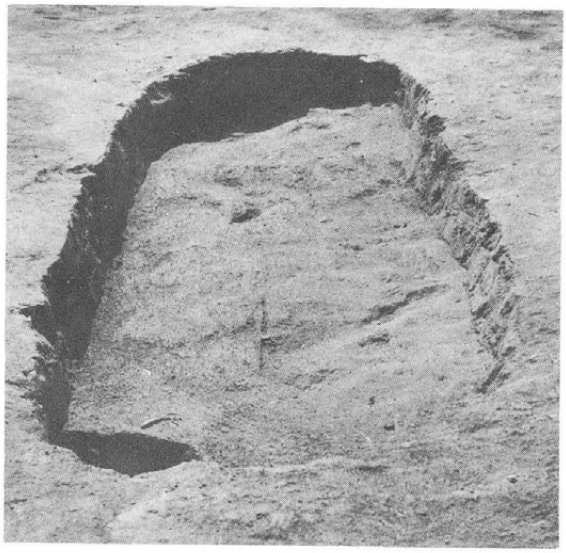


21.　1号の墓壙



22.　1号の主墓壙のガラス小玉　出土状態

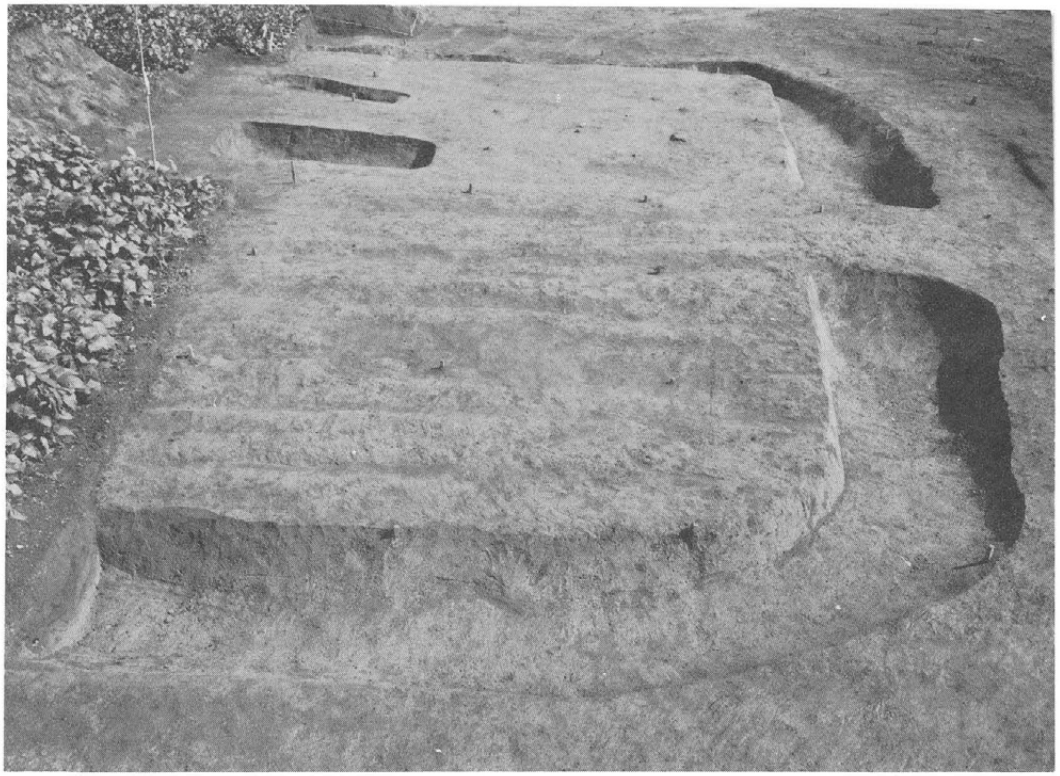
23.　2号の墓壙　木炭の状態



24.　2号の墓壙

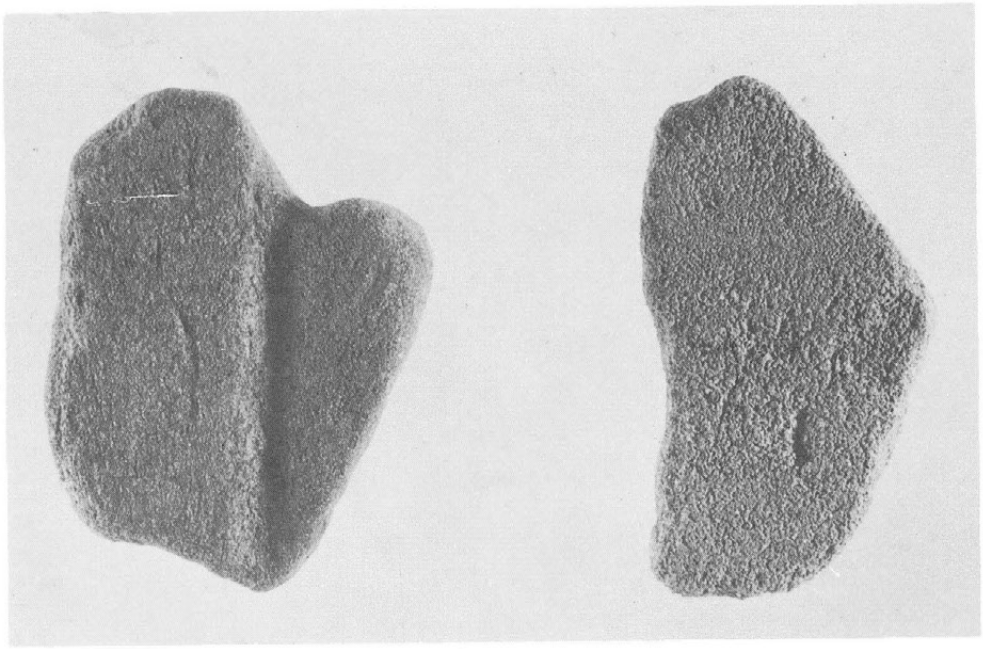
25.　2号の墓壙の骨片出土壮態

第十図　石子原遺跡方形周溝墓

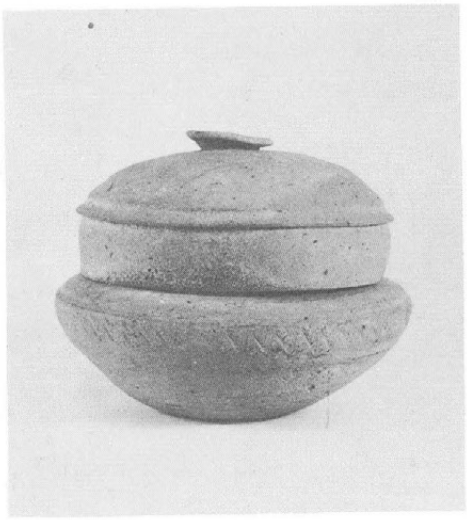


26.　方形周溝墓3号

27.　同　北側溝断面



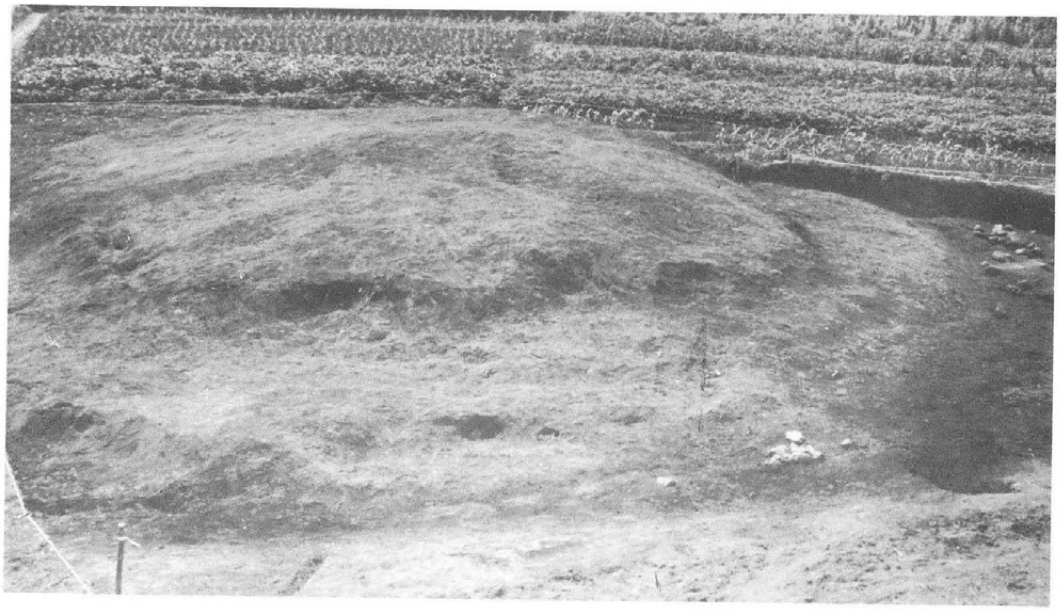
28.　矢柄研磨器と砥石



29.　古墳2号墓壙出土須恵器

30.　同　土師器

第十二図　石子原古墳



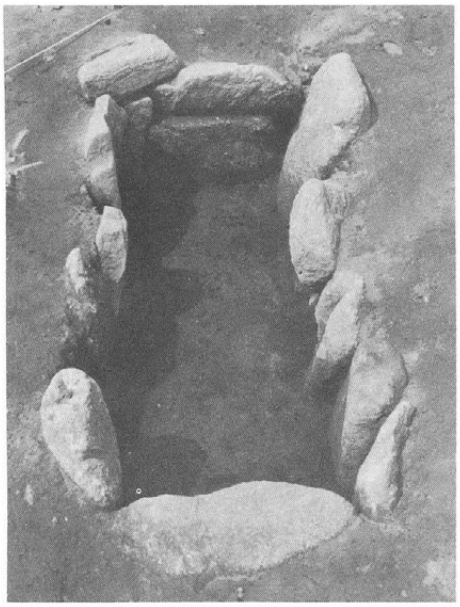
31.　墳丘全景（東より）

32.　北側掘埋土の上部にある配石

第十三図　石子原遺跡墓壙

33.　1号墓壙上面

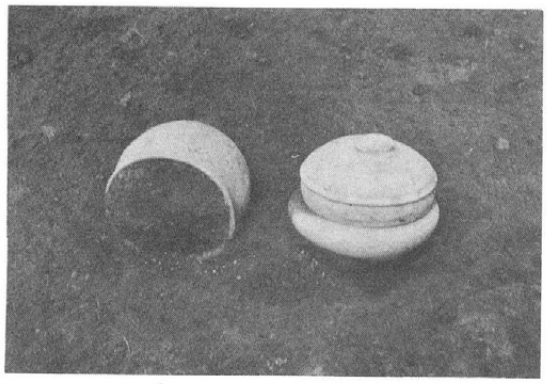
34.　同　中段の面



35.　同　下部面

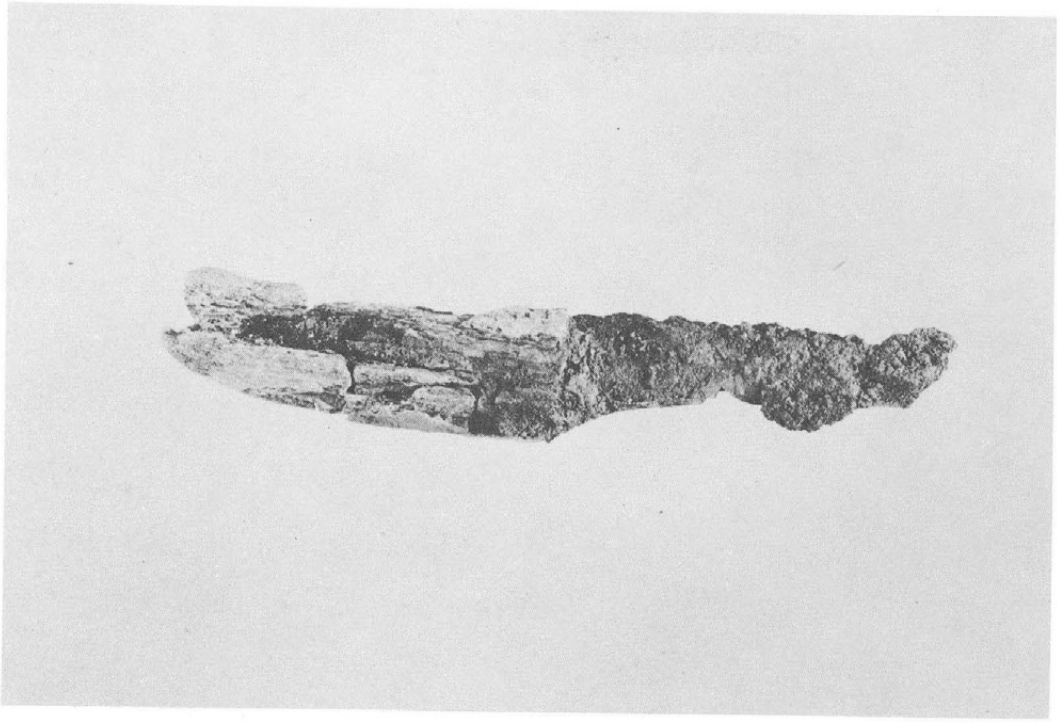
36.　2号墓壙

第十四図　石子原古墳出土遺物



37.　2号墓壙須恵器・土師器出土状態

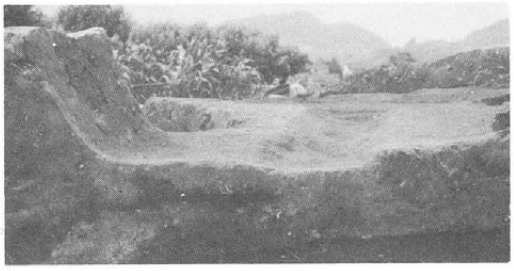
38.　同　刀子出土状態



39.　同　鹿角蕨刀子　苗

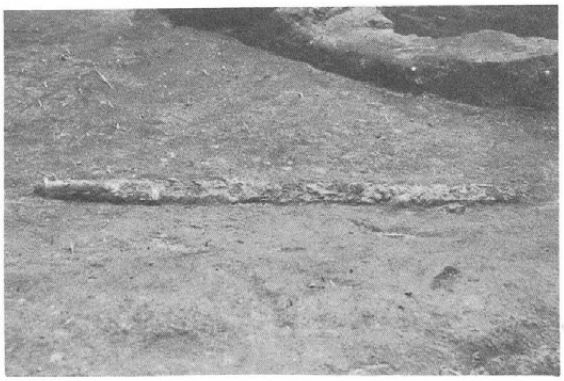
第十五図　石子原遺跡墓壙と出土状態

40.　3号墓壙

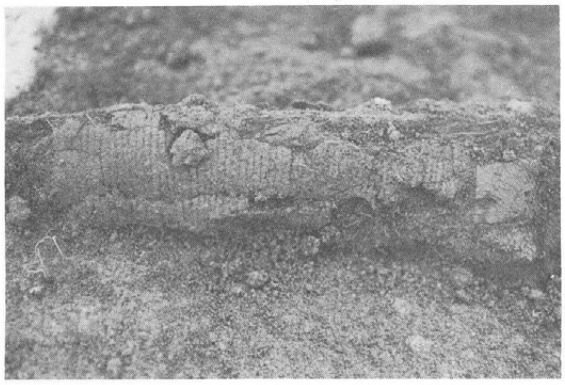


41.　同　断面

42.　同　鉄刀・鉄鏃の出土状態



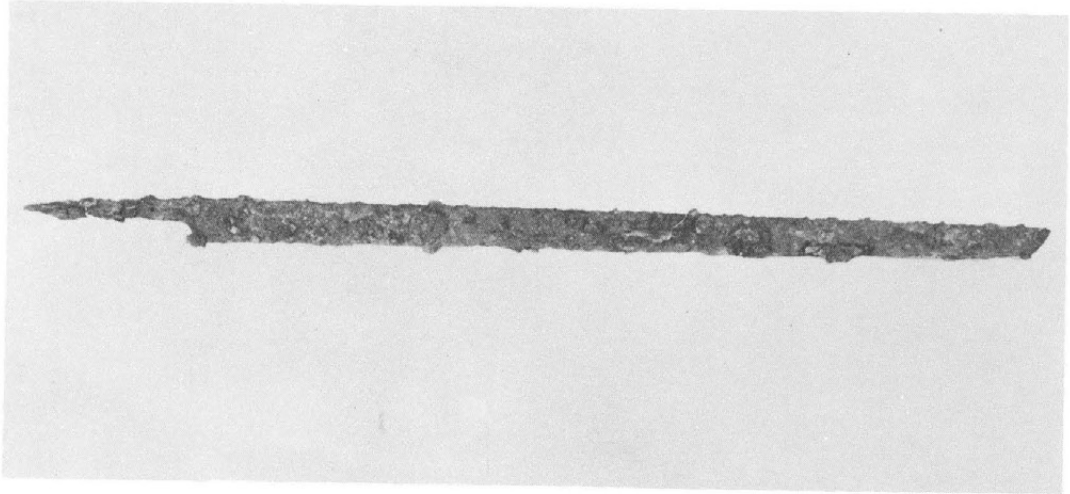
43.　鉄刀出土状態



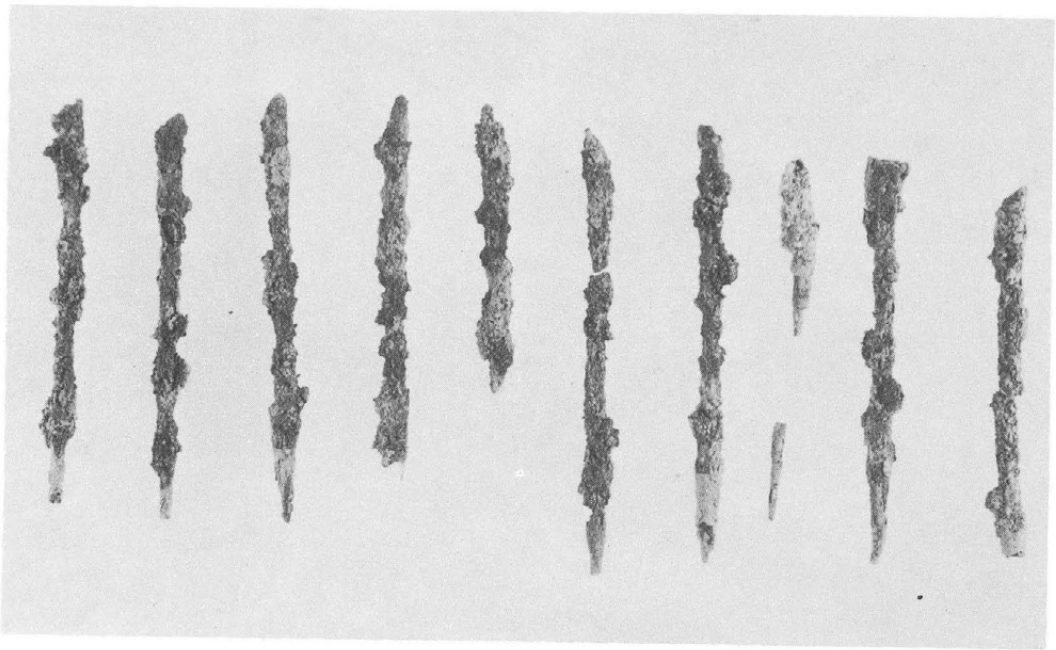
44.　鉄刀柄部

45.　鉄鏃出土状態

第十六図　石子原古墳出土遺物



46.　3号墓壙出土鉄刀



47.　同　鉄鏃

48.　1・2・3号墓壙（南西より）

49.　墳丘東西線断面（黒土より上部が盛土）（南より）

50.　4遺跡遠景（南より）　1　よろじ原遺跡　2　上の平東部遺跡　3　寺山遺跡　4　六反田遺跡

第十八図　伊賀良地区南部の遺跡

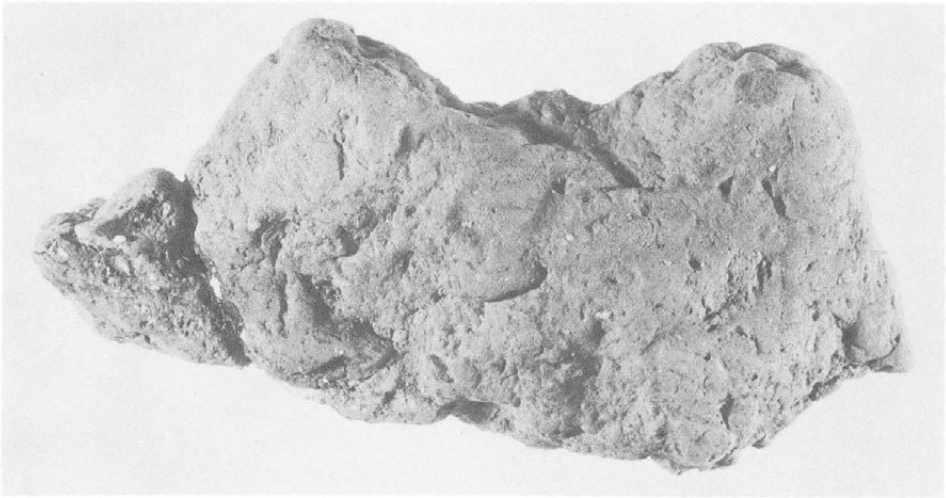
第十九図　上の平東部遺跡住居址

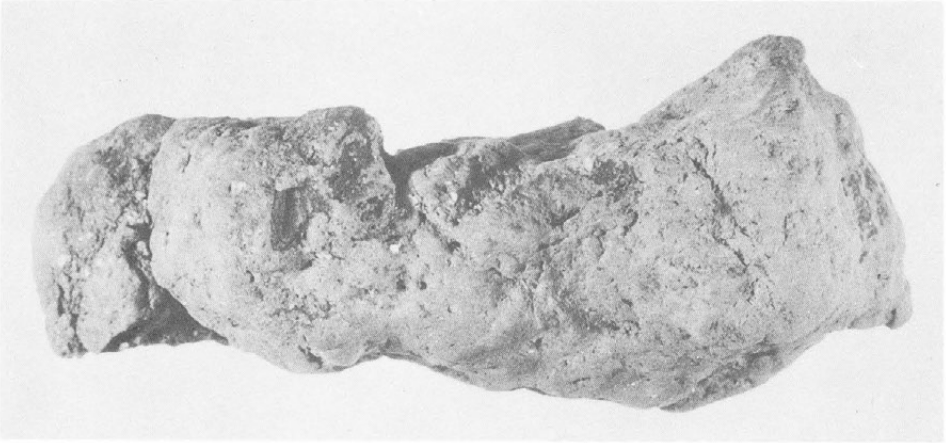
51.　1号住居址

52.　同　炉

53.　塑像の埋っていた柱穴

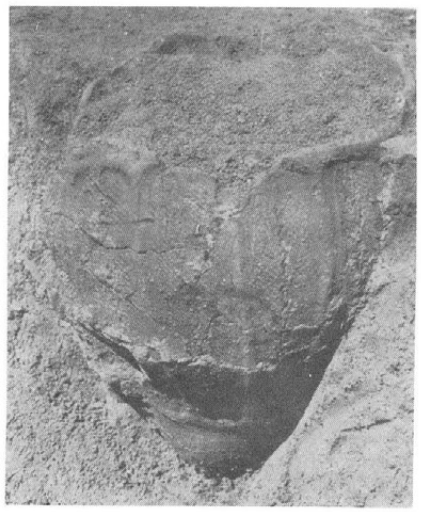
第二十図　上の平東部遺跡出土塑像



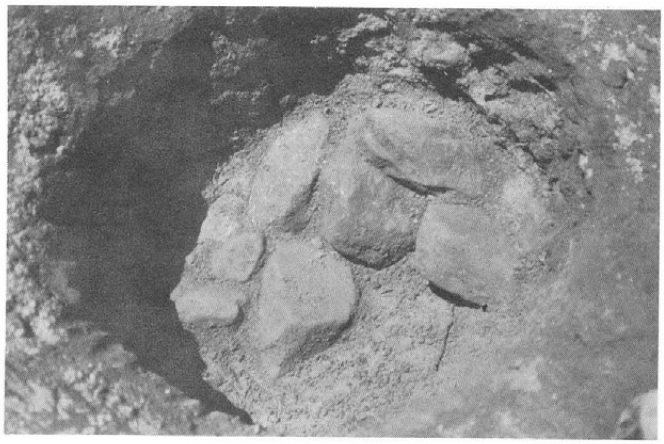


第二十一図　上の平東部遺跡住居址

55.　2号住居址



56.　同　埋甕



57.　柱穴

第二十二図　六反田遺跡住居址

58.　1号住居址

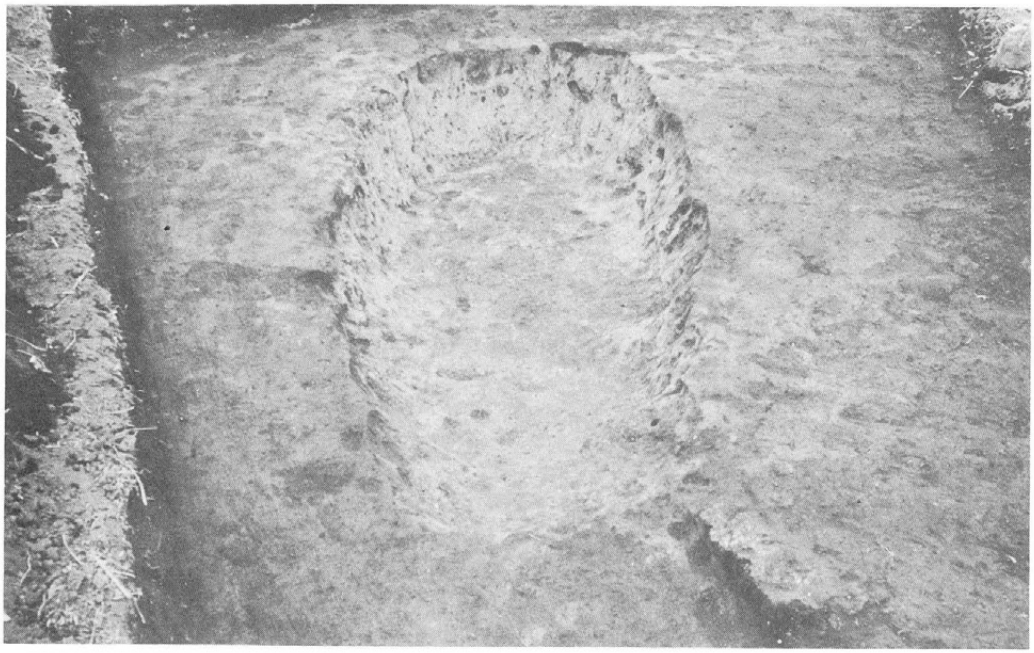
59.　2号住居址

第二十三図　六反田遺跡住居址

60.　3号住居跡

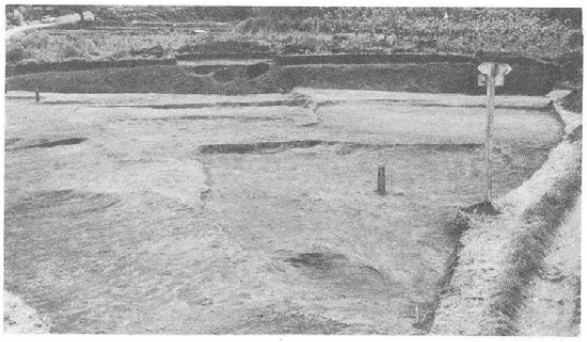
61.　4号住居址

第二十四図　六反田遺跡住居址・土壙



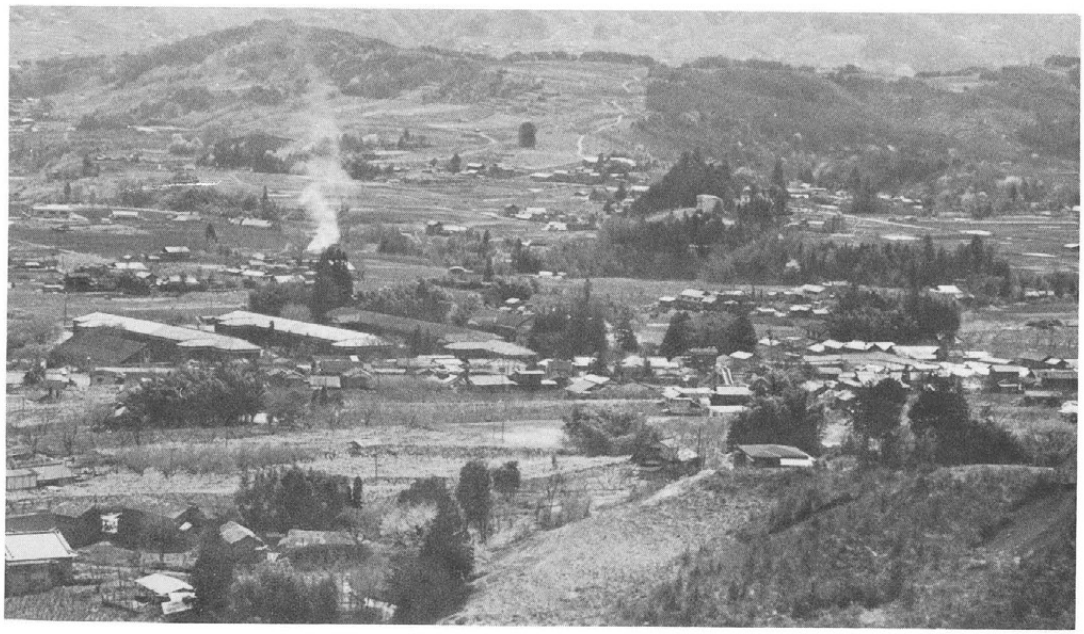
62.　5号住居址

63.　土壙4



64.　土取場？

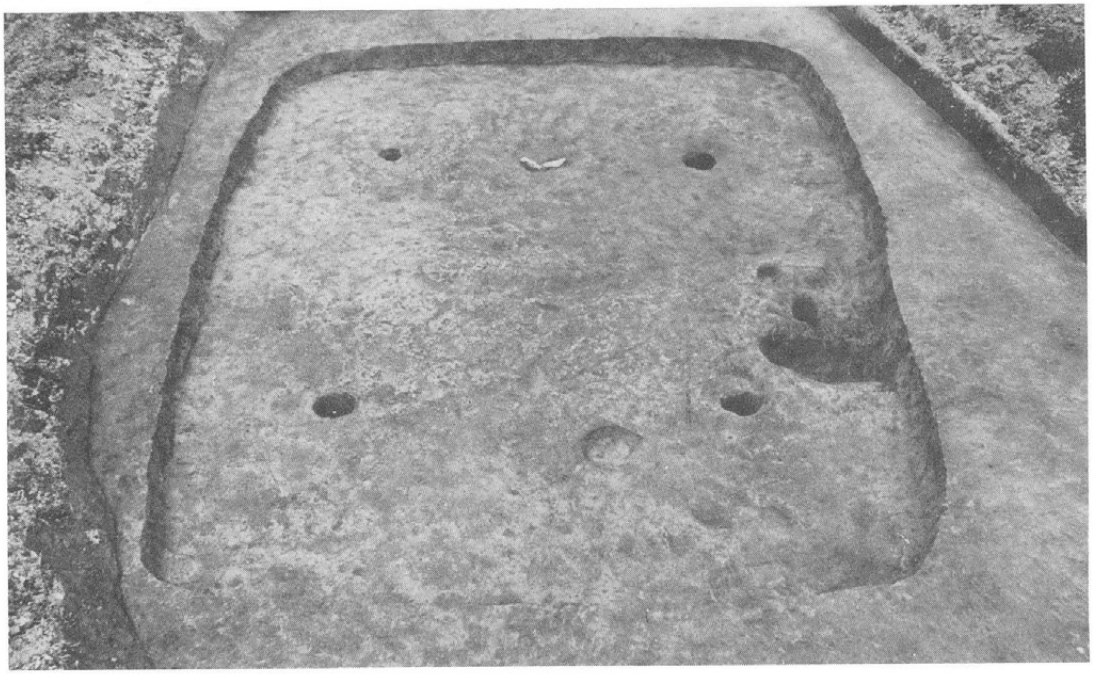
第二十五図　大東遺跡住居址



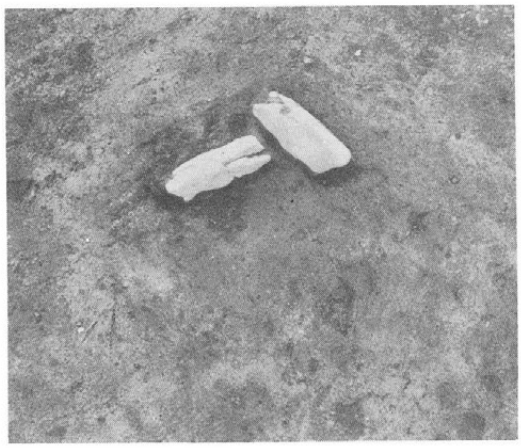
65.　大東遺跡遠景（北西より）

66.　1号住居址

第二十六図　大東遺跡住居址



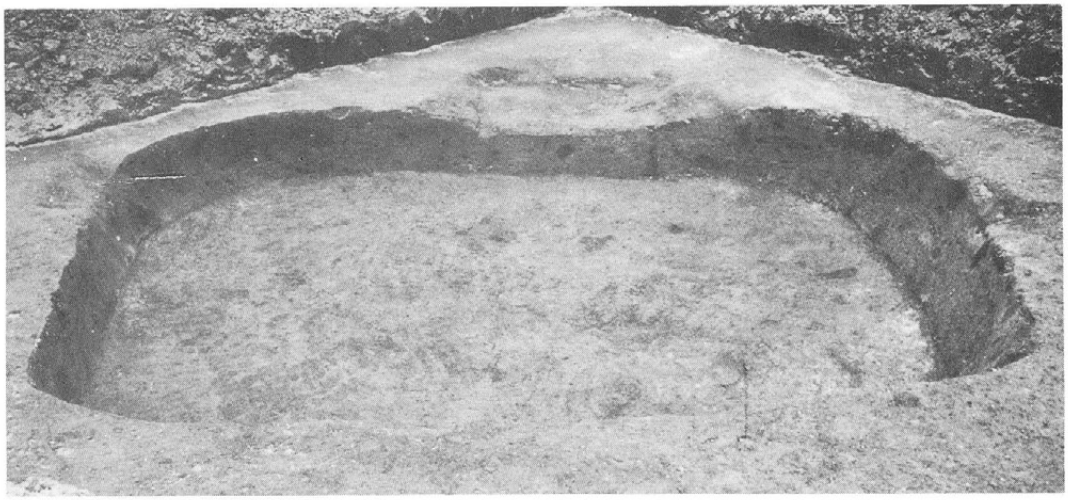
67.　2号住居址



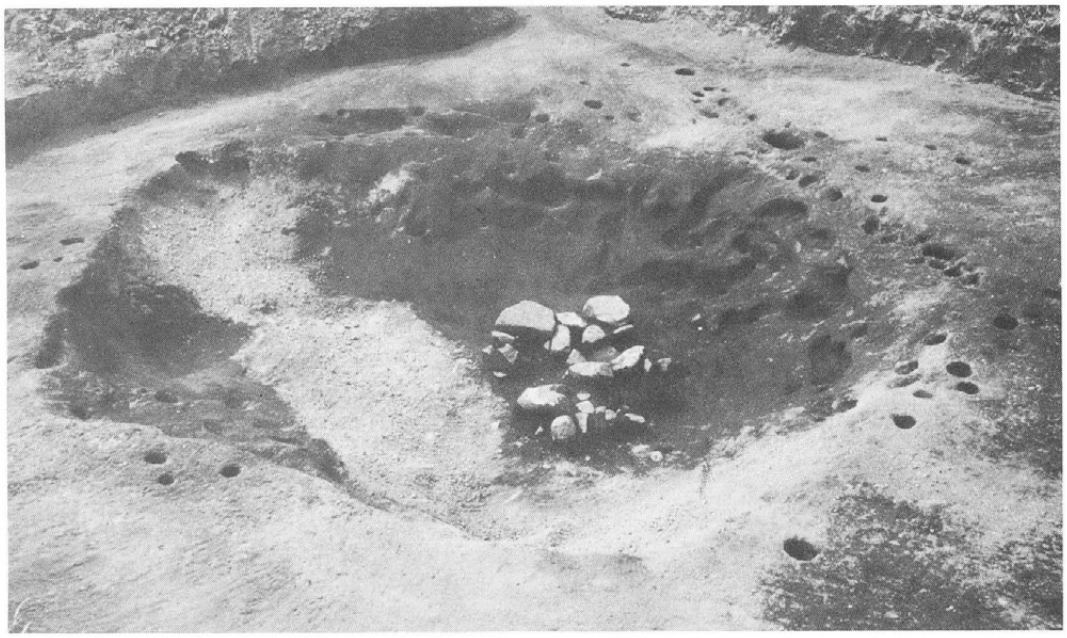
68.　同　炉

69.　同　貯蔵穴

第二十七図　大東遺跡住居址



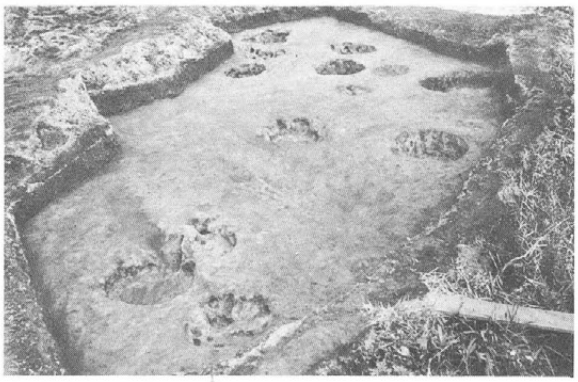
70.　3号住居址



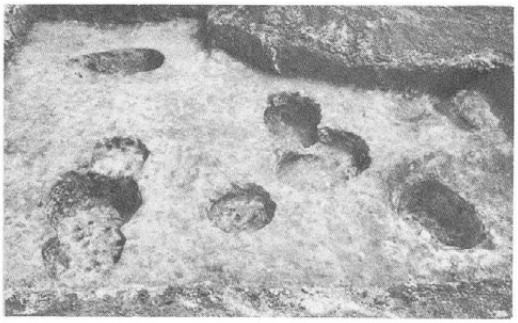
71.　4号住居跡

第二十八図　大東遺跡土壙

72.　土壙群A

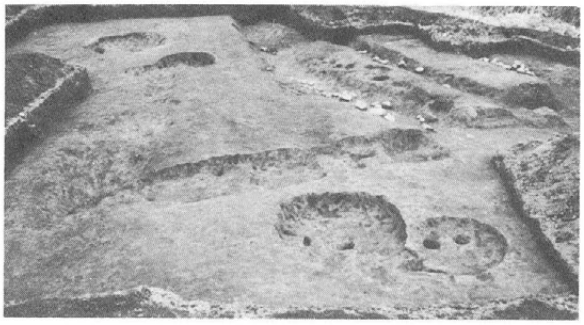


73.　土壙群B



74.　土壙群C

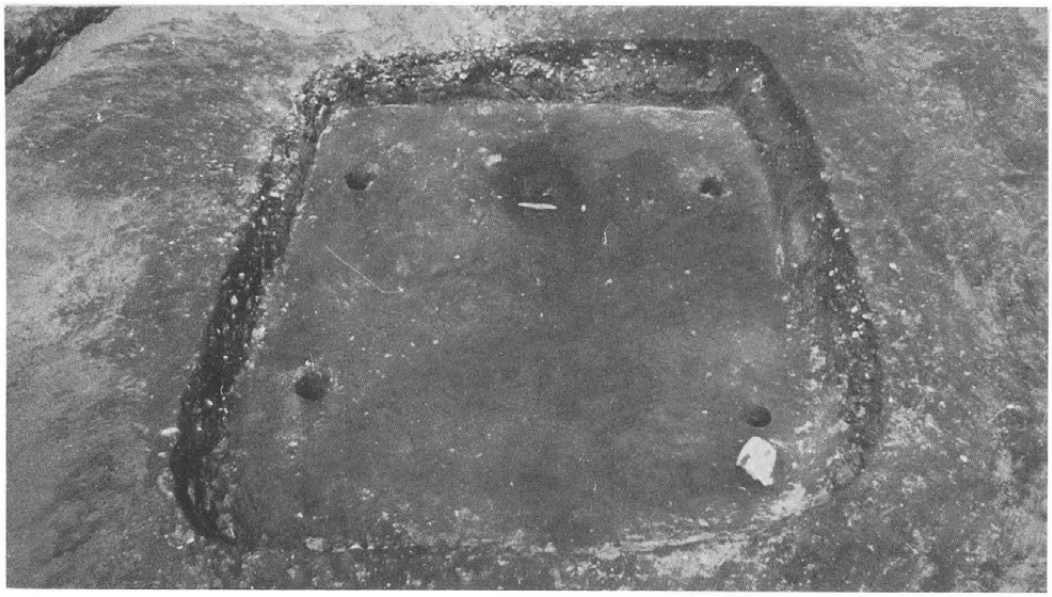
75.　土壙群D



76.　土壙群Eと溝1～3

77.　5遺跡の航空写真　1　酒屋前遺跡　2　滝沢井尻遺跡　3　小垣外・辻垣外遺跡
4　三壺渕遺跡　5　上の金谷遺跡　6　山岸遺跡

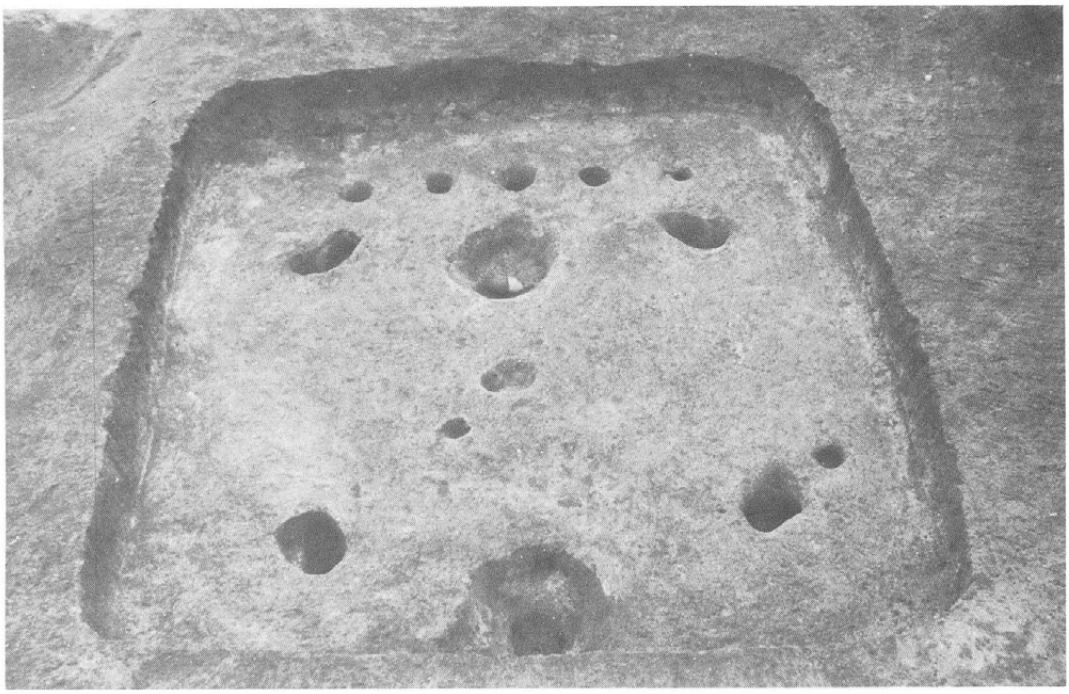
第三十図　酒屋前遺跡住居址



78.　1号住居址

79.　2号住居址

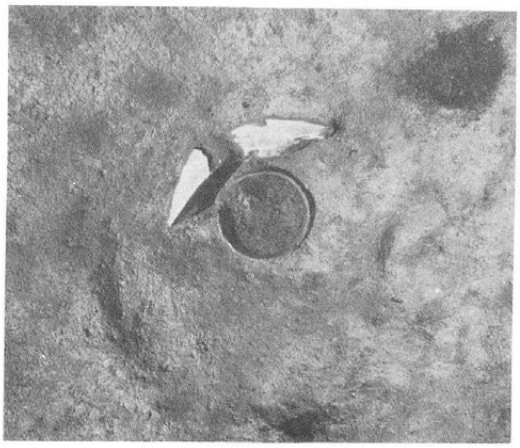
80.　3・4号住居址　柱穴群1



81.　5号住居址

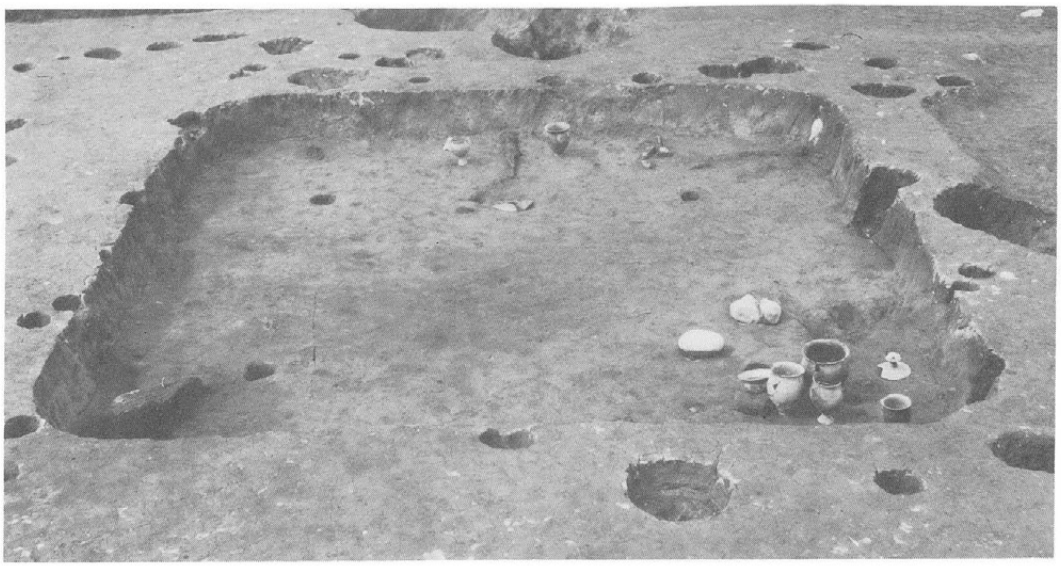
第三十二図　酒屋前遺跡住居址

82.　6号住居址　柱穴群2



83.　7号住居址炉

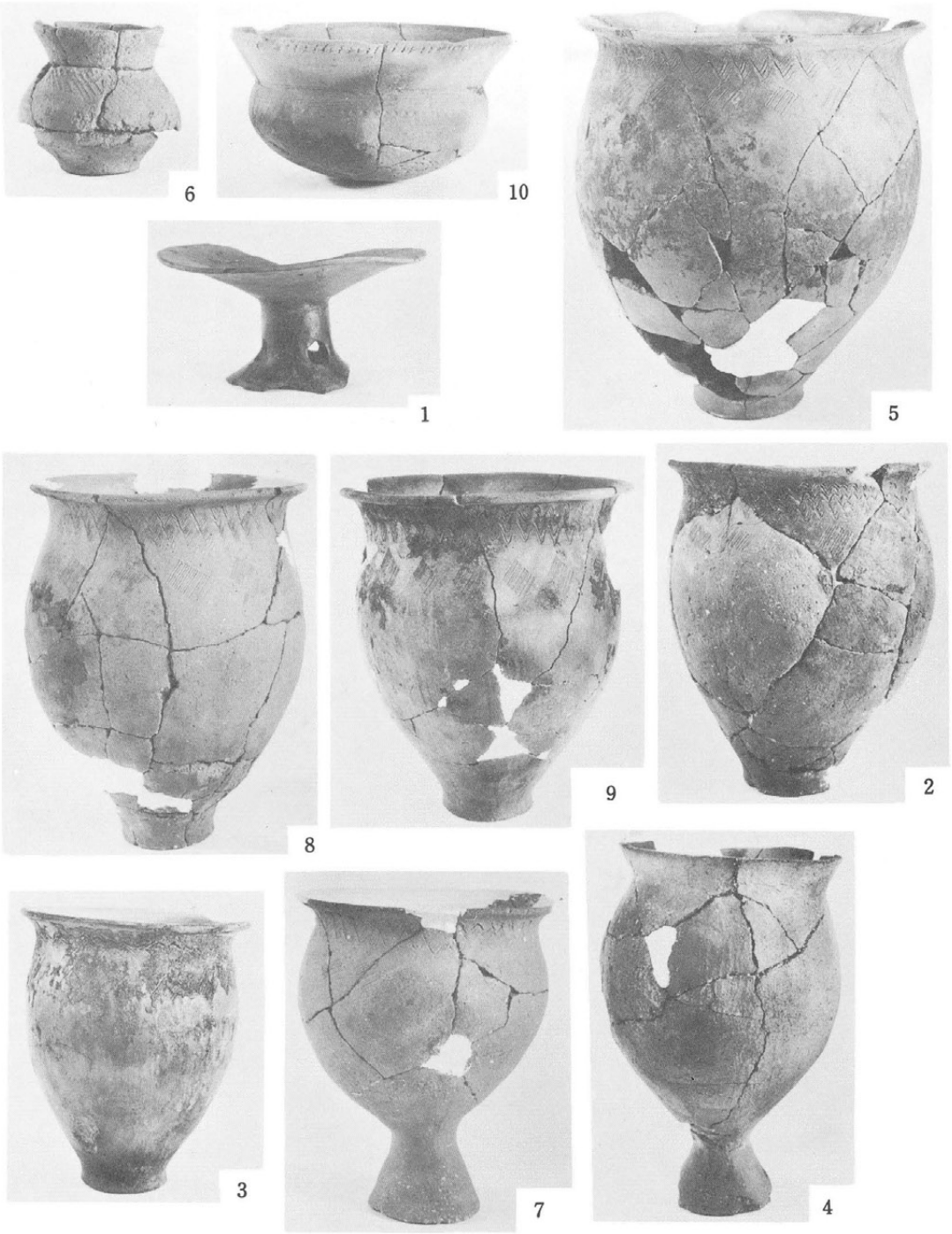
84.　7号住居址土器出土状態



85.　7号住居址土器出土状態

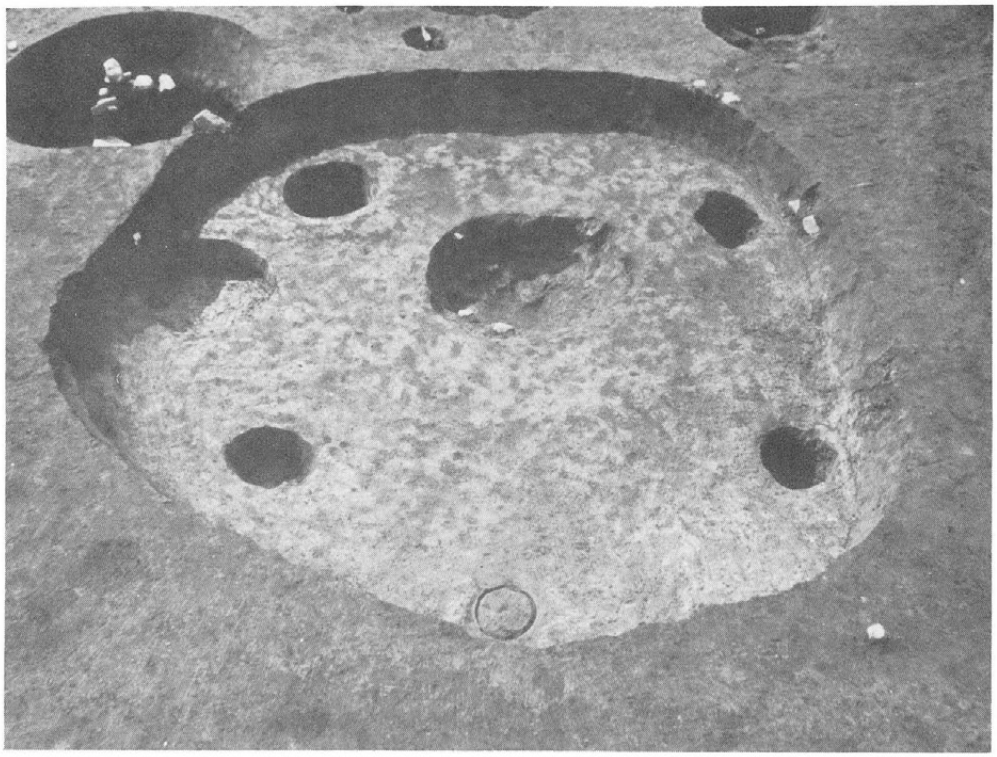
86.　7号住居址

第三十四図　酒屋前遺跡出土土器



87.　7号住居址出土土器（数字は遺構図出土位置番号）

第三十五図　酒屋前遺跡住居址

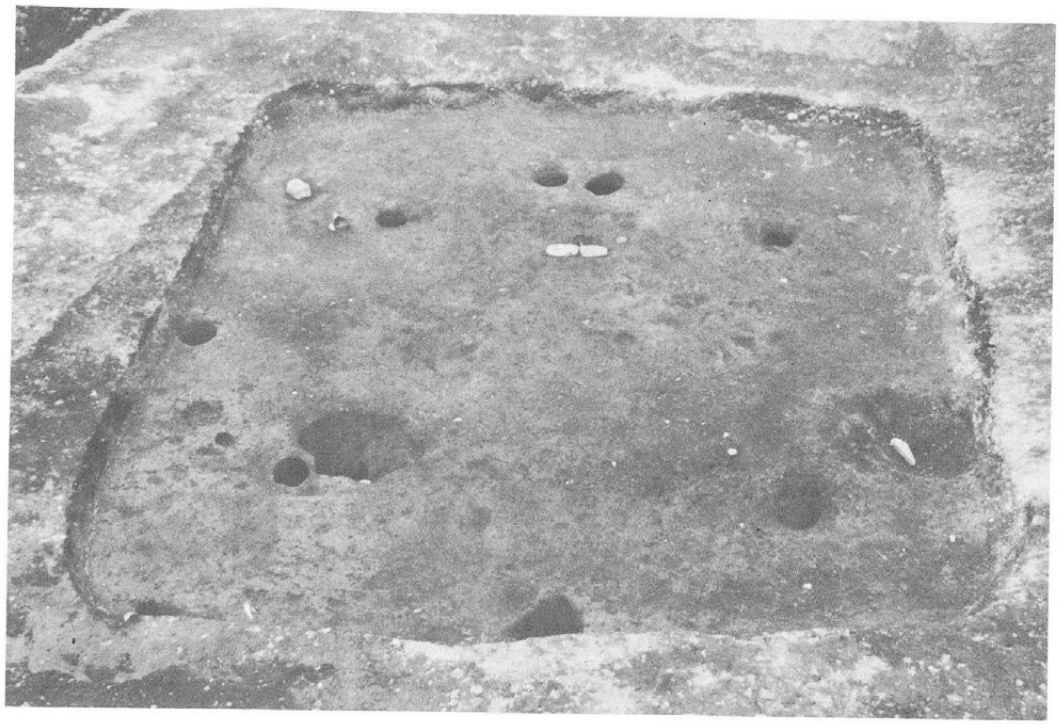


88.　8号住居址

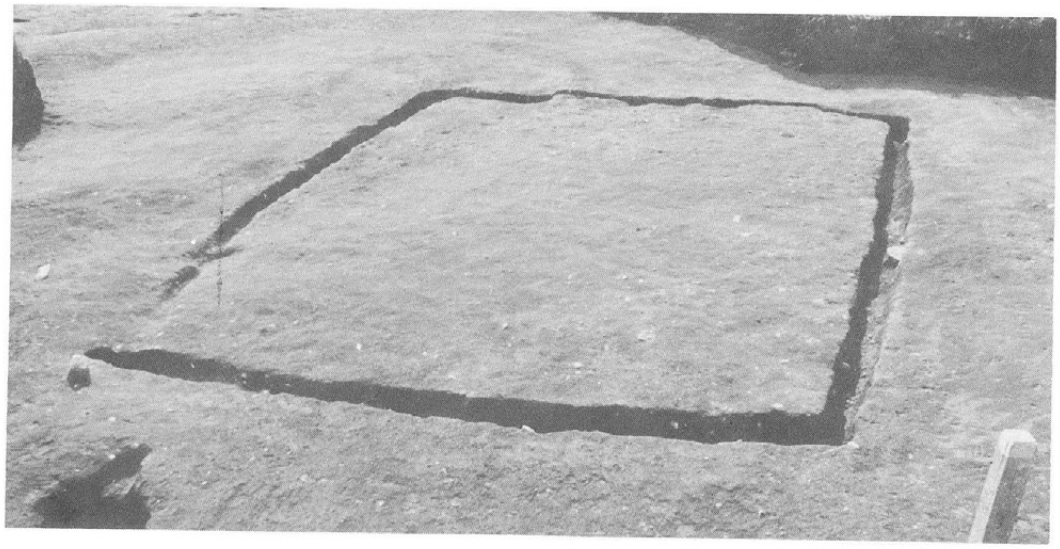
89.　同　埋甕の上面

90.　同　埋甕断面

第三十六図　酒屋前遺跡住居址



91.　9号住居址



92.　10号住居址